

---

# グレイゾーン 1

サヤカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グレイゾーン1

### 【Nコード】

N3752I

### 【作者名】

サヤカ

### 【あらすじ】

戦闘員<sup>ガード</sup>を目指す少女リリイは、薬なしに生活できない虚弱な少年ステイアに出会う。

彼の秘密に触れてしまったと同時に、大陸に隠された、さらに大きな秘密が暴かれてゆき…。

迷走する社会と錯綜する思惑。持つ者と持たざる者。科学と魔法。

大人と子供。白と黒。

そんな感じの冒険ファンタジー。

(この小説は長編作品の第一章にあたります。一章・pp2120)  
(2011/6全体的にリライトしました)

## プロローグ

「そっか、強くなりたいのか」

質問に答えたこちらに向けて、男が返した笑みは明るかった。

筋骨逞しい肉体を、こちらの目線に合わせて屈めたままで、彼は邪気なく笑った。ステイア・アリビートは少しだけ面食らった。笑われるであろうことは予測していた。だが、目の前に浮かんだ笑みの種類は、わずかに想像と違ったのだ。

「なら、まず肉をちゃんと食べよ。外じゃろくな食事に取りつけねえけどな」

屈託のない笑顔だった。馬鹿にされると思っていたのに。

こちらに向けて笑むその男は、ハンターと自ら名乗るにおおよそ相応しい格好をした、壮年の旅人だった。栗色の短髪に、薄茶の目その面立ちに懐かしさを覚えている自分に気づいて、ステイア・アリビートは奇妙な感覚を持て余す。懐かしい？

毎日を共に過ごしているこの男に向けて、何を懐かしがっているのだろう。

男は笑いながら、屈めていた膝を伸ばした。立ち上がりながら、腰に携えたナイフを取り出す。

大振りの柄に、肉厚の刃。手入れの行き届いた刃物に特有の、冷たい光沢があった。

「人間、体が資本だからな。栄養を取り入れなきゃ始まらねえ。食欲がないなんて贅沢は言っていないで、力を蓄えるんだ。それが一番手っ取り早い。というか、そうしなくちゃ強くなかなねえな」

この会話もまた、懐かしい。

どこかで、かつて一度聞いた。そこまで意識して、ステイア・アリビートは眉根を寄せる。ナイフを握る男の、大きな掌をじつと見つめた。そして同時に、自分の手をひどく意識した。そっと視線を移すと、肌の色から全てが違っことに、落胆を覚えた。

生まれてから過ぎた年月は、十に満たない。同じ年頃の少年よりもさらに小さな、自分の掌。見つめていて虚しくなるが　この白い掌もまた、懐かしい。

「怖えかもしんねえな。だが、よく見とけ」

ステイアは、男の目線が、自分の顔からわずかに逸れていることに気付いた。

彼を見つめて、そして彼がいる場所の全てを見つめようと、目を凝らす。風景はどこにも見えなかった。ただひたすらに広く、白い空間。目の前にある情報は、とても懐かしい一人の男と、同じくらいに懐かしい自分自身。曖昧な情報を、奇妙に客観的な自覚で認識する。久しぶりだから懐かしく感じるのか、あるいは久しぶりすぎて敏感になっているのか。それは分からない。

そんな事を考えている間に、男は携えたナイフの刃を、戯れに舌で舐めつけた。こちらに向けて　あるいは、かつてこちらと同じ場所にいた誰かに向けて　得意げに笑みを深めた後に、半身を突き出すようにして、戦いの構えを作った。

（ああ、そうだ）

この後に彼は、弱った獣を目の前で殺した。そして、その日の夕食のメニューをひとつ増やしてくれた。そう思い出して、ステイアは目を閉じる。

ふわふわとおぼろげな感覚が、急速に収束していった。水底に沈んでいた体が、急浮上するような圧迫感と共に　やがて感覚が覚醒する。

目を開けた。

ステイア・アリビートが眠っていたのは、白い空間ではなかった。くすんだ灰色のコンクリートの天井と、同じ素材の壁。窓のない地下室に固有の湿った空気。電球の色あせた鈍い輝き。その全てが、ぼんやりとした視界に、ゆっくりと馴染んでくる。見慣れたいつも

の病室だと認識するまでには、さらに時間がかかった。

気だるさを持って余しながら、ゆっくりと瞼をこする。

力の入らない腕を使って、時間をかけて半身を起こすと、睡魔の抜けきらない視界の隅で、ベッドの周りにずらりと並んだ複雑な機械が、いつものように出迎えてくれた。

寝起きの頭を軽く押さえて、邪魔な前髪を掻き揚げる。甲斐なく、絡みついた銀の直毛は、すぐに額に滑り落ちた。

「起きたんだ」

背後から声をかけられた。聞きなれた声。

返事は特にしないまま、ステイアはぼんやりとした半眼のまま振り返る。病室に入ってきた医者とは、相変わらずの薄汚れた作業着を着ていた。いつも通りに、ペタペタと特徴的な靴音を響かせて、ベッドのそばに歩み寄ってくる。視界の端に彼の足元をとらえると、やはり、見慣れてしまった変なサンダルを履いていた。

「こんな時間に起きるなんて、珍しいな。調子は？」

「……別に変わらない」

ベッド脇に置いていた回転椅子に、医者が腰掛ける。ステイアは生返事をしながら、いまだ活動を始めようとしな顔全体に手を翳す。ぼうつとしながら、それでも無意識に言葉を付け足していた。

「……たぶん」

医者 は苦笑すると、ベッドの傍らに置かれている巨大な機械に手を伸ばした。引き出しのようなスペースからコードを引き抜いて、別の場所に置いていた器具に接続している。検査が始まるのだろう。

ようやく、少しずつ意識が冴えてくる。ステイアは眉間を軽くつねりながら、己の体を見下ろした。十七歳。実際の年齢とギャップを覚える程度には、あまりに頼りがたい痩せた身体。それだけは、夢の中と変わらなかった。

ステイアは、あくびまじりの言葉をこぼした。

「夢を見たんだ。すっげー久しぶり」

「へえ」

「ガイルさんの夢」

器具を拭いていた 医者 の手の動きが、一瞬だけ止まった。

かすかな満足感を覚えて、ステイアは小さく苦笑した。顔を上げると、 医者 は大げさに両手を広げて、おどけるような仕草を見せた。

「そりゃまあ、なんというか。運命的なタイミングだな」

「……まあ、ね」

「ロールも、そろそろ待ちわびてる」

医者 は手にした器具を指先に構えて、にっこりと笑んだ。

「今日の検査結果が良好なら、さっそく実践に移ろう」

「分かってる」

ステイアは 医者 が構えた器具の種類を見とめると、心得たように上着を脱いだ。少し汗ばんだ寝起きの背中に、 病室 の生ぬるい空気が絡みつく感触がした。

Equ8 / 7 / 21 7 : 23

From : 父さん

Title : おはよう

少し久しぶりだね。この所、ちょっと仕事が忙しかった。変わりなく元気でやっていますか？ 父さんの方は元気です。でもすっげえ疲れています。疲れると、お前にメールをしなくなります。もうウザいって言われちゃう頃なのかな。

俺の仕事の話なんかどうでもいいよね。でも、リリイが就職したら、似た土俵に立つことになるんだよね。もうそんなに時間が経ったんだと思うと、不思議な気持ちです。

お前、そろそろ試験があるんじゃないのか？ 真面目に頑張ってるだろうから心配はしていないけど、一応メールは送っておきます。ここでまさかの成績低迷といったら、今までの努力がパーだしな。全力で挑め。な。

それでは、今回はこの辺で。ちょっと今大きな任務に関わっているのでどうなるか分からねえけど、できれば近いうちにまた連絡したい。

吉報を伝えたいんだ。

もしかしたら一つ、いい事があるかもしれない。まだ不確定だけど…。待っててくれると嬉しい。

それでは、学校頑張ってください。

\*\*\*\*\*

リリイ・ブルーノはライフルに銃弾を装填して、すぐさまグリッ

プを握り直した。いつでも攻撃に転じられるように、構える。

深い、深い森の中に、一筋だけ貫かれた街道。

まっすぐに伸びる道の上に、血痕が散らばっている。狼に似た獣の死骸が、いくつも転がっていた。そして、まだ生きている獣が遠くに数匹。

狙撃チームが放った銃声が響く。疾走していた狼の体が、また一体、地面に投げ出された。痙攣する体躯に、さらに銃弾が叩き込まれる。一発、二発。

群れから離れた一匹が、こちらに回り込もうとしていることに気づき、リリイは走った。照準を合わせるが、トリガーを引くより一瞬早く、ターゲットの身体が跳ねて、横に倒れた。左に視線を投げると、別の仲間がいた。銃で武装した、同級生の男子。

息を整えながら、再び構えを取って持ち場に戻った。あらかた終わりだ。リリイは周囲を見回して、そう判断した。動くものが見えない。

だが、全滅した確証がない。硝煙の臭いが鼻を突く。身体の緊張が抜けない。抜くべきでない。

リリイは、自分の背中の上に、車が停めてあることを確認した。守るべき相手。自分たち学生部隊を、ここまで運んだ大型のトラック。荷台に取り付けられた、警報ランプのような機械に、緑色の光が点灯している。意味は、セーフティ。

そして、まったく同じ装置が、街道の真ん中にも転がされていた。ただし、こちらは色が違う。

危険を示す、赤。

「うわあああ！」

学生の一人が悲鳴をあげたのと、葉がこすれる音が聞こえたのと、獣が地面を疾り抜ける音が聞こえたのは、全てが同じ一瞬だった。森から一つの影が躍り出て、地面を蹴飛ばし、高く跳躍した。

トラックを、その側に転がった赤い石を目がけて、一直線に走ってくる獣。

死骸となった他の獣と同じだ。姿形は狼だった。だが野生動物らしい、生に執着する強い眼光はない。どこを見ているのかはつきりとしぬい混濁した灰の瞳は、彼らが 狂獣 と呼ばれる全ての所以だった。

獣は一度着地してから、身体全体を弾ませて駆けた。石を挟んでリリイの方角。息を呑んだが、なんとか足の裏に力を入れる。ライフルを構えた。背中の中には運転席。そこに乗っているのは”依頼人”だ。

（ガード は、クライアントとターゲットを結んだ、直線上から離れてはならない）

側に一人いたはずの男子学生の姿がいつの間にか見えなくなっていたが、構っている暇はない。逃げたのだとしたら尚のこと、リリイは集中を解くわけにはいかなかった。標的と銃口を一直線上に見つめて、照準線が重なる瞬間を捕らえる。

（眉間を撃てば一撃！）  
掌の中で衝撃が爆発した。

迫っていた獣の四肢が宙を泳ぐ。横倒しにバランスを崩し、そして倒れた。

体から地面に粘液が広がる。それでもリリイは銃を下ろさない。数秒、待った。獣は動かない。

警戒を崩さないまま、そっと近づいた。

己が放った弾丸は、確かに額を貫いていた。ブーツのかかとで獣の体を踏みつけ、感触を確かめると、ようやく銃を下ろした。

深く、息をつく。

周りの学生から、歓声が溢れた。

「よっしゃあ！」

「すげえ！」

「終わったあ！」

近くにいた学生がリリイに駆け寄る。誰かれ構わず、みんなでハイタッチをしてはしゃいでいると、トラックの運転席の扉が開く音

がした。

学生たちが一斉にそちらを見る。降りてきた三十路の男は、いい加減な手つきで拍手をしながら、笑った。

「ほい、ミツシヨン・コンプリート。これで討伐試験は終了だ」

テリー・シモン。リリイは胸中で男の名前を再確認する。シモン教官の課題が厳しい事は学内では有名だった。それをこの笑顔で締めくくることが出来た。リリイはようやく緊張を解いて、笑った。

シモンはそのままの口調で、気楽に続けた。

「せっかくだから、死骸の処理の練習もやっておこうか。授業で習った通りの手順で、適当に協力すること。余った死体はハンターに引き渡すから、荷台に積んでおけ。帰り道が臭いかもしいけれど、そんなくらいはガマンしろ」

一斉に、不満の悲鳴が唱和した。シモン教官はそれらを涼しい顔で受け流すと、拍手をしていた手で、今度は仕切りなおすようにパーンと大きな音を鳴らした。

「今から十五分で全てを終わらせること。準備が整ったら、リック。お前が街までトラックを運転しろ」

「え、なんで俺が」

「挽回のチャンスをやるって言う、慈悲の心だよ。リリイが果敢に応戦してる中で、隣のお前がまっさきに逃げてどうするんだ」

教官が皮肉に笑うと、学生たちは爆笑した。

「お疲れ、リリイ」

後処理を終えてトラックの元まで戻ったリリイに声をかけてきたのは、学友のジャンだった。

ジャンはこちらに向けて、水筒を差し出していた。教官からの差し入れだろう。こんな時に振る舞われるのは、砂糖水にレモンを絞ったドリンクだ。手に残った生臭さを気にしていたリリイは思わず、満面の笑みを浮かべた。

「ありがとう！」

「見事だったぜ。最後の一撃。ますます置いていかれちゃうなあ」  
爽やかな酸味のする液体を喉に通して、体が生き返るのを感じる。  
リリイは機嫌よく笑ってみせた。食べ物を与えるだけで、ここまで  
いい笑顔を見せるのだからまるで子供だと、昔からよく言われるが、  
まあ、気にしないでおく。

「まあね。自分でも驚いた。日頃の努力が実を結んだ瞬間、かな」  
「努力ね。確かに、お前を見てると文句も言えないけどさ」

ジャンはあまり成績がよくなかった。先ほどのリックと並んで、  
このクラスでは最下の位置にいたような覚えがある。

だが二人とも、その成績に甘んじて、たいして悔しがっている様  
子もなかった。口では不平や不満を零しながら、今の立ち位置に満  
足しているのだろう。

女生徒のエミリが戻ってくるのが見えた。手を挙げて居場所を示  
すと、彼女もこちらにやってくる。新しいレモンドリンクを彼女に  
も差し入れてから、トラックの荷台に座り込んでお喋りをした。な  
んのことはない日常会話を繰り返しながら、リリイは結んでいた髪  
を解いた。栗色のロングヘアが、戦闘を終えて少し乱れていた。

髪を軽く整えてから、もう一度結びなおした。基本的には下ろし  
ている方が落ち着くのだが、長い髪は戦闘には邪魔だった。帰り道  
に襲撃を受ける可能性もゼロではない。

太ももと腰に装着したホルスターに、それぞれ銃が収められてい  
る。リリイはそれらを一つずつ取り出して、動作を確かめた。特に  
異常はない。家に帰ってから、いつも通りに整備をするだけで大丈  
夫だろう。

「出発するぞー！」

リックの声が聞こえたと同時に、トラックが動き出した。

数名の学生と、そこから少し離れた場所に積み上げた 狂獣 の  
死骸を荷台に載せたまま、石だらけの荒れた街道を、その隆起に忠  
実にガタガタと進んでゆく。

先ほど、地面に転がしていた装置　シールド　も荷台の上だ。今はスイッチを切り替えて、緑色に輝いた状態で、守護神のように中央に置かれていた。

リリイは景色を見た。街道として開かれた、巨大な獣道のような一本道。それ以外には、見事に森しかない。

街のゲートから外に一步踏み出せば、そこには森が広がるのみだとは知っていた。だが、実感としては新鮮だった。人の手が入りきっていない、中途半端に整備されただけの道も、狂った獣がはびこる、視界のきかない深い緑も。

(この世界は、閉ざされてる)

街と街の間に森が広がっているから、情報は遮断される。電波がそれを飛び越えるのだとしても、身体はついていくことが出来ない。全ては、森が呑み込んでしまう。

「リリイ」

横から声をかけられて、リリイは我に返った。

振り向くと、シモン教官がすぐ隣に立っていた。予想外の人物の登場に面食らう。

「どうしたんですか？」

「ちよつと、お前に話したいことがあってね」

荷台から運転席を覗くと、なるほど。出発するまではシモンがいたはずの助手席に、男子の後ろ頭が見えた。確認しているうちに、シモンは遠慮なく、リリイの隣に腰掛ける。他愛ないお喋りを続けていたジャンとエミリも、彼の拳動に注目してきよんととしていた。「まず、褒めておくよ。今回の討伐試験で一番良い動きをしたのはお前だった。成績から予想はついていたとは言え、女性の身であれだけの身のこなしは、なかなか出来るものじゃない」

「ありがとうございます」

「基礎クラスで学んだ事も、忠実に再現していた。けどね。ちよつと惜しかった」

リリイは目を見開く。シモンは皮肉に笑った。

「今回は群れの掃討が課題だったけど、私をクライアントに見立てて、私を守るために動くことが前提だったね。実際に敵を前にして、その意識を忘れていなかったのは、お前だけだった。ガードはクライアントとターゲットの直線状に立ち、死角を補うと同時に、クライアントを確実に守る。これが基礎の第一」

「はい。クライアントがいる車体には、セーフティモードのシールドを装備させてある。この事を利用するように努めました」

「そう。それは良かった。でも基礎の第二が惜しかったんだよ。それは、確実に敵を倒すこと」

「一撃で仕留めたのに、満点じゃないんっすか？」

不思議そうに、ジャンが口を挟んだ。シモンはこの場にいる全員に説明をするように、首を振ってみせた。

「当てれば一撃で仕留めることも出来るけど、今くらいの大きさの生き物の額を狙うのは、リスクが高い。走り方いかんで、外れてしまふ確率があまりに高すぎる。リリイは確かに希有な腕前だけど、どんなに腕がよくても過信したら終わりなのが銃って武器だよ。より確実に銃弾を当てるには、他の部位を狙って動きを封じた方が確実だ。特に、今日は狙撃チームもいたわけだしな」

大きな石でも踏んだのだろうか。トラック全体がガタンと揺れた。だけど、リリイはシモンから目を離すことが出来なかった。

「リリイ、お前は攻め急いでいたんじゃないかな。他の生徒に手柄を渡したくない。そう思ってしまったんじゃないか？ 周りの学生にとどめを譲りたくないという想いが、一撃必殺に繋がった。違う？」

教官が口にしたその言葉を受けて、確かにリリイは固まった。

意識していたわけではない。だが、違うと言いつけることは出来なかった。

シモンはこちらの反応を見て、真面目な顔になる。

「狂獣を相手にする時の基本は、近寄らせない事と、正確性を極めること。評価を高くすることを狙ったせいで、そのへんは減点

ちよつとしたことに聞こえるかもしれないが、今のだつて失敗して  
いたら、死んでいたかもしれない。以後、よくよく注意するように」  
「はい……」

「まあ、まだまだ伸びしろがあるつて事さ。反省して精進しなさい」  
シモンはその場で立ち上がつて、ひらりと軽く手を挙げて挨拶を  
済ませると、荷台の後ろの方に歩いていった。狂獣の死骸を検分し  
ていた学生たちと、会話を始める。

リリイは教官に告げられた言葉を反芻して、はあつと溜息をつい  
た。レモンドリンクで全快したはずの元気がしぼんでゆく。圧倒的  
な正論と、己の未熟さを前にして、ぐうの音も出なかつた。

「そーんなへこまなくても」

こちらの表情の変化を見つめて、ジャンが快活に笑つた。

「ほんつと分かりやすいよな、リリイつて」

「うつさいな」

「でも、負けん気が強いのはいい事じゃない」

ドリンクを飲みながら、エミリが笑う。リリイは曖昧に笑つたが、  
少し違うなと思つた。

別に、負けず嫌いというわけではないのだと自分では思う。習つ  
た事はきちんと身に着きたいと思うが、誰かと比べて一番でいた  
いわけではない。試験で感じる競争意識は、他の生徒と同程度のレ  
ベルだと思つているし、プライドが高いというわけでも、自分に厳  
しいというわけでもないのだと、そう思つている。

焦つていたので。結論を言葉にしてリリイは納得した。きちんと  
単位を取ればこの一年で資格が取れる。卒業すれば一人のガード  
として認められる。そのチャンスを確実にものにしたいくて、焦つ  
ていた。

今朝方、あんなメールをもらったからだ。そう思つて、リリ  
イはすぐに自分を恥じた。己の慢心を、一瞬でも父のせいにした意  
識が許せなかつた。

大陸中の獣が、原因不明の凶暴化をたどり始めたのは、十四、五年前だと言われている。

正確な始まりがいつだったかは、解明が進んでいない。政府が事態を正式な異常と認定したのは、八年前だった。その時に起きた、グランドクロス と呼ばれる災害をトリガーに、野生動物の広範に渡って、明確な異常が出始めた。

動物の中の アニマ が増殖した事が原因、というのが政府が公式に示す見解だったが、議会や学者の中でもいまだに意見が割れており、万人を納得させる理屈は、証明されていない。

原因の解明よりも差し迫っていたのは、人間の存亡だった。

突然に凶暴化した野獣の対策を取れずにいるうちに、多くの街や村が犠牲になった。亡命者の増加による人口の偏りや、流通の停滞、インフラ機能の麻痺、医療師の不足など、様々な要因が重なって、数年前とは比べようもなく、現在の大陸は混乱状態にあった。

獣の狂暴化の定義は曖昧で、種による個体差がある。一般的には脳が大きい生き物ほど程度が深刻なのではと言われているが、例外もあった。第一に、人間は誰一人として、同じ症状を出した例がないのだ。

程度のひどい個体は、瞳が鈍い灰色に混濁する。そこまで深刻なものは 狂獣 と呼ばれる。数は決して少なくない。

狂暴性を増した獣が群を組めば、人の手で太刀打ちする事は容易でない。必要の際は迎え撃って仕留めざるを得ないのだが、大規模な討伐計画を組んでみても、しばらくすれば、また沸いて出る。殖えるスピードも上がっているからだ。

生活の場をなくした人類は、大きな町に寄り集まって、そして外界を遮断した。 シェルター と呼ばれるバリア装置を開発した私企業が、 レアリス・カンパニー。

そして、カンパニーがスポンサードする対狂獣戦闘職のひとつが、ガード という。リリイ達はその卵だった。

「考えてみればさ」

荷台に座ったままのエミリが、思いつきの口調でつぶやいた。

「カンパニーが強い権力を持ったのって、たかだか数年前なのよね」「正確には七年前かな。それがどうしたの？」

リリイが答えると、エミリはうーんと唸るようにして、眼前の光景を見つめていた。鬱蒼と茂る森の木々と、徐々に開けてきたそれらの隙間から、遠くに見える シェルター 。

「上手い具合に事が運んだなあって思うの。奇跡的なタイミングじゃない？ シェルターの開発には、何年も費やしてたわけでしょ。まさに必要とされているその時に完成して、そのまま政府に買われたのよ。もし、カンパニーが開発を始めたのが少しでも遅かったらって考えると、ね」

シェルター は、高くそびえる、半透明のガラス壁に見えた。ひたすら広く平坦で、空を突き破ろうとでもしているかのような高さがある。内側には、これまでの光景とは一変して、人工的な建造物が集いに集った、大きな街の概観がうつすらと見えている。

バリアは街をぐるりと囲い、側面だけを守る形をとっている。獣が入り込めないように、城壁を彷彿とさせる高い壁を作ったのだ。

よって、鳥型の狂獣などが、街中に襲撃をかけることを完全に防ぐことが出来るわけではなく、時々街の中でも襲撃が起きる。そちらの対処に当たるのは、ガード ではなく ポリス の役目だが、同じく狂獣の対処に向かう職を目指す身としては、気にかかることのひとつだった。

「幸運な偶然だって言われてるし、こういうのを奇跡って言うのかもね」

「そうなんだろうけど、なんか予定調和だよ。なるべくしてなった、って感じがする」

「どうしても必要な事だから、そうならざるを得なかったんじゃない

いか？」

これはジャンだった。女子二人で一斉に彼の方を見て眉根を寄せ  
る。

「どういう意味？」

「その場しのぎってのは、成功すれば奇跡になるって事さ。深い意  
味はない」

ジャンはこちらの視線に答えるように、軽薄に笑う。

「俺はそれより、そのたかが七年間で、これだけ体系的に狂獣対策  
のシステムが出来上がっていった事に驚いてるけどなあ」

「それこそ、どうしても必要なことだから、でしょ」

「そりゃ、そうだけど」

トラックが速度を落とし、停車する。

シエルターのゲートがすぐそこにあつた。運転席のリックが視線  
で促そうとするよりも早く、シモン教官が荷台から飛び降りていた。

ゲートは、その重要性から見れば意外なほどに狭く、目立たない。  
獣から逃れるために作った壁で、抜け道をわざわざ目立たせては仕  
方ないと言えば、妥当な結果なのだろうが。勝手口を連想させるこ  
の外観を改めて見つめると、どうしても少し気が抜けた。

そう、勝手口。自己主張のかけらもなく、ただ、変わらず続く半  
透明の壁の一部に、謎の装置が張り付いているだけだ。確か、「コ  
ントロールパネル」と呼ばれていた。情報機器の一種である。

シモンは無造作な足取りで、パネルに近づいていく。そして、自  
らの左手首から、何かを外した。腕時計のような細いチェーンに繋  
がれたそれは、遠目からでも決して見間違えない。ガードのラ  
イセンスだ。

シモンがライセンスをかざし、パネルに指を滑らせた瞬間、細く  
強い、耳を貫くような警音が響く。

パネルから、機械ごしの音声が聞こえた。何を言っているかまで  
は聞き取れなかったが、内側の役員であることは分かる。双方の準  
備がとれて初めて、町の入り口が開かれる。

やがて、コントロールパネルの近くの壁に、ちょうどトラック一台が通るのに相応しい大きさの分だけ、光の直線で扉のシルエツトが描かれた。その線は壁と隔絶され、門戸のように開いていった。リックが歓声を上げるのが聞こえる。

ゲートを潜ると、もう一枚同じような壁があり、それにもコントロールパネルが設置されている。後ろの壁が閉まるのを確認してから、シモンは同じ動作を繰り返した。外部の進入を防ぐ意味で、前室を設けているのだ。

二枚目のゲートを潜って街に入ると、見える景色も、感じられる空気も全てが変わる。すっかり見慣れた、デカルト・シティが視界いっぱい広がって、リリイは思わず息をついた。他の学生も同様だ。自分たちで思っていたよりずっと、緊張をしていたのかも知れない。

ゲートから街に繋がる道は、車道しかない。舗装された滑らかな道がここから先、街の中心部に向けて伸びている。

遠目から見る町並みには、特別に目を惹く高い建物や、高度な技術を匂わせるような何かがあるわけではない。このゲートの開門を見た後に、変わり映えのないセメント製や木製の建造物の群れを見ると、やはり少しだけ気が抜けた。

どの都市でも、技術の粋を寄せ集めている場所はゲートだけなのだ。街の中に入ってしまえば、それこそ八年前から変わらないむしろ治安が悪化した分、質素になったとも言えるような華のない生活感が滲み出ている。

入ってすぐの場所に、ゲート管理の詰め所がある。待機していた管理人たちは、荷台に詰められた学生たちの、無事な姿を見て微笑んだ。そして。

ゲートが無事に閉まった事を知らせる音が響いて、ようやくリリイは後ろを振り返った。

もう、シエルトアのどこにも扉はない。

半透明の二重壁に隔絶された向こう側に、先ほどまでいた森の風

景が、ひたすら広がっていた。

ピピピピ、と高い電子音が鳴った。

リリイは、ぱちくりと目を見開く。荷物の中から、通信機を取り出した。手のひらサイズの、個人用連絡機械だった。機体が光っているのは、着信を知らせる合図だ。

街の外では、電波の整備が十分ではないので、特殊な機種を持ち歩かない限り、通信は難しい。よって、街中に入った途端に、電話や電子メールを受信することは、特に不思議でない。

着信音が途切れてしまい、リリイは慌てて機体を見た。ストラップにしているシルバーチャームが揺れる。

新着の電子メールが届いていた。カクカクとした機械文字が並ぶ画面を見つめて　そして力が抜けた。

「ど、どしたん？」

ジャンが驚いて問いかけてくる。自分で思っていたより、派手に肩を落としていたらしい。

リリイは落胆の色を隠せないまま、溜息をついた。

「ううん。なんでも……」

「そういう風には見えないけど」

街を眺めていたはずのエミリも、いつしかこちらを見つめている。ピンと来た、とでも言うように、満面の笑みを浮かべて顔を覗き込んできた。

「男？」

「違うって……いや、違うないけど。レイバだよ」

個人名を告げると、二人は揃って、ああ、と納得をした。

「なんか、落ち込むようなこと書かれたの？」

「いや、別に。文面はまだ見てない」

「じゃあ、なんでまた」

苦笑するジャンに、リリイはようやく己の失態を悟った。正直すぎる自分の反応に、今さらながら羞恥心が沸いてくるが、ここで格好をつけるのも、今さらだ。

だから、これまた正直に口を開く。

「今朝から大事な連絡を待ってるの。だから、必要以上に期待しちやっただけだよ」

「大事な連絡？ 男？」

「もう、さつきからそればかり。今はそういうのいらないうって言うてるでしょ」

エミリの軽口に苦笑いを返しながら、リリイは改めて電子メールの文面を見つめなおした。

どうせ大した内容でもないと思っていたので、中身を見た途端に、また目を見開くことになった。

（『今日は早く帰るので、俺の夕飯も用意してくれると嬉しいです それと』……）

眉根を寄せて、見間違いでないかをもう一度見直した。

（『客が二人来るから、うちに泊めてあげてもいい？ 急で悪いけど』……？）

続きもまた、唐突な内容だった。

（『でも、一人はお前と同じ年の男なんで、そういうの嫌だったら遠慮なく言ってください。その場合は、俺たち三人そろって職場で寝るから、夕飯いいや』）

若い男？

リリイは思わず眉根を寄せた。送信者の顔を思い出しながら、胸中で首をかしげる。

レイバの客。

プライベートな付き合いのある友人と仮定するには、年齢が合わない。

とは言え、商売柄、顧客としても不自然な気がする。

職場で雇ったアルバイトか何かだろうか？ だが、そんな話は今まで一度も聞いたことがない。

リリイはしばし考えたが、結局、理解できそうにないので諦めた。男所帯には慣れている。リリイは了解の意を示す文章を手早く返

信じた。その動作で、時刻を確認する。夕方四時。

あまり時間があるわけではないが、簡単なものでごまかすしかない。溜まった疲労を存分に癒せる時間が、夕食後まで伸びてしまった事に溜息をつくが、仕方ない。リリイは今晚の献立と、ストックしてある材料の数々に想いを馳せた。

トラックが学校に到着したのは、そんな折だった。

レイバ・グリーニツシュとは、叔父の名前だった。リリイにとって現在、唯一の同居人でもある。

一言で言えば、変わり者だ。リリイの父親の弟にあたるので、本来の名字はブルーノ姓であるはずなのだが、彼はわざわざ戸籍を書き換えてまで、グリーニツシュという独自の家名を名乗っている。理由を聞いたらなんのことはない。「ブルーより、グリーンの方が優しい感じで俺っぽいじゃん？」と言つてのけた。もちろん、ブルーノ姓の由来は色のブルーではないと言つた所で、たいして気にするような男でもない。

正確な年齢は、教えてくれないので分からない。だが、幼い頃に父に聞いた断片的な記憶や、見た目や価値観から判断をすると、三十を少しすぎた所、という推測ができる。

父とはかなり歳が離れていたらしく、リリイは実際に会ってみても、彼が自分の叔父だという実感が沸かなかつた。そして、その違和感は向こうにとつても同じらしい。

「おじさん、て呼ばれるのも複雑だから、呼び捨てでいいよ。レイバって呼んでね」

リリイがこの街にやってきた日の、歓迎の挨拶がそれだった。

敬称をつけて呼ばれることも、敬語を使われる事も嫌う人間だった。始めは戸惑つたが、同居を始めてから二年を過ぎた今となつては、すっかり友人のような関係が定着してしまつていた。

行きつけの食料店に、まともなものが残つていた事に安堵しながら、リリイは買ったばかりの食材を布袋につめていた。とは言え、叔父の客人が若い男だと考えると、中途半端な奮発だ。今日の財布に入っていた持ち合わせは、決して多くはなかつた。

(同世代の男どもって、信じられないくらい食べるのになあ)

学校の食堂で顔を合わせた時のクラスメイトの顔を思い浮かべつつ、溜息をつく。

荷物を抱え込んで店を出ると、夕焼けの日差しがまぶしかった。店を出てからは、意識的に足早になった。少し横道にそれると、浮浪者のたまり場に繋がっているのだ。さっさとポリスの目が光っている大通りに出るのが賢明だろう。

狂獣被害の影響で、この街の人口は増加した。デカルト・シティは、南大陸で有数に大きな街で、巨大なシェルターが、かなり初期から機能していたのだ。

だが難民を呼び寄せてからと言うものの、畳み掛けるように街の治安が悪くなったらしい。人口は増えても、技術革新の関係上、労働者は足りていない。工場で馬車馬のように働かされて、満足な賃金を得られないまま、路頭で死んでゆく人間が増えた。生産形態の変化も手伝って、食料の配給も上手く運んでいない。住民、特によりの所のない難民達のフラストレーションは、危険な段階まで膨れ上がっているように思う。

この八年間で、貧富の落差は顕著になっていた。近い未来には、こうして買物に足を運ぶのも、難しくなるかもしれない。

将来のことを考えると不安になる。不安になるからこそ、リリイは動かずにはいられないのだ。

(外、すごかったな)

試験の様子を思い出して、リリイは思わず視線を上げた。シェルターは上空には伸びていない。空だけは、この大地のどこからでも望むことが出来る。そう思うといつも、感傷的になるのだ。

リリイは十七歳。グランドクロス が起きた八年前には九歳だった。

シェルターに守られて育ってきた。街の中で生きてきた。その平穏を幸福に思うが、どうしようもない閉塞感と戦ってきた事もまた、彼女にとっては事実だ。

（恵まれてたからこそ、贅沢な考えなのかな……。デカルトも、スピノザも、まだ安全な方だし）

ガード になりたいと人に言えば、そのたびに全力で止められた。お前は恵まれてるのに、しかも女の子なのにわざわざ何故と多くの人間がそう言った。

反射的な反発が沸くのも事実だが、それらの言葉が正論だと言うことも分かっていった。金を稼ぐ方法なら他にいくらでもある。安全な壁の中で、両親が残した家に住んで、就職して、静かに暮らせばいい。

そうは分かっているけど、リリイは外に出たかったのだ。

シエルターの外では、植物までもが、狂獣に連動するように成長を活性化させた。森に飲まれた不自由な世界だが、それでも、街と街の交流を完全に絶つことはできない。移動は必要だ。物資も人も、街から出ることは、絶対に必要なのだ。

移動しようとする全てのものを、狂獣から守り、確実に目的地まで送り届けるサポーター。レアリス・カンパニーが提唱した ガード のシステムとは、大まかに言えばそのようなものだ。

危険な仕事だ。だけど、リリイにとってはこれ以上なく魅惑的だった。

街の外に出られる強さを得て、自由に街の外に出る資格が欲しい。そうしたら、会える人がいる

（確かに、私も変わってるかな）

苦笑した。肩にかかえた荷物をぎゅっと握りなおして、歩調を速める。

（でも一番変わってるのは、姪がガードになるって言い出したのをひとつの反対もせずに、むしろ援助してくれた……レイバなんじゃないかな）

周囲に反対されてばかりだった進路の希望を、身寄りである彼に相談したら、あっさり納得してくれた。

それどころか、自分の家の近くにカンパニー直轄の専門学校があ

るから、と、入学を勧めてさえくれた。

その言葉に甘えて、こうして学生生活を送っているのだから、感謝すべきなのだろうし、実際にしている。だが、奇妙に思う。叔父の考え方は、ありていに言えば非常識だった。奇妙な客人が来るからと言って驚くには、今さらかもしれない……

大通りに出て、視界が開けた。

循環バスが目の前を過ぎた。住宅街の出身であるリリイにとってはまだ見慣れない、この街でもっとも一般的な移動手段だった。

私有の車を走らせるような人間は、もう少し高級な住宅区画、もしくは街の出口近くに集中しているので、この道を通るのは、公共の移動車か、運送車が多かった。人で賑わう街の音に、燃料の音とガスの臭いが、すっかりなじんでしまっている。

車道の向こうには、遺跡が広がっていた。

柵で囲われた、広大な遺跡街と、その入り口に寄り添うように存在する、巨大な寺院。

通りを挟んで、そこだけ別世界のようだった。

デカルト・シティは技術者の街でありながら、遺跡の街でもあった。街の面積の三分の一を、教区 と呼ばれる遺跡が占めている。そもそもこの街は、遺跡に寄り添う形で営まれた考古学者たちのキャンプが起源なのだと、レイバは言う。

寺院は、森人信仰を掲げる、この大陸に存在する中で、もっともポピュラーな宗教 テンプル の有するものだ。リリイは無神論者だが、意匠をこらした荘厳な建物は、見ている分には、美しくて好きだった。夕焼けに照らされた今の時間は、特に。

寺院の側にある、教区 の出入口の門も美しいのだ。開かれていますのを見たことがない、特別な職業の人間しか入れない、立ち入り禁止区域なのだが。

リリイはそっと 教区 から目をそらした。大通りに沿った、歩行道を歩く。

寺院があるということは、家の近くまで来たということだ。なん

となく気が急いで、結局は大通りに出た後も早足で進んだ。

レイバの家は、小さな二階建ての一軒家だ。つい二年前まで一人暮らしをしていた男としては贅沢をしているようだが、商売道具を積み上げるためのスペースが、いくらあっても足りないと言本人は言う。

そして、外観を目の当たりにすれば、これは贅沢ですらないのではないかと思ってしまう。要するに、すさまじく古くて、すさまじく汚い。元の家主の仕業かレイバ自身の所業かは知らないが、機械油のようなもので汚れたグロテスクな外観は、隣に建っている安アパートが、清潔に見えてくるほどに哀れを誘う。破格の値段で売りに出されていた中古の家を、貯金を叩いて買ったと本人は言っているが、それが無償の譲渡だとしても、リリイは驚けなかったかもしれない。屋根のある場所がどれほどの価値を持つかは知っているが、それでもそう思わずにはいられない。

車もないのに設えられたガレージに、ガラクタとしか見えない謎のパーツがごろごろ転がっている。彼が言うところの“商売道具”だった。そのスペースが壁になって、初めて来る人間の目には、たぶん人家に見えないはずだ。

リリイはガラクタに埋もれて外からは見えない、入口のドアにたどり着いた。

鍵は開いていた。

呼び鈴を押すか押すまいか迷ったが、やめた。そのままドアノブを捻り、いつものように帰宅する。そして。

「え？」

思わず、呆然とその場に制止する。

「あ……」

玄関に立っていた人影が、こちらを振り返る。

長い、とても長い銀色の髪が、サラリと揺れた。

お人形さん。最初に思いついた単語は、それだった。

乳白色の腕が、振り向く動きに合わせて、身体の側に畳まれる。華奢な腕だ。腕だけじゃない。身体全体がほっそりとしていた。

きれいな顔だ。骨格が小さく、鼻も唇も小作りで、とても愛らしい。大きな瞳は、幼さを色濃く残しながらも、艶やかで美しかった。

だがそれは、顔の半分に限ったことだった。左目には眼帯をつけており、多くの面積を隠してしまっている。

成人には程遠く、リリイ自身よりずっと年下に見える。清潔そうなワンピースをまとった華奢な身体は、色気などを語るにはずっと早い。だがそれでも、少女は美しかった。若さがもたらす瑞々しさはもちろんのこと、それとはまた別次元の、彫像のような完璧さが備わっている。

とてもきれいな女の子が、我が家に立っている。

「……………」

事態を理解できずにリリイが呆然としてしていると、すぐに、家の奥から騒がしい声があった。

「あ、リリイおかえりー！俺の方が早く着くの珍しいから変な感じー」

ペタペタと、特徴的な足音を響かせて、見慣れた人物が、家の奥から顔を出す。

金に近い明るい茶髪は、本人のお気に入りであるらしいが、あいにく根元の部分が地毛の栗色に侵食されている。だらしく伸びっぱなしのその髪を、以前リリイが貸したヘアピンやらヘアゴムやらで適当にまとめていた。そのくせ、髭や眉毛の手入れは怠らないようだから、毎日見ているも、本当にわけがわからない男だと思う。

レイバは帰宅したこちらを見て、気楽に笑った。両耳の耳たぶから軟骨までを、シルバーピアスが浸食している。そのくせ服装は作業用のツナギで、足元は手製の健康サンダルなのが、彼らしいとも言えはいいのか。

「レイバ、この子……」

とつさのことに上手く声が出せず、少女に挨拶をすることも忘れてリリイは言った。

レイバは特に驚かず、ああ、と納得した。

「そうそう。メールで言ったじゃん。お客さんだよ」

「『お前と同じ年の男』とか書いてあったけど!？」

買い込んで来た食材の重みを気にしながら叫ぶと、レイバは特に動じないまま続けた。

「言わなかったっけ。ふたりいて、そのうちの一人が、お前と同じ年の男。こっちの子はそいつの妹だよ」

「妹？」

「そうそう。よろしくね、ロール。こいつがリリイだから」

レイバはいつも通りの軽い口調で、例の美少女にこちらを紹介した。ロールと呼ばれた彼女が、慌てて頭を下げて、よろしくお願ひしますとでも言おうとしたであろうその声が、発されるか発されないかのうちに。

「おーい、ステイアー!」

家の奥に向けて、レイバが叫んだ。

「うちの姪っ子紹介するから、こっち来てー!」  
声が響いて。

玄関から伸びる廊下の奥、レイバの物置部屋から、慌てた様子で一人の少年が姿を見せる。

少年。

リリイは反射的にそんな印象を抱いた。電子メールに書かれていた、「同じ年の男」という言葉から、教室で毎日顔を合わせているクラスメイトのような青年を想像していたのだが、それとはあまりにも、形が違った。

痩せていた。顔つきだとか雰囲気だとか、それらの情報を飛び越えて、最初にそう思った。

玄関に立っていた少女も華奢だし、レイバもどちらかと言えば痩せ型だ。だけど、それとはまた種類が違う。脆弱さを感じさせるほ

どに、はつきりと貧相だった。

よく見れば、身長がそこまで低いわけではなかった。せいぜい平均か、それより少し下か、といった所だろう。それでも、質量がないためか、小柄に見える。

気温もそこに上がり始めた初夏であるにも関わらず、前開きのジャケットを着込んでいるのは、それが理由なのだろうか。よくよく見れば、なぜか両手に白い薄手の手袋をつけていて、顔と首元以外の素肌は完全に隠されていた。それでも、服の上からでも気になるほどに、細い。ポケットから伸びる細いコードが、首に引っかかったイヤーフोनに繋がっていた。首筋が細いからか、そんな小さな装飾がひどく目立っていた。

ようやく顔を見やれば、そちらも十分に目を惹いた。

細い銀髪と白い肌。温度や生気に欠けた、セラミックのような透明感。まぎれもなく、先ほどの少女と兄妹に違いないと思った。顔かたちの全てが、妹によく似ている。年齢や性別の壁を越え、あまりに似すぎている。

妹の方が人形のように完成された外見だとすれば、兄の方は、あべきものを歪めたような、奇妙なアンバランスを感じさせた。綺麗だとは思うが、十七歳の男性と仮定するには、精悍さには欠けている。

リリイは思わず言葉を失って、立ち尽くした。挨拶をしなく

ては。心の冷静な部分がそう思っているのだが、身体が動かない。

温度のない美しさは、直感的に近寄りがたい。氷のように。

だが。

その沈黙は一瞬で破れた。目の前の男が笑ったのだ。

なんとということもない、普通の笑顔だった。愛想よく唇を動かしただけ、ただの笑み。誰にでもできる、日常の中でいつも見ているような、普通の笑顔。

外見から想像していたよりも、はるかに庶民的で、大げさな笑顔だった。

「お邪魔してます。スティア・アリビートです」  
歯切れのいい声。

「突然来ちゃって、すみません。お世話になります」  
明朗な挨拶。

リリイは我に返ると、つられるように笑った。

「あ……いいえ！ あの、たいしたお構いもできませんし……その、  
見ての通り、残念な家で申し訳ないです」

「残念って!?!」

玄関から見える範囲の散らかりようを指しながらリリイが言うと、  
レイバが心外そうに叫んだ。スティアは大笑いした。

「レイバの所業には俺も慣れてますから、お気遣いなく」

「うわナチュラルに採用された」

「えっと……」

いつまでも続きそうなレイバの声を遮って、リリイは背筋を伸ば  
した。

「私は、リリイって言います」

「よろしく。レイバから聞いてます。……ロールは、挨拶した?」

スティアは、多少兄らしい口調で、例の美少女に言った。

少女は少しか迷った後に、小さく首を振る。確か先ほどは、挨  
拶しようとしていた所を、こちらの驚愕や、空気を読まないレイ  
バの言動で遮ってしまったような気がする。

申し訳ない事をした。リリイはやっとそう自覚して、少女に笑顔  
を見せた。

「いきなり慌しくしちゃってごめんね。さっきも言ったけど、私は  
リリイ。よろしく」

「あ……はい」

少女の右目が、ゆっくりと笑んだ。眼帯の下にある左目がどのよ  
うな状態だかは分からないが、きっと同じ動きをしようとしている  
だろう。

「ロール・アリビートです。お世話になります」

どうやら、人見知りをするというわけではないらしい。想像していたよりもしつかりした口調で、少女はそう言った。

開けっ放しだった玄関の扉に錠を下ろしてから、リリイは自宅に入り込んだ。所在無さそうにしているロールと、彼女よりはいくらかくつろいでいる様子のステイアを先導するように、ダイニングへ向かう。

買ってきた食材をテーブルに下ろしながら、リリイはステイアに言った。

「えっと……ステイアくん。私と同じ歳なんですよね」

「え、ああ。この前十七になったばかりだけど、それで合ってるなら」

「悪いんだけど……」

頬を掻いて、ごまかすように笑った。

「家の中で敬語使っていると、ちょっと落ち着かないの。この喋り方でいいかな？」

レイバの流儀が感染ってしまったようで、気恥ずかしかったが。

ステイアはすぐに納得して、奇しくもあの時のレイバと同じ事を言った。

「ああ。なら、名前も呼び捨てで構わないですよ。……じゃないや。構わないよ」

玄関先にロールを棒立ちにさせたまま、レイバが何をやってたのかと聞けば、くつろげるスペースを作るために、この家のどこかにあったはずの、クッションを探していたのだと言う。ステイアはそれに付き合わされて、物置にまで引つ張られたらしい。

心底呆れながら、リリイは二人の客人にテーブルの席を薦めた。キッチンにはリリイのテリトリーなので、それに面したダイニングはこの家の中では片付いている場所と言える。一瞬前まではレイバが積み重ねた設計図だとか依頼書だとかが溢れかえっていたが、とりあえずは問答無用で、まとめて彼の物置部屋の床に移動させた。

急造のくつろぎスペースに腰掛けて、ロールの方はどこかそわそわとしていたが、ステイアはこの状況を楽しんでいるように見えた。廊下を通して見える隣の部屋で、書類の山を崩してレイバが悲鳴をあげている背中を、にやりとして見つめている。

「……一体、何つながりの知り合いなの？ あれと」  
リリイはキッチンのカウンターからその様子を眺め、ステイアに向けて問いかけた。

ステイアは、声をかけられて初めて気付いたとでも言うように、ああ、と一息おいてから、説明をする。

「客、かな。レイバの発明品に世話になったんだ」

「え？」

「どこから話せばいいのかな……俺、つい先日まで入院してたんだ。それで今、仮退院なんだけど」

唐突な単語だったが、その一声で、すべての種明かしを聞いたよくな納得が下りた。ここから改めて見やっても、ステイアの身体は、生まれつきの一言では収まりきらないほど、とにかく細い。

「治療にレイバが作った器材がけっこう関わってたらしくて。医者や看護師を通じて、責任者であるあいつが病院に呼び出されるよう

になって。最終的には、二人目の主治医みたいなことになってきて、リハビリとかに付き合ってもらったんだ」

「……え!？」

リリイは思わず、大声で驚いてしまった。

こちらのリアクションにステイアは少しびびりたようだった。珍しいものでも見るように、軽く目を見張る。

「そんなに驚くこと?」

「え、いや、だって……医療機器なんて、人の命に関わるものを作って、その運用に携わってるなんて知らなかったよ」

レイバ・グリーニッシュが営むのは自営業だった。よく言えば発明家、もっと正確に言えば改造屋、広く知られている名称で言えばジャンク屋にあたる。狂獣による被害の、特需景気に乗っている職の一つだ。

今のデカルト・シティでは、さして珍しくない商売だ。この街の教区 には、先住民が暮らしていたとされる遺跡が広がっている。遺跡を探索・研究する学者や研究者の働きにより、この大陸の技術革新が進んでいる。

また、学者や開発者が研究を終え、必要がなくなった遺跡文明の欠片を、管理する業者がいる。その業者から、いわゆるジャンクパーツと呼ばれるそれを引き取って、発明に利用をし、出来上がった商品を売りつけるのがジャンク屋だった。

カンパニーの開発陣が取り組む研究が、目下 シェルター や情報機器、通信技術に焦点を絞る中、ジャンク屋はそれぞれが得意なテリトリーを張って、好きなように開発をしている。起業して工場を立ち上げ、ブランドとして成功した例も多くある。カンパニーや自治体の監視を潜り抜け、非合法で銃器を開発し、ブラックマーケットで売りさばく者もいると言う。

レイバがジャンク屋として所属する団体は特にないが、近所で個人経営を営む同業者が集まって、仕事場を借りて適当に仕事をしている仲間がいるとは、以前に教えてもらった。

具体的にどんな種類の発明を請けているかは、聞いていなかったが、入院施設が整っているような大きな病院で、医者と対等に仕事をする叔父など、想像が出来なかった。

（だって、レイバって正装して仕事に行ったことなんてなかったし……）

楽な格好を好む叔父は、常に作業着か、それに準ずるような、ゆったりとしたぼろ布を纏って家を出ていた気がする。

（大きな病院で、白衣のお医者さんにまぎれて、仕事……？）

リイは平静を装おうと努力をしたが、意識すればするほど、なんだかぞつとしてしまう。こちらの百面相を目の当たりにして、ステイアもロールもきよとんとしていたが、すぐに笑った。可笑しそうに。

「表情豊かだね」

揚げ足を取るようにステイアが言った言葉は、他の人間にもよく言われる。本当に頻繁に言われる。まさか、初対面の人間にまで言われるとは思っていなかった。

嘘をつけない体質に自分を生んだ両親を心の中で呪いながら、リイはごまかすように視線をそらして、手元を見やった。買ってきたばかりの卵が、紙のパックに包まれている。

ステイアはそんなこちらの様子に苦笑して、フォローをするように優しく言った。

「まあでも実際、そんなに驚くことでもないと思うよ。入院してみても分かったけど、今の医療において、ジャンク屋が占める地位って大きいみたいだから」

「そ、そうなんだ」

「特にレイバは腕もいいし」

それこそが何よりも意外な一声だったのだが、確かに、叔父は金に困っている様子もない。

「それに……」

ステイアは話題を区切るように、息を吸った。

「医療に利用しないでどうするって話だ。科学ってのは、魔法なんだから」

リリイは思わず、手にした卵のパックを握り締めた。

教区 に広がる遺跡。遺跡から発掘されたジャンクパーツ。それらを利用して生み出された科学製品。それらすべての根源は、大陸の先住民が、自在に操っていた未知の技術だ。

リリイは、背中先の先にある冷蔵庫の存在を意識した。この街に来る前は、こんな発明品とは縁がなかった。生ものは早くに加工して保存をしたし、どうしても必要な時は、業者から氷を高値で買った。遺跡を身近に残し、ジャンク屋が多く商売をするデカルト・シテイでは、機械の家庭普及率が高い。

この冷蔵庫を初めて見た時、魔法の箱だと思ったのをよく覚えていた。それはちょうど今日、試験に臨んで、シエルターを目の当たりにした時の感覚に似ている。

外から見ても、仕組みなどは分からない。

ただ、ありえないことを当然のように叶える、そんな存在。

この大陸をかつて支配していたと言われる、遺跡の元の主たちは、このような不思議な力を、感覚ひとつで使っていたと聞く。

科学者はその復元者だ。レイバは言わば、現代を生きる魔法使いの一人なのだ。

大陸の先住民は、 森人 と呼ばれている。

森と共存していたのではない。森を役使していたのだ。自然の力を、手足の延長のように操り、その力を日常に生かして文明を築いていったと伝えられている。現在は絶滅して姿を消したが……彼らはまぎれもなく、おとぎ話の中に登場するような、魔法使いだったのだ。

無宗教のリリイにしてみれば、その事実がテンプルの教典に書かれている正史だと分かった上でも、絵空事にしか聞こえない。だが、

遺跡の文明を解明すればするほど、伝説が全て真実である裏づけばかりが取れるらしい。想像もつかない魔法の世界が、大陸の誰もが認める過去の歴史なのだ。

森人を偶像として崇拜しているのはテンブルだが、カンパニーが技術開発の拠りしろとしている物もまた、森人が残したアニマ文明だった。

「世の中の物質を分解しまくると、原子やら分子になるってことは知ってるだろ？ それくらいの最小単位で、世界のあらゆる所を漂ってる霊的粒子がいわゆるアニマなんだよ」

若者の話題が、少しでも科学的な方向になっていたのがよほど嬉しかったのか、レイバは子供のように顔を輝かせて、得意げにそう言った。

演説が止まらないので、テーブルに並べた食事に手をつけるスピードは、彼が一番遅い。

「森人は魔法の力でアニマを動かして、そのアニマを介して原子・分子レベルに干渉をして、様々な反応を呼び寄せたと言われているんだ。これらを全部、意識だけで感覚的にやっちゃうからすごいよね。でも、十三年前にストーンが発明されたことにより、人類もアニマを扱える土俵に立った。これからはどんどん、魔法が形になっていく。科学者がそうするよ」

買った食材の量が少なかった事を気にする必要はなかった。病み上がりのスティアはまだ、普通の食事が摂れないらしい。

四人で掛けたテーブルで、彼の前にだけ食事が置かれていないのを見ると、調理人としては無性にいたたまれない。そんなことを思いつながりリィは正面の席に着いたスティアを見た。食卓を一人で離れた所で、することもないのだろう。彼は演説を並べるレイバの言葉を聞き流しながら、薬らしきものを服用しようと、紙袋を開けていた。かなり種類に富んだ錠剤だ。

「ストーンはアニマを石に染みさせて、固めた人工燃料。新しいエネルギーがあるんだから、可能性はどんどん広がっている。た

たとえば通信機なんてアイデアは、森人が日常的に用いていたという、テレパシー能力を研究した所から来ている。あとはどうやって成立するかを考えて、人間にも使える形に作り替えていく。他の全ても同じさ。彼らが風を起こせば、俺たちは俺たちのやり方を探して扇風機を作る。彼らが敵を撃ち抜けば、俺たちは銃器の構造を作り上げる」

「少しでも、何かお腹にいれないと胃に悪いんじゃない？」

説明に酔っている風のレイバはとりあえず無視して、リリイはステイアに問いかけた。

たいして時間もかけられなかったので、結局の献立は、特別に豪華なメニューにはならなかった。買ってきた野菜に、保存していたドライトマトを合わせただけの、レモン風味の炒め物。たまたま先日からタレに漬けていた塊の獣肉を、薄く切って野菜の残りと共に並べたもの。固形ブイヨン溶かしてタマネギとベーコンを加えたスープ。固く炊いたライス。……スープくらいなら、病人職にも良いのではないだろうか。

そのような思考が視線で読まれたのか、ステイアは首を振った。

「遠慮しとくよ。来る前にリハビリのつもりで間食したら、ちょっと気分悪くなつたんだ」

「リゾットとかなら、食べやすいんじゃないかな。このスープがベイスでいいなら、すぐに作れるよ」

「うーん……ちょっと無理かな。まあ、さつき食べたアイスが胃に膜とか作ってそうだし、薬飲んでも、たぶん大丈夫じゃない？」

大雑把な論理を展開してくれた。

リリイが黙ってしまつと、ステイアは苦笑した。

「用意してくれたのに、ごめんね。でも、俺が食えないぶんは、ロールが大量に食ってくれるから、安心して」

「そんなことないもん」

ロールが食事の手を止めて、憤慨する。

「どうだか。さつきから見ればさつきぶん食うの早いじゃん」

「だって、おいしいから……」

そこまで言ってから、ロールは兄との会話を打ち切って、こちらを向いた。

「すごくおいしいです。お料理、上手なんですね」

「え？ あ、いや別に、そんなことないと思うけど……」

「なんだかすっごく無視されてるみたいで気になるけど気にしないよ。リリーの料理は上手いぞー」

唐突に、レイバが口を挟んだ。

「親元を離れるより前から、家事はやってたんだよな。確か」

「へえ」

「すごいですね」

「いや別にすごくないから！ 母さんがそういうのダメだったってだけで……って、いやまあ、なんでもいいけど！」

謙遜して照れくさいのをごまかそうとすればごまかそうとするほど、墓穴を掘っているような気持ちになる。レイバやステイアの視線を見れば、彼らはこちらの反応を楽しんでいるようだった。これだけ短い付き合いで、すでにこちらの性格を把握しているらしいステイアの事を恨みがましく思いつつ、唯一、純粹に尊敬の眼差しで見つめてくるロールを無下にすることができず 結局、リリーは小声で礼を口にした。「……ありがとう」

「ガードになるために、この街に来たって聞きましたけど」

ステイアが聞いてくる。特に意識したわけではないのだろうが、その一声だけが敬語に戻っていた。

なんとなく気が引き締まって、リリーはきよとんと彼を見つめ返す。

「そっだよ」

「実家はどこなの？」

「たぶん知らないと思う。この街の隣の、スピノザって言う小さな街なんだ」

「ああ、聞いた事はある」

「それよりそつちも、ずいぶん遠くから来たんじゃないの？ 銀髪の人ってこつちじゃあんまり見ないし」

一般的に、南大陸サウスランドに住まう人間は、リリイやレイバのような茶系の髪や赤毛が多い。北大陸ノースランドに住まう人間は、金髪や銀髪が多く、肌が比較的白いと聞く。むろん、帝国が解体されて以後は特に、居住移転や婚姻の自由が認められたことで、血が混ざる機会も増えたので、今となつては傾向の問題でしかないが。

それでも、銀髪を身近に見る機会が少ないことには変わらない。

だが、リリイは自分で問いかけておいて疑問に思った。入院するほど病弱な人間が、こんな時代に長旅を歩くだろうか。街から街へ移動するには、大量のガードを護衛につけた大型自動車に詰め込まれるのが一般的だ。個別契約でもない限りは、優雅な旅には縁遠い。体力・精神共に、消耗も大きいだろう。

そもそも、なぜ仮退院で自宅に帰らず、この家にやってくるのだろうか？

スティアは考えながら答えるように、ゆっくりと口を開く。

「生まれは北だけど、こつちに逃げたんだ。 グランドクロス の爆心地に近かったから」

「……………」  
瞳目する。

スティアは予想の範囲内だとも言うように、特に気にせずにつけた。

「しばらく、ここの隣町に住居を借りて生活してたけど、ちよつと用事があつて、家族で他の街に行くことになって、森に出た。その時に狂獣に襲われたんだ。両親は死んだけど、雇つてたガードに助けられて、俺たち二人は一命をとりとめた。そこでたどり着いたのが、この街の病院」

リリイだけではない。事情を知るはずのロールも、レイバも、きつぱりとしたスティアの物言いに驚いているようだった。賑わっていた食卓の空気が、静かになっていた。

「ロールは左目が見えないんだ。それは、その時の事故のせい。俺は右腕を噛まれて失血死するかと思っただけど、応急処置がよかったから、なんとか助かった。だけどその時の狂獣が、なんか変な病気持ってたらしくて、今でも具合が悪いんだ。入院したのも、今回が初めてじゃないし」

淡々とした口調のまま、なんでもない様子で続ける。

「でも入院って、金が掛かるでしょ？ 両親が持ってた金もギリギリ減ってきてさ。こちらら未成年でろくに働けないのに、自治体やカンパニーから出る公的な支援はスズメの涙だしね。こんな境遇の人間がゴロゴロしてる世の中だから、仕方ないと言えば、仕方ないけど」

愚痴るように言っつて、スティアは大きく肩をすくめた。

リリイが何も言えずに呆然としてみると、レイバが横から口を挟む。

「とまあ、そういうわけ。こいつら、退院した所で帰る家がないんだ。病院に戻るまでここに置いてやるぜ！ っつて話になって、今日来てもらったの」

「え？ で、でも……」

唐突に手元に戻ってきた話題に戸惑っつて、リリイは声を上擦らせた。

「それだと、今までロールちゃんはどうしてたの？ 入院してたのはスティアく……スティアだけじゃ」

「一応、アパートを借りてただけだね。そろそろ金銭的に限界で、追い出された」

答えたのはスティアだった。「治安も最近、見てられないしね」「そう……そっか」

リリイが肩を小さくしていると、スティアが笑った。場を仕切りなおすように。

「ごめん。暗い話になっちゃったね。お宅に上がらせてもらうなら、ちゃんと説明しなくちゃって思っただけど、どうも物言いが上手

くないんだよね。俺」

「ううん。隠さないでくれたおかげで、よく分かったよ。ありがとう」

「別に、落ち込まれるほど気にしてるわけじゃないよ。今はこんな境遇の奴、掃いて捨てるほどいる。比較の問題じゃないけどさ。医者にかかれただけ幸運だよ」

彼の言葉に、誇張は感じられない。本当に心の底からそう思っているのだろう。リリイはなんとなく、不思議に思った。自分と同じ歳であるというこの男は、奇妙に達観している。それは性格がもたらすものだろうか。苦労を経た結果だろうか。

何にせよ、彼はどこまでもあつさり言うのだ。リリイが同じ境遇にいたとすれば、絶対に言えないであろう言葉を。

「起きてしまったことを悔やんでもしょうがない。これからどうするかで精一杯だよ、いつも」

米のとき汁につけた食器を、スポンジで次々とこすっていく。

リリイがそうして三人分の食器を洗っていると、後ろから誰かがやってくる足音がした。      レイバではない。

「手伝うこと、ある？」

振り返ると、予想通り。シャワーを使い終えたステイアがそこにいた。自前のものであるらしい部屋着は、やはりゆったりとした長袖だった。

「ありがと。でも大丈夫だよ。せつかくさっぱりした所で、後片付けさせるのもなんだし。ゆっくりしてて」

「その皿を洗って終わり？」

こちらの提案をゆるやかに無視しながら、彼はリビングとキッチンを分けるカウンターに近づいた。

「余計な世話じゃないなら、拭くのも並べるのでも、手伝わせてくれないかな。体を動かしてた方が落ち着くから」

彼は特に他意のなさそうな、愛想の微笑みを見せた。

「まだ慣れないんだ。起き上がって歩いて、普通に生活するっていう感覚に。……こっちの勝手なりハビリ意識で、足引っ張っちゃったら申し訳ないけど」

「……そっか」

リリイは皿を洗う手を止めて、軽く手の水を切った。近くに置いていた布巾を手にとって、空いている片手でステイアを招く。

「じゃあ、洗ったお皿ここに置くから、拭くの手伝ってくれ？」

「ありがと」

「ううん。正直、私も助かるし」

特に気後れする様子も見せず、ステイアがキッチンに入ってくる。リリイは食器用の布巾を手渡しながて、不意に目を見張る。

布を渡した掌。風呂上りにも関わらず、変わらず白い手袋がつけ

られたままだった。

「……外さないの？」

見つめながら問うと、スティアはきよとんとした。初めて気付いたとしても言うように、戸惑いの仕草を見せる。

「あー、そっか。でも、新しいのに換えたから清潔だし」

「濡れるに決まってるよ。あんまり、その状態で食器を触っては欲しくないけど」

控えめに忠告すると、彼はあっさりと観念した。苦笑いを浮かべながら、左手の手袋だけを外す。

「……右は勘弁して」

悪びれるような口調で、だが、開き直ったように悪戯めいた笑みを浮かべた。

「ちよつとグロいことになってるから」

手袋をはめたままの右手を包むようにして、彼は布巾を手に取った。素手の左で食器を持ち上げると、それを拭く作業に入る。

リリイはその様子を眺めながら、先ほどの話を思い出した。

狂獣に襲われた。噛まれた右腕から病気が感染って、今でも具合が悪いんだ。

服の上からでは、右腕から手にかけての様子が見えるわけではない。

だが確かに、左腕に比べればどこことなく、動きがぎこちなかった。注意していなければ分からないほどの差異ではあるが……

「照れるよ」

からかうようにスティアが笑った声に、リリイは我に返る。

不遠慮に見つめてしまったことによく気付いて、肩が縮まった。

反射的にごめんと言いかけて、この状況で謝罪をすることは失礼だろうかと考え直して、そんな迷いを持って余していることがさらに失礼な気がして とにかく、混乱して何も言えなくなってしまった。そんなこちらの様子を、スティアは屈託なく笑い飛ばす。

「珍しいもんは普通は見ちゃうつて。別に気にしてないよ。隠したい所は、隠させてもらってるしね」

「……ごめん」

結局、混乱しているうちに謝ってしまった。ステイアは本当に気にした様子もなく笑いながら、皿を拭く。

リリイが再びスポンジを握り締めて、食器洗いを再開させた時だった。

「狂獣は危ないよ。俺の身体を見れば分かると思うけど」  
責めるでもなく、あくまで穏やかにステイアは聞いてきた。

「どうしてガードになりたいの？ これは別に反対してるわけじゃなくて、ただの疑問」

リリイは押し黙る。

志望する進路を、周囲のほぼ全てに反対されたのは最近だ。このように問われるのには慣れていた。

用意した答えはある。だが、今それを口にする気にはなれなかった。ステイアが実際に狂獣の被害を受けて、後遺症に苦しんでいる被害者だからだ。

街の中で生きてきたリリイが、街の中で訓練を受けて、街の中で育ててきた気持ちなど、彼にしてみれば綺麗事でしかないだろう。

彼のような人間がたくさんいることは知っていた。ニュースで聞いていた。浮浪者を見て想像していた。教科書で読んだ。だからこそ、やりきれないのだ。知識を持っていても、実感に結び付かない。食事の時に聞いたステイアの話は、淡々としていた。彼は、見てきたものに対して、愚痴や不満をぶついたりせず、事実だけを並べていた。現実的な性格なのだろう。

比べると、自分が甘い人間だと言うことが、痛いほどに分かる。  
(それでも)

ガードになりたい。それは確かに信念だ。

理由はある。嘘をつくことは得意ではなかったが、秘密のひとつやふたつを、抱えていない人間などいないのだ。

正当化するようにそう思いながら、リリイは笑った。　　うまく  
笑えたかは分からない。

ステイアは特にリアクションを見せない。その横顔に、ゆっくり  
と告げた。

「守りたいから、かな」

選んだ言葉もまた、決して建前ではない。

この想いもまた、本心であることには違いない。

「自分を守りたいの。こんな時代だけど、ちゃんと生きていきたい。  
できればその力で、同じようにみんなを守りたい。守れるだけの力  
が欲しい。何もしないでいるよりは、ずっといいと思うから」

ステイアはいつしか、じっとこちらの顔を見つめていた。

「……似てるな」

「え？」

「いや、気にしないで」

小声でなにやら呟いた後に、彼は笑った。屈託なく。

「いい夢じゃん」

「そ、そうかな？」

「うん」

ストレートな感想を貰って、リリイは照れくさくなった。

そんな会話の隙間を縫って飛び込んできたのは、毎日聞いている  
サンダルの足音だった。

「リリイ、あがったぞー」

風呂上りのレイバが、ご機嫌な様子で近づいてくる。彼は、こち  
らの状況を認識すると、首にかけた商店街のタオルを両手で握り締  
めて、笑った。

「ステイアもここにいたんだ。ちょうどよかった」

「カラスじゃないんだから……」

リリイは最後の一皿の汚れをゆすいで、ステイアの方に渡しなが  
らぼやく。レイバの早風呂は今に始まったことではないのだが、ど  
んな洗い方をしているのだろうと疑問に思う。

「まあまあ。いい思い付きしたんだよフロで。いてもたってもいられなくて出てきちゃった」

レイバは得意げに目を閉じて、なんだかとても楽しそうに告げた。

「スティア」

「ん？」

「ピアス開けようぜ、ピアス」

唐突。

そんな単語を思い浮かべながら、リリイはエプロンで手を拭いて溜息をついた。「なんなのよ……」

「入院中によく話してたんだよ。ほら、俺の美しいシルバー連星に、少年スティアは憧れてしまったようで」

「そこまで羨ましかったわけではないけど」

スティアは特に自分のペースを崩すことなく、皿を拭き続けている。「レイバ、自分が開けたいだけだろ」

「そういう気持ちもなくはない。でも、お前が自分でやるよりは安全だし、医者でやるよりは経済的だぜ」。退院祝いにおごってやるから」

「どっちでもいーよ」

「じゃあやろう！ 仕事の都合で、明日だけ予定空いてるし」

レイバは遊びを採用された子供のように瞳を輝かせて、くるりとリリイの方を振り向いた。

「リリイ、試験今日で終わりだから、明日から時間あるんだよね」

「え？ いや、まあ。予定組むのはこれからだよ」

声をかけられた時、リリイはすっかりシャワーを浴びに行くつもりで、エプロンのポケットに入れていた通信機をカウンターに置いている所だった。

「だったら、スティアと二人で街に行つてきてくれないかな。ピアッサー切れててさ」

「へ？」

「午前中は俺、ジョージさんちに寄ってからから、ロールというい

る出かけなきやなんだよね。ステイアも2ヶタ番地区には詳しくないし。お前は俺ほどではないにしろ、若者っぽいピアス屋とか知ってるでしょ？」

特に断る理由があるわけではないが。

唐突な申し出ではあった。ステイアが呆れる。

「困ってんじゃない。ごめん、いいよ気にしないで」

「え、なんだよー。二人でなかよく皿とか洗ってるから、てっきり友情的な何かとか、どっちもレイバの家族だぜ的な絆とか、そういうのが芽生えたのかと思ってたのに」

「ちょ、ちよつとうるさいレイバ。別にいいよ。どうせ休みだし」

ようやくリイが返事をすれば、レイバは感極まったと言うように満面の笑みを浮かべた。

「ありがと姪っ子！」

ステイアが拭いた皿を種類別に重ねながらレイバの脛を軽く蹴ると、馬鹿でかい感動の声は一応は終結した。リイはレイバに、皿を棚に並べる仕事だけ頼んで、キッチンを出てシャワールームに向かった。

長い一日だった。

これが最後の仕事だ。リイは自室の机に、帰宅時から放りっぱなしにしていた銃を置いた。布を広げて、整備道具を出す。

レイバの商売道具に侵食された家の中で、この部屋だけは奇跡のように整理整頓をされていた。別に特別なきれいな好きというわけではない。ただ、レイバが思う当たり前の整頓と、リイが思う当たり前の整頓に、超えられない格差があったというだけの話だった。

リイは机に向かった。書き物の趣味などはないので、課題にとりくむ時間を除けば、ほとんど武具の整備台となっている。

銃身を手早く解体し、シリンダーのカーボンをブラシで落とす。油の臭いが鼻をついたが、少し開けた窓から、いずれ逃れてくるこ

とを祈るしかない。

(シャワー浴びる前にやるべきだったなあ……)

分かつてはいたのだが、客がいると、どうにも調子が狂う。

パッチで余分な油をふき取って、不備がないかをもう一度確かめた。満足して、ライフルを置く。次はリボルバーの整備に入る。

試験が終わってしまったえば、採点期間に入るので、しばらく授業がない。射撃の腕が鈍らないことを祈るばかりだった。

(練習場くらい、開けてくれればいいのに)

銃身を管理するのは学生だが、銃弾を管理するのは学校だった。

正しくは、学校の親組織であるレアリス・カンパニーだった。治安維持のために、カンパニーは自治体と協力して、総出で銃の一般流通を制限している。たとえ訓練目的であろうと、こちらの意志で自由に使うことは出来ない。教師に隠れて銃弾をくすねた学生の例もたくさんあるし、ある程度は黙認されている所もあるが、それでも、事が露見した時の処分は重い。

合法の銃器販売店で自由に弾を補充するには、ガード、ポリス、ハンターいずれかの、ライセンスが必要だった。ゲートの開錠の鍵にもなっている、小さな銀のプレートだ。

夕方のシモンを思い出して、リリイは溜息をつく。

ライセンスを一度、シモンに見せてもらったことがある。

表面には、所有者の名前と登録番号が刻まれている。内側には小さなストーンが内蔵されており、それによって開錠IDや本人登録の暗証番号の電子記号が制御されているのだと言う。

ストーン について、リリイは詳しい仕組みを知らない。

外から見れば、様々な技術に便利に使われているだけの、きれいな石だ。宝石にはなりきれしていないが、大抵は普通の石ころなどよりは美しく外観を整えられている。

その石を、どうにかして精密機械に組み込むことで、さまざまな技術を支えることが出来るらしい。何故か、あらゆる場面のエネルギーソースとして、広く利用されているのだ。

十三年前にカンパニーが ストーン の開発に成功した時、技術者やジャンク屋が一斉に浮き足立って、街が一種、特殊な熱気に包まれていたことはよく覚えている。

新しいエネルギー燃料として、最初は電力の強化にあてられた。その影響で工場が活性化し、ここ数年の技術の発展に繋がった。

まあ、原理なんかどうだっていい。

重要なのは効果だ。ライセンスがあれば、街から自由に出る資格が得られる。

(欲しいな)

声に出さず、呟いた。

(ちゃんと卒業して、早くもらわないと……)

リリイは、銃の整備を終えると、ホルスターの汚れをチェックした。特に目立った損傷はない。

銃を収める場所の内側に、ポケットがある。リリイは指先をそこに入れて、中身を取り出した。

手製のお守りだった。

上等なものではない。どこでも買えるような布を、お世辞にも巧いとは言えない縫い目で、袋状にしただけの小さなもの。作られてから今までの年月を主張するように、可愛らしいピンク色だったはずのそれは、ほとんど肌色に近いほどに色あせてしまっている。

内側に通された糸できゅっと口を縫われていて、中身は見えない。開けるには、はさみで切るしかないのだろう。

(開けないけどね)

掌に載せると、心地よい重みがあった。リリイは未だに中身を知らない。

これを開けられる日は、このまま努力を続けていれば、もうすぐ来る。

リリイは、お守りをそのまま机の上に置いた。寝る時はここに置いてある。出かける時は、服のどこかにしまっただけでも持ち歩いている。

実戦に出る日が来るのなら、その時は装備のどこかに隠すと決めていたのだ。教室のみんなが無事で帰る事ができたのがこのお守りのおかげだなどと、信じているわけではないが。

(でも、集中力は高まったかな)

にこりと、思わず微笑んでいた。

ピピピピ、と電子音が鳴った。振り向くと、ベッドの上に置いた通信機が点滅している。

リリイはお守りから目を反らして、機体を確かめた。すぐに、期待した発信者でなかったことに軽い落胆を覚えたが、スイッチを入れた。

「もしもし」

「あつ、出た。よかった。寝たかと思ったぜ」

ジャンはいつもの軽薄な喋り方で、悪びれるでもなくそう言った。リリイは溜息をつく。

「ほんとにもう寝る所だったよ。何？」

「試験終わった記念に、明日遊ばない？ リックとそんな話が出ただけど、どうせなら、お前やエミリも誘おうと思ってさ」

タイミングが悪い。リリイは眉根を寄せた。

「ごめん、明日はむりなんだ。先約」

「へえ、珍しいじゃん。でもどうせ同じ学校の連中でしょ？ そっちの約束も合わせて、みんなでパーツとダーツでもしようぜ」

「うーんと、そうじゃなくてさ。家族の問題。今、お客さんがうちに来てて」

ジャンの語り口調が止まった。驚いているらしい。

「レイバさんに、客？」

「そう」

「ほんとに珍しいね。お前がそういう事情に關与するの。同居してから、お互いの生活にあんまり干渉してないって言ってなかったっけ」

「それは彼の仕事を私がよく知らなかったってだけで、また問題が

違っつて言うか……。とにかく、街の案内みたいなことをする約束なの」

奇妙な沈黙が降りた。

リリイは眉根を寄せる。電話だと相手の表情が見えないのがもどかしかった。

「ジャン？」

「あ、ごめん。分かった。お前は不参加ってことでいいね」

「うん。また今度誘ってよ」

「しょーがねーなあ。珍味的な何かを見つけたらおみやげに買ってやっから、楽しみにしてな」

「遠慮しとく」

ジャンの笑い声を最後に、電話は向こうから途切れた。

リリイは機体をカウンターに置いて、交わした会話を反芻した。

いつものクラスメイトとの、いつもの会話だ。何もおかしいこととはない。

だけど何か、違和感がある気がした。どこがどうというわけでもないのに。

（気のせい、だよな）

検証する価値すらも感じられぬまま、リリイは手を洗うべく廊下に出た。

\*\*\*

やがて、リリイが眠りにつき、二時間ほど数えた真夜中に。

着信が再び鳴り、一日じゅう待っていた電子メールの続きを受け止める。

Equ8 . 7 / 22 2 : 18

From : 父さん

Title : こんな時間にごめん

今朝は早速の返信をありがとう。そんなに喜んでくれるなんて嬉しいです。

試験の手ごたえはどうだった？ 俺の激励が功を奏しすぎて、燃え尽きていないことを祈ってる。

そのことについてもじっくり話したいけど、このメールでは大切な用件をひとつ。

父さんのことを話させてくれ。

大きな任務に関わっているって言ったよな。

本当に大きな任務になってきた。予想外の展開にコトが運んで、こっちの仕事は増えるばかりだ。

すっげえ大変だけど、でもそれはラッキーな事だった。

父さんちよつと興奮してるから、思わずこんな時間にメールしちゃいます。寝てたらごめんな。起こしちゃったならもつとごめん。

でも、このお知らせを聞いたら、お前も許してくれると信じたい。

お前に、会えるかもしれない。

「俺、別におかしいこと言っただけだよ」

「うん、まあ、怪しくはなかった。詰めが甘かったからヒヤヒヤはしたけど」

「ほんと？ どのへんが」

「“変な病気”とかさ。詳しく訊かれたら、どうするつもりだったんだよ。あいつがスルーしたから良かったけど、興味あつたらいろいろ訊いてきたと思うよ」

「いや、そういうのは、あんたがフォローしてくれる領域じゃないのかよ」

「科学者には、空言の証明はできません。計画的にやっってください。ほんととお前、さりげない所でさらりと嘘つきすぎだよ。逆に心臓に悪かった」

「木を隠すには森。嘘を本当だと証明するのが難しいなら、嘘を嘘にすり替えれば、ちよつとはやりやすい」

「曲がってるなあ。どうしてこう育っちゃったんだか」

「曲がった大人たちに、囲まれてきたからね」

「まあ、今回は相手がだまされやすいから、相性も良かったんだらうね」

「あー。でも、騙す騙さない以前に、あの子、俺に同情しまくってたから。何言っても信じたんじゃない」

「突っ込んだこと聞いてこなかったもんね。そりゃ、いきなりあんな身の上話されりゃ、反応にも困るだらうけど。あれも作戦？」

「やぶれかぶれだったけど。でも、わりといい言い訳だったと思わない。昼からずっと考えてたんだ」

「まあ、全部ウソではないから、矛盾も少ないよね。しかし、うちのかわい子ちゃんにあんな目で見られて、罪悪感はないの」

「自分で指定しておいてよく言っぜ。哀れまれるのは嫌いなんだよ。」

今さら感慨はない」

「そこまでキツパリ言われると、叔父としてはしょんぼりだな」

「別に嫌ってるわけじゃないよ。本当のこと話して変に巻き込むよりは、嘘を貫いた方がよっぽどいいだろ」

「へえ。お前の口から思いやりの言葉なんて、久しぶりに聞いたよ。気に入ってくれた？　うちの子」

「まあ、あんたの家族にしておくにはもったいない、くらいは思ったよ」

「違うないけどさ。もっと言い方ってもんが」

「それより動作は。自然だった？」

「んー、俺の目から見ればやっぱり多少、右側がぎこちないけどね。

外からはたぶん分かんないだろ。思ったより外見の違和感もないし。お前が寒がりでよかったホント」

「なら、いいけど。自分で動かす分にも違和感はない。部屋の整理とか、皿洗いとかが、寝所の準備とか、そういうのが自然にできる程度には感覚が戻ってるよ。走ると疲れるけど」

「立ちくらみとか貧血はない？」

「薬を変えてから調子いい。……あ、いや、一個だけ不満あった」

「？」

「新しい定着剤が、信じられないくらいまずい」

「配合成分のなに一つとっても変えられないな。そればっかはガマンしてよ」

「それにしても、今度は何企んでるんだよ。なんで唐突にピアス？」

「買って来たら教えてやるって。いい機会だから、このあたりの地理を覚えておけよ」

\*\*\*

母が死んだ日の夢を見た。

それが奇しくも、セカンド・グランドクロス による狂獣被害の激化と、ほぼ同時期の出来事だったということを、リリイはよく覚えていた。

世界中が歴史的な事件に震え上がる中で、物言わぬ母の寢床に立っていたリリイの心は、とても静かだった。 闘病生活は短くなかった。ずっと覚悟していたから、事前に想像していたよりは落ち着いていられた。

父が旅先で セカンド・グランドクロス に巻き込まれ、生死不明であると言う情報が入ったのも、ほぼ時を同じくしてのことだった。

身寄りの全てが、家族という共同体から離れた。

世界中が混乱していたから、寄り添う場所もなかった。

それでも、リリイの生活は、それまでのものと大して変わらなかった。父親が旅に出て家に帰らないのは、うんと幼い頃からの事だし、母親が一日の大半をベッドで過ごす事で、家事や日銭稼ぎは自分でするのも、当たり前前の事になっていた。

今までだって、一人で生きてきたようなものだ。

色々なものが麻痺して、痛みすら感じられない。

父からのメールが届いたのは、そんな折だったのだ。

そして、お守りが届いたのは、もっと前

グランドクロス が世界に与えた激震と、途絶えた情報と、錯綜する悪い想像の中で。

旅の空にいたはずの父親が、顔を見せてくれたその日から、小さな宝物はこの手を離れなかった。

夢から覚めたりリリイは、目覚めた現実もまた、同じ夢なのではないかと疑った。

朝食の準備をしようと台所に立ちながら、通信機に届いていた情

報を、何度も反芻する。

(どういう……意味?)

お前に、会えるかもしれない。

リリイはもう一度、通信機のメーラー画面を表示した。指先が、うまく動かない。

今、俺はデカルトのすぐ近くにまで来てる。

正確にはもう市内にいる。仕事の関係で、場所は明かせないけど、まだ色々と作業がある。すぐにでも飛び出して行きたいが、そういうわけにもいかない。大人だしな。

お前、試験が終わったなら、しばらく時間があるんじゃないかな？俺の方が、時間取れるのがいつになるか分からない。分かったら、連絡をする。都合がつかなら、会いに来てくれないか。

今、疲れてるんだ。こんな事を書くとお照れくさいし、年頃のお前にはやはりウザいと言われてしまうのかもしれないけれど、でも、できることなら、今日にだって、今すぐにだって会いたいんだ。

「おはよー、リリイ」

はっとして、反射的に機体をカウンターに置いた。

レイバはあくびまじりにそう言って、新聞を片手にテーブルに歩いてきていた。ぼさぼさの髪の間隙に、つけっぱなしのシルバールピアスが覗いている。

「……レイバ」

「ん〜？」

話しかけたが、寝ぼけ眼でこちらを見るレイバを見て、リリイは急に冷静になった。

レイバ・グリーニッシュは、とらえどころのない性格をしているが、基本的には現実主義者だ。事実の全てに好奇心を示すが、事実ではないものにはまったく関心を示さない。

そのことは、八年前に思い知らされたではないか。

リリイは、この家に来たばかりの日、この家に来る前の日々を、思い出した。

そうだ。

レイバの印象は、あのフランクな挨拶が放たれるその時まで、

“近寄りがたい人”だった。

「……ううん。なんでもない」

ごまかすと、レイバは一瞬だけ不思議そうにこちらを見たが、特に追求はしてこなかった。新聞を広げて、テーブルにつく。

レイバに報告をするのは、全てが終わった後でもいい。言い訳のように、そんな言葉が胸の中で溢れた。

リリイはなんとか笑って、ごまかすように口を開いた。

「あのさ」

「なに？」

「ステイア君はまだ寝てるの？ 結局、客室にはロールちゃんしか入らなくて、あなたの部屋に押し込めたんだよね」

レイバは新聞を読む動きをピタリと止め、あー、と気難しく唸り始めた。

「あいつ、朝ダメなんだよ。しばらくは地震が来ても津波が来ても、起きないと思うぞ」

「へ？」

予想以上に壮大な比喻に、思わず目を丸くした。

「悪いけど、寝かせてやってよ。まだ体力が戻ってないから、人より多くの休息を必要とすんのよ」

「別にそれは構わないけど……」

リリイは卵を割りながら、眉根を寄せた。

「困ったな。こんなことなら、昨日の晩のうちに今日のスケジュールを決めておけばよかったよ」

ロールが起きて、三人で朝食を終え、やがてレイバとロールの二人が連れ立って出かけても、ステイアが起きる気配はなかった。

リリイはその間、食器を片付け、洗濯を片付け、自分のテリトリの掃除をして、時間があつたから窓まで拭いた。それでも、彼の眠る部屋の扉が開くことはなかった。

「……………」  
時計が昼前を指す頃に、さすがにやることをなくしたりリリイへ、我慢の限界が訪れた。

普段は決して入ることのない 惨憺たる状況が容易に想像できるからだ レイバの寝室の扉の前に立つ。深呼吸をして、派手に二回ノックした。

「おーい」

コンコンと、もう二回。反応はない。

彼が客人であり異性であることを考えると少し迷ったが、学校では男性に囲まれて同列の扱いを受けているリリイだ。このような事態に、遠慮する意識は低かった。

「入るよ」

大きな声で宣言して、十秒だけ待ってから、扉を開く。

部屋の汚さは、予想よりはましだったと考えるべきなのだろう。床に布団が敷けていた。それ以外のスペースには、元は床にあつたとおぼしきものが大量に積み上げられていた。机の上から書棚の上まで、ぎゅうぎゅうに物が詰められている。確かに地震が来ても起きないだろうと思つた。確実に生き埋めになる。

床に敷かれた布団は空っぽで、ステイアは部屋にひとつきりのベッドで眠っていた。

どうやらレイバは、客人にベッドを譲つて、自分は床で寝ることを了承したらしい（もちろん予備の布団がいくらかもあるはずがなく、ここで使われているのもいつか捨てるつもりでいた冬物ではあつた）。なぜ使用済みの布団が畳まれていないのかは疑問だったが、必要性を感じないのだろう。レイバにとっては、そうなのだろう。

カーテンは開け放され、窓から燦々と日差しが差し込む昼前に、ステイアは布団に包まって熟睡していた。

意外と寝相は良くないんだな、と思った。

薄手の掛け布団の中に包まって、上半身の全てを縮こまらせるように、顔まで半ば埋めている。そちらに引つ張りすぎたのだろう、仰向けでもうつぶせでもなく、壁と向き合うように崩れた体勢のまま、足を布団からはみ出させていた。棒切れのような素足がわずかに露出されていて、初夏だと言うのに寒々しさを感じる。

布の塊から髪と足だけがはみ出ているようで、なんとなく気が抜ける。足の裏でもくすぐってやろうかと、冗談まじりにそんなことを思う。

ふと、右腕の露出を拒んだ彼の様子を思い出して、リリイはほっとした。そして軽拳に侵入をしてしまった自分を恥じる。もしも、布団が剥がれていて、服もはだけた状態であつたら、彼の心を傷つけてしまっていたかもしれない。

「……もしもーし、起きて」  
だから、リリイはなるだけ、驚かせない起こし方を選ぶことにした。

手段に選んだのは顔面攻めだ。指先でピタピタと、軽く脛や頬の近くを払う。

だがステイアは一切動じなかった。ひたすら、深い寝息を繰り返す。睫の先すらも、微動だにしない。

「手強いなあ」

最終手段である、デコピンの構えを作ってみる。その際に、ふと彼の顔を改めて見た。本当に綺麗な顔だ、と思った。

リリイが所属するのは、ガードの養成学校だ。入学するのは当然ガード志願者であり、必然的に、リリイの周囲には健康で屈強な男が多い。

眠るステイアの顔を間近で見ると、不思議な感じがする。脂肪が極端に少ないこともあって、女性に見えるというわけではないが、リリイが知る男性像とは大きくかけ離れていることには違いがない。出会って間もない異性の寝起きを間近で見てもなお緊張感が薄いのは、

それも一つの理由なのかもしれない。

指を伸ばせば額に届くような位置にしながら、奇妙な距離を感じるのになぜだろう。

喋ってくればそんなことはないのだが、黙っていると彫像のように冷たく見える。人間同士が付き合いを続ける上でついてくる、温度や匂いのようなものが希薄に感じられる。

そんなことを考えて、指が止まっていた、その間に。

ステイアが、不愉快そうに寝返りを打った。

「あ」

ただでさえ、ベッドの縁の近くに寝ていた彼が、さらに転がってしまえば、それは当然。

引力と言うものがある。

ゆるやかに転がり落ちて、ステイアはレイバが敷いていた床の布団の上に落下した。硬質な音が響いた。リリイは思わず、自分が痛みを感じた気がして、目を閉じていた。

だが。

ステイアはそれでも起きなかった。何事もなかったように浅い寝息を繰り返している。ずれた掛け布団から、わずかに除く肩　昨日と変わらぬ、長袖の服。

リリイは思わず、大きく瞬きをしてしまう。

街の外で鐘が鳴った。正午を告げる鐘だった。

すやすやと、場違いに続く睡眠の時間。

結局、彼を起床させるまでに、それから十分あまりの時間を要した。

デカルト・シティの二十番地区は、大型商店や多くの施設が集う繁華街だった。

リリイはステイアを先導する形で、二十番地区に向けて歩を進めていた。遠くに望めるバス・ステーションを中心に道が放射状に伸

びていて、ぱらぱらと露店や行商が並んでいる。

舗装されたその道を、多くの若者が笑い合いながら歩いていた。今日は平日だが、これは予想の範囲内だった。リリイの所属する学校はここから近い。遊びに行く場所が限られるのは、みな同じだった。

「すげえ。こんなに若者見たの、久しぶり」

後ろを歩くスティアが、不意に歩調を早めて近づいてきたかと思えば、そんなことを言った。リリイは苦笑する。

「『若者』って言い方もないでしょ。私たちと変わらないのに」

「病室から出してもらえなかったし、ずっと学校も行っていないから、ついでね。なんか、懐かしいわ」

「お昼を回っちゃったからかな。ご飯を食べて、これから遊ぶぞーって人が多いんじゃない？」

「……すいません」

さすがに即座に謝ってきた。その言い方がおかしくて、リリイは笑ってしまった。

時刻はとうに昼時を過ぎていた。スティアを起こしてからからの戦いもまた、長かったのだ。

寝起きの彼は、昨日のさばさばした態度とはまるで別人のようにぼんやりとしていて、とにかく行動が遅かった。食べ物でも与えれば目を覚ますのではないかと思いついたが、昨晚を抜いたにも関わらず、やはり食べる気がしないのだと言う。エネルギー補充もなしに、動き回れるはずもなく。

友人のエミリも低血圧で寝起きが悪いが、彼ほどひどくはなかった。リリイは最終的には、腹を立てることも忘れて、心配になってしまった。ひよっとしたら、薬の副作用ではないだろうか。ならば、リハビリを急がず、寝たきりでいた方がいいのではないか。しかしリハビリの主治医でもあるレイバは何も言っていなかった。そんな風に、思考が混乱を重ねているうちに。

唐突に意識を覚醒させたスティアが、ものすごい勢いで謝ってき

ただ。ごめん、と。

なにが起きたのかと怪訝に思っている間に、彼は文字通り、遅刻の恐怖におびえた学生のように、時計を見て絶叫した。いつのまにか彼は、液体の入ったスクイズ式のボトルを持っていた。枕元に置いていたらしい、服用している薬の一種なのだという。

「朝はあれを飲むんだ。目が覚めるから。頼りすぎてもダメなんだけど」

後で彼は、そのように事情を説明してくれた。

「また、俺が目覚まさなくて迷惑かけることがあったら、むりやり飲ませてくれるとありがたいです。本当、ごめんね」

それから先は、特に彼が調子を崩した様子もない。

リリイは顔をあげて町並みを眺めた。目的のアクセサリーショップは、バス・ステーションより手前にあるので、もうすぐ着くはずである。

そう思った矢先に、見えてきた。ほっとして、つぶやく。

「よかった。潰れてなくて」

店は小さく、注意して見なければ通り過ぎてしまいそうなほどに目立たなかった。古いビルの二階を借りているのだが、入り口の階段が非常に奥まっているのだ。

「ここ？」

ステイアもまた、初めてこの店を訪れた時のリリイと似たような反応をした。つまりは、不思議そうに眉根を寄せて、よく気づいたなどとも言わないばかりの目線で、案内人を見つめている。

リリイは苦笑した。

「中に入れば綺麗なお店だよ。個人経営なの。目立たないから、知られてないんだけど」

「へえ。通なんだね。アクセサリーとか好きなの？」

ステイアは意外に思う気持ちを持ち隠そうともせず、何の気なしに訊いてきた。昨日も今日も、実用性を重視した服ばかり着ているこちらの姿を目の前にすれば、当然の反応ではあった。すこしは複

雑だが。

ともあれ、リリイは正直に口を開く。

「私はそこまででもないんだけど、知り合いがね。買い物によく付き合ってたから」

「おーい！ リリイじゃん！」

突然、聞き覚えのある声が、背中に向けて投げられた。

振り向くと、男性がひとり、挨拶をするように手をあげながら近づいてきていた。その後ろに続くように、もう一人。ジャンとリック。

「わ、びつくりした」

「こっちの台詞だよ。街の案内つてこの辺りの地区だったのかよ」  
ジャンはいつものように軽薄な笑みを浮かべて、こちらを見た。  
そのまま視線をなにげなく隣に移して、きょとんと目を丸くする。

「あ、いや、これはこれは」

じろじろと無遠慮に見つめられて、ステイアは少し驚いたようだが、それ以上の動揺は特に表に出さなかった。むしろ、見つめてくるジャンの顔を、同じくらいに見つめ返していた。

ジャンは珍しく、歯切れの悪い様子で唸りながら、それ以上の言葉が続けられないようだった。

「うーん。そうか、なるほど……」

「……俺の顔に、なんかついてますか？」

遠慮がちにステイアから声をかけると、ああ、と我に返る。

「いや、そんなことはないんだ。ごめん。ちよっと父親の心境。リリイが俺に嘘をつくなんてさあ」

「は？」

リリイは声を裏返らせた。ジャンの後ろで、リックがため息をつく。

「『レイバさんの客人』な」

含みのある口調でそう言って、こちらを見る。

「別にそんな言い訳作らなくても、詮索しないのに」

「なんの話よ」

「あー、もう。エミリも彼氏と出かけるとか言ってたし、俺たち悲惨！」

ジャンがそのような世迷い言を叫びだしたあたりで、ようやくリイは事態を把握した。感想としてため息をついておく。

「ちょっと、なにを勝手に盛り上がったんの」

「いや、いいんだ何も言うな。ここで立ち去るくらいの男気は俺にもあるから。いやあ、しかしキレーな男捕まえたな。ねえ、住所どのへん？ 見かけない顔だけど」

「えっと……」

「あ、ごめんね。俺はジャンでこっちはリック」

「立ち去る男気はどこにあるのよ」

膨らみかけた会話を断ち切る形で、リイは吐き捨てるように口を挟む。ジャンが背筋を固まらせた。

「ステイア君は本当にレイバのお客さまだし、私たちはそういう関係じゃないし、彼は病み上がりで、あんた達の遊びにつき合えるほどの体力が戻ってないんだよ。もう。よりによって、その失礼な絡み方はないでしょ」

「ステイア君」

ジャンが予想外の箇所を反復する。

「……へえ。彼の名前？」

「そうだけど、何？」

「いや、俺の友達にも同じ名前の人がいるから、懐かしくて」

あいつ元気かなー、とか言いながらジャンはステイアに笑いかける。ステイアは困った態度は表には出さず、だがかなり曖昧な笑みを浮かべていた。

リックが腕時計を確認した。ジャンに「行かないと」と耳打ちする。

「あ、いけね。……そうだな」

「誰かと待ち合わせ？」

何の気なしに訊くと、ジャンは苦笑した。

「お前たちが来られなかったから、他の奴呼んだの。リリイは来ない方がいいよ」

「……………」

待ち合わせ相手を悟ったりリリイは、言葉に詰まって黙ってしまった。

そのまま彼らは軽い挨拶を残して、来た道を引き返していった。聞きたくないことを聞いてしまった。そう思った。

「学校の友達？」

ステイアが問いかけてくる。リリイは頷いた。「うん」

「なんか誤解を招いたみたいだけど、いいの？」

「別に平気だよ。違うって、ちゃんとやっておいたし。そっちなごめんね、私の友達が失礼なこと言って」

「いや、俺はべつにいいけど……余計なことかもしれないけどさ」ステイアは考えながら話すように、続けた。

「さっきの二人、ずいぶん君のこと意識してるように見えたけど、ほんとに平気？」

「平気だよ。あの二人が私の事どうこうって、そんな話はあるわけがないから」

「言い切っちゃうんだ……………」

「違うの。昔ね」

リリイは言葉を切って、苦笑した。

「付き合ってた人の友達なの。ふたりとも」

ステイアが目を見張る。

「というより、その人を通じて知り合ったんだ。今はあの二人とだけ同じクラスで、すっかり別個に仲良くなったんだけど…………でもやっぱり、向こうの友情が切れたわけじゃないものね。別れた後も私の交友関係を、彼の友達として変に気にしちやってるみたい。それだけだよ」

恋人だった人と別れたのは、そう遠い昔の話ではない。さらに言

えば、交際を始めたのも、そう遠い昔の話ではない。これを交際と呼んでいいのかも、リリイにはよく分からない。

初めての恋愛に戸惑った幼い熱は、忘れてしまうにはまだ新しすぎる思い出だった。振られてしまえば、どうしようもないのだが。

リリイは思いを馳せる。ジャンとリックが消えていった先に、誰がいるのか。ずいぶん長い間会ってない気がするが、それが気のせいだとも分かっていった。変わってなんかはいないだろう。

このアクセサリー店に初めて来た日に隣にいたのも、その男だった。

その日に買ってもらったプレゼントは、通信機のストラップとして、今でも手元に輝いていた。

「……ごめんね。何を話してるんだろ、私」

なんだか照れくさくなってきた、リリイは髪を整えながら、もう一度笑った。

「さ、ピアス選んじやおうよ」

「……ねえ」

提案を無視する形で、ステイアが口を開く。

「学校はここから近いの？」

「え？ うん。二十番地区の端にあるから、歩いていってもすぐだけど」

「行ってみたい」

今度はこちらが驚いて、目を丸くしてしまった。

ステイアは、いたずらを思いついた子供のような目で、笑っていた。

「ガードの専門学校って言うと、大きな施設だね。見学くらいはできるでしょ」

「それは、できるだろうけど……どうして？」

「興味が沸いたんだ」

それ以上は言わず、彼はただ、笑っていた。

決断の早いステイアは、好みのアクセサリを選びとることも一瞬だった。シンプルな銀色のファースト・ピアスはよく似合いそうだったが、店を出てから彼は苦笑して、値段で決めた、と言っていた。

その足で向かうことにしたガード養成学校は、繁華街地区の裏手にある。

「特に、面白いものがあるわけじゃないからね」

敷地を囲う石造りの壁は高く、上部には有刺鉄線が張られていた。教区 の遺跡ほどではないにしろ、外部からの侵入に備えて、堅牢な造りになっている。学習用に保管されている銃器を狙った窃盗への対策だと、学校は語っている。

休校日であるが、門は開きっぱなしだった。外壁の大仰さと比べると、この開放感の間が抜けているが、正門からのルートは、本校舎以外の道には逸れないように、きちんと区分けされている。

校門から本校舎にかけての道を囲って、木やその他の植物がたくさん植えられており、緑が綺麗だった。グラウンドを囲う鉄線を隠すようなレイアウトになっているのだ。

「わりと綺麗だね。想像と違う」

「見栄えがいいように頑張ってるのは、ここだけだよ。本校舎の受付を越えれば道が割れるんだけど、そこから先は殺風景なんだ」

リリイは苦笑しながら、周囲の緑を飛び越えたグラウンドを指さした。

「見た目もちろん重視してるんだろうけど、それ以上に、踏み越えられないようにしてるの。グラウンドは、危険な武器の取り扱いとかに使うから、許可された時間以外に入ると、事故を起こしかねないんだ」

喋りながら歩いているうちに、本校舎が見えてきた。五年ほど前

に建てられたと聞いている。

シルエットは横よりもむしろ縦に長く、この街の建造物でも、有数の高さがある。

入り口の扉は門と同じく開かれっぱなしだった。くぐり抜けると視界が開ける。隣のステイアが目を見張るのを見てから、リリイ自身も、見慣れた校舎を改めて見つめなおした。

縦長の校舎は、そのまま吹き抜けになっており、一階から最上階の八階、そして天井までをすべて望むことが出来た。各階の床は、口の字型、あるいはコの字型をとって、壁に張り付いているように見える。部屋は全て外側に配置されているので、ここからではよく見えないのだ。

所々に橋のような渡り廊下や階段を貫きながら、ひたすら上に積み重なっている建築様式は新しく、また珍しいものだ。

天井の一部は窓になっており、空に向かって開けている。本日は晴れなので校舎は明るく、空の色が直接望めて美しかった。

「……すっげ」

ステイアは感嘆したとも呆れたともつかない声で、ぽつりと呟いた。

「なんでまた、こんなに縦長なの？」

高層建築の基礎理論は確立していると聞くが、実際に目にすることは、大都会でもない限りは珍しい。

それを、学校は五年前にすでに取り入れていた。スポンサーがレアリス・カンパニーだからこそ、できることだと言われている。

「よく知らないけど……。私が一番便利だなんて思うのは、教室を使って、遠距離射撃の練習が出来ることかな」

リリイ自身も、説明できるほど詳しくないので、考えながら答えた。右の方を指でさす。

「あつちがわの教室は直接グラウンドに開けてるから、一月に一回、ライフルを使った超遠距離射的の授業が許可されるんだ」

「……まあ、実践的だとは思っけど」

ステイアがうめく。

「それだけのためにしては、大げさじゃない？」

「他には……確か、鳥型の狂獣が街に入った時には、鳥をグラウンドに誘導して戦えうことができるようになってた気がする。高さがあるぶん、さつき言った訓練の要領で、籠城戦術が組めるしね」

「わざわざ、日常生活に響かせる程の利点かな。鳥の襲来なんて、頻繁に起こることじゃないのに。これじゃあ、上の方の階に昇るだけで、疲れるでしょ」

「昇降機があるの。ほら、あれだよ」

リリイが指差した先には、まだあまり一般的とは言えない機械が設置されていた。吹き抜けになっっている内側の、空洞部分に沿って透明な長い筒とでも言うような装置が、一階から八階にまで一続きに伸びている。内側には小さな部屋のように床と天井があり、今は一階に寄り添って停止していた。

「スイッチ一つで、床が上へ上がったり下へ下がったりで、あつという間」

「……さすがデカルト」

「まあ、昇降機の使用が許可されてるのは、教員とか事務員だけなんだけど。私たちは訓練も兼ねて徒歩」

リリイが笑うと、ステイアは想像しただけでもうんざりだと言わないばかりに、肩をすくめてみせた。

「俺には入学できそうにないわ」

ステイアを連れて、リリイは一階にある受付に向かった。カウンターに座る事務員の女性に話しかける。

「一般客の見学ってできますか？」

「入学志望の方ですか？」

「そういうわけじゃないんですけど。あの、私が在校生なんですけど、友人を案内したいだけで……」

受付の女性は、学生証がなくても入れる範囲でなら、好きに見学しても構わないと告げた。

「ただし、今は試験の採点期間なので、在校生の方も職員用フロアには立ち寄れませんから、その旨は注意してくださいね」

「あ、そうか。そうですね」

事務員から受け取った外客カードのストラップを、ステイアが首から下げる。リレイ達は受付を後にした。

「職員フロアってのは、どこにあるの」

ステイアが訊いてくる。

「六階と七階……だったっけな。六階だけだったかも。実は、あんまり行かないから知らないんだけど。教室は五階までだよ」

「でも八階建てだよ、この建物」

「一番上は、スタッフルームだったと思う。関係者以外立ち入り禁止で、昇降機でEDを照会しないと入れないんだよ。階段が繋がってないの」

「じゃあ行けるのって、もしかして教室だけ？」

「こころなしか残念そうに、彼が呟く。

「別棟に、部活とかで使っている旧校舎があるけど、そこは私が詳しくないから案内はできないかな。図書館やグラウンドは学生証が必要だし、グラウンド近くの武器庫はライセンスが必要だし……確かに、一階には医務室や事務室しかないから、あとは食堂くらいかも」  
言ってしまうから、リレイは目の前の少年が食事を摂れないことを思い出した。だがステイアは、まったく気にした様子もなく納得していた。

「レイバとロールが腹減らしてるだろうし、食べて帰るわけにもいかないね。なら、五階の教室で空いてる所を見たいな。できればそこからグラウンドを見てみたい」

「いいけど、階段が長いよ。体は平気？」

「こっそり昇降機使ってみようよ。正直、一番興味あるのはそっち」  
彼は笑った。リレイは目を丸くする。

「一般客には使用禁止なんて言わないだろうし、君が誰かに見つかったら、病人の付き添いとか言っておけばいいじゃん？ 間違っ

はいないしね」

それから、リリイはスティアにつき合って、校舎を案内して回った。彼は教室の風景そのものよりも、外に見えるグラウンドの広さや校舎からの距離、渡り廊下や階段の構造などに、興味を持っているように見えた。

彼が満足するころには、夕方になっていた。受付に外客カードを返した後に、二人で帰宅した。

リリイには、その十七年の人生のうちに、父親と共に暮らした期間がほとんどなかった。

父は、良い親ではないように思う。

物心がつく前は、よく可愛がってくれたと聞くが、ある程度、手がかからなくなった後は、母親に全てを任せて、家を留守にすることが多かった。

だが母は、時おり帰ってくる父親を、呆れ顔になりながらも、幸せそうに出迎えていた。なんのканのと文句をつけつつも、父の奔放な性格が好きだったのだろう。だから、彼の勝手な振る舞いを許し、もともと頑健でなかった身体でもって家庭をひとりで支え、自らの寿命を縮ませたのかもしれない。

今さら、思い出すまでもない記憶だろうに。意識することが止められなかった。

「うわ、地味なやつ選んだな。お前の顔ならさ、もっところ、サフアイア的な何かが似合うような気がするんだけど」

「冗談じゃない。第一、どこから金が出てくるんだよ」  
隣の部屋から、レイバとスティアの会話が聞こえてくる。

リリイはダイニングのテーブルに座り込んで、通信機を握りしめていた。

スティアの起床を待っていた朝から、彼と共に街を歩いた午後、そして帰宅した今、夕方まで。注意深くメールの受信を確認してい

だが、未だに続きの連絡はない。

だが、それが不自然なことでないとも分かっていった。家に着くまでの帰り道で、ステイアの前で通信機を取り出した時も、とても驚かれた。すげえ、通信機なんか持つてるんだ、と。

ジャンク屋の叔父の元で、ガードの専門学校に通っていると感覚が鈍るが、一般市民にとって通信機は馴染みが薄い。通信波にアクセスして、個別に情報を引き出すというシステムそのものが、まだ一般的ではないのだ。整備が進んでおらず、精度と値段が、釣り合わないのが現状である。

一般市民が通書<sup>メール</sup>という形で、文字のメッセージを送る手段はまた別にある。市民館などに置いてある　メーラー　から、その場で使用料を払って、文書を作成するのだ。送信先もまた、受取人が契約を結んだ公共施設であることが多く、受信した内容を局員がタイプして、郵便物として、受取人に届けるような形をとっている。レアリス・カンパニーの技術者は、目下この通信技術を、精巧で一般的なものにするべく活動しているという。

ガードの場合は、外を歩きながら、常に連絡をとれる状態にしておかねばならない立場にあるので、通書<sup>メール</sup>のように時間を選ばない通信手段や、通話<sup>テレパス</sup>のように場所を選ばない通信手段が必要だった。

だから、周りの友人は学校に推進されて、早くに慣れる目的で、高い使用料を払った上で通信機を使っている。レイバたちジャンク屋は、開発に関わっているので、半ば趣味のようなものだろうが。（でも、考えてみれば父さんだって、通信機は持ってないんだ）

仕事場から触れるメーラーから、時間を見つけては送信していると言っていた。そんなやりとりをしたのも、ずいぶん昔の話だった。

（……三年？）

母が死んだのは三年前。

父親から頻繁にメールが来るようになったのもまた、三年前だ。だが。

（違う。最後に会ったのはもっと前だ……）

通信機を握りしめながら、リリイは履いているズボンのポケットを意識した。すっかり持ち歩くのが習慣になってしまった例のお守りは、今もやはり共にある。

このお守りをもらったその日、母はまだ生きていた。

ちょうど、そう思った瞬間に、手の中で通信機が鳴った。

心を読まれたようで、背筋が凍る。届いた新着メールの送信者は紛れもなく父親だった。逸る気持ちを落ち着かせることもできずに開く。

目を見開いた。

メールの内容が、見間違いでないことをもう一度確認してから、顔をあげた。

時刻は夕方五時。まだ外は明るいが、夜の訪れはそう遠くない。

いや、大丈夫だ。冷蔵庫には昨日の残りものが多くあるし、ステイアの消費量を考慮すれば、レイバとロールの夕食に足りないこともないだろう。掃除は今朝に全て終えた。銃の整備だって、休暇中は、神経質になることもない。

隣の部屋のレイバに会おうと、部屋を出るが、それより早く廊下でロールにばったりと出くわした。こちらの慌てた様子を見て、彼女は驚いていた。そのリアクションすらもどかしく、リリイは口早に告げた。

「ごめん、レイバに言っておいてくれるかな。今から、友達とご飯食べてくることになったって」

「今からですか？」

「うん。帰る前に連絡するから、残り物でなんとかしてって伝えて。ロールちゃんも昨日と同じご飯になっちゃうけど、ごめんね。大事な用なんだ」

まだ半ば呆然としたままで、構いませんけど、と告げるロールにもう一度礼を言ってから、リリイは家を出た。背後から、ステイアの耳に穴を開ける作業を実に楽しんでいるらしいレイバの、気楽な喋り声が聞こえていた。

レイバに報告をするのは、全てが終わった後でいい。その方がいい。まるで言い訳のように、胸の内でも繰り返す。

リリイは家を出て歩きながら、通信機のボタンを操作した。手早く返信をしてから、とりあえずは大通りに出ると、今度は迅速に、次の返事を受信した。

開いてみると、予想外の内容に驚いたが、すぐに納得する。父の仕事を考えれば、ありえない指定ではない。

リリイは、それきり通信機を服のポケットに押し込んで、足早に大通りを歩いた。ポケットの大きさから言って、通信機はうまく入りきらず、何度も落としそうになった。きちんとしたバッグを持ってこなかったことを後悔する。

それを調整する時間さえ惜しくて、最終的には、機体を手につままま走り出した。

\*\*\*\*\*

Equ8/7/22 17:04

From: 父さん

Title: Re:Re:今日は暇?

レイバの家は、十八番地区だったよな。

そこから近い大通りの寺院の辺りから 教区 の遺跡へ入れるようになってるのは、知っているか?

父さんちようどそこで休憩中なんだけど、今すぐ来られるなら、すぐにおいで。

鍵は開けておくから。

お守り、持ってきてくれると嬉しいな。

父親は放蕩な人間だった。あるいは、奔放な人間であったとも言えるのかもしれない。少なくとも外からは、そう好意的な言葉で評されるが多かった。

地元ではちよつとした有名人であった。地位や立場が目立つたわけではなく、人脈が広がったのだ。親しい友人が多かったというよりは、友情に執着しないことにより、多くの人間を気軽に引き寄せていたといった方が近い。リライが幼い頃に外で遊んでもらうたび、近所の男の子も勝手に巻き込んで、自ら輪の中心で遊びを楽しむよくな大人だった。来るものを拒まず、去るものを追わず、ひたすら自分勝手に笑っていた父は、近くにいる人間をも自然と笑わせてしまふ、そんな魅力の持ち主であったとは思ふ。

かなりのロマンチストであつた事もまた、他人を引きつける要因のひとつだろう。だがリライは、父のその一面だけは肯定する気になれなかった。彼の言う所の「ロマン」を追い求めた末に、父はいつしか、トレジャー・ハンターなどという職を、恥ずかしげもなく名乗ることになつていた。

文字通りに、財宝を掘り出すことを生業としているかと言えば、違ふ。彼が呼ぶトレジャーとは、旅先で出会う全てのものを指していた。その日暮らしをすることそれ自体が、彼が人生をかけた、最大の宝だったのだ。

ふらふらと町を出ては、荷物運びをしてみたり、用心棒をしてみたり、様々な手段を用いて金を稼ぐ。その行き先で拾った噂を元に、宝石の採掘に参加をしたり、峡谷の写真を取ってみたり、動物の高級な毛皮を手に入れてみたり、何でもやる。独身時代はずっとそうして過ごしてきたらしい気ままな生活を、結婚して、子供を得てもなお、やめることができなかったのだと言ふ。

リライが生まれるより前に、父はそうした冒険の末に、著名な富

豪の依頼を達成させて一山当てたことがあるらしく、おかげで家財は潤っていた。その余裕が彼を調子に乗せたのだろう。幼い頃から生活に不自由しなかったリリイは、その裕福さを、時おり恨めしく思った。年に何度かしか帰宅せずに、好き勝手に人生を謳歌している父親を、家庭に縛り付ける道具が欲しかったのだ。

周りの幼なじみたちは皆、「かつこいいお父さん」として羨ましがらるから、他人の理解はほとんど得られなかった。かといって大人に同情されるのも屈辱的で、幼い日のリリイは父親に対して、どこか鬱屈とした感情を持って余して育ってきた。

そして父は、本当に家に帰れない人になってしまった。

八年前、世界に激震を与えた グランドクロス それ以降、徐々に数を増やした狂獣によって、閉ざされる街。

社会全体が、旅人が自由に道を選べるような仕組みではなくなってしまったのである。

グランドクロス を、もっとも近い天災に割り振るなら、震災と扱われる事が多い。

ただ、普通の地震と異なる点は、大地そのものが揺れたのではなく、一カ所で起きた原因不明の爆発を核にして、周囲の大地が激震に見舞われた、ということだ。

ノースクラウンド  
北大陸のハウアー・タウン。八年前のその瞬間に、壊滅した街の名前だった。

はじめに政府がした発表では、壊滅した街の工場や研究所から生じた事故によるものとされていた。しかし、それでは到底説明しきれない威力と、獣の性質の変化、のちに生じた セカンド・グランドクロス との関連に対する疑念など、不安要素が膨れ上がるたび、その信憑性も失われていく。

この街の跡を見れば、爆心地を中心に、大地に十字型の亀裂が入っていたという。それが空の凶星と形を似せていたことが、歴史的なこの事件の名前を決めた。

ハウアー・タウンは、なにもその一撃だけで全てを無くしたわけ

ではなかったが、その事件以後、大陸に住まう野生の獣が、急激な凶暴化をたどり始めた。

大災害の直後に獣に喰い荒らされ、ハウアーという都市はすぐに機能しなくなる。生き残りの住民は街を捨て、難民として、他の都市に逃げ去った。残されたその場所には、廃墟が残されるのみで、復旧のめどは全く立っていない。原因の究明がまだだからだ。

旅に出ていた父は、事件の当日、ハウアー・タウンにいた。

この偶然を、天罰だと思うことはどうしても出来なかった。自治体の記録より発見された行方不明者名簿がラジオで流れるのを聞きながら、リリイは母親と抱き合つて、心の底から恐怖した。

レイバと初めて言葉を交わしたのも、この頃だった。

両親を亡くしていた父にとって、付き合いのある血縁者は、娘であるリリイを除けば、弟のレイバが唯一だった。

消息を絶つた父の行方を詳しく調べるために、家族で協力しようと呼びかけた。だがその時にレイバが返した言葉は、とても冷淡なものだった。

「宿の場所を調べたけど、現実的に考えて、生きてるとは思えないんだ」

悔恨も、悲哀も感じさせない口調で。

電話口に立つた幼いリリイに、彼はこう言ったのだ。

「この状況下で、遺体が無事に返つてくるとも思えない。お母さんに、『諦めて、あなたは仕事を探すべきだ』と、伝えてくれる？」

あまりにも淡々としていて、よく意味が分からなかった。

なにがなんだか分からないまま、涙が止まらなかった。泣きながら、家に帰ってきた母親に伝言を告げると、彼女は怒りとも悲しみともつかぬ腕の力で、思い切りリリイを抱きしめた。抱きしめられたまま、リリイは泣いた。

今にして思えば、仕方がなかったのかもしれない。父を失って混乱していたのは、肉親であるレイバも同じだろう。加えて、あの時の彼は、当たり前だが今より若かった。どこかの企業に勤めて、身

を粉にして働いていたのだと言っていたし、自分のことで精一杯で、こちらの親子を気遣う余裕もなかったのだろう。

そんな絶望をよそに、やがて父の無事を伝える連絡が届いた。二ヶ月も後のことだ。

近くの街に難民として逃げ込んで、なんとかやつてるから安心してくれ、という伝言と共に、市役所を通して電報が送られてきたのである。情報網も乱れていたために、連絡が届くのが遅くなってしまうのだ。

どこからどう見ても、父本人の性格を映していた文面は、母とリイを本当に安心させた。今度こそ喜んでくれるだろうと思って、リイ達はその旨をレイバに伝えた。

だが、彼の返答はやはり、期待していたようなものではなかった。「この状況じゃ、その情報が確かかどうか、信頼できないんだよな。本当に兄さんからつていう、証拠はある？」

単に現実的な性格で、悪気はどこにもないのだとは、同居生活を経た今だからこそ、納得が出来ることだ。

子供に対する気遣いもできない彼の態度を、母が快く思わないのは当然だった。リイ自身も、叔父を近寄りがたく思った。それから、彼とは交流をすることがなくなったように思う。

まもなく、レアリス・カンパニーが シェルター を開発する。

導入実験の結果として、狂獣の侵入を防ぐ効果は絶大だった。自治体が シェルター の生産を支援し、カンパニーが権力を大きくしていく。これが七年前だ。

そもそも、グランドクロス に関係なく、当時は技術革新の過渡期だったのだ。十三年前にカンパニーにより開発された、アニメを閉じこめた人工燃料 ストーン が、これまで不可能とされていた多くの技術 あるいは魔法 を形にしている真つ最中だった。

グランドクロス による難民の増加で労働力を得たことも手伝い、数を増やしていた工場もどきが活発に回転していた。必要に迫られていた新しい発明が、異常な速度で生活に馴染んだ。

後の歴史には、第二次技術革命とも呼ばれるのだろうと、当時のラジオで誰かが言っていた。

狂獣対策の装備も、もちろん整えられた。革新的な防具が、狂獣の行動をコントロールできる シールド。武器として革命を起こしたのが、マグナム弾を超える破壊力を封じた ストーン弾 と、それに対応した銃。

そして街から街への移動が困難になったことで、テレパス能力を模倣した、通信技術が発展する。

立案したのが、またもレアリス・カンパニーだったとくれば、議会の発言力が弱るのも自然なことだった。

通信波を利用した、通信<sup>テレパス</sup>や通書<sup>メール</sup>、ラジオなどが、これまで以上の精度で実用化されていくにつれて、後ろ盾であるカンパニーの地位は、確固たるものになった。

最たる新案が、 ガード 、 ハンター 、 ポリス といった、治安維持構想だと言われている。もとは帝政時代から続く銃器開発の企業であるレアリス・カンパニーは、築き上げたノウハウを背景に、ついに科学以外の分野でも、発言力を得たのだ。

情報の整備が進むと、最終的には携帯型の通信機が発明された。会話による通信<sup>テレパス</sup>。機械文書による通書<sup>メール</sup>。はじめは個々に発展していた二つの通信手段が、一つの機械に束ねられて、特殊な職業の人間にとつて都合のいい形の、連絡網として機能する。

一般人にしてみれば手の出にくい高級品だ。だが新しいもの好きの父は、どこかのツテをたどつて、開発初期から早々にそれを手に入れていた。すぐに通信を利用して、家に自慢してきたのだ。俺の趣味にすげー合ってる、などと。

それから、旅先の父は家にメールを入れるようになった。

どうということもない生存確認が主だったが、文面から伺える父の様子を見ると、やはりとても安心できた。レイバに見せる気にはならなかったが。

そして。

生活の変化に、世界が慣れ始めた時期に。  
父は突然、我が家に帰ってきた。

「大きくなったな。俺が分かるか？ リリイ」

十二歳になっていたリリイの目の前に、いきなり現れたその男は、ずいぶんと雰囲気を変えていた。

ざっくり切った栗色の短髪。伸びっぱなしの無精ひげ。大柄でたくましかった肉体は、その強靱さをそのままに、脂肪だけを減らしてずいぶんと引き締まったような印象を受ける。機能性ばかりを追求した旅装束の上から、銃で武装をしていた。全体的に装備品はくたびれていて、歩いた旅路の長さを感じさせた。

リリイは、手に持っていた箒を思わず取り落としそうになった。自宅の玄関前に、堂々と歩み寄ってくるその男の、懐かしい笑顔。

連絡なんかひとつもなかった。

何がなんだか分からなかった。

父は苦笑した。

「……あなたっ！」

沈黙を破ったのは、家の窓から放たれた、母親の驚愕だった。

慌ただしく家を出た彼女もまた、連絡は受け取っていなかったようだ。歓迎の笑顔ひとつ作る余裕もない妻子を眼前に、父は笑っていた。とても、幸せそうに。

「けっこう変わっちゃったなあ」

母はリリイと同じくらいに混乱していただろうが、それでも娘の手前、表面上は落ち着きを取り繕おうとしたのだろう。時間を稼ぐように、とりあえずは家の中にあがるようにと家族を促した。だが、父は苦笑して首を振ったのだ。

「人を待たせてるんだ。あまり長くはここにいられない」

「待たせてるって……」

啞然とした様子の母は言葉を続けられず、リリイはその息を継ぐ

ように口を開いた。

「また行っちゃうの？」

「リリイ」

「帰ってきたんじゃないの!? どうしていつもそう、自分勝手なの! 外の世界は、今は本当に危ないのに!」

怒鳴ったつもりだったが、声が震えてしまった。

驚いた風の母の視線にかまう余裕もなく、リリイはその勢いで箒を投げ捨てた。空いた両手で、思いきり父の体にしがみつく。

動揺の気配が感じ取れたのは本当に一瞬だった。顔面にふれる父の腹は服を通してもとても堅くて、母親とも、リリイ自身とも全然違う。

同じ人間とは思えなかった。彼の無事を心配していた日々が馬鹿馬鹿しく思えた。泣きそうなほど、たくましかったのだ。

リリイの首の後ろに、父の大きな手が触れた。

「ごめんな」

そのまま、頭の方に触れて、くしゃくしゃと髪をかき回す。

「エリイも聞いてくれ。今日は近くに來たから寄っただけなんだ。

俺はやっぱり、まだこの家には帰れそうにない」

「……どうして」

呆然とした母の声が聞こえてきた。リリイは顔をあげられなかった。頭の後ろに触れる父の手が、ポン、ポン、と、あやすようなリズムで動いている。

「いい夫になれなくてごめんな。それで、いい父にすらなれそうにねえわ」

お前たちのことは愛してるんだけどなあ、と、まるきり他人事のように、父は苦笑したようだった。

「リリイ」

呼びかけられたが、返事をする事ができなかった。父はそんなこちらの様子など見通していても言わないばかりに、そのまま続けた。優しい声。

「この街、どう思う？」

「どう……？」

「シエルター に閉ざされて、通信以外の情報を遮断されて、空しか見えない安全地帯。どう思う？」

どうもこうもない。リリイにとってはその仕組みは当たり前のものだった。 グランドクロス 以前の社会がどのように回転していたかなんて、よく知らない。危険と安全のどちらが良いかと問われれば、迷わず安全と答えるに決まっている。それは常識であり、それ以上でもそれ以下でもない。何を言っているのか、質問の意味がよく分からなかった。

父は、こちらが答えずにいることを予想していたように、しばらく黙ってから笑った。

「父さんは、欲張りなんだ」

触れあつ箇所から感じられる温度と、語りかける声だけはどこまでも優しい。

「お前も、母さんも、大好きだけど、世界にあるいろんなものも、捨てられないくらい大好きなんだ。世界ってのは、本当に面白いのに、回りきれないくらい広いんだぜ」

言葉は本当に勝手だ。すり抜けていく。掴むことができない。

「……今さ、ややこしい任務についてるんだ」

「任務？」

いぶかるような母の声に、ああ、と父は補足した。

「ハンターの任務だよ。そっちの仕事を貰ったんだ」

「……まだ、トレジャー・ハンターなの？」

「さすがにそれは無理だな。続けられるもんならいつまでも続けたいけど。今度のハンターは、正式なハンターさ。レアリス・カンパニーのライセンスが必要な、アレ。この時勢じゃ、ガードかハンターにならない限りは、外を自由に歩けねえからな」

父は誇るでもなくそう言って、いつまでも離れようとしなないリリイの顔を優しく剥がした。リリイは抵抗したが、勝てるはずもなく

顔を覗きこまれる。

泣いていたわけではなかったが、今にも泣いてしまいそうな自分と必死に戦っている真っ最中であった。顔を真っ赤にした娘のしかめ面を見て、父はなんだか痛ましく苦笑する。

「……本当に、大きくなつたな」

父はそつと、こちらの顔に顔を近づけて、額に口づけた。

家族も友人も分け隔てなく、どんな相手にも明るく接する父親にとって、そういった湿っぽい愛情表現は、非常に珍しいものであつたように思う。

わずかに触れた髭のチクリとした感触が、なぜかいつまでも肌に残つた。

「ごめんな。リリイ」

顔を離して、父は笑つた。

「お父さんにとって、私とお母さんは一番じゃないの」

「一番だよ。それだけは何があつても変わらない」

「じゃあどうして、一番近くにいてくれないの。今度こそ、死んじやうかもしれないんだよ」

「そうだな。でも、父さんは父さんであることをやめられないんだよ」

「私とお母さんが、グランドクロス の時、どんなに心配したか知らないくせに」

「ごめんな。父さんを待つてる人は、今本当に父さんを必要として  
いるから」

「私たちだつて必要としてるよ」

「うん。でも、お前たちの言う必要とは、ちよつと種類が違うんだよ。なんというか、その せっぱ詰まつてるんだ」

父の口調は、あくまで穏やかだった。

悪びれる様子すらない。罪悪感がないわけではないだろうが。

彼にとつての放浪は、人生そのものであり、人格そのものだといふことを、リリイは悲しく実感したのだった。この人は、ひとりで

も生きていけるのだ。そんな寂しい確信が、胸を突いてしまった。父にとつては、世界にはびこる狂獣や、街を守るシエルターですら、障害ではないのだ。

この大陸のどこにだって、行きたいところに行く。生きられるように生きる。どこまでも自分勝手な人なのだ。今さら、その性格を変えることはできない。

「リリイ」

もう一度名前を呼んだかと思えば、父はごそごそと荷物の奥を手で探り始めた。

取り出したものは、小さな布だった。かわいらしいピンク色の、手のひらに収まるサイズの小さな塊。

それを、巾着ではないかと思いつくまでには、時間がかかった。つまりは、形が拙かったのだ。

どこにでも買えるような厚手の布を、お世辞にも上手いとは言えないような手縫いで、袋状にしたらしい。中に何かが入っていると分かるが、開け口は糸が通されていて、きつく縫いつけられている。はさみでも使わなければ、開きそうにない。

「お守りだ」

父はそう言つて、リリイの手のひらにそれを押しつけた。思つていたよりも、重みがあつた。小石でも入っているのではないかと、そう思つた。

「中身は内緒だ。開けないで、捨てないでほしい」

リリイがじつと父の顔を見返すと、非難の意が伝わつたのだろう。彼は苦笑した。

「父さんはこの家にしばらく帰れないから、これを父さんだと思つて置いておいて欲しいんだ。俺、悪運だけは強いから、このご時世、利益があるかもしれないぜ」

「お裁縫、へただね」

せめてもの抵抗で、リリイは毒づいた。

「私の方がずっと上手いよ」

「そっか？ まあいい。頑丈にしたしな。いつかさ、俺が落ち着いて、もう一度お前たちに会えたその時にさ、一緒に中身を見よう」  
父はそんなことを言いながら、どこまでも曇りなく笑った。

「願掛けみたいなものさ。俺がそうしたい」

「……勝手な人」

これは母だった。

彼女は、心の底から呆れたとでも言うような表情で、父の方を見ていた。先ほどまで顔を占めていた、驚愕や、憤りといったものももう見えない。ただ、ひたすら呆れていた。

リリイは覚えていた。母がこの表情を見せた後の、父のわがままは通ってしまふのだ。

父も覚えていたのだろう。彼は、母に向けて微笑んだ。

「エリイ、ついていけないか。俺みたいな男はもう嫌い？」

「あなたのそういう所だけは、今も昔も、好きではないわよ」

きっぱりとそんなことを言う声には、諦念のような穏やかさがあった。害意ではない。身内に特有の、遠慮のなさだ。

「じゃあ、娘にこんなお守りを託すのは迷惑かい。俺なんかもう、消えてなくなつた方がいいか」

「それを決めるのは、私じゃない。リリイよ」

「俺は、お前のそういう所、好きなんだよなあ」

軽口のようにそんなことを言いながら、父はリリイの頭をもう一度、ポンと押した。その反動で立ち上がるようにこちらから距離を開いて、母とリリイを交互に見て、どこまでも晴れやかに笑っていた。

その日、背を向けて家を去った父の姿が、この目で彼を見た最後の記憶だった。

背中は大きかった。一人で歩き出すその姿は、悲しくなるほど、

清々しかった。

武装した姿も、触れたその肉体も、歩き方も、話し方すらも、強靱だった。まつすぐな瞳で、リリイが想像したこともないような外の世界を見つめていたのだ。

父を、素直に尊敬することは今でも出来そうにない。

だけど、眩しく思う。成長と共に、リリイは父の言葉の意味を考えた。シエルターで閉ざされた世界。それが及ぼした影響。見えな  
い外界。氾濫する情報。

母が死んで、残された自分。

一人で生きていくということ。

強くなるということ。

そして、今から三年前に再び起きた激震 セカンド・グランドクロス が、さらに事態を変えた。

グランドクロス と同質の爆発事故だが、以前のものよりは被害が小さかった。だが、以後の変化は、より劇的だった。この事件を契機に、獣の狂暴化は、本当に深刻なまでに規模を広げたのだ。

父はまたも、現場の近くにいらしたらしい。

悪運が強いという言葉が聞いて呆れる。この事故で再び行方不明の電報を流された父は、母の死で落ち込んでいたリリイの心に、さらなる負担を押し掛けてくれた。

だが、今度は比較的早く連絡がついた。現場で通信機を壊してしまつたらしい父は、職場のメーラーから、こちらのアドレスまで、生存報告のメールを送信してきた。

母の件も相まって、それからはメールで話す機会が増えた。

父も、一人暮らしを始めたリリイを気遣うようになって、以前よりは、こまめに連絡を取り合うようになった。

セカンド・グランドクロス でハンティングの仕事に区切りをつけたという父は、今度は情報整備の役職について、各地を転々としているらしい。ガードと一緒に、いろいろな場所を見て回るのだと言っていた。

その報告は、将来を憂えていたリリイにとって、ひとつの指標になった。

ガード。

護る者。

リリイは、強くなりたかった。

自分を守るだけの強さが欲しかった。この世界を生き抜くだけの知恵が欲しかった。

街を出る資格が欲しかった。証明が欲しかった。

家を出て、好き勝手に生きて、こちらを顧みなかった父親に、言いたいことがあった。メールではない。直接、言ってやりたいことがあった。

父に会いたかった。

父に負けなくらい、強くなりたかった。

答えが見えてからは、単純だった。父にメールで進路を伝え、親戚であるレイバに報告をして、デカルトの学校への入学を勧められて、現在にいたる。

レイバに、父親のことに関する諸事情は報告していない。どうせ証拠がないと信じやしないだろうし、気にかけているわけでもなさそうだったからだ。単に嫌な思い出の味が抵抗をしていると言われれば、それまでだが。

だが、現実主義者の叔父は、理にかなった行動をとる限りは、決して冷たい人間ではなかった。リリイが学校に通うために自分の家に住まうのは、彼にとっては負担でもなんでもないらしい。これまでこちらが抱いていた苦手意識が滑稽に思えるほどあっさり同居を勧めて、友好的な態度で、だが余計な干渉するでもなく、とてもよくしてくれた。経済の破綻が嘆かれるご時世だ。叔父として、レリス・カンパニーへ就職を決めてくれたら安心なのだと言っていた。

そんなものだ。人間関係も、人生も、きつと全てそんなものなのだ。

同じように、父を拍子抜けさせてやりたい。

リリイは学校に通って、外で生きるための知識を貪欲に学んだ。学校に入学した時の試験はトップだった。今は志を同じする生徒たちと切磋琢磨している。スピノザ・シティを出て、本当にたくさんの人に出会った。たくさんものを見た。

今なら言えるだろうか？ 予定より早くなってしまった父との面会を前に、心がとても急いでいる。ガードの資格はまだ得ていないが、今でも、言いたいことが言えるのか。

大丈夫だ。自問に対する自答はすぐに浮かんだ。会えるなら、今すぐにだって会いたい。それはこちらも同じだった。

リリイは、顔を上げた。

走っていた速度を緩めて、徐々に足を止める。  
たどり着いた「教区」を囲う鉄柵は、確かに開かれていた。

開け放たれた鉄柵と、奥の遺跡を眼前にして、リリイは急速に実感が沸き上がるのを感じていた。

父とのメールのやりとりは、日常の一部になっていると思っていた。だが、通信機でしか見ていないメッセージの通りに、現実が確かに動いているのを目の当たりにすると、夢で見た光景が目の前に現れたような違和感がある。

教区 の扉は、カンパニーまたはテンプルから、正式な許可を得ない限りは開くことが出来ない。街の四分の一近くの面積を占めているにも関わらず、その実態を多くの人間に知られていないのだ。父がそれを、自分のために開けたのだ。そう考えると、緊張した。自分はこの遺跡に、招待されているのだ。

リリイはもう一度だけ、メールの文面を確認した。父のアドレスから受信した待ち合わせ指定。間違いない。

意を決して、唾を飲む。通信機を服のポケットに無理やり押し込んでから、足の裏に力を入れて、一步を踏み出した。せめてもの礼儀として、胸を張って堂々と入ることを意識した。

扉を越えて歩くと、ここが街の中であるという意識が希薄になってゆく。

そこは、本当に廃墟だった。風化した建造物は、そのほとんどが石で作られていて、全体的な印象として、街全体が白い。

現代文明とは明らかに形を異としたその町並みは、まるで神殿が連なっているようだった。細かな彫刻を凝らした白い柱が、きれいな形で残っている。

表面が苔や蔦の浸食を受けているのは、作り上げられてから今日までに流れた月日を考えれば当然だが、建物そのものは、想像していたよりもずつとしっかりと残っていた。居住区 にあるレイバの家の方がよほど原型を失っているといってもいいだろう。

人間が保存に尽力したのか、森人の建築技術が進んでいたのかはよくわからない。両方かもしれない。

空気が、ひんやりとしている。人口密度ばかりが高まる居住区とはまったく違う。獣が息を潜める、シエルターの外とも違う。生物の存在が感じられない。厳粛で、静謐な緊張感があった。音も、人影もない。

歴史の教科書から、切り取ってきた挿絵みたいだ。

（この遺跡から、ジャンクパーツを採取して、研究して、機械の開発に勤しんでるって、レイバは言ってたけど……）

そういつたイメージを喚起させるような、無機質なパーツはどこにも見あたらなかった。古代より残る石の遺跡であり、それ以上でもそれ以下でもないように見える。

科学の原型は、魔法であったという話を思い出す。先住民にとって、現代でいうところの科学に相当する技術は、願えばそれだけで行えた、とも聞いたことがある。

（本当に、私の知ってる形じゃないのかな）

入り口に近いこんな場所では、価値あるものが全て回収されてしまったのかもしれないが。

リイが立つ入り口からずっと、白い石を敷き詰めて舗装されたタイルの通路がまっすぐに延びている。

目を凝らして先を見やると、直角に交わる同種の道路がいくつもあるように見えた。上空からみたら、チェス盤のようになっていたのだろう。

（父さんは……）

人の姿はどこにもない。

リイは待つ時間さえもどかしく、まっすぐに歩きだした。最初の曲がり角に着くまでは、出入り口からの道は一直線である。深入りしなけば、入れ違いやしないだろう。

道路の両隅には、排水溝と思われる溝があった。

魔法使いと呼ばれた森人なら、水道の整備や、雨の水はけな

どには縁がなさそうな先入観があったのだが、それでもなかったのかもれない。機械には、出来ることと出来ないことがあるのだから、魔法にそれがあってもおかしいことではない。

リリイはそこまで思っただけ、これだけ身近に寄り添っていた技術に対して、本当に無知であることを自覚した。ストーン だって シェルター だって、自分は結局、どういう仕組みで動いているかは知らないのだ。知ろうとすることもなかった。知らなくても生きていけることの方が、世界にはよほど多い。

だからこそ、父は外界に惹かれ、今は遺跡に関わる仕事をしているのではないかと思っただ。知らなくてもいいようなことばかりを掘り起こして、無知を知に変えることを楽しんだのではないか。

会って、一通りの話をしたら、そのあたりのことに関する感想を聞いてみよう。雑学好きとして、レイバとも、話が合うだろう。動かぬ証拠として、父本人の姿を連れ帰った時の叔父のリアクションも、きつと見物だ。

カツン。

人気のなかった背後から、足音が聞こえた。顔をあげて、振り返る。

誰もいなかったと思っていた、リリイが通り過ぎたはずの道の隅。遺跡の影に隠れていたらしい、一人の男が道の真ん中に姿を現していた。

ごく普通のスーツ。若干、姿勢悪く曲がった背筋。赤い髪。

それらの特徴を、認めた瞬間。

違和感が、全ての感情を縛り付けた。

「やあ、リリイ」

歩み寄ってきた男が、声をあげるのが聞こえた。

だが、顔が目に入らない。いや 頭に、入らない。

自分は、決定的な間違いを犯した。  
理由や根拠を飛ばして、真っ先に、確信する。

普通の男だった。長旅でくたびれた服や、実用性だけを極めた装備や、がっしりとした頑健な肉体や、延びっぱなしの無精ひげ。そういったものが、なにもない。

会社員のようなスーツ。武術の心得など見受けられない足取り。友好的で粘着質な笑顔。近づいてくる。

今の父は、トレジャー・ハンターでも、ハンターでもない。それは分かっていた。

だけど。

声が出ない。

ドク、ドク、と。自分の心臓の音が、身体の内側から重く響く。

赤毛の男の肌には張りがあり、歩き方や佇まいからは、思慮のなさや若さを感じられた。

そう、若い。

目の前に現れた男は、若かった。せいぜい二十代の半ばにしか見えなかった。

レイバよりは絶対に年下だ。そう確信した瞬間に、リリースは動いていた。

棒立ちになつていた体勢から、身体を開く。足を広げて重心を下げ、太腿に手を当てるが、愛用の銃はなかった。当たり前だ。

ここは街の中。学校でも、外でもない。狂獣はいない。どこにもいない。武器を構える意味はない。

なのに、総毛立つような警戒が全身から抜けなかった。息が詰まる。呼吸のリズムを乱すことが、なによりも愚かだとは分かっていた。でも。

こちらの動作を見て、男は一瞬だけきよとんとした後、すぐに笑った。

「ひどいなあ」

くつくつと、可笑しくてたまらないとでも言うように、笑ってい

る。嫌悪感を覚えるほどの、甘い声音。

「そんなにびつくりしなくてもいいのに。ちょっと驚かしてみただけじゃないか」

「あなた、誰……?」

声がかすれているのを自覚しながら、なんとかそれだけを口にす  
る。

赤毛の男は微笑んだ。

「照れなくてもいいのに。ずっとメールをしていたじゃない」  
「……?」

「教区」を待ち合わせ場所に指定したのは、俺なのになあ」  
自分の夢の中で出会った、自分しか知らない怪物にでも、殴られ  
たような心地がした。

冷静になるべきだと、どこかで理解しながら、頭が回らなかった。  
目の前の男の拳動のひとつひとつに、ぞっとした。 自覚するべ  
きではなかった。足下から沸き上がるような鋭い寒気。怖い。  
「ガイルだよ」

男は、猫撫で声で、確かに父の名を口にした。

こちらの瞳目を見る否や、満足そうに笑む。人形を慈しむ少女の  
ような目。言葉が、優しく続く。

「俺が、ガイル・ブルーノさ」

「なに言って……」

「お望みなら、これまでお前が俺に送ってくれたメールの中身を、  
すべて言えるよ。試験、終わったんだよな」

口の中が乾いてゆく。

「これまでずっと、真面目に頑張ってきたもんなあ。きっといい成  
績を取れるよ」

「……………」  
「……………」

「どつしてそんな目で見るのさ」  
愛情深さすら覗かせる優しい顔で、見つめ返してくる。

「お前とずっとメールをしていたのは、間違いなく俺なんだぜ」

「テッド」

別の声が聞こえてきたのは、背後から。

つまりは 教区 の奥からだった。振り返り、リリイは今度こそ完全無比に驚愕した。

歩み寄ってきた人影は二つ。先を歩くのは、金髪の若い男だった。すらりと四肢が長く、モデルのように見栄えのする体格をしていた。南大陸では希有な、華やかな金髪。まるで顔を隠すことが目的であるように、大仰なサングラスをかけていた。

薄手のトレンチコートの色は、派手な白。一目で高級品と分かるシャツの襟元で、首にかけられたネックレスが、夕刻の西日を反射した。ダイヤだ。ダイヤモンドの指輪を、鎖に通してネックレスにしているらしい。

金回りが良いことは一目で分かった。今まで関わったことのない種類の間人だとも。こんな場所で出会わなければ、芸能人だと思いきんだに違いなかった。

だが、リリイが驚いた理由は、彼を通り越した向こう側にあった。サングラスの男の後ろに、隠れようとしてもするようにこっそり控える、もう一人の男の顔に、はつきりと見覚えがあった。

見間違えようもないほどに、よく知っている人間。

「ジャン……？」

名前を呼んだ声が、震えた。

ジャンはちらりとリリイの方を一瞥したが、何も答えなかった。

視線を逸らして、関係のない床の方を見つめながら、どこか気まずい風に沈黙をしていた。

サングラスの男が、ため息をついた。

「出てくるなど、言ったはずだ」

リリイやジャンに向けた言葉ではなく、先ほどの会話の続きだった。最初に出てきた赤毛の男は、不満そうに鼻を鳴らす。

「そうは言っても、リリイの事を一番よく知っているのは俺だろう」「驚かせるのは失礼だろう」

サングラスの男は、そう言って、こちらに歩み寄ってくる。

先ほどのように、警戒してしかるべきだろう。だが、リリーの体は動こうとしなかった。男の後ろにいるジャンの事が、気になって仕方がなかった。事態を意識すれば意識するほど、体に力が入らない。

サングラスの男は、リリーのすぐ近くに立って、じっと見つめてきた。

視線はそのままに、背後に向けて口を開く。

「この女性で、間違いないですか？」

「……はい」

ジャンがほんの小さな声で、そう答える。

男は、悩むように息をついた後、まっすぐにこちらに顔を向けた。サングラスが光を反射していて、表情はまるで見えなかった。

「連れが失礼をしました。リリー・ブルーノさんですね」

「……なんなの」

まともな問答も出来ないまま、リリーの声は震えた。

男はそんなこちらを哀れむように、少しの沈黙を挟んでから、丁寧な口調で続けた。

「驚かせてしまって、本当に申し訳ありません。こちらとしても、このような方法を取るのには本意ではなかった。……失礼。詳しい説明は、後でします。どうか我々と共に来てください」

あまりにも唐突な申し出は、リリーの理解を越えていた。

「大人しくしていただければ、あなたに悪いようなことは絶対にしません。相応の報酬も、後で用意させていただきます」

「……なんなのって、聞いているの！」

震えたままの声で、叫んだ。いつしか声の震えは、手の先にまで伝染していた。なにがなんだか、わからない。

「私は父さんに呼ばれてここに来たのに、父さんは あんた達は いったい何なの、どうしてジャンが」

「時間がありません」

サングラスの男の物腰は柔らかかったが、声には焦りが見受けられた。

「あとで順を追って説明します」

「来ないで！」

反射的にそう叫んで、リリイはきびすを返した。教区 の出入り口からは、まだそう離れていない。

いけすかない赤毛の男の横をすり抜けて、石造りの通路を全力で走る。助けを呼ぼうと、がむしやらに声を張りあげようとした。その時。

全速力で駆けていた所を、横から突き飛ばされた。視界が回転し、石の床に激突する。

鈍痛にうめきながら半身を起こすが、髪の毛が引っ張られて思わず悲鳴をあげた。排水溝に引っかけた、起きあがるのに時間がかかった。

なんとか顔をあげて、加害者を見つける。

「リック……？」

声になっていなかったかもしれない。だが彼は、唇の動きだけで呼びかけられたことを理解したのだろう。地面に膝をついたまま、さきほどのジャンと同じく、なにかとてつもなく重大な秘密でも暴かれたように、気まずく黙りこんだ。

「仕方ない」

驚愕は、自分で思っていたよりも長かったらしい。

サングラスの男の声が、すぐ後ろで聞こえた。

「手荒な方法を取らせていただきます」

肩を掴まれた。顔を覗き込まれる。そしてリリイは言葉を失った。  
(え……?)

男は、顔を覆っていたサングラスを外していた。そして間近でかち合うその瞳は。

(あ……)

リリイの視界と、頭と、心の中までも、すべてが一瞬で白んだ。

すべての色を飲み込むような白光に、意識のすべてがさらわれて、  
そして全身の力が抜けた。

夕食を取るよりも早く事態に気づくことができた幸運は、性悪な科学者の悪行の中にあった。

ステイアは、洗面台の鏡を借りて、自分の耳をじっと見つめていた。

己の顔が、中性的と呼ばれる類に属するという自覚はある。両耳にひとつずつ開けた銀のピアスも、妙に似合ってしまったのが不快だった。格好を付けた若者というよりは、髪型に華を添えようとする女性のような意味で、だ。

望まぬ路線に仕上がった現状が、嬉しいはずはなく。

「で、このピアスがなんなんだよ」

機嫌の悪さは特に隠さず、鏡越しにレイバに向けて毒づいた。彼はこちらとは逆に、妙に上機嫌だった。

「画期的な発明品を取り付けたんだよ。もう、ほんとに。俺の中ではかなり傑作」

「発明品？」

気味が悪く、ステイアは鏡を見ながらピアスを手で触ってみた。

「別に、なにも変わってるように見えないけど」

「キヤッチを本来のものと入れ替えたんだ。そっくりな別物を、スーパー科学機能を添えつつ短時間で作ったんだから、俺の器用さって本当に天才だと思わない？」

「誉めるかどうかは、スーパー科学機能とやらの中身による」

呆れながら振り返ると、レイバは笑って手招きをした。洗面所から離れて、別の部屋に誘導してくる。

呼ばれた先は、物置部屋のひとつだった。混沌と、様々なものが積み上げられているその部屋の隅で、暇を持て余していたらしい口ールが本を眺めていた。彼女はステイアの耳のピアスを発見すると、顔色を明るくした。

「いいなー、かわいい」

「兄として、妹に誉められたくない言葉ランキングとか作ったら、それ、全国的に上位に入りそうだね」

軽口をたたいている間に、レイバは棚のひとつを漁っていた。目的のものはすぐに発見したらしい。スキップのようなリズムで、こちらに向けて持ってくる。

「これが受信機！」

「受信？」

「えっと、お前のピアスはこれじゃなくて、もっと精巧なやつなんだけどね。これはプロトタイプなんだ。だいぶ前、実験的に作ったんだよ」

レイバが持つているその機械は、板のような形をしていた。通信機よりは大きい、四角いモニターになっている。電源は入っていないようだが、画面そのものに、座標軸と思われる線が書かれていた。レイバは楽しそうに続けた。

「リリイが通信機を持ってたの、覚えてる？」

「ああ。見たよ」

「あれを勝手にいじって、電池の所に発信機をつけたんだ。このモニターはデカルト・シテイのこのあたりの地区と同じにしてあるから、今からこれのスイッチを入れれば、リリイがいる場所が点滅して光るんだよ！」

実に朗らかで、清々しい声が響いた。

ぼかんとしているロールを後目に、ステイアは呆れを全面的に押し出しながら、ため息をつく。

「それ、最近の法律ではプライバシー侵害って言ってる、知ってる？」

「大丈夫だろ、動作を確かめたかっただけだから、別に普段は見えないし。リリイも若いんだし、俺に言わない秘密の恋とかそういうので、びっくりするような場所に行ってた所で気にしないって」

「気にしないのはお前だけだろ、それは」

「友達と食事に行ったって言ってたんだよね。だったら確か……十九番にある大衆食堂によく行くみたいだから、そのへんが光るんじゃないかな。あ、うちはここね。スイッチ入れるぜ」

こちらの指摘はどこ吹く風。レイバは装置の電源を入れた。

「ん？」

彼が指した自宅の位置とも、十九番地区とも離れた場所が、小さく点滅した。

予想が外れただけなら、そこまで驚くことでもなかったはずだ。

だが、レイバは驚愕していた。常に飄々とした態度を崩さない彼にしては、珍しいリアクションだった。

「どうしたんだよ」

ステイアは立ち位置を変えて、レイバと同じ方角から装置をのぞき込んだ。だが、座標の見方が分からないので何も言えない。

「……ステイア」

レイバは、声のトーンを落として、ひどく真面目な表情でこちらを見た。見慣れず、ステイアはきよんとする。

「なに」

「今から、この場所に行ってみてくれないか。ここに本当にリリースがあるなら、わりと本気で洒落にならない」

意味が分からず、眉根を寄せる。

「彼女のプライバシーは侵害しないって言ったばかりだろ。どういう種類の洒落かは知らないけど、気は進まない」

「俺たちのいる 居住区 がここまで。この印が寺院。発信機が指すのはその奥。 教区 の中だよ」

さすがに、言葉を失った。

黙って話を聞いていたロールも、眼帯のない片目を大きく見開いて、レイバの方を見つめていた。

レイバも、半信半疑といった様子ではあった。モニターを見つめながら、深刻な様子で眉を寄せている。

「学生のイタズラで侵入できるような場所ではないはずだし、単に

故障かもしれないけど……見ちゃった以上は、確かめないと」

ステイアは、今日の昼間のことを思い出した。

リリイに連れられた二十番地区。途中で出会った男の二人組。

彼ら二人の、態度や言動、目線。

「分かった」

何を理解したわけではなかったが。

直感的に、そう答えていた。顔をあげてレイバを見る。

「今すぐ行く。反応があるのは 教区 のどのへん？」

「ほとんど入り口近いね。縮尺が原因かもしれないけど、今のところは動く気配がないな。念のためにモニターごと持っていつてくれ。ここを基準にすれば見やすい」

レイバが指さした寺院の座標を心に留めつつ、ステイアはモニターを受け取った。

「あ、そうだ」

まさに出発しようとしたその時に、レイバが後ろから声をかける。

「体力は平気？ 今日、昼も歩き回ってたんだろ」

「これが最後のお遣いなら、平気。だけど……」

なぜか、頭をちらつく光景がある。

ジャンとリック。

妙に印象に残って、一度で覚えてしまった、その名前。

夢想を振り払い、ステイアはレイバの方を見た。口を開く。

「念のため、昨日くれたものより濃いめの定着剤を作っておいて。

今朝、起きられなかったんだ」

それだけ言っつて、家を出た。

最後に見たロールの視線が、不安げに細められているのが、嫌に目に焼き付いた。

少しは期待したのだが、あいにく、遺跡の入り口にあたる鉄柵は、いつものように閉ざされていた。

地面を舐めるように、赤く光る西日がまぶしい。柵が道路に落ちた長い影を見つめながら、ステイアはため息をついた。大通りに面した、教区 の入口。閉ざされているのならば、カードキーがなくては開けない。

とはいえ、正面から入ることが出来なくとも、教区 に侵入する方法なんて、いくらでもある。

ステイアは後ろを見た。通りを挟んだ 居住区 の人通りはまだ多い。だが、込み合っている時間帯は、逆に人々の視界を狭める。堂々としていれば、大丈夫だろう。

向かうのは鉄柵の扉ではなく、寺院の方角。そこならば一般人が近づいても不自然でない。

寺院の外観は、遺跡をモチーフにしているだけあって、風変わりなものになっている。目を引く壁の彫刻や、いくつも立てられた大型の柱などといったものが、夕刻の今は多くの影を生み出していた。死角を確保してからの行動は素早かった。ステイアは、彼にしかできない方法を淡々と実行し、そして二分もしたところには 教区 の内側への侵入を果たしていた。

( 人がない…… )

侵入口からモニタを確認し、リリーの居場所を目指して遺跡街を歩いた。だが、通り全体から物音ひとつしない。

他人の気配を読むなどという超人芸は使えないが、学生たちが戯れに侵入を果たしただけだとしたら、ここまで精巧に音を消せるはずもないだろう。

こちらの追跡を読んで、遺跡の影にでも隠れているのなら話は別だが、それこそありえないことだった。

( 一応、調べてみるか…… )

もう一度モニターを見て、座標の示す場所に見当をつける。候補は多かったが、ステイアは最初に目に付いた建物から覗くことにし

た。その時。

排水溝を跨ぐとして、その隙間に、ストラップと思われるものがひっかかっているのに気づいた。

白の遺跡街の中で、確実に存在が浮いた、シルバーのチャーム。スティアは身を屈めて、手を伸ばした。隙間に落ちた通信機が、絡まったストラップに支えられて、中途半端な直立で引っかかっている。

複雑に絡んでいるわけでもなかったもので、すぐに取り出すことが出来た。手に持って、機体を確かめる。

今日見たばかりだ。間違えなどしない。

リレイ・ブルーノの通信機だ。

スティアは手にした機体のスイッチを押した。躊躇なく。

通信機は馴染みのない機械だったが、市営のメーラーとたいした違いはなさそうだった。着信の履歴や、メールの中身を検分しようと、適当に手を動かす。

そして。

完全に予想外の名前を目にして、思考が停止した。

貪りつくように、文面に視線を落とす。次から次へと、メールを開いた。

開いた口が塞がらなかった。

Equ8 . 7 / 2 2 1 7 : 0 4

From : 父さん

Title : Re ; Re ; 今日暇？

レイバの家は十八番地区だったよな。

そこから近い大通りの寺院の辺りから 教区 の遺跡へ入れるようになってるのは、知っているか？

父さんちようどそこで休憩中なんだけど、今すぐ来られるなら、すぐにおいで。

鍵は開けておくから。  
お守り、持ってきてくれると嬉しいな。

Equ8 . 7 / 2 2 2 : 1 8

From : 父さん

Title : こんな時間にごめん

今朝は早速の返信をありがとう。そんなに喜んでくれるなんて嬉しいです。

試験の手ごたえはどうだった？ 俺の激励が功を奏しすぎて、燃え尽きていないことを祈ってる。

そのことについてもじっくり話したいけど、このメールでは大切な用件をひとつ。

父さんのことを話させてくれ。

大きな任務に関わっているって言ったよな。

本当に大きな任務になってきた。予想外の展開にコトが運んで、こっちの仕事は増えるばかりだ。

すっげえ大変だけど、でもそれはラッキーな事だった。

父さんちよつと興奮してるから、思わずこんな時間にメールしちゃいます。寝てたらごめん。起こしちゃったならもつとごめん。

でも、このお知らせを聞いたら、お前も許してくれると信じたい。お前に、会えるかもしれない。

Equ8 / 7 / 2 1 7 : 2 3

From : 父さん

Title : おはよう

少し久しぶりだね。ここの所、ちよつと仕事が忙しかった。変わりなく元気でやっていますか？ 父さんの方は元気です。でもすっげえ疲れています。疲れてると、お前にメールを打ちたくなくなります。

そろそろウザいって言われちゃう年頃なのかな。

俺の仕事の話なんかどうでもいいよね。でも、リリイが就職したら、似た土俵に立つことになるんだよね。もうそんなに時間が経ったんだと思うと、不思議な気持ちです。

お前、そろそろ試験があるんじゃないのか？ 真面目に頑張ってるだろうから心配はしていないけど、一応エールは送っておきます。ここでまさかの成績低迷といったら、今までの努力がパーだしな。全力で挑め。な。

それでは、今回はこの辺で。ちょっと今大きな任務に関わっているのでどうなるか分からねえけど、できれば近いうちにメールしたい。

吉報を伝えたいんだ。

もしかしたら一つ、いい事があるかもしれない。まだ不確定だけど…。待っててくれると嬉しい。

Equ8/5/03 02:08

From: 父さん

Title: こんばんは

真夜中にごめんね。泣き疲れて眠っていることを祈ってる。

リリイに彼氏が出来たって聞いた時は、正直寂しかったんだけど、別れたって聞いても嬉しいわけじゃないから複雑です。こういうのは合う合わないの問題だから、俺の娘をバカにしやがって、とか言うつもりもねえけど、でもお前が悲しんでいるのかと思えば、やっぱり俺はそれだけで悲しい。

今は、思い切り泣いてやれ。それで、その悲しみを、後の人生の肥やしにすればいい。人生の醍醐味はなんたって、寄り道だからな。エミリちゃんは本当にいい子だね。男に泣かされるのも、男を泣かすのもいいけど、やっぱり同性の友達つても最高だから。ちゃんと大事にしるよ。

……今は、俺が何を言っただって説教臭いかな。  
このメールに返信はいらねえや。おやすみ。

Equ7/10/04 21:11

From: 父さん

Title: よっ！

未来のガード諸君、健康でやっているか。

そろそろ入学して半年かな？ それでもまだ、新しい友達が出るって言うんだから、街の生活つても捨てたもんじゃねえな。まあ、俺はやっぱりブラブラしてる方が合ってるんだけど。

最近仲良くなったの、誰だっけ、ジャン？ そいつみたいなお調子者くらいの方が、お前みたいにマジメな子にはちよっどいいんじゃないかな。あ、でもお前って、ラルフ君のこと好きなのかな。なんか勝手にそんな気がしてるんだけど。

まあ、どっちを好きでも、どっちを好きじゃないでも、なんでもいいけど。

戦闘の専門学校なんざ、辛いことの方が多だろうけど、やっぱり学生生活は楽しんでくれ。焦りすぎず、その中で、お前の真面目さを大事にな。

頑張れ！

Equ7/3/05 09:46

From: 父さん

Title: お父さんです

これはリリーのメールアドレスで間違いはないかな。

通信機とか買っちゃうと、本当にガードって感じて新鮮な気分だろ。父さんも昔そうだった。あーあ。通信機をぶっ壊してからもう二年近いのか。となると、セカンド・グランドクロス からも二

年近いんだな。早いのか、遅いのか……  
でも、あの事件をきっかけにお前と話す機会も増えたんだ。  
世の中、暗えニューズばかりだが、その全てが悪いものでもない。  
俺はいつでも、そう思っているよ

メールを閉じた。

そのまま、通話スイッチを入れた。

呼び出し音が何度か響いた後に、レイバの声が聞こえた。

「あ、リリイ、よかった連絡ついて！ 今」

「どうということだよ」

冷静な声を作るだけの余裕もなかった。

レイバは話し相手が違っていることに気づき、続けようとしていた言葉を見失っているようだった。

「どうしてあんたの姪が知らないんだ。どうして今まで教えなかった」

「ステイア？」

レイバは、かみ合わない会話に困惑している。

「その通信機、リリイのだよな。リリイはどこに」

「ガイルさんは三年前に死んだんだ」

唾棄するように断言すると、受話器の向こうのレイバはきよとんとしたようだった。沈黙の間合いで、表情までも浮かぶ。

「今さら、何を言ってるんだ？」

ステイアは舌打ちして、通信を切った。

ここで怒りをぶつけた所で埒があかない。持ち帰って、メールの全てを見せつけた方がよほど早い。

リリイ・ブルーノの顔を思い出した。感じるままに笑い、悲しみ、無知ながらもまっすぐに夢を追いかけていた、同じ年の女の顔を。

悔しさに頭が眩んだ。  
い現実を見抜けなかった。

彼女の裏に隠されていた、  
ろくでもな

まどろみの中で思い出したのは、自分が髪を伸ばし続けた理由だった。

繰り返される戦闘訓練の中で、何度邪魔に思ったかは知れない。そして実際に、それを切ろうと思った回数も知れない。

それでもリイが髪を伸ばし続けた理由は、とても単純なものだった。好きな人に誉められた。たったそれだけのありふれた事だったのだ。

「長いのに、毛先まで綺麗だよなあ」

何か特別な手入れでもしてるもんなの？ と、教室で邪気なく聞いてきたその声を、今でも覚えている。

もうすぐ切るつもりだと返事をした時の反応もまた、忘れられない。

「え、切っちゃうんだ。もったいない……って、いや。好きにすればいいけどさ。でもやっぱ、もったいないなあ」

次から次へと人を寄せ付ける父のせいで、故郷の街にいたころから、男の友達はたくさんいた。

気の置けない友人として、そのそれぞれと、罵りあいながら育った。

だが、ここまでストレートに、女性として美しさを褒められたのは、初めてだった。照れくさくて、だけど嬉しくて、忘れられなかった。

結局、毛先をそろえる程度にしか髪を切れなくて、その男とはそれをきっかけにして親しくなったのだと、思い出した。

そして、彼を通じて知り合った友人が、ジャンであり、リックであったことを。

そこまで思い出して、心臓が冷たく鳴る。

父からだと思いきんでいたメール。現れた見知らぬ男。彼らと共

に立っていた、友人であったはずの二人。

どこからか、真実なのだろう。

何を、信じていたのだろうか。

ゆっくりと目を開けたリリイは、身体にかけられた簡素なタオルケットの温もりを意識した。

横たわった身体を沈める、中途半端に柔らかい、吸いつくような感触。神殿街の石造りの床ではない。かといって、自宅のベッドほどに居心地がよいわけでもない。

そこはソファの上だった。そう認識できた要因は、目の前に広がる、黒い皮の背もたれだ。長いソファをベッドの代わりに、眠っていたようだ。

なぜ意識を手放したかを思い出すより早く、リリイはゆっくりと半身を起こした。

ソファの背もたれの向こう側の壁は、窓になっている。距離があったため外の景色は見えないが、空が赤い。夕焼けの光が刺すように入り込んで、白い床を照らしている。時計を確認する術はないが、あれからさほど時間が経ったわけでもないらしい。

あれから。

そこまで思っ、リリイはようやく我に返った。

「目が覚めた？」

友好的な声は近くで聞こえた。振り向く。

リリイが座っているソファの向かいには、同じデザインのソファが、低いテーブルを挟んでそこにあった。この部屋は、応接間のよくなものであるらしい。

スーツを着た赤毛の男が、向かいのソファに座っていた。くつろいだ様子で背を丸め、膝に肘をつけてその手で顔を支えている。

「寝起きがいいな、リリイは」

鳥肌が立つほど柔らかい声で、男がささやく。

その笑顔に恐怖しながら、リリイは反射的に、タオルケットの裾を握りしめて彼を睨んだ。睨みながら、男の姿を越した、部屋の間取りを意識する。男が座っているソファの向こう側に、出口と思われるドアがあった。

「あなた……何」

こちらからの質問を受けて、男は待つていたとでも言わないばかりに笑みを深めた。優しく。そして、愉快犯のような愉悦をこめて「ガイルだよ」

「……いい加減にして。私は父さんを見間違えたりしない」

ぎゅっと、タオルケットを握りしめる。自らの温もりが確かに染みた布。寒いわけではない。今はただ、握りつぶせる何か欲しい。「顔も体格も違う。髪の色だって、年齢だって合っていない。化ける気なんかかけられないのに、どうしてそんなことを言うの」

「それでも、お前が『父さん』って呼んでくれて、何年もずっとメーブルをしていた相手は、俺だから」

息が詰まる。

父と交わした言葉の全てを、すぐに思い出せるわけではない。だが、寒気がした。頭が理解を拒むように、回転を止める。

赤毛の男は心底おかしそうに、声をあげて笑った。

「かわいそうなりリイ」

そのままソファを立ち上がり、すねの高さにあるテーブルの上に膝を乗せた。踏み越えるように身を乗り出して、こちらに向けて手を伸ばす。

リリイは後ろに下がったが、ソファの背もたれが邪魔をした。体勢を整えるより早く、男の指がこちらの髪に触れた。視線がかち合う。甘い愛情を覗かせる、静かな目がこちらを見ている。

「何も知らないのに、与えられるものを信じていて、そしてそれを疑うことすら知らない。そんな所が、可愛いんだけどな」

伸びた手を振り払おうと、タオルを握っていないかった左手をあげる。だが、暴れる左手そのものを、手首を捕まれてあっさりと止め

られた。

そのままの体勢で、男は静かに笑う。

「別に隠す気はない。俺の親が俺に与えた名前は、テッドだ。でもこんな名前は、俺たちの間に意味はない」

身体が触れあうことに嫌悪を覚える余裕もない。間近でこちらの顔をのぞき込むその男は、聞き逃せない情報突きつけてきた。

「だって、お前は俺のことを父さんって呼んで、ずっと会話をしてきたんだから」

「……違う」

「違うない」

「違う！」

「でもお前は、本物のガイル・ブルーノと俺が、いつ入れ替わったなんて分からなかっただろう」

リリイが何も言えずにいると、テッドと名乗った男は微笑んだ。

そのまま、触れていた手を離す。テーブルから足をどけて、元のように向かいのソファに腰掛けた。

「種明かしをしてあげるよ、リリイ」

スーツの内ポケットに手を差し入れてから、そつと、こちらに向けて名刺を差し出してくる。

受け取りたくない気持ちも多分にあったが、今は事態の理解が先決だった。テッド・リオ。今し方受けた自己紹介と同じ名前が印刷されている。そして、その上に。

見覚えのあるロゴマークが印刷されていた。拳銃とアンテナをモチーフにしたその記号は、今や町中のどこでも見られる。知らない者などいない。

(レアリス・カンパニー……)

大陸の治安を支える大企業であり、リリイにとっては将来の就職先でもあった。

ロゴマークだけではない。男の名前の下に小さく書いてある役職名にも、正式な記述があった。レアリスカンパニー、ガード事業部、

デカルト支部経営部門……

「俺の個人的な意見は、ひとまず置いておこう」

テッドは満足そうに笑んで、指を二つ立ててみせた。

「これからカンパニーはお前に、きつと二つの協力を要請する。ひとつは、ガイル・ブルーノに関する情報を洗いざらい吐くこと」

その笑みは、話の内容がどうこうと言う以上に、こちらの反応を楽しむ意味が強いのだろう。

事態に取り残されれば取り残されるほど、彼の表情も優しくなる。リリイはそのことだけは理解していた。理解したくなど、なかった。

「お前の父親は、特殊な立場の人間だったんだよ。カンパニーは、彼が持ち逃げした情報を欲している」

「持ち逃げ……？」

「三年前から行方不明さ。おそらく、死んだね」  
静かに。

当たり前のように、特筆することでも言おうように、テッドなる男は、そう言った。

驚きを表情にすることすら、出来やしない。理解がついていかず、リリイはただ呆然と目を見開いて、目の前の男を見つめた。

三年前。

その言葉の意味する所が、もはや何も浮かばない。

混乱を重ねた思考の中で、昨日や今日に交わしたメールの言葉思い出す。いつも、いつでも、父の気楽なメッセージに呆れさせられ、そしてどこか励まされていた。

そうして、ずっと、ガード になるための道を、歩いてきた。

「ちなみに、俺がガイルと入れ替わったのも、三年前だな」

愉悦に嗜虐的な色を差して、テッドはこちらの顔をのぞき込んでくる。

「……なんで」

声が震える様が、相手に伝わってしまうのが悔しくてたまらない。

「なんで、そんなことをしたの」

「ガイルは秘密を握ったまま死んだ。レアリス・カンパニーはその情報を欲している。彼の個人情報調べ尽くして、一人娘であるお前の所に行き着くのは当然だろう。カンパニーは、お前を抱き込む手段を探していた。三年前からだ」

「こちらの問いを無視する形で、すらすらとテッドは説明を並べた。意図してのことだろう。彼はリリイをじらしている。」

「だったら、こんな回りくどいことをしなくても、聞かれた事には答えたよ。父さんが死んだことを正式に教えて、質問をしてくれるだけで良かったのに、どうしてこんな　なりすましでメールなんか、三年間も……！」

「レアリス・カンパニーは、お前を買っているんだ」  
テッドは涼しく告げた。

「こちらから召集をかけるより早く、お前は自主的に　ガード　を目指し、カンパニーへの就職を希望した。なら、正式に仲間につき込もうとしたって算段さ。お前はまだ未成年だから、スカウトできななり社員にすることは出来ない。ある程度の監視を残して、お前という存在をキープしつつ、成長を見守るのが安全策だったんだ」  
「それとこれとは話が別でしょう!？」

「別じゃないんだ。お前は、父親の事情を説明された後だと、わざわざカンパニーに就職しようなんて思ってくれないだろう。それどころか、機密だけ握った不穏分子になりかねない……逃げ場をなくして、信用を買う手段があるなら、多少の手間は投資だ。それほどお前の持つ情報は有用なんだよ。情報だけじゃない。『ガイルの娘』というカードを、組織に抱き込むことが出来れば、いざという時の切り札にもなる」

「情報……って」

リリイは言葉に詰まって、テッドの顔を睨んだ。

「私は、そんなこと何も知らない」

「そうみたいだな。それは、メールをしているうちに分かった。で

も、俺以外の人間はそんなこと知らねえからな。リリイ・ブルーノをガードとして平穩に採用するために、裏からけっこうな手を回したらしいぜ。入試の成績がトップだったって、喜んでたよな？」父にしか知らせていなかったはずの過去を口にして、テッドはにやりとした。

「成績を裏から操作して、お前を安全に入学させて卒業させるなんて、簡単な事だ」

教室で日々顔を合わせる、シモン教官の顔を思い出した。お前は優秀だな、リリイ。この調子でいけばかなりの順位で卒業できるし、推薦状も書ける。油断せずに精進しろよ。

「教員や警備員を抱き込むのも簡単さ。ガード システムのシステムサードをしているのが俺たちなんだから、学校のすべてはレアリス・カンパニーの手のひらの上だ。生徒の中にも、俺たちの一派はいた。入学当初から、お前を監視するバイトとして雇っていた候補生の一部が、さっきの二人だ」

ジャンとリック。

向こうから声をかけられて親しくなった。ガードの専門学校に通うにしては、ふたりとも学業には熱心でなかった。

彼らと知り合ったきっかけを、思い出す。紹介してくれた一人の男。ふたりで特別な時間を作るようになった唯一の相手。

彼は、どうだったのだろう。

これ以上に確かな存在などないと、疑うことすらしなかった、家族の存在が嘘だというのなら。友情の全てが用意され、仕組まれたものだというのなら。

あの恋情の全ては、なんだったのだ。

「無知なお前は、目の前の現実を疑うことを知らない。あとはカリキュラム通りにスキルを上げてゆくの見守りながら、希望通りに就職してくれるまで、待つだけでよかった」

もはやテッドの説明の声が頭に入らない。リリイは親友のエミリのことを思い出していた。彼女は、あの日常をどのように思ってい

たのか。あの教室の誰が、どこまで、事情を知っていたのだろう。  
「だけど、そこまで上手くはいかなかったんだ。この街に出張  
に来たセイが、『あれ』の気配を察したのが数日前」

知らない名詞や代名詞が増えたが、それを言及する気力も沸か  
ない。

「スパイとして潜らせてたジャンとリックに、念のためにお前の周  
りを調査させて、最悪の事態が把握できたのが、今日だ。もはや一  
刻の猶予もない」

「なんの話よ……」

テッドは、とっておきの冗談でも披露するように、笑った。そし  
て。

「カンパニーがお前に求める情報の、一番大事な所は、これなんだ  
よ」

名刺が入っていたのと同じ胸ポケットから、再び何かを取り出し  
た。

指先で摘める程度の大きさの、小さな布袋だった。色あせて、  
ほとんど肌色に近くなってしまったピンク色。

それが何であるかを認めて、リリイは思わず身体を起こした。反  
射的に、服のポケットに手をやる。通信機がなくなっている。そし  
て、同じポケットの奥にしまっていた、いつでも持ち歩いていたはず  
のものも、なくなっている。

父に預けられたお守りの袋を手中にして、テッドは得意げに告げ  
た。

「お前がメールで言う所の『お守り』の存在を、最近になってから  
上司に告げたら、すげえ驚いてたぜ。なんでもっと早く教えなかつ  
たんだって、怒鳴られたけど」

「返して！」

ソファから立ち上がり、今度はリリイの方からテーブルを踏み越  
えた。だが、食いかかろうと伸ばした手の動きはすぐに止まった。  
テッドがお守りをくるりと裏返していた。

縫い止められていた開け口が、切り裂かれていた。

テッドはにやりと笑って、視線をもう片方の手の方にくいと向けた。思わず、誘導されるようにしてそちらを見ると、さきほどまでは何も持っていなかったはずの手の中に、手品のように現れていたものがあつた。

親指の先ほどの大きさの、宝石に見えた。

種類は分からない。　リリイは、誕生石であるダイヤモンド程度しか、この手のことに関して知識がない。水を結晶にしたような滑らかな光沢がある半透明の石だ。色は、澄んだイエローだった。

美しいが、宝石の表面には、粘土のような黒い物体が、所々にへばりついていた。卵の殻をかぶったままのひな鳥のように、全体を覆っていたと思われるものが、剥がされている……

「マター・コーティングとは、ガイルも回りくどいことをする」

テッドが笑っている。父との秘密の約束だった、リリイ自身すらも中身を知らなかった、その宝石を指先でもてあそびながら、訳知り顔で笑っている。

「どつりで、誰も気づかずに行方不明扱いになったわけだ。かのレイバといえど、これでは探査の仕様がないだろうな」

「レイバ……？」

まだなお、身近な名前が登場することに、どうしようもない苛立ちを覚えた。

テッドは改めてこちらの瞳を見て、声を低くした。

「レアリス・カンパニーがお前に要求することは大きく分けて二つだ。一つは、ガイル・ブルーノに関する情報を洗いざらい吐くこと。それには、この宝石の譲渡も含まれる」

先ほどと同じことを反復してから、一息おいて告げた。

「そしてカンパニーへ身柄を預け、レイバ・グリーニッシュとステア・アリビートに今後一切関わらないこと、だろうな」

最後のひとりだけは、まるきり予想外の名前だった。

リリイが言葉を失っているそのタイミングで、部屋の外から物音

がした。遠くの方から徐々に近づいてくる慌ただしい足音と、怒鳴り声のような会話が聞こえてくる。

「誰もあの部屋に近づけるなど言っただろ！」

「で、でもテッドさんはこの人ですし俺より偉いし、断れないっすよ。だいたいあの人、セイさんの許可はちゃんと取ったって」

「許可を出した覚えはない！ 今のあの子とテッドを接触させるのが、最悪だったことくらい」

ボタンと勢いよく、ドアが外から開け放たれた。

そのまま部屋の中に駆け込んできたのは、先ほどの金髪の男だった。きちんと整っていた白のコートの、肩がずれている。彼は息を整えながら眉間を指で押した。サングラスは、室内でも外していなかった。

彼の後ろから、弱った調子でついてきていたのは、知らない若者だった。それがジャンでもリックでもなかったことに安堵するだけの余裕もない。テッドが語った言葉が、彼の不快な愉悦が、リリーの頭の中をぐるぐると回っていた。

「慌ててどうしたんだい、セイ」

サングラスの男の焦った態度を、テッドは涼しく笑んで受け流す。セイと呼ばれた金髪は、息を整えてから、苦々しく声量を抑えた。

「何を、どこまで話した」

「全てを、ありのままに」

「何故だ！」

「言わなくても分かっているだろうに、あえて聞くところが気に入らないんだ。それにしても意外と迂闊だよな。あんたみたいな若造に本社がどれだけの権限を与えてようが、この地区では俺の方が経験も人脈も勝ってるんだぜ」

言葉を失うセイに、テッドはひよいと肩をすくめてみせた。そのまま、飄々とした仕草で立ち上がる。

出て行くこうとするその背中を、リリーは大声で制した。

「まだあなたは、私の質問に答えてない！」

テッドは振り返って、笑った。確信犯の笑みだった。

「そうだったか？」

「仮に、レアリス・カンパニーが父さんの持つ情報を必要として、娘である私を回りくどい方法で困い込もうとしていたことが本当だとしても、メールで私を監視する意味なんて何もなかった」

夢中になつて叫びながら、リリイは目の前の男を睨んだ。初対面の、見知らぬ男。これといった特徴もないスーツを着た、二十代半ばほどの、赤毛の男。

こんな人間は知らない。悔しさに身体の中が煮えくり返る。どうして私は今、こんな男の前で、こんな話をしている。

「私が父さんに送ったメールなんて、ただの日常会話だった！ カンパニーにとつて有益な情報なんてひとつだって渡した覚えがない。どうして、情報を聞き出すだけじゃ飽き足らず、わざわざ父さんに化けて、三年も雑談に付き合つたの！」

テッドは、そんなこちらの感情などまるきり無視して、旧知の間柄であるように、親しげに笑った。

今しがた、セイに見せたような形式的な笑みではない。確かな愛情があった。それが何よりも気味が悪い。

「……ガイル・ブルーノが死んだ現場を、しばらくしてから検分に行つたのが、俺だったんだ」

笑みを浮かべた唇に、軽い声が載る。

「事故現場の隅も隅、崖崩れが起きていた岩場の中から、壊れた通信機を拾つたのはほんの偶然さ。その機体の奥でなんとか無事に残つてた、ストーン のメモリーから、ガイルの所持していたデータを引き出すことに成功したのは、レアリス・カンパニーの技術があつてこそだけだな」

自慢でもするように、両手を広げる。

「ガイルは仕事とプライベートをきつちりと分けるタイプの人間だったらしいぜ。その携帯に入っていた情報は、個人的なものが全てだった。ろくにデータ容量もない初期仕様の通信機の中で、娘から

届いたお気に入りメールをなんとか保存して、大切に眺めていた様子くらいは察することができたけど、それだけだった。組織は早々にそのデータに見切りをつけて、別の方向から事件の調査を始めただよ。俺もそっちの仕事に参加した」

軽々しい言葉が、絡みつくように紡がれる。

「組織が見捨てたデータの中から、ガイルのアドレスと、ガイルの家族が住まうスピノザ・シティの契約メーラーのアドレスを盗み見るのは簡単だった。それを控えたのは、俺の気まぐれだ。そして、ガイルになりすまして娘にメールを送ってみたのは、好奇心が理由さ。レアリス・カンパニーにここまで周到に付け狙われるハンターが、どんな人間だったかが気になったんだよ」

瞳に、危険な愉悦の色が灯る。

「あとは強いて言うなら……お前が可愛すぎたのが、メールを続けた理由かな。父親の口調を研究して、シミュレートして、その通りに送ってみた創作のメールに、本気になって返事をくれる。俺は父親でもハンターでもなんでもないので、頭で描いた全ての虚構をお前は信じる。こんな言葉をかければ、お前はこう反応をくれるかなって、期待なんかすると、だいたいはその通りに動いてくれる。たまに変に予想を裏切る所まで含めて、楽しくてたまになかった。そのうち、進路や友情や恋愛の相談までしてくれた。赤の他人のこんな男に！ お前の無知さや愚かさが、自分の娘のように愛しくてたまらなかつたんだよ」

誇らしく胸を張って、高らかに告げる。

「このメールのやりとりに、組織の意向は関係ない。俺の趣味さ。毎日の仕事を終えて、お前に送るメールを考えると、お前から帰ってきた無邪気な返事を見ることばかりが、俺の楽しみだった」

リリイは眉根に力が入るのを感じていた。唇が、震える。

「そのうち、考えるようになった。俺が正体を現して、すべてを教えたその時に、お前はどんな顔をするんだろって。あとは、最近になって本社と利害が一致したから、個人的に連絡を取ってい

たことを明かしただけさ。失われた イエロー が、お前がお守りと呼ぶあれなら、今になってレイバが動き出した説明もつく」

テッドはそこで言葉を切って、息をためた。これ以上ない笑顔で、唇を開く。

「分かるか。俺は、今、お前が俺を睨んでる、その顔が見たくて、そのためにずっとメールをしていたんだよ。徹底的に夢を見せて、突き落とされた瞬間のその顔が、見たくて見たくてたまらなかったんだ」

邪悪な幸福に溺れながら、どこまでも甘く言葉を紡ぐ。まっすぐに。

「想像していた以上だ。可愛いよ、リリイ」

リリイは、ソファから立ち上がった。いた。

テーブルを土足で踏み越えてテッドの襟首を掴んだ。持てる全ての力を使って睨んでも、彼は表情を変えない。楽しんでいる。この腐った現実の全てを。

衝動のままに、襟首を掴む手が、喉仏に伸びた。力を込める一瞬前に、背中に回り込む気配。わきの下から腕を差し入れられ、羽交い締めになされていた。

「離して！ 離せ！！」

リリイを後ろからとらえたのは、セイと共に部屋にやってきた若者だった。姿は見えないが、他の人間は全て前方にいる。

いきなり引き離されたことで、テッドはソファに尻餅をついていた。その横から、こめかみに銃口が突きつけられた。セイ。

彼がいつ銃を取り出したのかは分からなかった。掌に収まるような小さなハンドガンだ。指は、引き金にかかっている。

「テッド・リオ。……今の発言を含めて、これ以上の命令違反は認められない。私の権限で、お前を拘束する」

サングラスに遮られて表情は見えないが、押し殺した声の響きから、怒りの気配は濃厚に感じられた。

「無関係の人間に対する個人的で悪質な措置も、企業秘密を軽々し

く話し計画の遂行を疎外するやり口も、これ以上は看過できない」  
「俺のメールを利用してリリイに近づこうとしたくせに、よく言うぜ」

銃を突きつけられても、特に気にした様子もなく、テッドはセイを見返した。無造作に両手を挙げて、降伏の意だけは示す。

「でもひとつ言っておくと、俺はリリイに事情の全てを話しちまったからね。今さらどんなきれいごとでごまかしても、こいつの心は動かないだろう。レアリス・カンパニーに平和的に抱き込もうって言う、あんたのプランを実行するのは難しいぜ」

「貴様……」

「俺は満足したよ。リリイを絶望させたんだ。こんな退屈な仕事を続けて、お前みたいな退屈なガキに従ってきたのも、この瞬間のためだったんだらうな」

「なら終わりだ、表に出ろ。もうこの部屋には近寄らせない」

「それは残念」

セイに銃口を向けられたまま、両手をあげたまま、テッドは言われるがままに立ち上がった。

部屋を出ようとする。リリイは羽交い締めになれながら、暴れた。「待ちなさいよ！ 待って！！」

「大人しくしてください！」

大の男に後ろから関節を押さえられてしまえば、あらがえない。足の間にも、足が挟まれている。最低限の力で、全身の自由を奪ってしまった後ろの男を憎みながら、リリイは叫んだ。届くものは、声しかない。

「ふざけないでよ！ このっ……！！」

涙がこぼれていたことによくやく気づく。悲しみではない。怒りの熱が、眼球の水分を沸騰させて、ふきこぼれるようだった。

遠ざかっていく背中に手は届かず、拘束された丸腰の体を動かすことも出来ない、そんな状況で、胸の奥がひたすらに滾った。この期に及んで余裕に笑んだあいつの顔を、上から、完全に、ぐしゃぐ

しゃっ。

声しか届かないのに、崩すことなんか出来やしない。

叫びはいつしか、意味の分からない金切り声になっていた。

部屋を出る間に、テッドが振り返ったが、セイがその表情を隠すように立ち塞がった。そのまま、二人の男は、部屋から出ていってしまった。

レイバの表情が、驚きに染まるのは珍しい。そう思ったのは、今日だけで二回目だった。意外とこの男は、認識していたよりも隙だらけなのかもしれない。

そうでなければ、こんな事態が起こるものか。ステイアは胸中で毒づきながら、リリイ・ブルーノの通信機を見つめるレイバを見ていた。彼女に届いた『ガイル』からの通書 メール。その全てを目の当たりにした、ガイルの弟。

「気づけよ」

言っても仕方のないことは言わない主義だったが、こればかりは言わずにはいられなかった。

「あんたはガイルさんが死んだことを知っていたのに、あの子だけ知らずにメールのやりとりを続けてたなんて、そんな話があるかよ」  
「本当だな。驚いた」

どこか他人事のようにそういうレイバの態度に、ステイアは苛立つていた。

教区 から帰宅して、拾った通信機をレイバに突きつけた、その反応は予想通りにこんな具合だった。発明品や、その原材料となるパーツに埋もれた物置部屋で、神妙に眉を潜めている。

ステイアはため息をついてから、教区 で確認した点を述べた。  
「メールは大部分が消えてるけど、保存されている一番古いものは去年の三月。だいたい一年半前で、その時点で セカンド・グラندوقクロス の話題に触れてる」

レイバは無言のまま、画面上で視線を動かしている。

「三年前から文通は続いてたってことになる。ガイルさんが死んだとほぼ同時に、偽者と入れ替わったんだよ」

「グラランドの時は、報告があっただけだな」

レイバには、特に感情を動かす様子はなかった。純粹に、疑問に

感じているらしい。

「報告？」

「リリーの母親が、兄さんから生存確認の電報が届いたってことを、こつちにも伝えてきたんだよ。どうリアクションしたかは覚えてないけど」

「ちゃんと覚えてるよ」

ステイアは深く嘆息した。

「あなたの性格が冷淡すぎるとか、他人に関心がなさすぎるとか、そういったことを今さら俺が説教するのも馬鹿げてるけどさ、この事態を招いた原因のひとつはあなたの無関心だろ。一度でも、あの子にガイルさんの思い出話でもしてれば、その時点でこんなアホな事件は起こらなかつたはずなんだよ」

「しかし、リリーは部外者だしなあ。父親が死んだ理由を説明するのも、それこそ面倒事に巻き込むことになるだけだったから、俺からその話題は避けてたんだよね」

レイバは頭を掻いた。

「兄さんが行方不明だつていう報道は、正式にラジオで流れたんだ。まさかこんなご時世に、生存を信じ続けてるとも思えなかつたし」

「言い訳はいいよ。部外者だつたら誘拐なんかされない」

ステイアは話を切った。

「これからどうするかを考えないと」

「……その通りだけどな」

レイバは息をついて、通信機をまじまじと見つめた。

「俺には、リリーが誘拐される理由が何も思いつかないんだけど」

「メールを見て分からない？」

口調がさらに苛立つのを自覚しながら、ステイアは言った。レイバは学者としては天才的な才覚を示すが、他人の感情の機微には、呆れるほどに鈍い。

「あの子が呼び出された誘いのメール。『お守り』を持ってこいつを書いてあるだろ。わざわざ強調してるなら、目的はそれだ」

「お守り？」

「どうやらレイバは、その一文をキーワードとして認識していなかったらしい。もはや呆れるのも馬鹿馬鹿しくなって、スティアはマペースに推理を告げることにした。

「あの子を誘拐したのは、間違いなくレアリス・カンパニーだ。ガイルさんの死に関係している組織は、俺たちを除いたらそこしかない」

「そうだな、それは分かるけど」

「まだ資格を得ていない未成年とはいえ、あの子は ガード 養成学校に通っていた。立場としては準カンパニー社員だったと言ってもいいだろ。それをあえて、だますように力づくで誘拐して、しかもそれが今日だったのはなぜか。三年間も放置していたのに、今になってカンパニーが動き出すほどの重要な モノ …… って考えると、答えはひとつしかないだろ」

レイバもようやくピンと来たようだった。納得して、口にする。

「 カラーストーン か？」

「たぶん、行方不明だった イエロー だ。ガイルさんが持ち逃げした秘密なんて、それくらいだ。きつとあの子が持っていたんだ」  
「しかし、リーダーには映らなかったし、兄さんもそんなことは教えてくれなかったぜ」

「兄弟だからって、なんでもかんでも話すわけじゃないだろ」

スティアは吐き捨てるように言った。

「今日、いきなり動き出した理由も、なんとなく見当がつくよ。あの子の周りで起きた変わった出来事ってのは、俺とロールの登場くらいなものだし」

「お前が現れたことで、カンパニーが焦ってる？」

「二十番地区で買い物をした時に、あの子のクラスメイトだったという学生二人に会った。妙に観察してくると思っていたけど、やっぱりこつちの理由だったんだ。ガード候補生なんて、カンパニーの手下みたいなもんだしね。もう、俺の存在は気づかれてるよ。……」

ロールがこの街にいることも、きつと気づいてる」

「早いな」

レイバは困ったように眉根を寄せた。「思っていたより、事態が動くのが早い」

「だから、今すぐ動かないと向こうのペースに追いつけない。レイバ、この街の地図を見せて」

手早く、レイバは奥の机をこそそこそとあさって、地図帳を取り出した。

受け取って、ステイアは街全体をざっと確認した。 教区、居住区、生産区、中枢区……そのすべてにある、ガード・ハンター・ポリスの詰め所を確認する。

「やっぱりな。このあたりでカンパニーが自由に使える建物は、あの子の学校しかない」

ステイアは皮肉な思いで、自嘲するように笑った。

「いざという時のためにとあって、今日の昼間に見学に行ったんだけど、こんなに早く役に立つとは思わなかったな」

「そこにリレイがいるのか」

レイバの声は、疑問というよりは納得に近いようだった。ステイアは頷く。

「カンパニーなら、たいがいの犯罪は隠蔽できるだろうけど、さすがにポリスを頼ることはないだろ。あれは自治体と提携しているだけの商売だから、色々な罪状が明るみに出て、権威が失墜する危険性が高い。かといって、ハンター関連の施設は生産区かゲートに集中してる。車を飛ばしても時間がかかるし、女ひとり運ぶために、わざわざ目立つ真似はしない」

「加えて呼び出しの手段が、こつ悪趣味じゃあな」

通信機を、ひらひらと手で示して、レイバが言った。

「なんの抵抗もなく穏便に、てのはムリだよな。リレイが暴れることを見越して、待ち合わせ場所が教区なら、平和的なさらい方はしてないだろうし、遠くまで行く余裕はないわな」

「今はね。カンパニー側で準備が整ったなら、もうちょっとやっかいな場所に連れて行かれるんじゃない。行方不明になったりリイ・ブルーノの身内へ、体のいい言い訳を引つ提げてね」

「向こうが言い訳を考えてる間に、こっちから打って出て現場を押さえるしかない、か……確かにここで イエロー を失うのは得策じゃないしな」

冷静な声で、レイバはそんな事を言った。得策であるとかそれ以前に、実の姪の無事は心配ではないのかと聞きたくなったが、やめた。この男相手に、この手の問答が意味をなさないことは、嫌と言うほどに知っている。

「しかしなんだって、カンパニーはこんなに面倒くさいことを……」  
携帯を指先で弄びながら、レイバがつぶやく。

「ただ呼び出すだけなら、学校の教官を通じて正式に連絡をした方がてつとり早いだろ。『お守り』の要求にしる、兄さんだってハンターだったわけだから、いくらでももつといい言い訳が作れそうなもんだけどな」

「あの子の同居人が、あんだたったからじゃない」

ステイアが答えると、レイバは不理解を訴えるように眉をひそめた。

「リイ・ブルーノの持つ情報を欲していかつ、その同居人であり血縁者である、レイバ・グリーンニッシュとの接触は絶対に避けたい。そう考えればどんな策があっても、動きは消極的になるだろ。あんたの経歴を考えれば、警戒しすぎてほどこでもない」

「そうならそうで、杜撰だな。俺がいつリイに兄さんの話をするとも知れない状況で、メールで連絡なんてさ」

それについてはまったくの同感だったが、分からないことを気にしても仕方がない。

「なんでも合理的に片づけられるとも限らないんじゃない。組織なら、有能な人間も無能な人間もいるだろうし」

ステイアは毒づきながら、レイバの目を見つめなおした。

「どうする？」

「……………」

レイバはリリー・ブルーノの通信機から目をそらして、作業机の上に置く。眉を寄せて、考えながら話し始めた。

「リリーの学校の場所は分かるんだよな」

「今日確認したから、覚えてる。一般人でも入れるみたいだし、案内は問題ない」

「お前、助けられる？」

結論だけを聞いてきた。

「無理だ」

ステイアもまた、断言した。

「あんたが一番知ってるだろ。強力なサポーターでも手配してくれるなら、事情が事情だから考えるけど」

「無茶言うなよ。今すぐカンパニーに殴り込みしてくれる便利な奴で、かつ強くて使えて機密を絶対に洩らさない助っ人だろ。都合よく転がってるもんじゃない」

「じゃあ、ここで手をこまねいてるのか？」

「……………ちよつと待っててくれ」

レイバはおもむろに立ち上がった。そのまま、ステイアの横をすり抜けて、部屋を出ていってしまう。

彼の姿を追うようにして、部屋の出口に視線をやると、ロールがそこに立っていた。こちらの話を外から聞いていたのだろう。

レイバが階段を昇る音だけが、他人事のように響いていた。

「……………入ってくれば？」

ステイアがそう言うと、ロールは驚いたように目を見開いた。声をかけられたのが予想外だったらしい。

「う、ううん。何を話してるのか、ちよつと気になった来ちゃっただけだから」

「近くの方がよく聞こえるだろ。別に遠慮するような話題じゃないし、もうお前も無関係ってわけじゃ……………」

言いかけたところで、レイバが階段を降りる音が聞こえてきた。そのまま、なにやら大仰な荷物を担いで、部屋に戻ってくる。真剣な様子のレイバに素通りされて、結局ロールはこちらにやってくるタイミングを見失ったらしい。まあ、好きにすればいいことだが、それよりもステイアにとっては、レイバが抱えてきた荷物の方が重要だった。それは、どこからどう見ても……

「……本気？」

口元がひきつるのを自覚したが、レイバの眼差しは雄弁にその問いを肯定していた。

「ああ。これでなんとかして」

「いや、無理だろ」

「時間を稼ぐだけでいい」

きつぱりと断言しながら、まっすぐにこちらの目を見つめてくる。「お前の位置はピアスで正確に把握できる。だから、できるだけ早く、できるだけ強力な救援を送ることだって出来る。お前はリリーの身柄と イエロー を奪還して、あとは救助を待てばいいから。特濃の定着剤もちょうどさっき作ったし、一日くらいなら無理が利かないわけじゃないだろ？」

「……………」

奥歯を噛む。

問答無用で断りたい所ではあったが、時間がないことは分かっていた。今すぐに動ける人間が、自分の他にいないことも。

ステイアはなるたけ冷静な声で、つぶやいた。

「報酬はいくらか、先に教えてよ」

レイバは、きよとんとした。

「お前、そこまで金に困ってたっけ？」

「これが仕事だっという実感が欲しいんだよ」

毒づきながら、目の前の性悪をにらんでやった。

「検査に合格したのが数日前だったのに、いきなり働かされても、気が引き締まらない」

「まあ、分からんでもないな。なら……」

レイバが気楽な口調で告げた金額は、スティアの予想を大きく越えていた。

不覚にも呆然として、まじまじとレイバの顔を見てしまった。彼はしごく当然とでもいった様子で、軽く笑った。

「それくらいの価値がなくちゃ困る。なにせお前のデビュー戦だからね」

態度のいい加減さとは裏腹に、瞳は真剣だった。”ジャンク屋”らしく、己の発明に注ぐ一途な情熱と自信を覗かせている。

「……くそつたれ」

何か侮蔑の言葉を口にしなければ気が済まず、スティアは小声でそれだけ言っただけだった。

レイバは涼しく笑って受け流し、抱えていた荷物のすべてを、部屋に転がっていた古いリュックサックに詰め込んだ。ずっしりと重くなったそれを、こちらの手に押し付けてくる。

どれほど睨んでも彼の優位が変わらないのが、不愉快だった。

ガード養成学校は、その敷地を、高い外壁と有刺鉄線で囲っていた。

加えて、受付で身分証明を提示せずには、奥に進めないシステムになっている。本人認証システムのからくりはシエルトターの開閉と同じ技術に基づいたものであり、レアリス・カンパニーの最新技術を駆使した、再新鋭の警備体制である。

ジャンは、そういった警戒が敷かれる理由は、武器の保管のためだと思っていた。銃の流通が制限されている法律下で、学生の訓練用に大量の武器を所蔵する専門学校から、それが盗み出されては治安維持も何もない。ポリス・ステーシヨンや銃器販売店が、戸締まりを厳しくすることと、何ら理屈は変わらない、と。

(……それだけじゃ、なさそうだな)

学校に通い始めて一年半。ようやく、意見が変わるのが、今日になりそうだった。

四角い敷地の角、外壁の隅に立ちながら、ジャンは空を見ていた。夕刻の赤い日差しが紺に吞まれ、夜が訪れようとしている。試験期間も終わり、講義が開かれていない学校ならば、人気があるはずもない時間だった。だが。

ジャンは、壁に右肩を預けるようにして、右方 正門の方角に視線を投げる。

出入りをする人間はほとんど見えなくても関わらず、私服の男が数名、見張りのように立っている。ように、とは不適切な表現であることは自覚していた。彼らはれっきとした見張り番に違いない。顔合わせをしたわけではないが、自分も含めて、外壁の警備に回された私服警備のアルバイトが何人かいるはずだった。

(何の侵入に備えてるんだか……)

これから学校に入る人間など、ほとんどいないに決まっている。

なのに、レアリス・カンパニーの人間が特務で入り込んだ途端にこの警戒だ。毎日通っていたただの学校が、要塞にでも様変わりした風だった。あるいは高層建築も含めて、すべては初めから、そのために設計されていたのかもしれない。

この施設の中で、今、何が起こっているかを知る人間なんてほとんどいない。

ジャンもこれに関しては多数派だった。分かるのは、この大仰な警備の中心に、クラスメイトである女生徒が関わっていると言うこと。そして、彼女が閉じこめられる原因を作ったのは、自分たちであるということだった。

ふわり。

柔らかな風の気配が足下をくすぐった。

ジャンはきよとんとする。今日は朝から天気がよく、風なんか吹いていなかったはずだ。そして。

一瞬の油断をついて、人の気配が急速に接近した。振り返る暇もなく、背中に固い何かを押当てられて、戦慄する。

肋骨のあたりに突きつけられた銃口を通じて、撃鉄を起こす音が伝わってきた。

「振り返るなよ」

聞いたことのある声が、すぐ後ろから聞こえた。ほんの少しだけ、言葉を交わした昼間とはまったく雰囲気が違う。

「時間がないから手短に聞けよ。罪悪感はある？」

\*\*\*\*\*

レアリス・カンパニーの社名は、レアリスム 現実主義に由来する。グランドクロス に伴う狂獣の発生に世界中が混乱している中で、社長であるドーン・リアスが改名を発表したのだ。

獣が暴れ出した理由は、絶対に解明する。悲嘆にくれる暇などない。人類が生き延びる手段を考えて、尽力する。我々は現実を見据える。必要とされるものをひとつでも多く、開発してみせる。と。そう宣言して事業の幅を広げると同時に、もともと持っていた社名を、変えたのだ。

その会社が、組織ぐるみで『嘘』を生み出していたのなら、現実とはなんだ。

「あつたかいうちに食べた方が、美味しいよ」  
セイと共にやってきた若者の、気遣いの声に返事をする気力もわかない。リリイはただ黙って、ソファに座り込んでいた。

目の前のテーブルには、簡素な食事が並べられている。大きな平皿に載せられたパン。小さな深皿に注がれたスープ。その全てに、手をつける気にもなれない。

部屋はあれから移動していない。出て行ってしまったセイや、テッドが戻ってくる気配もない。いつのまにか日は暮れていたが、部屋に残った先ほどの若者が、電灯をつけたため、視覚には不自由がなかった。

この若者がひとり部屋に残ったのは、監視のためだろう。そう考えると、彼もカンパニーの社員なのだろうが、雰囲気はむしろ学生に近かった。年齢は二十歳ほどだろう。だが、ラフに立てた短髪や、動きやすさを重視した服装などからは、社会人の威厳などといったものが感じられない。ポケットがやたらと多い古着のジャケットなどは、その最たる例だった。

「食欲がないなら、飲み物をもらってこようか。紅茶とコーヒーだったらどっち派かな」

何も言わないリリイに向けて、若者は友好的に提案をしてきた。話しながら立ち位置を変えて、ほんの少しだけこちらに近づいてくる。

どちらと言えば小柄な男だが、体つきはしっかりとしていた。セイやテッドなどより、ずっと隙のない歩き方をする。

「……構わないで」

なんとか、それだけを告げると、若者は嘆息をした。

「そんなに思い詰めなくても、大丈夫だよ。テッドさんのやり口は確かに悪質だったし、それは申し訳ないと思う。会社から慰謝料なんかを支払われた所で、君が立ち直れるわけじゃないとは分かっているけど、でも、セイさんはいい人だから。これから不当な要求をしたりはしないと思う。あの人の言うことは信じられるよ」

「……これから？」

返事をしたというつもりではなかったが、聞き逃せなかった単語を思わず反復していた。

「『これまで』が嘘だったのに、『これから』なんてあるのかな」

若者が、言葉を失ってこちらを見ていることは意識していた。だが、会話が成立するような配慮など、考えていられなかった。

「何を信じればいいの……今さら」

つぶやくことにも疲れていて、そこで続く言葉を見失った。

電子音が部屋に響いた。若者が、機敏な動作で懐の通信機を取り出した。

「はいこちらエルクです。セイさん？」

無造作に電話をとった後に、発信者を意識して彼は口調を改めた。上司から、次の仕事の指示といった所だろう。

「……え？」

若者 エルクとか言ったか の声が転調した。

これまでの気楽な態度から一変して、深刻な驚愕の声。

リイは顔をあげた。エルクはこちらに取り繕うだけの余裕もないらしく、そのまま、会話を続けた。徐々に、声を荒げて。

「小火あ？」

不穏な単語。

さすがに、リイは目を見開いた。

「入り口の植木が……って。火種は？ ってそんなことどうでもい

い、消火できたんっすか？ 僕らは？ 彼女を連れて逃げるべきですか？」

畳みかけるように疑問符を並べるエルクの口上は、そこで一旦止まった。たぶん受話器の向こうでセイが、落ち着け、とても言ったのだろう。

「……はい。分かりました。はい。じゃあ、そっちは任せます」

会話を終えて、エルクは電話を切った。リリイの方を振り返って、やけくそのように笑ってみせる。

「入り口でちよつと小火騒ぎが起きたみたい……」

「……！」

「あ、いやでも大丈夫。そんなに大規模じゃないみたいだし、セイさんが向かったからすぐに始末できるよ。ここまで火の手が延びることはまずない。むしろ待機してた方が」

その瞬間。

聴覚をつんざくような高い音が重なって、建物全体を震わせた。

反射的に、耳をふさぐ。閉ざされた密室の中から聞いてなお、頭の芯に響くような音だった。食器棚をまるごと勢いよく倒せば、こんな音になるだろうか。

「なんだ？」

エルクの動揺をかき消すように、もう一度、同じような音が床を伝う。

リリイは思わず片目をすがめていた。ガラスが割れたような音だ。それも、とても派手に。

こちらが耳をふさいでいるのに対して、エルクはむしろ耳を澄ませていた。

「小火騒ぎに便乗した事件かなんかかな……でも方角が逆だ」

密室の中で、全ての事象の方角に見当をつけたらしい。ひとりで眩きながら、眉根を寄せる。

「ちよつと待つてて」

そのまま、小走りに、部屋の入り口の扉を開ける。

扉の隙間から見える廊下の景色を見て、リリイは驚いた。見たことがある。

天井に開けた大きな窓。空洞を囲うような、吹き抜けの廊下……。小火。

異常事態。

帰ってこないセイ。

理解でなく直感だった。

リリイはパンを載せた皿を握り、外の騒ぎに気を取られて、啞然としているエルクに背後から肉薄する。

彼がこちらの動きに気づくのは、想定していたよりずっと早かった。だが、ぎりぎりでこちらが勝る。

「！」

エルクの後頭部に、皿の角を思い切り振りおろした。

鈍い手応えと共に、彼の身体がくずおれる。そのままリリイは、開かれた扉から廊下に躍り出た。

(学校……！)

やはり、間違いない。

部屋から逃げ出して身を投じた廊下は、一階から吹き抜けになった縦長の建築物の、かなり高所にあった。ここから見下ろせる各階の床は、コの字型、あるいはコの字型をとって、壁に張り付いているように見える。部屋はきつと、外側に配置されている。

ところどころに橋のような渡り廊下や階段を貫きながら、ひたすら下に積み重なっていて、最下層には一階の床が広がっている。毎日見ていた、だが、いつもはほとんど下から見上げていた建物。

(ここは、学校だったんだ)

リリイを拉致した、彼ら組織がレアリス・カンパニーであるのなら、十分に自然な展開だった。天窓が夜に染まっていることもあり、普段リリイが通う昼間とは大きく雰囲気違ったが、それでも、よ

く知っている。

きつと、ここは八階だ。リリイは一瞬でそこまでを判断したが、次の行動は戸惑った。八階のスタッフルームは、生徒は原則として立ち入り禁止だった。普段使うような階段は繋がっていない。昇降機を使わなくては出入りができなくて、それには暗証番号が必要である。

(出られない……?)

非常階段はどこだろう。来たこともないフロアの構造を必死に考えるが、分かるはずもない。

昇降機の近くにも行けば、来客向けにフロアガイドのひとつもあるはずだ。やぶれかぶれにそんなことを思いながら、リリイは再び走り出した。

走りながら、吹き抜けになっている部分から、下の階を見下ろす。いざとなれば一階分くらい飛び降りる覚悟だったが、さすがにそのあたりは建築技師の腕か、軽々しくジャンプができるような構造にはなっていない。渡り廊下や階段には不用意な落下を防ぐために、透明な高い壁が設えられている。配置も厳密に計算され、飛び降りようという気を起こさせるような手ごころな間隔は存在していなかった。

そのまま目線を動かし続けて、一番下の階の様子も見た。一階の受付はまだ明るい。制服を着た事務員が、まだ仕事で残っていた。小火騒ぎや、さきほどの騒音に驚いてか、何人かで固まってきよるきよるとしている。

事情を知っているようには、見えない。

(あの人たちに向けて叫んで、助けてもらえばいい)  
誘拐されて閉じこめられていたのだ。他人にすがって悪い状況ではない。

(でも……)

判断に迷う自分が齒がゆくて、奥歯を噛んだ。

不快な男の不快な声が、胸に蘇るのを抑えられない。

教員や

事務員を抱き込むのも簡単さ。ガードのシステムをスポンサードしているのが俺たちなんだから、学校のすべてはレアリス・カンパニーの手のひらの上だ。

(ジャンやリックですら私を売るのに、誰が助けてくれるんだろう) エミリやシモンすら味方とは限らない。レイバもまた、関係者であるようなことを言われていた。

何も知らないのはリイだけだ。見知った学校の中にいて、世界中にあざ笑われているような気分だった。

(なにを信じればいい)

父に家庭を見放され、ひとりで生きてきた。父に会うために、父に負けないくらいに強くなりたかった。

そんな出発点すらも嘘ならば。己を励ましてきたあのメールが、くだらない男のくだらない趣味で生み出された、虚構だと言うのなら。

(ここで過ごした私の今までは、なんだったの)

階段は、昇降機のすぐそばにあった。そのまま、一気に駆け降りる。リイが普段生徒として利用している五階までのエリアには、昇降機のそばに階段はなかった。これは非常階段ではなく、教員フロアとスタッフルームだけを結ぶ連絡通路なのだろう。歯噛みする。

一気に二階分を駆け降りて、六階にたどり着いた。今は試験の採点期間なので、教員専用のこのフロアにはかなりの人が残っていると思ったが、奇妙なほどに人気がなかった。職員室も、上位教員にあつらえられた個室のひとつひとつも、すべて明かりが消えている。今の正確な時刻は分からないが、教員が締め出される時間にはまだ早いように見えた。何らかの圧力で、強制的に追い出されたのか……?

確信のない推理が不安を広げるのを意識しながら、リイは息をあげつつも、下へ続く階段を再び探そうと決意した。だが、すぐに異変に気付いた。

「え……？」

床に、ガラスの破片が大量に散らばっていた。顔を上げると、冷たい空気が外から流れ込んでいた。吹き抜けの内側に設置されている昇降機の反対方向、つまり建物の壁側を改めて見る。

教室はもう少し奥にあり、そこまでの廊下には窓が開けている。こちら側はグラウンドとは反対で、街の景色や、外壁のきわに植えられた木が、近くで望める場所だった。その窓ガラスが、外側から粉々にされていた。

破片は、吹き飛ばされでもしたかのように、内側に流れている。単に外から叩き割られたにしては、破片の一つ一つの粒が小さく、砂利のように見えた。その破片にまぎれて、緑色の物体が大量に転がっていた。……木の葉だ。外に植えられた木の葉っぱが、一枚一枚バラバラに飛んできたように、散らばっていた。

わけがわからないが、無惨な光景だった。試験の日程を掲げて、廊下に放置されていたキャスター付きのホワイトボードは、ガラスまみれになって床に倒れてしまっている。

(さっきの物音……？)

日頃から鍛錬のために、戦闘用の特製ブーツを履くようにしていたから、ガラスまみれのこの床とて、歩けないことはない。だが、驚愕は確かにリリースの足取りを止めた。

それが、油断を生んだ。

「お願い、逃げないで。リリースさん」

後ろから声を掛けられて、肩を跳ねさせる。

振り返ると、階段の踊り場にエルクがいた。左手で、痛そうに頭を押さえてはいるが、それだけだった。脳震盪くらいは起こしてきていると思っていた。とっさに身をねじって、衝撃を逃していたのか？

「頼むよ。さっきの部屋に戻ってくれないか」

さきほどまでは丸腰だったエルクだが、今度は右手に警棒を持つ

ていた。なにげなくそれを構えながら、重心をひとつも乱していない。先ほどから気になっていたが、彼は歩き方ひとつ取っても隙がなく、訓練された強靱さを感じられた。きつと、手にした警棒もこけおどしではない。

リリイは警戒して、後退した。ガラスの破片を踏みつづす、嫌な感触が靴底を鳴らす。

だが背中はずぐに行き止まりを探し当てる。吹き抜けの構造を採用しているこの学校は、基本的に通路が狭い。背後の昇降機に邪魔をされて、これ以上は動けそうにない。

「君みたいなかわいい女の子を、武器を持って、数人がかりで追いつめるのは、好きじゃないんだよ。大人しくしてくれれば、悪いようにはしないから」

数人がかり。

リリイが立つ場所から、左右に延びる廊下の両端から、ひとりずつ気配をとらえる。ちらりと確認すると、二人ともが警備員だった。エルクが呼んだのだろう。

いつも学校を警護してくれている、見慣れた制服。ひとりひとり顔を覚えているわけではないが、見かけたらいつも挨拶をしていた。それが今は敵として、リリイの行く手を阻んでいる。

もう、現実に対する絶望は通り越した。苛立ちが湧き上がる。

正面の階段にはエルク。左右には警備員。背後は閉ざされた昇降機と、吹き抜けになっている口の字の空洞。昇降機の近くから後方に向けて、かろうじて、細い渡り廊下が伸びている。リリイの立つ位置から、右後ろに駆け込めばすぐだ。逃げるとしたらそこしかないが。

（挟み撃ちに遭う）

即座に両側に回り込める狭いフロアで、細い道に逃げるのは自殺行為だ。分かっている飛び込むことは身体が拒んだ。なにより、こちらには武器がない。

「リリイさん」

エルクが通告するように言う。ここまで走って追って来ただろうに、たいして疲れた様子もなかった。

唇を噛んだ。

そして。

室内で突風が起こる、という現象を、リリイは生まれて初めての目の当たりにした。

轟音が耳をかけ、目の前の光景が吹き飛ばされて蹂躪される。生半可な威力ではない。嵐の日に傘を壊したあの感触を呼び起こすような風の奔流が、衝撃波となって背後から前方へと駆け抜けた。

「つぁ……!?!?」

三人の男たちは、立ち続けることすら出来ずに、風に圧されてフランスを崩す。手のひらからこぼれたエルクの警棒が、勢いよく飛んで壁にぶつかった。床に散らばっていたガラスが、つぶてとなって踊り狂う。警備員が顔面を押さえて叫んでいた。

「え……」

リリイ自身は、背後の昇降機が風避けになってくれたため、まったくの無傷であった。だが、事態についていけるわけでもなく、立ち尽くしてしまう。そして。

呆然としていた右腕を、横から強引に掴まれた。

ぐいと、身体を引かれて、渡り廊下の方角へ転がり込んだ。目が合う。深い碧の美しい瞳。

残り風が、彼の細い銀髪をなぶるように暴れていた。その隙間から見える耳たぶに、銀色のピアス。

ステイア・アリビート。

この場で出会うには、あまりに似つかわしくない虚弱な人間を目の前にして、リリイは言葉を失った。

風が収まるよりも、敵が動き出すよりも、混乱から我に返ることすらよりも先に、リリイには、理解したことがあった。

ステイアの呼吸が乱れている。

銀髪を残り風に揺らしながら、まっすぐにエルクらの方角を見つめながら、リリイの腕を掴みながら　彼は、すでに疲れていた。不規則な口呼吸では喉も渇くだろうに、そうせずにはいられないとでもいうように、苦しげに肩を揺らしている。

声をかけようと口を開くより早く、彼の左手の握力が強まった。

小声で、ささやくのが聞こえた。

「逃げるよ」

「え？」

「俺、喧嘩できないから」

彼が口調を強めたのとほぼ同時に、カランと固い音が聞こえた。エルクが警棒を拾い上げたらしい。

ガラスの破片がかなり舞ったはずだが、とつさに顔をかばったのだろう。手にこそ傷が残っていたが、もともとジャケットを着込んでいたこともあって、四肢にはまったくダメージがなさそうだ。

友好的であり続けたエルクの眼が、きゅっと細められる。ステイアはリリイの腕を引いて走り出した。敵に思い切り背を向けて、後方へ。

「きゃっ……！」

バランスを崩したことを嘆くだけの暇もなかった。エルクが命令を下す声が聞こえたのと同時に、二人の警備員が追いかけてくる。

ステイアの手はすぐに離れたので、リリイは自力で走り出した。不意打ちでに足止めを食らわせたので、挟み撃ちに合うまでに渡りきることは、問題がなさそうだ。しかし、さすがに男の警備員二名から、いつまでも逃げ続けられると信じられるほど、楽観的には

なれない。

走りながら、自分の前をゆく少年を見る。

さきほどは気づかなかったが、スティアは背中に荷物を抱えていた。どこかで見たような気がする、古いリュックサックだ。彼の華奢な背中を覆いつくす程度の大きさはある上に、中身も詰まっついでずっしりと重そうだった。

それを差し引いた結果か、もとの体力のなさかは判断しかねたが、スティアの走る速度は、状況と照らし合わせると、間が抜けていると思えるほど、遅い。渡り廊下の終点につく頃には、後から走り出したリリィは追いつき掛けていた。そのタイミングで。

彼は素早く身をひるがえし、振り返る。

「後ろに隠れて！」

短く言って、注意はそれで終わりだとしても言うように、こちらを通り越した廊下の向こう側を睨んだ。廊下の直線を走って迫りくる警備員ふたり、そしてエルク。

リリィが廊下を渡りきって、追いつき形で通路に避難すると、スティアは右手を前に突き出した。長袖のジャケットの袖口の下に、昨日と変わらぬ白い手袋。

その中指の付け根のあたりで、手袋ごしに、緑色の光のようなものが見えた気がした。そして。

指先に従属するように、風が巻き起こる。

「!?!」

それはとても、現実離れた光景だった。

渡り廊下の床が軋むような音を立てた。空気の塊が、何もかもを薙ぎ払う。

人間だって例外ではなかった。走行の慣性を打ち消された警備員はバランスを見失い、吹き飛ばされる。人の身体がぼろくずのように重力に見放される様を、リリィは初めて見た。

渡り廊下の壁が高かったおかげで、突風の被害は他の場所にまでは広がっていない。ドミノ倒しのようにくずおれる警備員たちを確

認すると、ステイアは振り向きざまに小声でささやいた。

「とりあえず、話そう。どっか」

そこまで言つて、むせるように軽くせき込んだ。苦しげに呼吸を乱して、それでもなんとか顔を上げた。

「非常階段から降りれば、適当な教室に隠れられる」

警備員たちが起きあがれずにいる隙をついて、ステイアは走り出した。リリイを伴つて、目の前に迫っていた非常階段へ。

五階に降りてからもまた人影はなく、廊下以外の明かりがすべて消えていた。この階からは、渡り廊下がない代わりに、小さな踊り場とでも言うべき、ベンチが置かれたロビーがある。吹き抜けになつていた空洞の隅に、床が敷かれているのだ。四階、三階、二階にも同じようなスペースがあり、その全ての床の位置がスライドするようにずれていて、階段で繋がれている。つまりはここから一気に、一階に降りることができる。

リリイは必死にどうするべきか考えたが、ステイアはまったく迷わず、ロビーの方向に右手を突き出していた。そのまま風を放つと、ベンチや掲示板が、派手な音をたてながら吹き飛ばされ、形を崩す。その行動を非難するだけの時間もなかった。流れるような動作で、ステイアは、前に突き出していた右手を顔の方に畳んだ。

手の甲を、額にかざす。

場違いな比喻ではあるが、検温のような仕草だった。

彼はすぐに手を離して、確認をするように右手の甲を見つめた。

中指の付け根のあたりが、赤く光っている。

さきほど、緑色の光が見えた箇所と同じ。

確認したばかりの右手を上方に突き出した。その瞬間、ロビーを照らす電灯の光が、突然にショートして、消えた。

「……！」

ステイアの右手が電灯の方角をまっすぐに指さしているのは、偶然とは思えなかった。

フロアの照明が不安定になり、明暗が混乱するのに乗じてステイ

アはリリーの手を引いた。吹き抜けから見上げることができる、五階の渡り廊下の位置を意識しつつ、死角になる箇所を走る。そして、適当な教室の扉を開け、内部に滑り込んだ。

明かりの消えた夜の教室だが、窓の外はグラウンドを照らす巨大照明に面していた。おかげで、視覚に不自由しない程度には明るいとはいえ、空気の静けさは、夜そのものだ。尋問も破壊跡も追跡も、謎の突風もない、リリーは弾んだ息を、意識して整えた。かなりの距離を走ったが、奇跡的に怪我はなかった。呼吸を少し整えれば、まだ走り続けられるだけの体力はある。

だが、案内人の方は、そももいかならしい。

教室に入っつてすぐに、糸でも切れたようにステイアは膝をついた。リリーは彼の苦しい呼吸の音を聞いて、少し慌てた。

「だ、大丈夫……？」

状況は掴めなかったが、とりあえずは駆け寄った。体を起こすのを手伝おうと背中に触れて、その手を止めてしまふ。分かっていたはずだが、想像以上に細い。まるで骨格標本のようだった。

気を取り直して、右側に回って肩を支えようとした。だが、腕に触っつてすぐに、違和感を覚えた。想定外の感触が、指先に伝わってきたのだ。

（え……？）

冷たい。

体温が低いから、という言葉で説明がつくようなレベルではない。激しい運動に火照った身体の中で、右腕だけがひんやりと固い。

疑問を口にするより早く、ステイアがゆっくりとその右手を動かして、床に突いた。自立して半身を起こすために、身体を支える支点にする。

「ちよつと……疲れた」

苦しげに顔をしかめ、腹のあたりを押さえていたが、すぐに強がるように苦笑した。

「五階分も階段登ったの、久しぶりだし……なんかもう、脇腹が痛い……」

リリイは思わず言葉を失った。その弱音の原因は、運動不足以外のなんでもない。

訓練が日常になっていた己の生活において、そういった疲労だけで動けなくなるという概念は、懐かしいものだった。彼がろくに体力も戻っていない病人であるのなら、当然の反応なのだろうが……。

(いや)

体力の戻っていない病人。

昨日紹介されたばかりの肩書きを、もはやそのまま信じることは出来なかった。今ここで会話をしている現状や、先ほどから暴れている正体不明の風、体温のない右腕など、疑念の一つ一つが、リリイの心にささくれを作ってゆく。

そもそも、何故ここにいるのだ。誘拐されたことを聞きつけたにしても、あまりにも早すぎる。レアリス・カンパニーの内部でさえ統率が取れていない状況で、外側に向けて声明を届けたとも考えにくい。

そう思うと、自然と眼差しが険しくなっていた。

スティアも、こちらの疑念は承知していたのだろう。少しずつ息を整えながら、背負っていたリュックサックを下ろした。ずっしりと、固く重い何かが床に横たわる。

荒い吐息の隙間から、言葉が滑り出した。

「まず、無事でよかった」

「……………」

「正直、君が内部で騒ぎを起こしてくれて、助かったよ。裏口の警備が、だいぶ薄くなってる」

その言葉をすぐに切り上げると、スティアはまっすぐにこちらを見つめてくる。

「いろいろ、聞きたいことがあるよね。こつちも、どつから話せばいいのちよつと混乱してる。とりあえずは……」

「……あなたは」

リリイは不審を隠さずに、ステイアの瞳を見つめ返した。

「あなたは、なんなの……？」

我ながら、あまりにも漠然とした聞き方だ。

だが、他に言葉が見当たらない。

こちらの物言いに、ステイアは、ほんの少しの間だけ言葉を失っていたが、すぐに、唇を開いた。

「昨日、俺の身の上話を語ったのを覚えてる？ 家族で旅してたら狂獣に襲われたとか、それからずっと入院してたとか、アパートに住んでたけど金がなくなったとか」

「うん」

「ごめん。あれ全部、嘘」

あっさりとそう言い放つ彼の表情には、罪悪感がどこにも見えない。

リリイは、血の気が引くのを自覚していた。

かわいそうなりリイ。

何も知らないのに、与えられるものを信じていて、そしてそれを疑うことすらも知らない。そんな所が、可愛いんだけどな。

「君を巻き込むつもりはなかったし、必要な検査やテストが終わったら、すぐに家を出ていくつもりだったから、その場しのぎだった。話すと長くなるけど……」

ステイアが続けた説明のすべてが、耳から入ってすぐに抜けてゆく。テッドの言葉が頭の中でぐるぐると回る。不快だった。寒気がした。耐えられなかった。それは今のリリイにとって、逆鱗だった。

リリイは、ステイアの身体を横から支えていた手を、一気に離す。拒絶するように、振り払うように、距離をとる。

ステイアが驚いているのは、気配で分かる。だが、彼の顔を見た

くなくて、リリイは床を睨んでいた。

「ふざけないで……」

レイバ・グリーニツシュとステイア・アリビートに関わるな。そうだ。

思えば発端はこの男だった。よき学友だったジャンヤリックの態度が変わったのも、ずっとメールを続けていた父が手のひらを返して正体を現したのも。

全ては、嘘の経歴をひっさげて、自宅に転がり込んできたこの男の登場が始まりだった。日常が壊れたきっかけは、この男だ。リリイの周りを囲ってしまった欺瞞の一端を、この男が持っていた。

「あなたも、どうせあのお守りを狙って私に近づいてきたんでしょ……だから嘘ばかりついて、私の周りは、全部、あなたも……あいつらも……！」

叫びながら、声が震える。それが憤怒によるものか、あるいは悲哀によるものなのかは、分からない。真実がないのだ。なにも、分かるものか。

「本当のことを教えてくれないなら、近寄らないで。都合のいいことばかり言って、機嫌をとろうとしないで……！ もつなを信じればいいのか、分からないよ！」

必死に叫んだ。叫びながら、自分が何を言っているのかが、分からなくなっていく。感情の塊が、喉につかえるようで、怖い。だけど、どうしても止めることができない。

そして、沈黙。

言葉が途切れた。続きも、返事も無い。

ゆっくりと、様子を盗み見るように、視線をあげる。

ステイアは何も言わずに、こちらを見ていた。

その眼差しが冷たかったことに驚いたのは、なぜだが　自分でよく分からなかった。

ジャンヤリックのように目をそらすでもない。テッドのように不気味な愛情を覗かせるでもない。セイやエルクのように哀れみすら

しない。

ただ、冷淡な瞳で、まっすぐにこちらを見ていた。

「……あんたさ」

ずっと優しくかったその口調が、鋭くなったように聞こえたのは、気のせいではないだろう。

「俺に、何を言ってほしいの」

質問をされて、リリイは言葉を失った。

「助けてあげるから、全部正直に話して君に希望を与えてあげるから、俺を信じてください。……とでも言えば納得してくれるの？」

続けながら、ステイアは初めから答えなど期待していないとでも言うように ゆっくりとため息をついて、そっところから目をそらした。

「悪い奴にさらわれた可哀想な自分のために、これからどうすればいいかを一から十まで教えてくれる救世主が現れてくれるとでも思ってたなら、期待に答えられないし、答えるつもりもない」

それが、予想外の切り返しであったことは確かだったが、見当違いだと否定するには、あまりにも強く心に響いた。

リリイは何も考えられないままで、ステイアの顔を呆然と見つめた。

「真実つてのが、上から勝手に降ってくると思ってるんなら、俺はあんたの力になれない。自分を守りたいって、言ってただろ」

口調はあくまで淡々としていた。

「自分を守るってことは、意識をしつかり持つってことだと思ってる。だって仮に、俺が今ここで、信じてなんて言った所でどうせ怒るでしょ。俺がなにかを主張したって、あんたが信じられなければ、あんたにとって真実じゃないし、それは俺が決められることじゃない」

小さく、ため息を落とした。

「現状だって同じだよ。社会に情報を与えるのは、実質的にレアリス・カンパニーだ。あんたも、ガードを目指してる時点でそんなこ

とは分かってたでしょ。狂獣と森に閉ざされて、情報を統制されるこんな社会に、嘘がどこにもないなんて、本気で信じてたわけじゃないよね。誰かが恣意的に偏らせた情報を消費して、すべてが回転してるんだ。欺瞞に気づかないか、あるいは気づいても気づかぬふりができる人間だけが、無知という代価で、安全を買ってるんだよ。この世界は、閉ざされてる」

それは、リリイ自身も知っていたはずの言葉だ。

この世界は、閉ざされている。打破してしまいたいと心より願った。ずっと願っていた。

息苦しいと叫ぶだけで、閉ざされているという現実の本当の意味を、考えたことなどなかった。

こういうことだと、理解して、納得できるほどに、賢くはなかった。

「嘆くなら、考えなきゃ。マニュアル通りに生きれば正しい答えが拾えると思ってるなら、平和ボケだよ。全てを疑って生きるのが苦しいなら、道は自分で選ぶんだよ。自分以外の人間には、選べない」彼の言葉を聞いていると、何かを思い出す。

そうだ。父だ。テッドではない。実際に会った、最後に聞いた父の言葉。

この街、どう思う。シールドに閉ざされて、電波以外の情報を遮断されて、空しか見えない安全地帯。どう思う？

「起きてしまったことを、悔やみ続けてもしょうがない。これからどうするかが肝要なんだ。違う？」

ステイアの声と父の声は、似ても似つかない。おぼろげな記憶と比較しても、それは明らかだった。

だけど、思い出す。父は、世界にはびこる狂獣さえ、グラウンドクロス でさえ、シエルター でさえ、障害としなかった。

障害を越えるには、どうするべきか、それを考えていたからだ。いつだって前を向いていた。

リリイも、前を向こうとした。そして、すべてを間違えた。頼み

にした情報のすべてが、嘘だったからだ。

だが、それで、終わりなのか。

前だと思っていた方角が前でないならば、どうすればいいのか。「カンパニーの連中が、あんたに何を言ったのかは知らないけどさ。俺は、自分の言うことがすべて正しいなんて思えないし、無条件で信じてくれなんて言えないよ」

ステイアの声は、冷たいとすら思えるほど、淡々としている。

だが、漠然としていた不安が、絞り込まれてゆくのが分かった。分からないことが何であったか、それが、ほんの少しだけ見えた。

そしてそれが、胸の奥を傷つけた。

「ただ、あんたが協力してくれると頼もしいから、話せるだけのことを話したい。あとはあんたの裁量で、考えてくれればいい。何を信じるか、信じないか」

ステイアは言葉を切った。

息を整え、まっすぐに、こちらの目を見つめてくる。

「俺はあんたが、それができない人間だとは思ってない」

甘えるな。そういった意味の言葉だ。

優しさなんか、何も無い。

だから。

リリイは、自分の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちていたことに、しばらく気づかなかった。正面から、こちらを見ていたステイアの方が、ぎよっとする。それでようやく、自覚する。

慌てて、表情を隠すように手をあてて、瞳を拭いた。焦りと羞恥とで、顔面が一気に熱くなった。

「ご、ごめん」

謝って、顔をそらすか止まらなかった。緊張の糸が切れて、涙腺が緩みきってしまったようだ。怒りでも悲しみでもないのに、ぎゅっと心臓が収縮するような感覚があった。声が詰まる……

ステイアはしばらく、言葉を失ったままこちらを見ていたが、とめどなく濡れていくこちらの指先を見て、我に返ったのだらう。ポ

ケツトからハンカチを取り出して、掌に直接、押し付けてきた。

荷物の全てが取り上げられてしまったリリイには、遠慮する余裕がなかった。受け取って、顔を埋める。

言葉を発する余裕もなく、無言で泣いた。ぽつりと、ステイアの声が届いた。

「ごめんね」

リリイ自身が、今言ったものと同じ言葉だ。

なんとか、ハンカチの隙間から視線だけをあげる。

彼は気まずい風に口を閉ざしながらも、小さく微笑んでいた。どこか、寂しげに。

それが、昨日から今朝にかけて見てきたような、社交辞令の取り繕いではないことは、なんとなく分かった。

もちろん、証拠などはない。だけど。

そんな気が、した。

「言い過ぎた。っていうか、八つ当たりだったね。言い訳になんかならないけど、こっちもちょっと、慣れないこと色々やって、イライラしてた」

自嘲するように、苦笑する。

「レイバほどじゃないけど、ほんと、俺も物言いがうまくないっていうか、気が利かなくて嫌になる」

言葉を切って、明るい声を出した。

「俺が今、君にできることなんてほとんどないけどさ、ここから出たらレイバになんかご馳走でもおごってもらえばいいよ。この事件、半分くらいあいつのせいだし、もうなんか、盛大に金使わせてやるうぜ」

悪戯を思いついた子供のように。

こんな状況に似つかわしくないような気楽な笑みを、どこまでも、ふてぶてしく。

「レイバも俺も、君に嘘をついてたことには変わりないし、他にもそんな連中がいたのかもしれない。それを許すか許さないのかは君

が決めればいいけど、全ての嘘が悪意から生まれたわけじゃないよ。疑心暗鬼にならなくても、意外と平気だと思うよ。今は、一番悪趣味な嘘をついてた奴が、調子付いてるだけだ」

そこで言葉を切って、彼の声音が変わる。真摯に。

「そいつの思い通りにされるのが癪なら、一発殴るくらいは手伝うよ」

リリイはなんとか鼻をすすって、呼吸を整えた。

ハンカチから顔を離して、最後にもう一度だけ、ぐいと目をこする。

それで気を引き締めたつもりだったが、すぐに気付いて、狼狽した。借りたハンカチを、慌ててぎゅっと握りつぶした。

「ごめん」

反射的に、何度目か分からない謝罪を口にしていた。スティアがきよとんとする。

「鼻水、ついちゃった……」

ハンカチを握ったまま、押し殺した声でそう言うと、スティアはしばらく呆然として　すぐに吹き出した。屈託なく、笑う。

「何事かと思った」

「でも、ごめんね。洗って返すから、私を持つてるね」

「まあ、別になんでもいいけどさ。もう大丈夫？」

「……うん」

リリイは、顔をあげる。

涙が出て、弱音が出て、目が覚めた。

何かなんだか、事情や陰謀の全てが、理解できたわけではない。だが。

前だと思っていた方角が前でなかったならば、歩き出すより先に、できることは。

それは、顔を上げることだ。

スティアはほっとしたようだが、すぐに、その表情を引き締めた。「じゃあ、俺の具体的な目的を話すから、利害が一致するなら協力

して欲しい。君の身柄と、イエロー を取り戻して、ここから連れ出すことを頼まれたんだ」

「……誰に？」

聞きたいことは他にもあったが、リリイはその中から一つだけ、質問を選んだ。

「レイバに。正式に、依頼を受けてね」

言いながら、彼は下ろしたリュックサックを床に置いたまま押し出して、こちらの方に寄せた。

「あいつから報酬をもらって、君を助ける仕事を請けた。……で、ここからは俺から君に、頼みたいことなんだけど」

リリイとスティアの間に、ぴたりと寄り添うような位置に、リュックサックが置かれた。スティアはそれを、座り込んでいたこちらの膝に押し付けるように、さらに押す。受け取れということなのだろう。

リリイは戸惑ったが、とりあえずは持ち手を握る。ずっしりとしていて、座ったままの体勢で、持ち上げるのは無理だった。そのままファスナーを開いて、中身を覗き込んでみる。

絶句した。

「レイバから貰った報酬の半分を、君に払う」

拳銃が二丁、それを包むホルスターごと、押し込まれていた。

はつきりと見覚えがあるモデルだった。学校支給のリボルバー。皮製のレッグホルスター。

毎日見ている武器だった。今は、自室に置いてあるはずの……

「その金で、未来の ガード である、君を雇いたい」

リリイは、顔をあげた。

こちらを見つめるスティアの瞳は、真剣だった。

「ここから出るまで、俺を守ってほしい」

リリイは、呆然としてしまった。

頼みごとの意味がくみ取れずに、理解が追いつかなかったというの、ある。だが、それ以上に。

荷物の内側で、闇にくるまれた拳銃は、紛れもなく自分が所有している愛用の品だった。

ほんの先日、これらの装備で獣を殺した。殺傷のために作られた武器だ。

ステイアは、そんなこちらの反応などは見通していたようだった。皮肉に笑う。

「女の子一人片腕にかかえて、凱旋できるほど頑健に見える？」

問いかけの体でそう言つて、今度は苦笑いを浮かべた。

「てなわけで、申し訳ないけど頑張ってもらいたい。さつきも言ったように、俺は喧嘩ができないから、取っ組み合いになったら相手が誰でも、勝てる気がしない」

聞きたいのは、そんなことではない。そう訴えようと顔をあげるのと、ステイアは分かっているとも言いたげに、手で制した。

「ここから、このままこっそり脱出することが出来れば一番いいけど、もうずいぶん騒ぎになったし、そう甘くもいかないと思う。俺が侵入する前からすでに、出入り口の警備がすごいことになってた。私服の警備員だったけど、もしも候補生のバイトだったなら、大半が君の顔を知ってる。これ以上の騒ぎにならずにるのは、無理だ」

(……見張り)

そこにどれだけの級友が含まれるのかが気になったが、彼に問いただしても仕方がないことは分かっていた。吐きかけた息を、飲み込む。

ステイアは続けた。

「どうせ脱出できないなら、敵をいなしながら時間を稼いで、ついでに イエロー の奪還をする。レイバが救援を呼んでくれるまでの、耐久レースだね。そのためには君の力が必要なんだ。一緒に戦ってほしい」

君を助けに来た。

そのためには君の力が必要なんだ。

大いなる倒錯を意識しながら、リリイは声を押し殺して、言った。「私は、獣を殺すための戦い方しか知らないよ」

ガード の定義は、護る者。

金を積まれて、ボディ・ガードを依頼されたのならば、引き受けるのが筋であり、それを将来の目標にしていた。だけど。

「狂獣から人を守るための勉強はしてきたけど、人と人の喧嘩の手助けなんて、できない。だいたい、銃なんて持ち出したら、それはただの喧嘩なんかじゃ済まされないでしょう……？」

町中での銃器の使用は、法律で固く禁じられている。それだけじゃない。取り扱いには免許が必要で、銃弾を補充するにはまた別の資格が必要だった。

それは決して、無意味に定められた決まりではない。銃は、容易に人を傷つける。打ち所を選ぶだけで、他人の命を終わらせる。臆病者でも、人殺しが可能になる。

リリイは、射撃の腕には自信があった。すべての成績が偽りだったかもしれないとテッドに言われたばかりだが、これだけは関係ない。体感覚のひとつとして、絶対の実感がある。定められた的を撃ち抜くのに、必要なものが何だかを、もう知っている。狂獣を一撃で撃ち殺すことだって実際にやってのけた。決断さえすれば、可能なのだ。

人間相手に同じ武器を使って戦えと言われた所で、手加減など出さない。

銃撃は、格闘技とは違う。怪我の最小単位が、あまりにも大きい。たとえ相手を殺すにはいならずとも、後の生活には大なり小なりの

支障をきたすだろう。

どれだけ憎い敵だとしても、人を相手にこの武器を振りかざすことなんて、出来るわけがなかった。それはもはや、原始的な恐怖に近い。善悪の概念は、理屈を通り越して、生理的な感覚としてリリーの体に染み着いている。

(……この人は)

平気なのだろうか？ 問いかけを口にすることはできず、リリーはスティアの顔を見る。

殺人も辞さない喧嘩など、少なくともリリーは知らない。この大陸の中で、戦争なんて遠い歴史だった。共和国としての基盤が安定してから、ずっと長い時間、法律によって治安が保たれていた。

彼は、何なのだ。

「別に、人を撃つたりしなくていいよ」

スティアは当たり前だろうとでも言わないばかりに、両手を広げてみせる。

リリーが顔をあげると、安心させるようにだろうか。彼は苦笑した。

「むしろ間違つて誰かを殺されたら困る。俺も殺人犯にはなりたくない。ただ、銃を持つことは、有効なハツタリになる。向こうにしてみれば、君がキレてることに疑いはないんだし」

「……………」

表情や声から嘘は見えないが、それはこの男のことなので、どうだか知れない。なにより、リュックの中には、ご丁寧に弾薬まで入っていた。どこから仕入れたのかは知らないが、普通に暮らして得られるものではない。

こちらの疑念に気づいていないわけではないのだろうが、スティアは淡々と続けた。

「君には、俺のことを守ってほしいんだ。俺はマニュアル的な戦い方を知らない。だけど、敵をビックリさせるだけの特技は、搭載してある」

奇妙な言い回しだった。

だが、それに疑問を投げる暇も与えてくれずに、彼は、右手の甲をこちらに見せつけるように、差し出してきた。

白い手袋がはめられていることは変わらない。ジャケットの袖口と、その手袋が重なっていて、肌は一切見えない。そして。

手の甲の、中指の付け根。

その一点が、手袋ごしに、澄んだグリーンの光を淡く放っていた。親指の先ほどの大きさの、緑色の宝石でも張り付けたようだった。薄暗い部屋の中で、焼き付くような存在感があった。

「ここが緑に光ってる時は、風が出る」

唐突なことを言った。

彼は、差し出したばかりの手をひっこめて、今度は光っている場所を額にかざした。先ほども見せた、検温のような動作だ。そのまま精神集中でもするかのように、目を閉じる。

ゆっくりと目を開いて、手をもとの位置に戻した。すると

緑だった光が、赤くなっていった。

燃えるように赤々とした、レッドの光。

「赤いときは、熱が出せる」

あっさりと言いつい放ちながら、スティアはもう一度手を額に翳し、目を閉じた。同じプロセスを経て手を下ろした時には、もとのグリーンに戻っていた。

「他にもできることは色々あるけど、安定して使えるのはこれだけだから覚えておいて。でも色を変えるには、今みたいに手をデコに当てなきゃいけないから、隙ができる。違う色を好き放題に連発することは出来ないから、風を出してる時に、熱の追撃は期待しないで」

「……………」

うまい言葉が見つからなかった。

スティアもこちらの混乱には気づいていたのだろうが、笑ってこまかした。

「あとでちゃんと説明するから、今は最低限で勘弁してくれと助かる。あ、そうだ。緑色のものとか、赤いものとか発見したら、その時は俺に教えて。ある程度は自由にできるから。混色もできなくはないけど、疲れるし、この二色じゃオリーブ色っぽくなって使い勝手が悪いんだよな」

「……………」  
「発動範囲は、右腕が捕らえた空間だけ。なんでもかんでも好き放題にできるわけじゃない。ついでに言えば、あんまり使いすぎても体が衰弱する」

「……………えつと」

とりあえずは、すらすらと続いていく台詞を遮った。漠然とした問いを、漠然としたままで伝える。

「それは、何なの？」

風が出るとか、熱が出るとか。そもそもそれらの現象の源は、なんだ。

スティアは、そのあたりの説明を全てすっ飛ばしてきたことによく気づいたようだった。なにこともきっぱりと断言する彼にしては珍しく、少しだけ躊躇してから、渋々、といった口調で答えをくれる。

「……………魔法」

「え？」

「だから、魔法」

同じ言葉を反復した二言目には、強調というよりは、やけくそといった心地の感情が見受けられた。

リリイが追求を深めようとした。その時だった。  
チャイムが鳴った。

夜の学校全体に、授業の開始を意味する音が、重々しく響く。  
教室に取り付けられたスピーカーが、振動する。

『リリイ』

そのスピーカーから聞き覚えのある声が放送されたのは、チャイ

ムが止んですぐだった。

『まだこの建物の中にいるんだよな。どうせ出られないんだ。隠れないでくれると助かるなあ』

無機質な放送音声が、テッドの声を真似て、気色の悪い愛情を再現していく。

『ああ、俺がこんな放送をしてるのが不思議かな。セイが外に出てずいぶん経ったが、まだ手が離せないみたいだ。詳しい事情を知る社員はあと俺だけだし、おかげで一時的に指揮権が戻ったんだ』  
笑みを思わせる吐息が、マイクにかする音がした。

『せっかくのラッキーだ。俺はお前にまた会いたいよ。俺は放送室がある一階にいる。イエローも、持ってる』

イエロー。

執拗に繰り返されるその言葉が、例のお守りを指すことを察せないほどに鈍くはなかった。ぎりつ、と、奥歯に力がこもるのを感じた。

『お前はどこにいるんだ？ さっき騒ぎがあったのは六階だよな。』

……待ち合わせは中間を取って三階にしよう。三階のロビーで、待ってるよ』

ブツリ、と放送が遮断される。

無音に戻った空間で、リリイはたぎる怒りを止めることができずに、リュックサックの持ち手を握りつぶしていた。

「今のが、例の偽者？」

ステイアが冷静に聞いてくる。リリイは顔をあげた。

目があったその瞬間に、ステイアの表情が変わる。しまった、とでも言わないばかりに。冷静さを保てていないことをそれで自覚しながら、リリイは虚しくなった。どんなに騙されても、自分は嘘をつくことが出来ないのだ。

「……知ってたんだ」

ステイアは申し訳無さそうに、だがきっぱりと肯定した。

「ごめんね。メール関連の事情はだいたい分かる。詳しい経緯はあ

とで説明するよ」

リリイは頷くことも出来ずに、俯いてしまった。ここに助けに来ている時点で、彼が何の事情も知らないことを期待していたわけではないが、それでも他者の口から欺瞞を証明されるのは、心に重い。ステイアが、軽蔑のニュアンスを含んだ声で呟いた。

「あんな頭のおかしい放送を、全体に流し始めたってことは、もう事務員も追い出されたんだろうな。……それは逆に好都合か」

「私は」

リリイは、なんとか息を吐き出した。

頭の中を、たくさんの情報が回る。三年間続けたメール。数刻前に明かされた、真実。

ステイアが持つてきた荷物の中にある、拳銃。

昨日獣を殺したばかりの、自分の所有する、自分のための武器。

俺を守ってほしいと、ステイアは言った。

そのために渡されたこの銃は、それ以外の用途に使うことも可能なのだ。

引き金を引くのは自分であり、照準を定めるのも自分だ。

殺してしまいたい存在がすぐ近くにいる。

それを殺せるだけの力が、ここにある。

テッド・リオ。

「私は……」

彼が憎い。

また目の前にすれば、何をするか分からない。そんな自分が、怖い。

あいつなんか死んでしまえと、そう思う感情を止めることができない。

だけど、人を撃つことは 怖い。したくない。してはいけない。自分が何をしたいのかを、再び見失っていると、続けようとした言葉が心の中でバラバラになっていく。

すっかりしなければ、と、思えば思うほど、分からなくなる。

「リリイ」

ものすごく不意打ちで名前を呼ばれて、うつむきながら目を見開いた。

驚いた表情をそのままに、顔を上げる。

ステイアは、照れくさがるような気持ちを特に隠さないまま、苦笑いを浮かべていた。

まったく場違いな感情であるとは自覚しつつも、リリイはその造作を見つめながら、奇妙な懐かしさを感じていた。同級生の男子と喫茶店にでも入った時のように。日常の中で見えるべき、ごく普通の光景が見えた気がしたのだ。

この人はすごく綺麗な顔をしているけど、整っている顔立ちを、大げさに崩すような笑い方をする。

だからこそ、笑った時の方がいい顔だと、そう思った。

「……なんでもない。びつくりさせてみたかっただけ」

ステイアはそう言って、笑みを唇に残したまま、瞳をこちらに向けた。静かに。真剣に。

「大丈夫？」

リリイは、目を閉じた。

鼻から大きく息を吸い込んで、肺を満たして、ゆっくりと吐く。体の中身が循環するような感覚を意識する。

目を開いた。

「……うん」

深呼吸を終えて頷くと、ステイアは少しほっとしたようだった。

「さっきの話の続きは、実戦で覚えてほしい」

彼はそう言いながら、立ち上がる。この場に似つかわしくない薄っぺらな身体に、武器の一つも持っていない。手袋に包まれた右手の光だけが、異彩を放っている。

「俺に協力してくれる？」

リリイは、リュックサックから拳銃を取り出して、それを握った。自分の銃に触れて、これほど重く、ずしりとした感触を味わった。

のは、初めてだった。

決然と顔を上げて、頷く。そのままの動作で、ホルスターも引張りだして、装着した。太股に一丁、腰の後ろに一丁。銃弾を装填してから、いつものようにリボルバーを収納する。

他の装備は、履いていたブーツくらいしかない。滑り止めのグロームも、敵の攻撃を受け止める特殊な衣服も、髪を束ねるゴムすらない。戦いの装備としては、ひどく中途半端ではある。

不安は強かったが、いつまでもここにいるわけにはいかない事は分かっていた。

自暴自棄な気持ちで、準備を終えたりリイもまた立ち上がった。

扉を開けると、一続きに一望できるフロアのすべてが、明々とした電灯で照らされていた。

先ほどステイアが壊した照明は消えたままだったが、吹き抜けの構造のおかげで、それを差し引いても館内のすべてが不自由なく一望できるようになっていた。

計算通りだ、とステイアが満足そうにつぶやくのが聞こえた。照明を不安定にすれば、電気の供給が強化されるに違いないと踏んでいたらしい。薄暗い校舎で走り回することは、敵味方双方に利を生まない、と彼は断言した。

先ほどの派手なパフォーマンスのほぼ全ては、敵を混乱に招くための陽動であつたと言う。こうした実益も同時に計算しているあたり、油断ならない人間だとリリイは思った。

壁から身を乗り出して一階を見ると、たむろしていた事務員がいなくなっていた。これも、ステイアが言っていたとおりだ。その場から離れ、階段に向かう。

「へえ」

長い階段から、三階のロビーに近づくと、感嘆の声が、不快な歓迎をくれた。

指定した通りの場所で待っていたテッドは、降りてくるこちらにむけて、軽薄な笑みを浮かべてみせる。

「想像してたのちよつと違うな。君がステイア・アリビートか」  
ロビーとは言ったが、広さがあるわけではない。渡り廊下を、正方形に近くなるほどの幅に拡大しただけの床の上に、ベンチをつけた程度のスペースだ。五階から下の各階に同じように設えられたそれらは、今リリイが降りているような細い階段でつながれており、ロビーそのものでさらに巨大な階段を模すように、一階までスライドしていた。

空中に築かれていることもあり、階段以外の隅は、曇りガラスにも似た、透明で硬質な壁で囲われている。

テッドはそこに立っている。先ほどと変わらない、動きにくそうなスーツ姿。武器の類を持っている様子はない。少なくとも、見た目に分かるものは。

ひとりきりではあったが、伏兵がない道理もなかった。三階の構造も、これまでと変わらず口の字型の吹き抜けであり、階下に面している場所には壁がある。警備員やガードが隠れる場所など、いくらかでもあると言っただ。

思索しているうちに、階段を降りていた足が、三階のフロアを踏んでいた。止まって、リリイは顔をあげる。

テッドは、こちらを見ていなかった。リリイより少し後方から歩いている、スティアを見つめている。

「はじめまして」

友好的な調子で、挨拶を投げかける。

「俺が、今のリリイの父。テッド・リオさ」

「言ってるよ」

スティアは、三階に降りるより少し上の段で足を止めて、唾棄するように、そう言った。

テッドは肩をすくめる。

「年長者に向けてその態度とは、今の若いのは本当に礼儀を知らないんだな」

「いい年して、ままごと遊びに夢中な大人に、そんなこと言われてもね。……あんだ、俺のことも知ってるんだ」

「当然だろ。君は重要な参考人だ」

テッドは挑戦的に笑った。

「銀髪碧眼の兄妹なんて、接近にさえ気づけば、人を使って早急に見つけたすなんて容易なんだよ」

「そりゃそうだろうね。そうやって権力自慢をしてくれるわり、現場に通信機を落としたことに気づかなかつたり、ここまで侵入を許

すあたりが間抜けだけど」

「本気で言っているなら哀れだな。セイみたいな偽善者が、わざわざリリイを強引な手でさらった意味が分からないか？」

リリイは、目を見開いた。

テッドは自己陶醉するように笑っている。

「もちろん、早急に イエロー を回収する必要もあったのも本当さ。同時に、敵をおびき寄せる最適な手段でもあったのさ。君はここまで侵入はできただろう。だが、もうここから出られない」

ステイアは表情を変えない。

絶望的な言葉を突きつけられながら、まっすぐにテッドの目を見て、何も言わない。

「気づいていないわけではないだろう？ この学校はガードの養成施設であると同時に、狂獣対策の要塞であり、さらにカンパニーの秘密事務所でもある。内側も外側も、警備は万全さ。お前たちは袋の鼠なんだよ」

リリイは、これまでテッドと交わした会話や、ステイアが話した言葉を思い返す。

つまりリリイは、体のいい囷であり、人質にされていたのだ。こちらの動揺やテッドの愉悦をよそに、ステイアの表情は動かない。

平静は、声にも同じだった。

「なるほどね。彼女を利用して宝石を手に入れて、また彼女を利用して俺を捕まえて、で、利用し尽くした後に捨てるつもりだったんだね」

テッドは不愉快そうに鼻を広げて、やぶ睨みにステイアを見つめ返した。ステイアは、その眼差しにもまるで怯まなかった。

「レアリス・カンパニーなら、行方不明者のひとりやふたりを増やすことくらい簡単だろう。あつらえ向きにガードの候補生だ。あんたらなら、すべてを 狂獣 のせいに行けるもんな。いつもみたい」

まったく予想外の言葉を聞いて、リリイは硬直した。

「大昔、災害の混乱に乗じたドサクサで、反乱分子の粛正を行ったのは黎明期のエンパイアのメビウス帝だっけ？ 俺は歴史に詳しくないけど、今のレアリス・カンパニーがやってることなんて、全部そんなもんでしかないとは分かるよ。 グランド も セカンド も、人の手におえないって意味では、大陸史上最悪の”自然災害”だ。混乱を利用しながらきれいごとを並べて、何食わぬ顔で情報を遮断して、内部の不満をなんとか押しつぶして。外界と切り離された多くの人間は、情報収集能力において無力化されてる。今のあんたらは、どんな派手な悪事だつて隠蔽できる」

「聞いていた情報より、おしゃべりだな」

テッドは鋭く口を挟んだ。だがステイアは決然と無視をした。

「自然災害で発生した 狂獣 の驚異ですら、あんたらにしてみれば、チャンスのひとつでしかなかったんだろ。凶暴化した獣や活性化した森は、天然の牢番だ。 シェルター で安全を作るふりをして、町のひとつひとつを牢獄に仕立てあげる。飛び交う情報の全てを、保護するふりして制御する。そのまま正義ヅラで治安管理のポストに食い込んで、そのうち政権でも取るうってんだろ。あんたらが抱える、とっておきの秘密兵器サマがいる限り、どんな危険も予知できるもんな」

言葉を切つて、彼は息を吸った。

そして、驚くほど大きな声を出した。

「ガードも警備員も、そんな事情とは関係なく、鼻先の給料に釣られて働いているだけだろうしね！」

叫びのような声が、吹き抜けの校舎全体に反響する。

彼らしからぬ大声に、リリイは今までの台詞がテッドに向けられたものでないことに気づいた。

それは、リリイに向けられたものだった。あるいは、さきほどのように戦闘員としてどこかに配置されているであろう警備員に。帰りそびれたかもしれない事務員に。聞いているかもしれない、バイ

トのガード候補生に。

闇雲に動いていた全ての関係者に、スティアは現実を突きつけた。

「……本当に、おしゃべりだ」

テッドは怒りの色を隠そうとせず、低い声を出す。

「お前みたいなガキには分らない。大人って生物は汚いんだ。みんな、大なり小なり、そのくらいの覚悟は背負って生きてる。説教したって無駄だよ」

静かに、まっすぐにスティアを睨みながら、続ける。

「どんなに不透明だとしても、今の大陸は、俺たちカンパニーがいなくちゃ回転しないんだよ。カンパニーが世界を救っていることは、厳然たる事実だ」

「別にそれを否定するつもりはない。だけど」

元のような声量で、スティアはきっぱりと告げた。

「俺や彼女の人生を犠牲にすることが、世界の救いとやらにつながるほど大きな事業とも思えないね。抵抗して何が悪い」

「お前はともかく、リリイを犠牲にするなんてとんでもないな」

テッドは冷たくそう言い放ってから、視線をこちらに向けた。うつとりと。

「リリイには手厚い保護の措置を施しただけさ。いずれは正式にカンパニーの社員として働いてもらうことになる。本人がどんなに嫌がっていても、上がなんとか、時間をかけてそうするだろうさ」

「ふっ……」

ふざけないでと、反射的に叫びかけたが、スティアの声が重なってそれを制した。

「あんたらが彼女に執着する理由が、さっぱり分からない。イエ

ロー はもう盗んだんだろ」

「盗んだとは人聞きが悪いな。メールで頼んで、リリイに持ってきてもらっただけじゃないか」

涼しげに笑いながら、テッドはぬけぬけとそう言った。

「俺個人の感情は置いておいても、リリイはレイバ・グリーンニッシ

ユの唯一の縁者だからな。組織として、取引のカードとして、保護する理由は十分にあるだろう」

「保護じゃなくて拉致って言うんだよ。そういうの」

「そうかもな。でも、時間はかかるだろうが、リリイもずっとここにいればきつと納得するぜ。レアリス・カンパニーの一員になるってことが、どれほど生きやすいことが、身にしてみ分かるはずだ」

リリイは好き勝手言われながらも、ただその会話を聞いていることしかできなかった。

ステイアが、皮肉に笑った。

「もし、彼女がそれで納得をしたとしても、やっぱり意味がないと思うけどな」

「何？」

「あんたらはレイバの性格を知らないから、仮説がとんちんかんなんだよ」

まるで自嘲のような、空しさをはらんだ笑み。

「あいつは好奇心でしか動かない。親愛や友情、家族愛ですら関係ない。冷たいんじゃない、関係がないんだ。あいつがどんなに好意的に見ているものでも、あいつにとってはすべてが客体なんだよ。誰にだって平等に手を差し伸べるし、平等に見捨てる。親友だろうと恋人だろうと、血縁だろうと」

リリイはその言葉に衝撃を受けていた。あるいはテッド以上に。

八年前に聞いた言葉が、瞬間的に脳裏をよぎる。グランドクロスに恐怖する中で、レイバと話した最初の電話。父を見捨てるよくな、現実主義が過ぎた彼の発言。

的確だった。ステイアの言葉は、リリイが漠然と感じていながら、言葉にしかねていた部分を形にしていた。

当然といえば当然だが、テッドには理解ができなかったらしい。不服そうに唇を尖らせている。

「リリイに、人質としての価値はないって言ってるのか？」

「ああ」

「ならばなぜ、彼女を助けに来た」

「イエロー が必要だからだ」

「俺たちが混乱している隙について、現物だけ奪えばいい。人質を助けるリスクを負う意味がない」

「内部の様子を把握できないし、一人でいるよりは二人でいる方が心強いし、見捨てる理由もない」

ステイアは、ひとつひとつの質問に迷いなく断言を重ねる。

だがテッドの表情は晴れなかった。疑わしく思う気持ちを隠すことなく、やぶにらみの目つきを崩さない。

「本当にそれだけか？」

「……………」

「今のお前は、とても機嫌が悪そうに見えるけどな」

リリイは驚いて、思わずステイアに視線を投げる。

階段の三段ほど上からテッドを見下す彼の瞳や表情に、あからさまな怒りはない。

だが、静かだった。

昨日から今日にかけて、常にまもっていた穏やかな気配もろとも、全ての感情を沈めてしまったようだ。

そして。

指摘が、封印でも解いたかのように。

「…………その質問への答えの代わりだ。こっちからも問わせろよ」  
押し殺した怒りが、低くうなる。

美しい碧眼が、強く燃える。

「あんたはなんで、わざわざメールを使って『ガイル』を名乗ったんだ」

リリイは、目を見開いた。

ステイアに父の名前を教えた覚えはない。よしんばメールを見られたのだとしても、登録した名前は「父さん」でしかないはずだった。

レイバが話したただけにしては、名前を転がす調子が、ひどくステ

イアの声に馴染んでいた。まるで昔からの知り合いであるかのよう……。

テッドはしばらく黙って、やがてくつくつと笑った。

「そんなことを気にしていたのか」

顔を上げて、声を高らかに響かせる。

「あえて言うなら、お前が今言った全てのことが理由さ。レアリス・カンパニーが退屈だったんだ。この世界の仕組みや、俺の仕事が退屈だったんだよ」

愉悦が強まる。不気味なほどに深い皺が、唇に寄ってゆく。

「リレイ・ブルーノを保護して、穏便にカンパニーに所属させる？ そんなことができるわけがない。ガイル・ブルーノが死んだ時点で、彼女の不信を回復させることなんてできやしない。だけど組織は本気でそれができると信じて、あがいてる。……くだらない。冗談じゃない。そんなことをするなら、いつそのこと傷つけてしまった方がいいんだ。その方が、俺のかわいい娘はいい顔をしてくれるに決まってる」

自分で述べた高説を全否定しながら、その破壊の快感に酔っているようだ。

「閉塞感を打破したいのは、お前たちみたいなガキどもだけじゃないさ。ただ、俺はもう少し手軽な方法をとった。それを大人の世界ではストレス解消って言うんだよ。その手段として、ガイル・ブルーノを名乗るのはこれ以上なく有益だったんだぜ。あらゆる情報の中心にいながら、本人は死んでいて、その死を公表されていない。俺が計画したイタズラの隠れ蓑にするには、最高だったね」

「……イタズラ」

ステイアが低く反復する。テッドは雄弁に肯定した。

「ああ、そうだよ。父親のふりをして娘とメールを続けるのが趣味だった。リレイの無知さが可愛くて、それを思うままに操縦するのが、これ以上なく楽しかったんだ」

リレイは拳を作って、テッドを睨みすえた。彼はこちらの動きに

気づいて、スティアに向けていた目線をちらりと寄せる。微笑んでいた。気色悪いほど、愛情深く。

体に密着させた銃が、震える。それを意識した時だった。

スティアが、くるりと背を向けて、降りてきたばかりの階段を登っていた。一段、二段。

テッドも不意を突かれたのだろう。会話の応酬が止まる。スティアの歩調はのんびりとしていた。逃げ出そうとしているわけではない。

見上げねば目が合わなくなるほどの高さになって、ようやく身体ごと振り返った。平然とした表情だった。

スティアの右手首がわずかに動く。腕を身体の横に垂らしたままで、手のひらだけを後ろに向けている。

手の甲にある、緑色の光が小さく見えた。

「リリイ、左」

ちよいちよいと左手を動かして、そんなことを言う。リリイは意味が分からずにきょとんとしたが、ほとんど反射的に立ち位置をわずかに左にずらした。そして。

後ろに向けたスティアの右手が光って、突風が吹いた。

「!?!」

爆発的な風圧に飛び乗って、床を蹴ったスティアは常軌を逸した速度で飛んだ。立ち尽くすこちらの右上をいつ越えたのかも分からない速度で、テッドの方角に。

狙い変わらず胸板に、靴が激突した。鮮やかなフォームのドロップキック。テッドはまともに喰らって吹っ飛んだ。たたらを踏むこともできずに、仰向けに。

強力な風圧と、一階分にも近い重力を味方につけてしまえば、十キロや二十キロの体重差などに意味はなかった。同じく倒れ込んだスティアは、衝撃をテッドの体に押しつけるようにして体勢を整えた。そのまま、すぐに動けずにいるテッドの胸ぐらを掴みあげる。リリイはそこまで見届けてようやく、自分の身体が完全に停止し

ていた事に気づいた。しかし、自覚した後も、動けなかった。これでは「守って欲しい」も何もない。

体重や腕力で負ける相手に勝ちたいのなら、他のことを味方につけるしかないし、体力に自信がないのなら、先手を取るしかない。正しい判断である。正しい判断ではあるが。

それが「喧嘩ができない」ときっぱり宣言した人間の思考だとは、とうてい信じられなかった。

ステイアがテッドの胸ぐらを掴みあげたのは、怒りの衝動などではなかったらしい。そこを視点に、スーツの内ポケットに片手をつっこみ、隠し持っているものがないか調べている。まるきり追い剥ぎだった。迷いが無い。

倒れてうなだれたままのテッドの様子は、リリイからはよく見えない。最初の一撃で失神していたとしても驚くべきではない展開だった。いや

ステイアが服を調べるのに夢中になっている傍らで、テッドの拳が握られるのを、リリイは見た。

「！ ステイア！」

警告は間に合わなかった。テッドの拳が、横殴りにステイアの顔を突き飛ばした。

攻撃を受ければ見た目通りに脆かった。ステイアは、なにかの冗談のように軽々と殴り飛ばされる。なんとか左手を床につき、完全に転倒するのは避けたようだが、立ち上がることが出来ないまま、右手を頬と鼻の間に当てていた。かなり攻撃が響いたのだろう。

半身を起こしたテッドの視線が、ステイアの右手で止まる。緑色の不審な光を発見したのだろうか。

「……その、右手か！」

跳び蹴りのシヨックがまだ抜けきっていないと分かる、壮絶な声。「こいつの右腕を折れ！」

物騒な命令に戦慄する暇もない。

隠れていた警備員らしき気配が、フロア全体で複数沸き上がるの

を、リリイは肌で感じていた。

ステイアはまだ起きあがれそうにない。リリイは彼の傍に駆け寄る。ロビーの真ん中に位置するこちらに対して、敵は両側から接近していた。ざっと視線を向けた限りでは、警備員が左から二人、右から一人。

ひとりであしらえる人数ではない。

だが

リリイは太股のホルスターから、一瞬で銃を取り出し、手中に収める。近くに迫っていた警備員が動揺する気配を観察するより早く、両手で構えた。照準線を、重ねる。

(外せる)

混戦を少人数で耐え抜くには、敵を驚かせるくらいしか手段がない。今のステイアを見れば、効果の程はよく分かった。狂獣を相手には使ったことのない戦い方だが。

ハツタリをかますには、威力を見せつけるのが一番早い。

(外すように狙えば 外せる！)

当たり前のことを懇願するように叫びながら、リリイはトリガーを引いた。重い手応えとまったく同時に、ロビーを囲っていた半透明のガラス壁の上に、派手な亀裂が炸裂する。

固い音の余韻が消えると同時に、全ての気配が静まっていた。警備員はこちらに駆け寄るのを停止して、愕然と立ち尽くしている。

リリイは油断なく、脇を締めて銃口をあげた。一番近くに立っていた警備員に照準を合わせる。彼はひっと喉の奥からわずかな悲鳴をあて、すぐに両手をあげた。

「動かないで」

声が震えているのは、隠せなかった。

「あなたたちの誰かひとりでも、これ以上、私たちに危害を加えたら、この人を撃つ」

警備員の標準装備は、警棒のはずだ。彼らに、この距離を詰める手段はない。

先ほど、セイが拳銃を持っていたのが気がかりといえば気がかりだったが、今日の前にいる男たちは誰一人、法を超越するような切り札を隠しているようには見えない。怯えて、こちらを見ている。いや。

「ハツタリだ」

楽しそうですらある、余裕の声が聞こえた。テッド。

「構わないで取り押さえる。リリイに、人を撃つことなんて出来やしない。……この場にいる誰よりも、俺はそのことを知っている」  
人質から目をそらすのは危険だと分かっていたが、それでもリリイは細心の注意を払いながら、視線を移動させる。警備員とテッドとリリイ自身の立ち位置が三角形になるように、じわりと重心を移動させながら。

座り込んだままのスティアを挟んだ位置で、彼と同じような動作で胸を押さえたまま、テッドはこちらをまっすぐに見つめていた。銃を人に突きつけているリリイの姿を、その強がりすらも慈しむように。

「……あなたに」

声が割れる。

「あなたに、私の何が分かるの」

「分かるさ。逆に聞きたいよ。どうして俺に分からないと思うんだ？」

そこまで言って、テッドは立ち上がろうとした。が、頭を押さえて、膝をつく。衝撃で、脳しんとうでも起こしているのだろう。

だが、彼は静かに顔を上げる。

無様な恰好とは裏腹に、言葉は静かだった。憎たらしいほどに、理性的だった。

「俺の名前が、ガイルじゃないのは確かだが、明確なウソなんて結局はそれだけだろう。動機がなんであれ、お前と三年間メールを続けてきた相手が俺なのは、現実なんだ。お前の悩みを受け止めた言葉も、お前を励まし、勇気づけた言葉も全部、俺がお前のために頭

をひねって、一所懸命にしばらくだしたもののなんだ」

嗜虐性は影を潜めていた。今さらに、誠実さを全面に押し出して、そう言った。

「名前が違っただけで、これまで俺が届けた言葉が全て無駄になるのか？ どうしてお前たちは、そこまで名前というものにこだわるんだ。俺のメールなしに、お前がこの進路を選んだとも思えないのにな」

頭が、真っ白になる。

「騙す騙さないの全てを置いておけば、お前がこれまで見てきた言葉は、俺の内側で生まれたものなんだ。小説家や脚本家が、悪意で虚構を並べているとも思っているのか。お前は俺が生み出した渾身の創作に、心を確かに動かした。それは現実なんだよ」

リリイは、静かに、強く、唇の端を噛んだ。

屁理屈の口上を、止められない。間違っていると、断言できる根拠が見つけれられない。そんな自分の愚鈍さが、たまらなく嫌だった。だが、それでも、銃口は下ろさなかった。

理屈が見当たらなくても、抵抗をやめることはできない。

この現実はおかしい。そう思うことはやめられない。考えることはやめられない。

思考を停止してはいけない。

ステイアの言葉の意味は、こういうことだ。

こちらの決意など、知ったことではないというように。あるいはそれすらも愛しむように、テッドは唇の端に笑みを浮かべた。

「取り押さえろ」

命令が繰り返されるが、警備員は動かなかった。命を握られている一人だけでない。他のふたりも。

彼らの表情には、リリイの持つ武器に対する恐れもあるが、同時にテッドに対する不信が見て取れた。今の会話を外野で聞いて、とるべき行動を迷っているようだった。

意外な展開ではあるが、納得のいく幸運でもあった。制服を脱げ

ば、彼らは一般人なのだ。レアリス・カンパニーの刺客として、その使命だけのために生きているわけではない。むしろ、いきなり呼び出されて、何の準備もないままで戦闘に投げ出されたという立場だけ見れば、リリイと同じ、いや、それ以下の待遇だとも言えるはずだ。

ましてやリリイは毎日ここに通い、目を合わせれば笑顔で挨拶を交わすような優等生だった。彼らの顔も、はつきりと覚えてはいないにせよ、見たことがないわけではない。

先ほどのスティアの口上を聞いていたのは、この警備員も同じなのだ。

敵は、一枚岩ではない。

思っていたよりも、この包囲網には、隙がある。

「ここにいるのは腑抜けばかりか」

軽蔑したようにテッドがもう一声をかけるが、それでも警備員は動けずにいた。ため息が流れる。

「なら」

テッドは、ふらつく頭を支えるように、額に手をあてた。そして

「俺が手本をみせてやるうか」

言葉と同時に、彼の体が動いた。

リリイが振り返るよりはるかに早く、テッドはうつむいているスティアの方に迫っていった。予想外の対応に、息をのむ　テッドの座る位置からだ、リリイよりもスティアとの距離の方がはるかに狭い。立ち上がることが出来ずとも、膝をついたままでも、すぐに詰められる。

拳銃の引き金を引くことはできなかった。テッドはまるきりこちらの甘さなどは見通しているように、迷わず、スティアの関節をすくうように、彼の右腕に手を

伸ばしたその瞬間に、沈黙を守っていたスティアが動いた。

テッドに捕らわれるより早く、スティアはまっすぐに右腕を伸ばして相手の襟首に肉薄する。チャンスを待ちかまえていたとばかり

に、鋭く。

だが、単純な腕力勝負でどちらに分があるかなどは、一目瞭然だ。そう思った一瞬に。

リリイは、スティアの手の甲の光が、いつのまにか緑から赤に変わっていたのを見た。それだけでない。手袋で覆われていたはずのその手の甲に、違った色が見えたような……？

「つあああああ！」

派手な悲鳴が、フロアに響きわたる。テッドは顔面を押さえてのたうった。

何が起きたか、分からなかった。分からないほどにスティアの動きは小さかった。殴ったりはしていない。爪の先で顔を引っ掻いたわけではない。

テッドは顔を押しえたままで、床を転がった。尋常でない悲鳴が聴覚を刺激するのに紛れて、リリイの嗅覚はわずかな違和感を嗅ぎとった。

肉が焼けるような、焦げた臭い。

「……そんなに見たいなら、見せてやるよ」

わずかに息を弾ませて、スティアが、低く呟いた。

無様に転がったままのテッドの前で、ゆっくりと立ち上がる。

いつのまにか外していた手袋が、床に転がっている。そして彼は、羽織っていたジャケットを脱ぎ捨てた。

リリイは目を丸くする。

右腕。

彼の異常な能力の全ての鍵が右腕にあるとは分かっていた。だが、それでも 想像していたよりも、それは少しばかり異常な光景だった。

かたくなに露出を避けたスティアの両腕が、露わにされている。かなり大きめの服を着ていたのだろうか、想像通りの体型であるはずなのに、想像以上にアンバランスだった。鎖骨、肩、肘といった骨格の出っ張りがはつきりと浮き出るほどに、筋肉も贅肉もなにも

ない。中に着ていた半袖のインナーも若干サイズが大きいらしく、貧弱な体格をより際立たせていた。

薄着をせざるを得なかったであろう理由は、一目見ればすぐに分かった。

右の肩口から右手の指先にかけての半身全体が、異質な素材で出来ていた。

鉄のような素材でできたパーツが、人間の表皮などでないことは見れば分かる。関節の隙間からちらりと見える、コードのような細い管が、血管などでないことも一目瞭然だった。それらの奇怪な部品が連動し、きちんと関節が曲がるように配置されて、腕の形を模していた。

義肢であることは間違いがないが、機械であることも間違いがない。

だが機械に特有の、洗練された構成美といったものも、見受けられない。

それは、重さを限界まで削っているからだと気付いたのは、しばらく眺めてしまった後だった。生身の左半身の細腕に、重量を合わせたのだろう。

だが、手の甲で光る赤いランプの色だけは、苛烈だった。

手袋の上からでも見えていた光。その正体は、中指の付け根に張り付いた、宝石のようなフォルムのランプだった。関節ごとにパーツがかみ合う無機質な手の中で、その色だけがひどく美しい。

「面倒だから教えとくよ。外部からどんなに力を入れたって、アニマは砕けない」

言いながら、スティアはテッドを見下ろす。

テッドは明らかに聞いていないようだった。叫び疲れて、肩で息をしながらも、体のいたる所をかきむしるように、苦しんでいた。

(！)

不意にリリィは気付いた。テッドを蝕む痛み の 正体。

赤い時は、熱が出せる。

ステイアが、そう言っていた。  
鉄のような素材で出来た義肢。  
肉の焼けるような臭い。

「はやく冷やした方がいいんじゃないの？  
もう、傷痕は消えないだろうけどね」

ステイアは、右手の指先の五本を全て離すように、手を開いて、見せしめるようにしながら、低い声でそう言った。

じゅわぁ、と、小さな音はその指先から響き続けていた。油を塗った鉄板に、肉を載せた時の音にそっくりだ。ならば音の正体は、テッドの顔の皮脂、だろうか。

ぞつとしていたのはリイイだけではないようで、警備員もしばし言葉を失っていたが、すぐに銃よりはよほど危険が少ないということに気付いたのだろう。近くにいた警備員のひとりが、テッドを助け起こしに駆け寄る。

その姿をまっすぐに見つめながら、ステイアが言う。

「何で俺があんたを『ガイル』と認められないのかも、教えてやる  
うか」

彼は、左手で右手首に触れた。これまで手袋の下に隠れていて見えなかった箇所、身に着けていた何かを、外す。

鉄色の腕に紛れてしまつて、リイイの位置からではよく見えないが、銀色の、チェーンのような……

ステイアは、ふらりとリイイの近くに歩み寄る。そして、持っていたものを手渡してきた。リイイは思わず銃を片手に持ち替えて、受け取る。

絶句した。

「俺がガイル・ブルーノだからさ」

テッドに向けて高らかに断言する声に、返す言葉が何も浮かばない。

受け取ったものは、腕時計のように細いチェーンで繋がれた銀色のプレートだった。登録番号とおぼしき長い数字と、盾を模したマ

ーク、そして人名が刻まれている。内側には ストーン により制御された、開錠IDや本人登録の暗証番号が入力されているのだから。

見間違えなどしない。これを手にすることを夢見て、訓練を続けてきた。 ガード のライセンスだった。そして。

刻まれた名前の綴りは、さらに馴染み深い。

ガイル・ブルーノ。

間違いなく、そう書かれていた。

カツン。

澄んだ足音が床を叩いた。

隣に立つステイアの視線がテッドから離れ、音の方角にそれる。

リリイも釣られるようにそちらを見た。階段。

来た道とは真逆の、二階に通じる下り階段。一人の男が、下からこのフロアに上り詰めて、立っていた。

金髪にサングラス。ダイヤの指輪のネックレス。すらりとした長身に白のトレンチコート。今の足音は、高そうな靴のかかとで、意図的に響かせたものだろう。

「ステイア・アリビートか」

その場にいる誰が反応するよりも早く、セイがぼつりとつぶやいた。その声を耳にして、リリイは違和感を覚える。

サングラスが顔の大部分を隠しているので、セイの表情はきわめて読みとりづらいが、声から感情を判断をするなら、悲しんでいる？ いや、むしろ……

哀れんでいる。

倒れたテッドや、破壊された壁のそばに立ちながら、これだけ派手に味方を傷つけられながら、まったく状況に似つかわしくない声だった。

「……ずいぶん、痩せたんだな」

ステイアは、なにも答えなかった。

階下からもう一人分の足音が響く。警棒を構えたエルクが、セイを追いかけて昇ってきていた。いや。

エルクの登場を合図に、ロビーを囲う通路の両側から、警備員がばらばらと飛び出してきた。リリイたちが立つ場所を包囲して、ざっと布陣を取る。

(増援)

絶望的な悪寒と共に、そんな認識が浮かび上がった。

昇降機で回り込んだのだろうか。気を張っていたこともあり、まったく気づかなかつた。新しく召集された人数は、全部で五人。もともといた警備員と合わせて八人。セイとエルクを含めれば十人になる。倒れたテッドを数えれば十一だが、ここまでくれば一人くらいは勘定に入れずとも同じだった。増えすぎだ。

当たり前だが、こちらは相変わらずのふたりきりである。四対二の状況ですでに攻めあぐねていたのが、最悪の状況になっていた。気づいていないのか、あえて無視しているかは分かりかねたが、包囲の中心に立ったセイとステイアは、周りのすべてを視界に入れずに、見つめあっていた。騒ぎの中心地で、台風の目のように、静かに。

「できれば」

セイが、唇を薄く開く。

「君には、二度と会いたくなかつた」

「あなたに」

対するステイアの声を聞いて、リリイは驚いた。

ステイアはセイを強く睨んでいた。口元が引き締まって見えるのは、奥歯に力を込めているからだろうか。常に涼やかな態度を崩さなかつた彼の表情としては、少なくともリリイにとっては、驚くべき種類のものだった。

テッドに向けた軽蔑とは質が違う。憤怒よりも怨恨に近い気がする。短いつきあいの中で把握した、ステイア・アリビートという人間の印象を変える程度には、まるきり想像外の憎悪だった。

「あなたにだけは、そんなことを言われる筋合いはない」

唾棄するようなステイアの言葉に、セイはむなしく息をついた。

その嘆息を打ち消すように、大仰な動作で片腕を広げた。

「特権により、これより特別措置の施行を命じます。この二人の身柄を確保してください」

セイの声から、気遣うような穏やかさが消えた。口調こそは丁寧

なままだったが、余計な迷いはすべて捨てたとでも言わないばかりに、きつぱりとしている。

「無傷が望ましいですが、状況からそれが可能と思えない。命を奪わない範囲で、あらゆる武器の使用を許可します。今より作戦終了までの間に起きた全ての被害へ、本社の名の下に、補償を約束します」

そしてセイは視線を転じた。テッドを介抱している警備員に。

「ろくな事情の説明もなしに、あなた方を混乱させたことは謝罪します。ですが間違えないで下さい。銃器と凶器を持ち出して、先に手を出したのは彼らだ。正当防衛の目撃者はここに大勢います」

ステイアは、嘲笑した。

「先手で誘拐なんてしてかしたのは、どっちだよ」

「リリー・ブルーノはこの生徒として登録されている。上官に召集されることは不自然ではない。レアリス・カンパニーなら、そういうことにできる」

セイは冷静に断言した。

「それが分からない君じゃないだろう」

虚しそくに言いながら、セイはサングラスに手をかけた。無造作に、ずっと身につけていたそれを、外す。

ざわめきこそ走らなかつたが、動揺の気配が警備員たちの間を、さざ波のように伝った。リリーもまた、驚いた。そしてこれまで忘れていた、教区で気絶する間際に見たものがなんであったかを、はつきりと思い出した。

セイの素顔は、服装や立ち居振る舞いから想像していたよりは、平凡だったとも言えた。適度に整えられた眉の形などが、背格好と同様の清潔感を醸し出してはいるが、顔立ちそのものに、華美さがあるわけではない。どちらかと言えば、親しみやすい部類に入る、優しい顔立ちと言う方が近い。

だが、それら全てを打ち消す特徴が、右目に集中していた。眼球に、色がない。

左の瞳は空色だったが、右目は、瞳と白目の境界が分からないほどに真っ白だった。充血の痕すらない、純白のビー玉でもはめこんだようだった。涙の分泌による潤いからも、隔絶されている気がする。

眼の病気だと仮定するには、あまりにも無機物的だった。だが義眼と仮定するには、いささか趣味が悪い。特に、セイのように服飾に金をかけていることが一目で分かるような人間が選ぶには、不自然な気がした。そして何より。

リリイは 教区 で、この瞳に覗き込まれた途端に、意識を失った。

白い瞳から、視界全体、心の中まで白く染まっていくような感覚が、体の自由を確かに奪って、あっさりと気絶に導いた。

「彼らの武器は、銃だけじゃない」

辺りの動揺の気配はまるで無視して、淡々とセイは続ける。折り畳んだサングラスを、コートの内ポケットに引っかけながら。

「得体の知れない力を使います。それは私ができるだけ食い止めます。だから」

突然、ステイアが機械の右手を、セイに向けて突き出した。

赤く光るランプの先で、不可視の何かが放たれたのが、動作で分かった。先ほど、照明をショートさせた時の動作と同じ。

だが攻撃はセイに届かなかった。白い瞳をこちらに向け、彼が一瞥すると、見えない衝撃が弾けて分散した。暖房の放つ熱風のような余波が床を伝って四方に弾ける。警備員たちはわけがわからず、きよとんとしていた。リリイも同様だ。

ステイアはリリイの手を右手でくいと一瞬だけ引いた。金属の冷たい感触に驚くと同時に、もうひとつのことに驚いた。ステイアの手には、もうテッドを火傷させたような熱はなかった。冷却する時間があったとも思えないのに。

「逃げるよ！」

返事をする暇も与えてくれず、先に駆けだした。唯一、包囲を免

れた方向。すなわち、来た道である昇り階段。

リリイが追いかけるより早く、セイの後ろに控えていたエルクが走り出した。彼の手の中で、鉄でできた警棒が電灯をわずかに反射した。リリイはとっさに割り入って、銃のトリガーに指をかけた。床を狙って、引く。

手のひらに残る衝撃の重さに、我に返る。エルクは、確かに威嚇に怯んで、驚愕の表情で追跡を止めたが、リリイは自分の軽率な判断が信じられなかった。

また、銃弾を無駄にした。

人間を相手の喧嘩に、当てずっぽうに。

「早く！」

上から発破をかけられて、肩が縮まる。ぐずぐずしている暇はない。リリイはとにかく必死になって、スティアを追った。

スティアは四階のロビーで階段から逸れ、壁沿いの通路側に逃げていた。突き当たりで、足を止めて振り返る。威嚇射撃が効を奏したのか、追っ手は来ていない。

リリイが追いつくと、スティアの顔が疲労と苦痛に歪んでいるのが分かった。乱れた息づかいに合わせて、肩が弾んでいる。ここで立ち止まったのは作戦ではなく、ただ単に、体力が限界なだけか？

絶望的な気持ちで彼を見やるが、スティアはこんな状況でも態度を変えない。息を切らせながら、あくまで毅然とした表情は崩さずに、かすれた早口で言った。

「セイ・ホワイト」

「え？」

「あいつの名前。絶対に偽名だね、ふざけてる……ってそれはいいとして」

スティアは言いながら、もう一度視線を投げて、追っ手の有無を確認した。追いかけてくる人影は、まだない。

彼は壁から背を浮かせて、ふらふらと頼りない足取りで、歩きだ

した。

ロビーから離れ、通路を窓に沿って進む。狭い上に、所々に柱が立っている。障害物の多さは、混戦を少人数で抜けるには利になる。体力のなさは置いておけど、戦闘におけるスティアの判断は理にかなっていた。無茶こそ多いが。

「あいつは、右目で、アニマを自在に制御する。俺の技は、ほとんど無力化されるし、たぶん銃弾も届かない」

「え？」

「小火の鎮火が思ったより早かったな。あいつ、やっぱり手加減したか……」

独り言のような事情説明の上で『あいつ』の数が増えてゆく。リィが混乱しかけた所で、スティアは足を止めた。

窓枠に背中を預けて、息を整える。

彼の背中ごしに開けた窓からは、グラウンドを囲う木の頭の葉が微かに見えた。飛び降りて逃げられるような高さではなさそうだ。

「あいつには、勝てない。なんとか逃げながら、やり過ぎさない」と

「勝てない……って」

「相性が悪い」

弾んだ息を整えながら、スティアはゆっくりと答えた。

「特技の全部を封じられるわけだから、相手にするだけ無駄だ。幸い、あいつの視線が届かない所では、こっちも魔法が使えるから。

隠れながらうまくやるしかない。それはいいんだけど……」

「けど？」

「面倒なミスが一つ。テッドが イエロー を持ってた」

悔しがるというほど大げさな動作も見せずに、淡々と言った。

「さっき胸ポケットあさった時に、見つけた。うまく取れないでいるうちに邪魔が入ったから、なんとかしてまた奪い取らないと」

「じゃあ、戻るの？」

「……いや」

スティアは否定して、すっと目を細めた。左右に動く瞳。

「さすがに、敵がそうさせてはくれないかな」

彼の視線をたどる。細い通路の両側から、気配を殺していた警備員が一人ずつ迫ってきていた。挟み撃ち。

リリイは銃を構えようとしたが、通路の狭さに気づいて躊躇した。むやみに外そうとすると、敵にも味方にも危険だ。そして、敵はそろそろ、こちらの甘さを理解しているだろう。

頭が回らず混乱していると、隣から声が聞こえた。

「壁際でできるだけ低くしゃがんで、耳、塞いで」

警備員が迫る。警棒を構えて、両側から。

困惑したが、ステイアは心の準備を待ってなぐれなかった。壁と窓を背にして、通路全体をなでるように右手をさつと動かす。そして。

ステイアが指を鳴らした瞬間に、背後の窓ガラスが一齐に割れた。一枚や二枚ではすまない硬質の破壊音が重なって、不協和音が鼓膜をつんざく。食器棚を丸ごと倒したような音量に、リリイは音を訊いてからしゃがんでしまったことを後悔した。だが、目の前に広がる光景が、そんな感情を吹き飛ばす。

割れたガラスの向こう側から、緑色の何かが大量に飛んできていた。弾丸のような勢いで、一直線に。

援護射撃でも呼んだのかと思うようなその光景だが、どう見ても弾丸は見慣れた弾薬などではなかった。もっと見慣れたものだった。それは。

（葉っぱ……？）

木の葉が、一枚一枚それぞれ意志でも持っているかのように、一直線に飛んでいる。

直撃を食らった警備員が悲鳴をあげた。制服を切り裂いて、その下にある肌到達するほど深く、切り傷が刻まれてゆく。その光景を見てリリイは、すべての葉が刃物のような性質を持っていると見当をつけた。

血の臭いが、こちらの鼻まで届いた。

ぞつとした。

「風”がグリーンなのは、俺が森育ちだからなんだよ」

リリイに向けたとも、警備員に向けたともつかない声で、ステイアは言った。

「強風が吹くと梢が揺れる。ときどきは葉っぱが飛んだりする。そのイメージが染み着いたから、俺が風をイメージする時に浮かぶのは、森の色なんだ」

ステイア自身は無傷だった。よく見れば、彼が立っていた場所の窓ガラスだけ割れていない。だとしても、多少の巻き添えは食らっていないそんなものだが、やはり術者は避けるように設定ができるのだろうか。

「だから、原理としてはむしろこっちが基礎なんだろうね。……緑色のものを、イメージ通りに動かせる」

彼は、ふらふらとしたままの足取りで、警備員に近づいた。一人はどうかにかこの場を離れたようだが、まともに食らったもうひとり、足をやられたのか、その場に膝をついていた。痛みに歪んだ表情に、焦りが浮かぶ。

握りしめていた警棒を、やけくその体で振るってくるが、ステイアですらも、ひよいと後退するだけでよけることができるほどに、力ない動作だった。そのまま、ステイアは警備員の弱った手から、警棒をもぎ取る。

敵の驚きを確認することもせず、ステイアは両手で棒を振りあげて、容赦なく振り下ろした。鈍い音。

警備員が白目を剥いて転がるのを見届けながら、ステイアは息をついた。しゃがみこんだままでもいたリリイの方に歩み寄り、持っていた警棒を、差し向けてくる。

「使えば？ 銃より、こっちの方がやりやすいでしょ」

リリイは、抜けない驚愕を表に出さないように努力しながら、立ち上がった。まだ鼓膜の様子がおかしく、音が少し聞き取りづらい。「あなたこそ、武器持ってないのに」

「俺の力じゃ、これを持ち運ぶのはちよつと重い」

情けないことを堂々と断言しながら、彼は苦笑した。

笑い返す気にはなれず、リリイは警棒を受け取った。ステイアが言うように軽くはないが、腕力で男に勝てない自分が振り回すには、ちよつどいい重量だと思った。重さはそのまま威力になる。

とりあえずは持っていたりボルバーを、再び太ももに収めた。代わりに棒を構えると、先ほどよりどこか安心できた。

このサイズなら、ホルスターのベルトにねじこんで収納することもできそうだ。銃が必要になっても、手放す必要はないだろう。棒術を専門にしたことはないが、護身の基礎知識として、故郷で長い武器の扱い方を、簡単に習ったことがある。

ステイアはそんなこちらの様子を見てから、笑みを潜めて呟いた。「追撃が来る前に移動するか。セイが来たら今の技は使えないし、これ以上窓辺にいてもしょうがない」

足取りはかなり頼りなく、顔色も悪い。

あまり魔法を使いきても、体が衰弱する。彼はそう言っていた。「今の技は切り札のひとつだったんだ。手の内がひとつバレちゃったし、どうするかな。一番マズいのは、囲まれてフクロにされることだけど、どうしたら避けられるか……で、どうしたらテッドの所に行けるか」

つぶやいてから、顔を上げて、こちらに訊いてきた。

「医務室って、確か一階だったよね」

「え？ ……うん」

リリイは頷く。昼間に学校を案内した時に、確かに軽く説明はした気がするが、そんな所まで覚えているとは思っていなかった。

「そっか」

ステイアは何かを考えているようだった。その横顔に向けて、リリイは、そんな場合ではないと理解しつつも、思わず声をかけていた。

「……ねえ」

逃げる際にポケットに入れたものを取り出して、掌の上に載せてステイアに見せる。先ほど手渡された、ガードライセンス。

父親の名前が刻まれた、シルバーのプレート。

「これは、なに？」

ステイアは、ああ、と納得してから、ふっと息を洩らして表情を和らげた。

「さっき説明するつもりだったけど、時間ないからね。あとで話すよ。……あなたに、持ってて欲しい」

そう言われると、それ以上の言及はできない。

とりあえずはライセンスを、ホルスターの収納ポケットにしまった。空いていたポケットが、これまで「お守り」をしまい続けていた箇所だけだったのが皮肉に思えた。その時。

ステイアの背後で、忍び寄った人影が腕を上げた。勢いよく振り下ろされる警棒と、骨に響くような鈍い音。一瞬の出来事だった。

リリーの立つ位置に、ステイアの体が倒れてくる。受け止めながら、彼の肩越しに襲撃者を見た。エルク。

接近に気付かなかつたのは、鼓膜が麻痺していたからだ、遅れた理解が、背筋を凍らせる。エルクがそこまで計算していたのか、単なる不幸な偶然かは分からなかった。それよりも。

リリーは困惑した。ステイアは自立をしようとしなない。人間ひとりぶんの重みが、離れない。

そつと顔を覗き込むと血の気が引いた。たった一撃で、きれいに気を失っていた。

「……リリーさん」

エルクが警棒を構えなおして、こちらを見る。凶器を手にしながら、教鞭をとる教師のような気楽な造作だった。なのに微塵も隙がないあたりが不自然で、底が知れない。

ステイアの気絶を好機と見たか、通路の両側から、数名の警備員が布陣をとった。そして、階段側の通路に、セイ。

「大人しくしてくれれば、危害は加えないから」

いくら極度の瘦身といえど、人間一人の体重を支えるのは、重かった。

リリイは完全に意識を失っているらしいステイアの身体を、なんとか支えた。抱きとめながらも、右手に握った警棒は離せなかったが、この状態で振り回すことはできない。ホルスターに納めた銃を取り出すことは、さらに絶望的だ。ステイアを床に寝かせようにも、砕けたガラスの破片が床一面に散らばっている。

エルクが、無造作に警棒を回転させながら、軽い口を開いた。

「怖がらせてしまったことは、謝るよ」

場違いに、のんきな言葉。

「だけど、それは君たちが暴れ回るからさ。何度も言うように、俺たちだって平和に解決したい。武器を捨てて、ついてきてくれないかな。連れの人も、これ以上の危害は加えないことを約束するから」

たった今、ステイアを気絶させた手並みを見れば、白々しいほどに優しい提案だった。だがそれは、臆病者の譲歩や、平和主義者の偽善とは種類が違う。

リリイは直感した。エルクという人間は、これまでの行動から察するに、警備員とはまた別の、有能な戦闘員だ。どちらかと言えば、狂獣対策に教育されている。ガードの強さに近い。なんらかの形で、敵を「倒す」形の戦い方を修得していることは疑いないし、甘さが外からは見えない程度には高いレベルを誇っている。

だが、女性を傷つけることに抵抗を覚える性格なのだろう。そして、それを隠すつもりもないらしい。

リリイは自分も殴り倒されずに済んだ事に感謝しつつ、その幸運に奥歯を噛んだ。

ガードの候補生にも、似た主義を持つ人間は少なくない。そうい

ったフェミニストたちを、訓練で黙らせることを目標にして、リリイは戦い方を学んできた。とはいえ。

心境を置いておけば、チャンスではある。そう考えようとするが、状況は絶望的だ。

銃と警棒だけで、警備員の包囲を突破し、気絶したステイアを守りつつ脱出をする。なにをどう考えても不可能だ。

だが。

「……承伏させたいなら」

リリイは答えながら、ステイアを引きずるようにして後退した。

さきほど立っていた窓辺。ここならガラスが割れていないし、壁が死角を補ってくれる。

鋭利なガラスが散りばめられた足場の悪さは、敵側にも影響を与えているようだった。セイ・ホワイトにいたっては革靴を履いている。一瞬で距離を詰められることはなさそうだった。

「もっと具体的な話をして。危害を加えずに私たちを捕らえて、どうするつもりなの？ イエロー って、なんなの」

「我々は、カラーストーン と呼んでいます」

セイが答える。不気味なほど汚れない純白の瞳が、まっすぐにこちらを見ていた。

「アニマの結晶宝石のひとつ、六属性のイエローが凝縮された石です」

「アニマ……」

さきほど、ステイアもそのようなことを言っていた。

それより以前に、常識として知っていた言葉でもある。魔法。機械。リリイにとっては仕組みなど何も分からない不思議なものたちその原動力。分子レベルの極小単位で、世界のあらゆる物質に漂っている霊的粒子だと、昨日のレイバは語っていた。

セイは続けた。

「人類の浅知恵で作り出した、ストーン なんかとはレベルが違う。カラーストーン は、森人が残した強力な古代文明遺産のひ

とつです。正しく使えば、狂獣の暴走で急速に弱体化している大陸を、根本から正すだけの鍵になる。我々レアリス・カンパニーは、これが必要とする開発を急いでいます」

「……それが全部本当なら、言ってくれれば渡した」

リリイは、ステイアの体を支えながら、うめいた。

「あなた達は、すべてを狂獣のせいにして、悪事を隠蔽しているって、彼は言っていた」

「言いがかりです」

セイは冷静に否定した。

「今のあなたは頭に血が昇っているだけです。ステイア・アリビートの言うことには、何も証拠がない」

「テッドは否定をしなかった」

「……………」

「私は、テッドの味方であるあなた達を、信用することなんてできない」

ぐっと、ステイアの体を支える手の力を強めながら、リリイは片手に握った警棒を、牽制の姿勢で構えた。おとぎ話のナイトのような格好だと、頭の冷静な部分が他人事のようにそう思っていた。

セイの言う通りだ。カンパニーを信用することができないように、ステイアを信じる理由だって何もない。だけど。

それでも、守るといふ約束は、果たしたかった。彼は甘言を弄さない。誘惑をぶら下げない。

そして偽物の父親に向けて怒りを見せた。自分にとって、一番優しかった。

今はそれだけで、十分だった。

脱力していたステイアの身体が、不意に動いた。

首を動かした後に、状況が読みとれないのか、困惑するようにもぞりと動く。立ち上がるうとするその身体を、リリイは慌てて支えた。

至近距離で目が合った。寝起きの時と同じ、ぼんやりとした瞳。

「……痛って」

その目がすぐに眇められる。リリーの肩に手を置いて、彼はふらつきながらも自立した。

「……気絶してた？」

簡潔な確認の声。リリーが頷くより早く、スティアはこちらの表情を見て、勝手に納得したらしい。

ふらりと身体を離すと、首筋を押さえたままで壁際に寄った。リリーを通り過ぎる形で、後ろに。

「ごめん、時間稼いで……」

彼はふらりと壁に背を向けて、もたれ掛かった。立っているのが辛いらしい。

「加減をしすぎたなあ」

正面のエルクが、気楽に言い放つ。リリーが向き直ると、彼は警棒の先端でポンポンと掌を叩いていた。

「全力で殴ると、本気で首の骨が砕けそうな相手だったし、あんまり思い切れなかったわ」

「エルク」

セイがたしなめるような視線を送ると、エルクは肩をすくめた。

「はい、すいません」

両手が空いたリリーは、警棒を持ちなおした。少しでも長く持つていられるように、ぶら下げるような体勢で、柄を握る力だけを強める。

スティアをかばうように前に立ちながら、ざっと敵を観察した。

状況は何も変わっていないが、今はその気になればすぐに銃が構えられる。それを含めるように腿のホルスターを整えると、敵の警戒も強くなる。そんな風に思考をしていると。

まったく唐突に、後ろから、腰のあたりに誰かの手が触れた。

「……っ!？」

予想外の方向から、予想外の箇所延びた触感に、リリーは思わず身体をくねらせた。細い指が触れたのは尻の上。探り当てたのは、

腰の後ろに携えていた、二丁目の拳銃を収めたホルスターだった。そして。

カチャ。

後頭部に固く細い何か当たる。とてもよく知っている、冷たい感触。

「動くなよ」

後ろから投げられた声は、自分に向けられたものではなかった。

リリイは事態を理解できずに愕然とするが、動けなかった。振り返ることすらも、指先を動かすことすらも、なにも。

目の前に並ぶエルクやセイ、警備員たちの、度肝を抜かれたとでもいうような、間の抜けた表情を、さらに間が抜けているであろう顔で眺めるのが、精一杯だった。セイらが見ているのは、リリイのすぐ後ろ。そしてリリイのすぐ後ろで、ステイアが見ているのも自分ではなく、彼らだった。

「…… イエロー が欲しいつつつても、彼女を助けたいつつつても、命をかけてまでそうしてやる義理は、俺にはないんだってことを忘れないでよ」

警告を投げた声の抑揚に併せて、後頭部に添えられた鉄がかすかに揺れる。

リリイは、己の装備が外されていたことを、重さの感触で理解した。無防備な背後をとられれば、奪われる可能性もゼロではない箇所ではあったが。

でも、まさか、そんな。

「派手にガラスが割れたり、小火が起きかけたり、警備員が集ったり。いくらあんたらが隠そうとした所で、今この場所で騒ぎが起きてるのは、近隣にはバレてるよ。そんな中で、召集されたリリイ・ブルーノが死体で発見されたら、イメージダウンってレベルの話じゃないだろうね」

リリイの腰から奪った銃を、リリイの後頭部に突きつけて、ステイアは確かに、そう言った。

「忘れるなよ……俺ひとりなら、この窓から飛び降りて、一瞬で逃げられるんだ。そして、リリーの保護者であるレイバもこの事件を知っていて、現在進行形で暴こうとしている。隠蔽工作を敷くだけの時間は与えてやらないよ」

足が、震えた。

「その場合、殺人者として指名手配されるのは俺になるけどね。けど、捕まるようなことはない。理由は説明しなくても分かるだろ」  
振り返ることはできなかったが、スティアがすべての言葉を、セイ・ホワイトに向けて放っていることは、相手の様子からなんとなく理解できた。

「俺が起こしたひとつの殺人事件をきっかけに、自治体はこの建物や、あんたらのことを調べ始める。リリーが召集された理由や、その時の様子、彼女と親しいクラスメイトの個人情報。調査されてなお、誘拐その他のボロが出ないと思えるほど、楽観的でもないだろう。少なくともジャンとかリックなら、俺でも怪しめた程度には大根だった」

唾棄するように、続ける。

「調べられる口実さえ与えられれば、ポリスは喜び勇んでやってくるだろうね。自治体とカンパニーが冷戦状態にあるのは、秘密でもなんでもない。大義名分ができれば、失脚させるために、あの手この手を尽くすだろう。今までのように、権力を盾にして言い逃れしようつたって、そうはいかないぜ。レイバはカンパニーには帰属しないけど、カンパニーに対して、対等に発言する手段は心得てるよ」

「……君は」

「その場合、こっちにもイエローは手に入らないし、俺もその後の人生が変わるけど、ストレート負けするくらいなら、痛み分けで妥協するさ」

「君が、その手で、彼女を殺すと言っているのか。我々の手から逃れるそのために」

セイが慎重に告げると、スティアは黙った。

そうしている間にも、頭に突きつけられた銃口は離れない。

どうしようもなく呼吸が震えているのを自覚して、リリイにはもう、何が何だか分からなかった。スティアが気まぐれで引き金を引けば、その瞬間にすべてが終わる。

「……テッドが宣言してたよ。リリイに、人を撃つことなんかできないって。あんたらも気づいてただろ」

セイが押し黙る。スティアは続けた。

「俺を同じ尺度ではかるのは、リリイに失礼だとは思わない？ 知ってんだろ……自分の身を守るためなら、俺はなんでもやってやるよ」

自分を守りたい。

時間が止まった気がした。それは、リリイが先日、スティアに告げた決意と同じ言葉だった。

頭の芯に、冷水の滴でも垂らされたような心地がした。

目が冴える。

自分を守るってことは、意識をしっかり持つってことだと思ってる。

嘆くなら、考えなきや。

俺が、ガイル・ブルーノだからさ。

「道を開けて」

スティアは空いた片手で、押し出すようにリリイの肩に触れた。その感触と、かかる体重の動きで理解する。彼は、まだふらついている。首に受けた打撃の衝撃は、軽くないらしい。頭も強烈に揺れたらろう。

そんなか弱い人間でも、引き金を引くだけで人を殺せるのだ。それが自明だからこそ、スティア・アリビートは強がりをやめない。

強がり。そうだ。こんなものはただの強がりだ。彼自身も言っていた。喧嘩ができない。だけど、敵をビククリさせるだけの機能は搭載している。

だから。

正面に立つエルクは、ちらりとセイの方が見た。セイは神妙な表情で頷く。エルクが退くと、ロビーや昇降機の方に続く道が開いた。「そのまま彼女を人質にとって外に出たら、それこそ本当に警察沙汰になるだろう」

セイが静かに言った。

「ここで我々が道を開けたところで、君は逃げることは出来ない。どうするつもりだ」

スティアは、鼻で笑う。

「ご親切にどうも。心配されなくても、それくらいは分かってるよ」彼はそのまま、リリーの肩を押して、銃を構えたまま誘導する。

「もうすぐ、救援が来る。それまで籠城させてもらうさ。……追ってくるなよ」

そのまま、人質のリリーと突きつけた銃口を盾にして、スティアはゆっくりと移動を開始した。ガラスの床を抜けて、包囲を抜けて、セイたちの方を見据えたまま、通路を油断なく進んでいった。

銃口の感触を意識しながら、リリーは、スティアが呼吸を必死に押し殺して、平常に見せようとしている演技の音に、耳をすませている。

「思ったより、怖がらないね」

ステイアがそう言ったのは、階段の角を曲がって、セイらの死角を確保した後だった。

後頭部からこめかみに移動した銃口と、肩を支える骨ばった手。背筋が凍りそうになるのをぐっとこらえて、それを正してみるが、息が震えるのは隠せなかった。

後ろから捕らえられたリリイには、彼の表情は見えない。だから、誰もいない正面にむけて、ぽつりと返答をする。

「……怖いよ」

「まあ、そりゃそうか。でも」

背後をとったままでリリイを誘導しながら、彼はゆっくりと階段を昇る。来た道と行く道を、どちらも警戒しながら。

場所を移動するたびに、銃口を突きつける角度を変えていた。リリイの肩を押さえる手には、たいした力もこもっていない。拘束の意味などなしておらず、どちらかといえば自分がふらついているから、足がかりにしているとでもいった方が近いほどだ。隙をついて暴れば、逃げ出すことは可能だろう。それと同時に銃弾がリリイの体を貫く可能性は、まったく低くないが。

だが、リリイが暴れ出さないのは、もっと違った理由だった。

「俺にまで裏切られて、怒り狂うかと思ってた」

ステイアの声に、先ほどのような凄みはない。むしろ疲れているようだった。

「……私も、考えたから」

リリイも小声で答える。

「あなたはきつと、私を撃てないでしょう」

ステイアの足取りが、止まった。

当然、誘導される形で歩いていて、リリイの足も止まる。

彼の反応に、ほんの少しだけ満足したが、急速に不安にもなった。すなわち、予想がまったくはずれていて、逆ギレでもされやしないか。

「どうして、そう思ったの？」

「テッドを蹴飛ばしたから。あと、私にライセンスを渡したから」  
リリイはなるたけ、はっきりとそう答えた。

「あなたは父さんの事を知っていて、本当に怒っていたから……父さんの娘である私を、撃ち殺すことはできないって、思った」  
「指でも滑れば、どうなるか分からないの？」

「あなたが指を滑らせたくらいで引けるほど、トリガーは軽くない。物理的な意味だよ。決意と覚悟がなくちゃ、撃てないように設計してある」

告げると、ステイアはまた黙って、そしてすぐに吐息を漏らした。笑ったようだ。

声が近づいてきた。耳の後ろから、囁かれる。

「この天井に監視カメラが付いているから、演技は続けて欲しい。

…… おおまかに正解」

会話が漏れることを防ぐための接近なのだろうが、声の隙間から感じられる息づかいがくすぐったい。リリイは思わず目をすがめた。「でも、そういう推理の仕方はおすすめしないかな。俺の性格次第では、論理の根本が破綻するから」

正解を得られた所で、安心ができるわけではなかった。一撃で自分を殺せる武器を突きつけられた状態で、平然としていれるほどには凶太くない。

その恐怖はプラスに働いたようで、演技ができない自分の仕草を自然に見せることには貢献した。非常階段を抜けてから、ステイアは苦笑した。

「嘘をつくのは苦手ですよ。君が本当に怖がってくれなきゃ、あいつらは騙せそうになかったからね。敵を騙すにはまず、味方からつて言っし」

軽い調子で告げてくる。

「まあ、理由がなんであるうと俺の勝手だったことには変わらないけどね。でも、謝れない」

「え？」

「これが最善だつていう独断で、分かった上で選んだ作戦だから。俺が君に謝る資格はない」

妙な筋を通しながら。

足元にフロアマットの感触が生まれた地点で、スティアは立ち止まった。

リィイは視線だけを動かす。普段使っている階段から登れるフロアとしては、最上階にあたる七階の入口だった。教員用フロアの上層である。

ロビーはなく、壁に張りついた口の字型の通路の他には、それを横切るようにした細い渡り廊下が伸びているだけだ。

「……どうして七階なの？」

「本当は八階の方がいいんだけど、たしかあつちはスタッフエリアでしょ。さすがに敵の本拠地に行くのも、ぞつとしないし」

スティアはそう言うてから、確認するようにもう一度訊いてきた。

「医務室は、一階で間違いないよね」

「え？ うん」

「だったらなるべく上に、敵を集めたいから」

それで話は終わりだとしても言うように、会話を打ち切った。詳しい説明を省く癖があるのは、彼自身の頭の回転が早いからだろうか。リィイは問いたださうと口を開きかけたが、それより一瞬だけ早く、スティアが背中を押してきた。歩き出そうと、オリーブ色のフロアマットから足を離そうとした瞬間に、靴底にはまっていたガラスの破片が引つかかった。

階段から離れて、渡り廊下の方に進む。曇りガラスでつくられた半透明の壁が、リィイの胸くらいの高さで、道の両脇にそびえている。それを越えた先に見えるのは、ひどく小さく見える、一階の

受付だった。先ほどまでいた、五階から二階までにスライドする口  
ビーは、もう少し奥まっている。

橋みたいだ。

「これから、ちょっと頑張ってるね」

「え……？」

「俺はまだ イエロー を諦めちゃいない」

渡り廊下の真ん中のあたりで、ステイアは足を止めた。

そのまま、すんなりと銃口を外して、リリイを解放する。

ゆっくりとした大仰な仕草で、右手に持っていた銃をリリイに渡  
そうと、手を伸ばした。そして。

バン！

強烈な破裂音が響くと同時に、ステイアの右手が跳ねた。拳銃が  
近くの床に勢いよく落ちる。

リリイは視線を投げた。ライフルを構えたエルクが、三階のロビ  
ーに立ってこちらを見上げていた。ずいぶんな距離がある。スコ  
アの精度がどれほどのものだったとしても、誤差が出るのを禁じえ  
ないほどに。武器だけを正確に狙えるような位置じゃない。

ステイアの様子を確認した。彼が銃を持っていた手は義肢だった  
ため、怪我はないようだった。そして、損傷もない。

(え?)

信じられず、もう一度目をこらす。

銃撃を食らった義肢の隙間に、ひしゃげた銃弾がはまっていた。

貫通していない。それどころか、傷一つつかないまま、まともに銃  
弾をくい止めていた。

こちらが驚いている間に、ステイアは腕ではなく、肩口を押さえ  
ていた。軽々しいうめきが耳に届く。

「いつてえ……」

顔を上げると、少しだけ涙目になっているのが見えた。

「アニマは砕けないつっても、運動エネルギーが消えるわけじゃな  
いか……」

その言葉の意味を問うより早く。

目の前に立つスティアの後ろ、すなわち、来た道である非常階段の方向から、複数人の警備員が迫っていた。

「スティ

「あんたの後ろもね！」

警告を投げようとすると、彼は釘を刺すようにそう言った。言葉と同時に背を向けたスティアの様子を、目で追う暇もない。リリィは気配を肌で感じて振り返った。渡り廊下の反対側に回り込んでいた警備員がひとり、迫っていた。

リリィが警棒を構えると、先頭の警備員の表情に驚愕の色が覗く。彼は人質として捕らわれたリリィを、救助する役だったのだろう。その油断をつかない手はない。

リリィは警棒をまっすぐに突き出したまま、迫りくる警備員に向けて突っ込んだ。がらあきだった腹に先端が激突して、筋肉に食い込む手応え。後退したその身体を追撃で押し出すと、靴底についていたガラスの破片が耳障りな音を立てた。

廊下の狭さが幸いして、敵に背中をとられることはない。その代わりに、逃げる道はどこにもなかった。背中合わせに、スティアが別の警備員と応戦している。どちらかが崩れたら、その瞬間に負ける。

じっくりとあたりを見回すだけの余裕もなかったが、向こうに回った敵の数は少なくないはずだ。これだけ混戦になればエルクのライフルに狙い撃ちにされることも無いだろうが。いや、逆に警戒するべきか。エルクも、今ごろ階段を駆け上がって、直接の応援に向かっているかもしれない。

姿を確認することはできないが、セイ・ホワイトの動向も気になる。スティアが言っていたような危惧はピンとこないが、彼は拳銃を持っているはずだ。

(まづい)

この段階で、早く決着をつけねばならない。となれば、リリィを

敵だと想定せずに油断していた、こちらの側から突破しなければ。

はつきり言つてスティアでは背中を預けるにはあまりに頼りなかった。身体能力で男に劣る自分には、壁が必要だ。

リリイに一撃をうけた警備員が、敵意をむき出しに警棒を突き出してきた。肩口から振り下ろされた一撃を、己の警棒と左肘を重ねて受けて、急所がねらわれるのを庇う。獲物ごしに伝わる重さに腕を痺れる。アームガードを着けていないため、想定以上にダメージを感じた。だが、やせ我慢ができない範囲ではない。軽く麻痺した左腕から一時的に気を逸らすべく、リリイは視線をちらりと上にあげた。フェイントが生んだ一瞬の隙で、右足で敵の足の甲を踏みつけて後退する。

呼吸を整えると、なんとか左手を動かして、両手に握った警棒を振るう。なんとかやりあえそうだが、危機的状况であることに変わりなかった。持久戦になれば人数が少ないこちらが潰れる。距離を確保して銃で脅す方が現実的かもしれない。

護身の傍らで、リリイはリボルバーを構えようとした。だが、その動きを読まれていたかのように、後ろから声が聞こえた。

「撃つな！」

弾んだ息の隙間で投げられる、スティアの警告。

意味がわからず、リリイは視線をちらりと後ろに向けた。スティアの方は戦闘で手いっぱい、振り返る余裕がないらしい。警備員のひとりと対峙しながら、声だけを届かせてくる。警備員

「ここで踏みとどまって。しばらく耐えて！」

言いながら彼は、目の前の警備員が振るった棒の一撃をよけて、武器を握る敵の手首を右手で思い切り掴んだ。警備員が悲鳴をあげる。右手の下から、じゅわあと脂の焼ける音がした。赤く光る手の甲。

どれほどの熱さがあるかは見ていただけでは分からないが、テッドや警備員の様子を見るに、熱したフライパンに触れるくらい凶悪さは備えている。非力な人間が接近戦で扱うには有効な武器だろ

う。ならば、心配せずに、自分は自分の敵を相手にしていれば……  
上手くいくはずもなかった。

熱さにひるんで警棒を取り落とした警備員の後ろから、すり抜けるようなダッシュで別の警備員が詰めてきた。ステイアは右手をあげようとするが、体力がついていかなかったのか、反射神経が足りなかったのか、まったく間に合わなかった。

警棒を振り回すだけの暇も惜しんで、そのまま助走に乗った拳が、まともにステイアの顔を殴り飛ばした。背中を預けていたリリーの背に、骨のような身体が激突した。

ぞつとして、リリーはその姿を後ろ目にみやる。ふらりと半身を起こした彼は、顔を左手でおさえていた。鼻血が出ている。

背を預けていた壁を失って、同時に足枷が現れた。絶望する暇をなんとか使って、リリーは体を動かした。

(ガードは)  
上体をねじりながら、警棒を構えなおす。

(クライアントとターゲットを結んだ、直線上から離れてはならない！)

両側の敵を牽制できるように、棒の間合いギリギリで、どちらにも届く位置に移動をする。ステイアに追撃をかけようとした警備員の一撃を、ためらわずに棒で受ける。はさみ打ちに成功した状況下で、敵は確かに、一瞬だけ戸惑った。そしてその一瞬で、ステイアがしゃんだまま、右手を額に当てた。

翳した手を、滑るようなリズムで前方に突き出す。警備員たちを越えたさらに向こう側でも、指し示すように。

そして。

「うわああああ!？」

ステイアの側にいた警備員たちの列の、後ろの方から悲鳴があがり、やがて唱和した。

リリーは度肝を抜かれて呆然とした。どのフロアの床にも置いてあった、オリーブ色のルームマットが宙を舞って、そのまま警備員

をなぎ倒してスティアの方にまっすぐ飛んできていた。無論、普通ならそこまでの強度があるはずもない。さきほどガラスを粉碎した緑の葉のように、何か強力な補正がかかっているのだろう。

ポルターガイストと言うには、あまりにはつきりとした意志を感じさせて、どこか間が抜けていた。警備員を打ち倒して、その上空を突破したルームマットは、スティアの前でバツと身体(?)を広げ、彼を守る盾とだとも言わないばかりに、その場に制止する。通路が狭いのもあって、それは文字通りの壁になって、警備員とスティアの距離を遮断した。

リィはちらりとスティアの手の甲を見た。先ほどの、はつきりと鮮やかなグリーンとは違う。ひどく鈍い緑のような、赤みがかっているような色の光が、ぼんやりと点っていた。

「混合混色だよ」

ぼそり、と彼が呟いた言葉は、よく聞き取れなかった。左手が鼻血を押さえているためか、くぐもってしまっている。

「疲れるから、あんまり使いたくないんだけどね」

こちら側の警備員が、ようやく我に返った。分断されてしまった戦力に動揺をしつつも、すぐに武器を構える。

無防備きわまりないスティアを守るべく、リィは立ちふさがった。棒を敵の足下に投げつける。鉄がすねに直撃して、敵の体が折れる。次の瞬間には跳躍して敵の懐に入り込んでいた。手加減なしの肘打ちが、顔面に直撃する。

苦痛に顔をゆがめて警備員がたたらを踏む。次の瞬間にはリィは体重を乗せ直していた。頸動脈に手刀を連打する。数回目で手ごたえが変わった。警備員が、倒れる。

重い音を立てて、背中を打ちつけたその姿を油断なく見つめながら、汗ばみ、乱れた髪を指でピンと背中に流す。後ろのスティアが、小さく口笛を吹くのが聞こえた。

「すっげえ。ガードって、格闘技もやるの?」

鼻血を押さえたままだったので、とても聞き取りづらかったが、

態度は平然としている。この人は、時々すごく格好悪いと、膨大な疲労感と共に、そう思った。何をしでかしても、悪びれないからだろうか。

その感想は表に出さないように注意しつつ、警棒を拾いながら、リリイは口を開いた。

「身体を動かすことの基礎だから、しなくはないけど。専門ではないよ。役目は人間以外の生物の掃討だから」

「そのわりには強いんだね」

「不意を突けたからだよ。それに私は、故郷ですつと習ったの」  
薦めたのは父親だった。その言葉は口にせず、飲み込んだ。  
不意に。

ステイアが作っていたルームマットの壁が、するりと床に滑り落ちた。

リリイが瞬く横で、ステイア自身もまた、少し驚いていた。だが、彼はすぐに納得したようだった。渡り廊下の先に、セイ・ホワイトが立っていた。

火傷を負った警備員をはじめ、まだ無事にいる数名も、彼の後ろに控えている。

白い瞳が、ステイアの方をじっと見ていた。彼と、彼のすぐそばで崩れ落ちたルームマットとを。

「……最初から、あんたが来れば良かったんじゃない？」

「殴り合いは苦手だね。君に言うのと嫌味に聞こえるかもしれないが」  
セイの返答を聞き流しながら、ステイアは手の甲を額に当てる。

オリーブ色から赤へ変わった右手を、そつと鼻にかざした。次の瞬間には、鼻血が止まっていた。口元に残っていた血液を、左手の甲で乱雑にこする。

リリイはその一連の動きを見て、ようやく確信を得た。グリーンが操った木の葉、オリーブ色のルームマット、レッドが止めた鮮血、風のイメージと、熱のイメージ。

ステイアが言う所の「魔法」は、物理法則ではなく、たぶん、色

のイメージで作られている。

「それに、私が出れば、建物の方に被害が出る。そんなことに無駄金は使わせたくないし、報告書も書きたくない」

「なら戦わなければいい。見逃せよ」

「そういうわけにもいかない。それに……」

セイ・ホワイトは後ろに向けて手を振った。警備員に向けた、下がれというジェスチャーだろう。

「君がこれだけ破壊してくれたなら、遠慮してもしなくても、もう意味がない」

セイは笑わなかった。あくまで、哀れみに似た静かな表情で、ステリアを見ている。

リリーの位置から、ステリアの表情は見えなかった。

階段を駆けあがる足音が、沈黙を一掃した。

下の階から登ってきたエルクは、そのまま足を止めずにこちら、渡り廊下の方向まで走ってくる。立ち尽くすセイ・ホワイトの後ろから、何も言わずにその横をすり抜けて。

こちらが対応をするより早く、エルクは走りながらジャケットの胸ポケットのひとつに無造作に手を入れた。中身を取り出す。それは。

爆竹。

エルクが指先で床に投げると、火がついていないはずのその先端に光が点る。そして、セイ・ホワイトの左目が大きく見開かれたその瞬間に。

爆発が起きた。

衝撃が、渡り廊下の床を揺らす。爆炎のように煙が広がり、視界が遮られる。

爆風によるめきながら、リリイは反射的に閉じていた目をなんとか開いた。涙がにじむほどの煙の規模に戸惑っていると、エルクは何の迷いもなくそれを突破してこちらに飛び込んでくる。しゃがんでいたスティアの腹を、微塵の容赦もなく思いきり蹴りあげた。彼の体が転がる。悲鳴もあげられず、力なく。

頑健な大男が受けたのだとしても、ただですむ一撃じゃなかった。投げ出された華奢な肢体を見て、リリイはぞっとする。爆煙の中で、濡れた咳のような音がした。

エルクは躊躇せずに警棒を構えて、吹っ飛んだスティアに接近する。リリイは妨害すべく、同じく警棒を突き出した。転げたスティアの頭の上で、棒を用いた罅迫り合いが二、三打続く。そして。

突然、リリイの顔のすぐ横を、光線が走り抜けた。

視覚に残像を残すほどの鮮烈な光が、一本の線になって閃く。ほ

とんど同時に、はるか後方にある壁が、爆砕する。

なにが起きたかを、理解する暇もなかった。

ぱらぱらと、砕けた壁のカケラが床に落ちる音が聞こえる。呆れたような表情のエルクの向こうで、セイ・ホワイトがこちらを見ている。リリイと、リリイを越えた向こう側で、爆砕した壁とを。

「加減が難しいな」

セイは本気で困りきったような顔をして、うめいた。エルクがこちらを向いたままで、告げる。

「もー。室内戦にも慣れてくださいよ」

リリイは決して事態を理解することはできなかったが、直感した。ぞわりと、鳥肌が全身を駆け抜ける。今の威力は銃撃の比ではない。危険信号。逃げる、と。

傷ついたステイアの手を引いて、走りだそうとした。だが、攻撃を食らって伸びていたステイアが、それをはつきりと振り払う。驚いて、見やる。

ステイアは目をすがめて、明らかにダメージを全身で訴えるように呼吸していた。顔をあげることで精一杯で、立ち上がることにすらできないようだ。

だが彼は、確かに唇の端を釣り上げた。

「……来た」

息が上がっていることを隠す余裕もないらしく、その声はひどく掠れている。だが、近くににいるリリイには聞き取ることができた。

ステイアは立ち上がるうとしたようだが、力が入らないのか、まったくできずによるける。リリイが駆け寄ると、彼は遠慮なく、肩に手を乗せてなんとか立ち上がった。

寄りかかったまま、ほんの小さな声で、囁いてきた。

「まだ、走れる？」

「え？ ……うん」

「ちょっと、俺のこと、運んでくれない」

「は？」

思わず大声で聞き返すと、スティアは早口で囁く。

「この渡り廊下の、真ん中まで。一瞬だけでいい。俺もう走るの無理だけど、ジャケットの男を、越えたいんだよ」

意味が分からず、リリイは瞬くが、スティアはそれ以上の説明をしなかった。

現在、自分たち二人が立つ位置を確認する。はじめにライフルの一撃を受けた時には、ほぼ真ん中にいたような気がするが、スティアが殴られたくだけりから、徐々に奥側に位置がずれていた。今では、「ちょうど真ん中」までは五歩くらいの距離がある。そしてその間あたり　ここから三步目に、エルクが立っている。

一瞬だけでいいと言われても、エルクの横を越えられる気などしない。

そう思ったことが表情で伝わったのか、スティアは小さく笑った。「ために、やってみればいいよ。たぶん、上手くいく」

その言葉に、返事をする暇もなく。

スティアは突然後ろに回って、その細腕に残されていたらしい思っていたよりは強い力をすべてこめて、了承もなくこちらの肩に手を置いた。そのまま、ひょいと体を縮めて、足を宙に放る。まったく意味は分からなかったが、ほとんど反射的にリリイは投げ出された脚を受け止めていた。ようするに、おんぶである。

どれだけ間の抜けた絵面だかは、ぽかんとしたエルクとセイの表情を見れば分かった。そして同時に、理解した。スティアが言っていた言葉の意味。

「今だ！」

めちやくちやだ。

そう思った気持ちは嘘ではないが、リリイはそれでも走り出していた。彼の突拍子のなさに、慣れてしまったのかもめない。

エルクの横を通り過ぎることに、あっさりと成功した。びっくりにした人間というのは、こうまで隙だらけなのかと、感心すら覚え

た。

ステイアの体は見た目通りに軽かった。酔っぱらって目を回したエミリを運んだ時の方がよっぽどきつかったと言ってもいい。とはいえ、人間ひとり時間を長時間運べるほどに、リリイ自身にも体力があるわけではない。廊下の真ん中に付いた五歩目で、すぐに彼を下ろした。そして。

飛び降りながら、ステイアは、リリイから警棒を勝手に奪う。

そのまま止まらずに、流れるような動作で反動をつけて武器を振るった。標的はセイではない。エルクでもない。リリイが立ちつくしているすぐ後ろの、渡り廊下を覆っていたガラス壁。

腕力というよりは遠心力に負けて、派手な音を立ててガラスが砕けた。ステイアは警棒を投げ捨てながら右手を翳し、強い風の一撃を放つ。脆くなっていた面が空中に吹き飛ばされて、そのままフルムごと、一階の床まで落ちていった。壁に開いた穴が大きくなる。ステイアは、ふらふらとした足取りで、それでもなんとか、穴のあいた壁から少し離れた。リリイを挟んで、通路側に移動する。

「あんた達と」

セイらに向けて顔を上げて、はっきりと声を上げた。そして。

「まともに戦う気はないんだよ」

ステイアは思いきり体重を乗せて、呆然としていたリリイの身体を突き飛ばした。

(え?)

自分の身になにが起きたのか、理解が出来なかった。

足場が消えた。重力から解放された自由な感覚。髪が、一方向に引っ張られるように流れて、そして。

「き」

内臓がふわりと浮き上がる感覚。頭の重さに負けて、身体の向きが逆さまになる。

「きゃあああああ!」

空気を切る感触だけにひたすらもてあそばれながら　リリイは

まったく冷静さを保つことができずに金切り声をあげていた。

ロビーや渡り廊下が絡み合うこの高層建築の中で、リリイが落ちた箇所だけは一階に直結しているらしい。ひたすら長い滞空時間。ちっとも落ち着かない落下速度。全身の血液が、沸騰する。

死ぬ。

重力に反発するように、膨大な風が、体を押し上げた。

圧力が拮抗して呼吸が詰まる。もみくちゃにされたのは一瞬で、すぐに辺りの空気が穏やかなものになってゆく。いつのまにか、恐怖に閉じていた目を開いた。リリイの体は、パラシュートでもつけたように、ゆっくりと下降していた。

なにがなんだか分からず、ただ、弛緩した目や鼻や口から、液体がこぼれないようにするので精一杯だった。ふわりと、リリイの体は一階の床に着地する。無様な体勢ではあったが、ひとつの怪我もない。髪の毛は絶望的に乱れていたが。

次いで背後で、トン、と軽やかな音がした。

涙ぐみながらゆっくりと振り返る。ステイアがやたら優雅に着地している。リリイを突き落とした直後に自分も飛び降りたのだろう。となれば、風で落下速度を軽減したのも彼なのだろうが……

はるか上空の七階で、セイやエルクの影が、小さく見えた。

言いたいことは色々あったが、こちらが文句を整理するより早くステイアは動いていた。緑色に輝いていた手の甲を、額に当てる。すぐに離して、赤を宿した右手を無造作に振り回した。指先にが差したのは 昇降機。

火花がシャートして派手な音がする。機体を支えていた太いワイヤーが、煙を立てて切れていた。

「医務室！」

「へ？」

「俺より、君の方が足が速い。テッドは、たぶん医務室にいる！」

こちらの様子など構わずに、ステイアはめいっばいに叫んだ。

「今しかチャンスはない！ 早く！」

むちゃくちゃだ。

二度目の言葉を胸中で放ちながら、リリイは膝が笑つのをなんとか押さえ込んで、ゆらりと立ち上がる。

髪をかきあげて、今の自分に出来るだけの速さで、走り出した。無人の受付を越えて、校舎の奥へ。

（なんなのもう！）

胸中で悲鳴をあげながらも、頭のどこかで冷静な思考が回る。人数で負けていた状況から、包囲を派手に突破した。チャンスは確かに、今しかない。

テッドは火傷を負って戦線から引いた。医務室は一階にある。確認できる敵のすべて、特に強力なエルクとセイは七階で立ち往生している。昇降機が壊れた今なら、階段で下りてくるには時間がかかるだろう。稼いだこの時に、無防備であるテッドに襲撃をかけて……

（イエロー を奪う）

のが、スティアが思い描いている策なのだろうが。

まだなお、落下のショックが抜けきらず、どこかふわふわと曖昧なままの思考が、もどかしかった。

腰に携えていた拳銃は七階に置き去りだが、太股に携えた残りひとつには、弾丸がまだ残っている。

（私は……）

医務室の扉が見えてきた。リリイはそのままの勢いで、扉を開けた。そして。その瞬間に。

銃声が高く響いて、リリイの髪の一房が爆ぜた。

停止する。

医務室の中には誰もいなかった。保険医も、病人も、けが人も、誰一人。

今の攻撃は別の場所から届いた。恐怖が追いつくより早く、笑い声が耳に届く。

視線を向けた。二階のロビーに通ずる、階段の途中に、テッドが

立っていた。医務室に駆け込んでくるリリーの姿を予想していたように、はつきりと顔が見える場所にいる。

赤毛の下にのぞく顔面に、真っ赤な手のひらの形に火傷があったが、じつくりと見やる余裕はない。彼の手には、硝煙をたなびかせた拳銃が握られていた。

まじまじと機体を確認できたわけではないが、それでも見覚えのあるモデルだった。学校支給の、リボルバー。

「一階からは武器庫が近いってことを、忘れてたんだ」  
テッドは、くつくつと笑った。

「ケアレスミスでばかり、テストの点を落とす癖は、治ってないみたいだな。俺に愚痴ってくれてから、ずいぶん経ってるのに」

リリイは動けなかった。こちらがおかしな動きをすれば、テッドはその瞬間に引き金を引く。

彼が、銃の扱いにどれほど精通しているかは分からない。だが、肩書きや身のこなしを見る限り、それほど腕がいいわけでもないのだと思う。だからこそ、動くのは危険だった。撃ち落とされたのは髪。射撃に自信がない人間が狙うには、繊細な箇所だった。

少しでもずれていれば、心臓を貫いてリリイは死んでいたかもしれない。

それが、それでも構わないという意志の表れなのだとすれば、迂闊な行動をとることは出来ない。

テッドの顔を見れば危険度は分かった。顔面に無様な大火傷を負うことで、先ほどまでと一転して特徴深くなってしまった、彼の顔。その唇には深い笑みが浮かんでいる。だが、目を見れば分かった。キレている。

今までずっと、リリイのことを見下していただけの余裕が、なくなっているように見えた。

膝が笑いそうになるのを感じて、リリイはぎゅっと奥歯を噛みしめた。

「リリイ」

笑みを浮かべたまま、テッドはまっすぐに名前を呼んできた。

「こつちへおいで」

意味が分からず、リリイが黙ったままだいと、いくばくの間もおかずに、テッドは別人のように声を荒げた。「俺の所へ来いって言ってるんだよ！」

思わずびくりと、肩を跳ねさせてしまった。テッドの言葉が続く。「レアリス・カンパニーが嫌いだらう。ずっとお前を騙し、利用するために育ててきたカンパニーが憎いだらう。そして、そんなお前

を横で見ながら何も言わなかったレイバ・グリーニツシュヤ、ステイア・アリビートも、恨めしくて仕方がないだろう」

銃身を支える両手を離さないままで、絞りだすような早口。

「俺もだ。俺もこんな社会が嫌いだよ。なあ、リリイ。認めろよ。

目標も、家族も、友達も、すべてが嘘だったお前の日常で、本物だったのは俺との会話だけだ。俺も、本音で話した相手はお前だけだった。なあ、俺と二人でここから出よう」

あまりの発言にリリイは目を剥くが、それに気づいた様子すらも、今の彼にはない。

「俺はお前の親だ。ガイル・ブルーノはもういないかもしれないが、お前に送ったメールはすべて俺が考えた、俺なりの誠意なんだよ。お前はそれに影響を受けてここまで来た。なら、お前を育てたのは俺だ」

テッドは目を細めた。

「お前は俺が憎いだろう？ 俺は、そう思うお前の顔が見たかった。嘘に踊らされていたお前と会話をしながら、ずっと考えてた。立場を偽っていた自分も、偽りの平和で笑うお前も、ぶち壊したかったんだよ。お前の本当の表情が、ずっと欲しかった」

一瞬だけ、彼の表情の上に、恍惚の影が差した。

「だから満足したんだ。あとで自分の地位が落ち込んだところで、人生が台無しになったところで、それだけで俺は満足だったんだ。だけど、やっぱりだめだ。だって、おかしいじゃないか」

恍惚はすぐに、煮えたぎる怒りに吞まれた。銃を握る右手にそえた左手に、力がこもる。

「俺たちが親子なのに、ステイア・アリビートなんか横から全てをさらわれて、俺が負けるのは、おかしいじゃないか！」

怒り狂うテッドの顔面で、人の手の形をした大きな火傷が、無様にひしゃげていた。まだ傷を負ってから時間が経っていない。表情を歪めるだけで、想像を絶するほどに痛いはずだ。

この傷が、彼の心をどのように傷つけたかを理解するには、リリ

イはテッドのことを知らなすぎた。

そう、知らないのだ。彼はこちらのことを知っているかもしれない。だけどリリイは、テッドのことなど何も知らない。

激情をぶつけてくるテッドを見ながら、リリイは気持ちのどこかが、冷めてゆくのを感じていた。

この距離感が、答えなのだと思った。

「……銃を突きつけないと、会話もできない親子って何？」

リリイは低い声を絞り出す。今のテッドを刺激するのは危険だとは分かっていたが、止まらなかった。

「あなたの言う『すべて』って何？ 見くびらないで。確かにあなたは、私に影響を与えたかもしれない。だけど、私は、あなただけに育てられたわけじゃない。絶対に」

リリイの腿には、拳銃を収めたホルスターがある。一瞬でも向こうに隙が生まれれば、すぐに撃つための準備ができる自信がある。

この自信は訓練で生まれたものだ。この学校で、ジャンやリックやエミリと共に、シモン教官の講義を受けたことで生まれたものだ。彼らの目的が何であったかは関係がない。結果としてリリイの中に残った、確かな力だ。

その力を使って、現に今、自分と、自分以外の人間ひとりを守って、戦うことができた。

嘘ではないことが、手のひらの中に実感として残っていた。

当たり前だ。考え続ければ、分かることだった。

「今までの環境が嘘だったとしても、正解なんてどこからも降ってこなかったとしても、私は、今の私としてここにいるもの」

毅然と顔をあげて、銃の向こうにあるテッドの顔を見つめる。

「あなたの言う通りよ。あなたの嘘が私を育てた。だけどそれは、他の全部も同じだよ。ジャンもリックも、嘘つきだったかもしれない。もしかしたらラルフやエミリだってそうだったのかもしれない。だけど、彼らと共に過ごした時間が、無駄だったなんて思わない。すべての嘘や本当から、私を感じたすべての感情や経験は、私だけ

のものよ。全部が合わさって私がいる。真実なんて、ひとつだけ出来てない」

ここで過ごした自分の今までは、客観的に見れば無駄な時間だったかもしれない。

だけど、顔を上げれば分かることがある。

目の前にいる男の顔の醜さが、最初に分かる。造形や、火傷のことを言っているのではもちろんない。メーラーの向こう側にだけ存在していた、リリイ・ブルーノという他人の幻想にすぎり続ける哀れな表情が、とても醜い。

悲しくなるほどに、醜い。

「あなたは、私の父じゃない」

自明を、きつぱりと口にした。

それだけで、目の前の男の表情が歪んでいく。

「私の父は、もっと単純で、バカで、自分のことしか考えてなくて、一人でいつでも明るかった」

テッドの手の中にある銃口は、はっきりとこちらの方を向いている。

だけどその恐怖すらも、どうでもいい。

「口調や言葉は真似できても、実際に会ったあなたは、特徴のひとつだって合ってなかった。だから、あなたは父さんじゃない。それだけだよ」

「うっ……」

テッドが突如、喉に食べ物でも詰まったかのように、呻いた。ぶるぶると唇を振るわせ、貫くような視線でこちらを見る。そして。

「……うおおおお！」

叫んで、銃身を掲げて、引き金にかけた指に力を込めようとした。

その一瞬で。

彼が握りしめていた銃が、手のひらの中で弾けて、飛んだ。

床に落ちた拳銃が暴発して、明後日の方向を打ち抜いた。その音に恐怖しながら、リリイは自分の立つ場所より右後ろ、新たな気配

が近づいた場所に視線を投じた。

ステイアは、リリイよりさらにテッドから離れた距離に立っていた。

機械で出来た手のひらを、テッドの方に向けている。原理は分からないが、テッドの銃が突然弾けたのも、彼が放った魔法によるものだろう。甲のランプが、赤く光っている。

ステイアの表情はとても静かだった。疲労も、穏やかさも、凶々しさも。これまで見せた全ての感情を取り払ったような冷たい佇まいで、何も言わずにテッドを見ていた。

突き出していた右手を握りしめて、親指と人差し指だけを立てた。子供が遊びで作る、拳銃のジェスチャーと同じだった。そして、

左手で手首を支えたかと思えば、機械でできた右の人差し指の、第一関節から先が、パカリと開いた。

「！」

細い指の奥に、小さな金属のきらめきが見えた。サイズまでは確認できないが、おそらく、空洞になっている。弾薬が通るだけの形に。

「…… キャロル」

ステイアがほんの小さな声で、そうつぶやいたのが聞こえた。

その意味を考える暇も問う暇もなく、手の甲の光が強くなる。そして。

銃声が響くと同時に、ステイアの右手で衝撃が爆発した。

テッドのスーツの裾が散り、銃弾はそのまま階段を貫通した。

身体が直接に銃と接続されていた反動か、一撃を放ったステイアの身体も、バックステップでも踏んだように弾かれていた。恐怖で完全に静止した隙だらけのテッドを前に、彼にはそれ以上の攻撃ができないようだった。だが、その一瞬があれば十分だった。

リリイはリボルバーを握りしめて、すでにテッドに接近をしていた。こちらの動きに気づいた丸腰のテッドが、視線を向ける。彼を守るものは、何もない。

距離もコンディションも申し分ない。撃ち殺すことなど、造作もない。だけど。

リリイは銃身を左手で握って、右手で撃鉄を下ろす。そのまま支えたグリップで、テッドのこめかみを思い切り殴りつけた。

頭部に衝撃を受けて、テッドの身体が崩れる。強く殴りすぎたか、表皮が切れて派手に血が流れ出た。見た目ほどたいした傷ではないが、頭に直接衝撃を与えることには成功している。ならば。

体勢を整えたステイアがこちらに接近しているのは分かっていたので、リリイはくずおれたテッドから離れて場所を空けた。

ステイアは一瞬だけ驚いたような顔をしたが、あとは躊躇わなかった。もう一度、指で作った銃を構えたかと思えば、次の瞬間にはテッドの右足に穴が開いていた。硝煙の臭いと悲鳴と血臭とを、間近で感じながら、リリイは気持ちが悪く沈んでゆく感じていた。

頭が割れるような悲鳴をあげて、テッドの身体が投げ出される。湯水のように流れる血液は、やはり見ていて気分のよいものではなかった。ステイアもそう思ったのか、こちらをフォローするためかは分からなかったが、彼は打ち抜いたばかりの敵の足に、赤く光る手をかざした。次の瞬間は、血だけが止まった。それでも、スーツのズボンを染めた臙脂色の染みや、悲鳴は消えなかった。

ステイアは、足の痛みにも身動きが取れずにいるテッドの上半身を踏みつけた。トリガーを引く。銃声。

ガクンと、テッドの身体から力が抜けた。

ステイアが放った三発目の銃弾は、テッドの顔面よりわずかに横にそれた、床を砕いていた。

白目を向いて気絶したテッドの様子を確認し、ステイアは多少苦痛そうに身体を折り畳んだ。スーツの内ポケットから、何かを取り出す。黄色の宝石。

「撃たなかったね」

宝石を手の中で弄びながら、ステイアは軽い口調でこちらに話し

かけてきた。

リリイはそんな様子を見つめながら、とても空しい気持ちになっていた。あれほど自分を滾らせた憎しみが、手の中で行き場をなくしたようだった。

「怒りに身を任せて、撃ち殺しちゃうんじゃないかって不安だったけど、しなかったらしなかったで、意外かな」

「……うまく言えないけど」

リリイは言葉を探しながら呟いた。テッドは大量の血液を失って、真っ青になっていた。明らかに普通じゃない脂汗が浮かんでいる。

憎い敵も、銃の一撃を受ければ傷を負う。

傷を負えば、無様に叫ぶだけの哀れな瀕死人になる。

殺しても死なないと思っていたふてぶてしさも、痛みひとつに弾き飛ばされてしまう。

殺しても死なないと思っていた父親も、殺されればきつと、死ぬのだろう。

「父さんは、本当にもうどこにもいないんだなって……そう思ったら、すごく、虚しくなっちゃった」

笑おうとしたが、うまくいかなかった。だけど、泣いてしまえるほどには、悲しむこともできなかった。

「私ね、父さんのこと、別に好きだったわけじゃないんだ」

ステイアに告げるふりをして、くすぶっていた想いが外にこぼれる。なんとか言葉にしたくて、胸の奥がきしむ。

言葉にした所で、すべては遅すぎたとは分かっている。

「家庭を顧みず、母さんの死に目にも立ち会えないような、自分勝手な父親だったから、たぶん、恨んでた。だから会いたかった。変わらず私を好きでいて、好きなように気にかけてくるあのお気楽な父親に、一人前になって、会いに行きたかった。そして面と向かって言いたかったんだ。私にはもう、あなたは必要ない。一人で生きていけるほど強くなった。ざまあみる、ってね」

苦笑する。ステイアが横から口を挟まないのに甘えて、独り言の

ように続けた。

「私、まじめに頑張っただけで、別にいい子じゃないんだよ。ずっとそんなことを考えてた。そんなことを、考えてた、つもりだった。でも……実際にいなくなってみると、よく分からない」

父のことを素直に尊敬することは、どうしても出来なかった。

だけど、自分や、世界の全てを率直に愛するあの笑顔を、嫌うことだって出来なかったのだ。

ステイアは、何も言わなかった。

何も言わないまま、イエローを握りしめた。そして、ちらりとこちらを見てから、ようやく口を開いた。

「ちよつとこれ、貸してね」

彼は宝石を左手に持ち変えてから、その手で右手首のくぼみに、なにやら複雑な動作で触れた。

次の瞬間、手の甲を覆っていた鉄のパーツが、ガシャンと音を立ててスライドする。手首の部分に、隙間を広げたような空洞が開いていた。

もはやその右腕の機能に何が追加されても驚かないと思っていたが、次の瞬間には、リリイはあっさり目を見張っていた。ステイアは無造作に、開いた隙間にイエローを滑らせて、右手の中にしまつて手首のパーツを閉じてしまった。

そしてその瞬間に、手の甲で輝いていた例のランプが、鮮やかな黄色に光った。

装着を終えた瞬間に、ふらついていたステイアの足取りが、多少しゃんとしたように見えた。顔を見やると、表情も変わっている。重い疲労や、病人のような顔色の悪さが払拭されていた。この一瞬だけで、ずいぶん疲れが取れたように見える。

「すげえ。全然違うな、ひとつ増えると」

満足そうに呟いて、すぐにこちらを見て笑う。「説明はあとでするよ」

額に手を当てて、ランプを赤に戻した。

遠くから、足音が近づいてきた。

最初に姿を見せたのは、エルクだった。ジャケットの裾をはためかせながら、五階から一気に、こちらに向けて階段を降りてくる。

セイ・ホワイトはいくぶん静かな歩調で、その後ろに続く。警備員のうちの、まだ動ける数名は、また別の箇所から接近していた。非常階段から降りたのだろう。こちらを包囲するように、後ろの方から二人。

足音が聞こえてから、包囲されるまでは実に短かった。

気絶したテッドとステイアとリリイを取り囲むように、残党はじわりと距離を縮めようとしていた。しかし。

「動かないでよ」

ステイアが得意げに、指で作った銃を、テッドのこめかみに当てた。

吹き抜け構造の校舎の中で、先ほどの戦闘は筒抜けだったのだろう。二階のロビーに立ったエルクが、下り階段にかけた足を止める。「最初に言っておくけど、この銃はトリガーを引いて放つわけじゃない。あんたらがよくご存じの通り、魔法のすべては気持ちひとつで放てる。ようするに、あんた達の誰かがこっちに攻撃でも加えたりしたら、俺ビククリして、自分の意志とは関係なく、うっかりこの人のこと殺しちゃうかもしれないってこと。危険物の取り扱いは、慎重にね」

堂々と胸を張って、ステイアは言った。

「こめかみから直接放たれるなら、あんたの ホワイト も届かない。ついでに言えば、リリイは出来れば撃ちたくない相手だったけど、こっちの男はむしろ今すぐ死ねばいいのになって思ってる相手だからね。人質としての扱いは、さっきとは違うぜ」

言葉を放たぬまま、エルクが唇を噛みながらこちらを見ている。

ステイアはちらりと視線を上げた。

リリイもそれにならって眼球を動かす。一階から最上階まで開けた校舎で、上に仰げるものは、大きな天窓だった。星は見えずとも、

満月はよく見えた。リリイは初めて時間の流れを意識した。

ステイアが空を見たのも、時間の経過の確認だろう。彼はテッドに銃を突きつけたままで、セイ・ホワイトの方を見た。笑う。

「いいかげん、そろそろ救援が来るだろ。それまでこいつは人質にさせてもら」

「！」

言葉の途中で、なぜかセイ・ホワイトの肩が跳ねた。心の底から驚いたとでもばかりに、目を見開いていた。

彼は、コートの襟元に手を運んで、首もとを押さえた。この初夏に室内で戦闘を終えて、寒さを感じているのだろうか？

「……やばい」

セイの喉から、ぼつりとそんな声が洩れた。彼以外の全員には、彼が動揺をする理由が分からなかった。

彼はぼつと視線を上げた。天窓。リリイもつられてそちらを見る。見たばかりの夜空。

間違い探しの絵のような、違和感を覚えた。

塗りつぶしたような真っ黒な空。星は見えない。

満月も、ない。

「伏せる！」

セイが大声で吠えた、次の瞬間。

鼓膜を突き破り、頭の中身をもすべてつんざくような巨大な破裂音が響き、天窓の全てが粉々に割れた。

シエルター は、街を守る壁であり、上方が開いている。

狂獣の侵入を防ぐ目的で作られた防御装置だが、鳥型の狂獣の侵入は、完全に防ぐことが出来るわけではない。よって、街の中での襲撃もごくまれに発生する。

その際に対応に当たるのは ポリス の役目だが、デカルト・シテイの北部の地区においては、町中に狂獣が降りたら、ガード養成学校へ誘導する決まりになっている。広いグラウンドと、高さのある構造が、有効な対策として認められているのだ。

だが、それは頻繁に起こることではなかった。ガード養成学校に通っていたリリイとて、在学中にそういった事件似遭遇したことはない。

だが、今。

リリイは伏せていた顔を、おそろおそろ上げた。

床に這うようにしゃがんでいたのは自分だけではなく、隣にいるステイアも、気絶したテッドから銃口を離して防御の姿勢をとっていた。エルクも、警備員も。

立っているのは、セイだけだった。彼とエルクがいる二階ロビーから、リリイがいる一階のフロア全体までが、淡い光のようなものできらきらと輝いていた。リリイはそのきらめきの正体を察して、驚いた。 ガラスの粒。

砕けた天窓の破片は、雨のように降っていたはずだが、床に届かず、リリイ達やエルクらを誰一人傷つけず、斥力でも発生したかのように、宙に浮いたままで積もっていた。

立ち尽くすセイ・ホワイトが見つめる先は、割れた天窓。

そしてそこから、厳かに降り立つ生物がいた。あまりにも巨大な鳥であり 狼だった。

馬のような巨体を持つ、漆黒の毛並みの狼。それだけでも奇妙で

あるというのに、さらに鷲のような巨大な翼が生えている。そして、あり得ないはずのバランスで巨体を支え、ゆっくりと空から降りてきている。

一匹ではなかった。ぞろぞろと同じ生き物が数匹、天窓に開いた穴から降りてくる。決して野生にはありえないフォルムの、異形の生物が数を増やしてゆく。なにがなんだか分からなかった。

(狂獣……?)

では、ない。おそらく。

狼に翼が生えているなんて聞いたことがない。狂獣はもともとは野生動物であり、だからこそ危険なのだ。無駄のない野生の力が、無駄のないままで引き出されてしまうからこそその脅威だ。だが、この生物は違う。おかしい。重量のある狼が空を飛ぶ利点がない。無駄なものがありすぎる。なのに、なぜか、不自由なく飛行をしている。

そもそも狂獣は、生物を誰彼かまわず歯牙にかける生き物だった。理性などはない。

この建物を、この天窓だけを、意図的に狙って襲撃するなど、彼らの思考上には、ありえるはずがない事だった。

そして。

まったく予想外のものを発見して、頭の回転が停止した。巨大な狼の背中に、乗馬するようなポーズで、人が乗っていた。それも、かなり小柄で、かなり華奢な影。

狼の飛行に合わせて、背にまたがる少女の、銀の髪が揺れていた。粉々に砕けた窓ガラスや、血塗れになって倒れた人影、舞い降りてきた異形の生物……少女は、そういった現状の全てから決定的に浮いていた。得体の知れない生き物に腰をかけながら、白馬に導かれた姫君のように、場違いに汚れない。そして。

あどけない無垢さと、彫像のような美しさを、完璧に備えた顔かたち。

その顔には見覚えがあった。はつきりと。

だがリイには、どうしても彼女の名前を呼ぶことができなかった。これもまた、間違い探しのようだ。だが今度は、いささか簡単すぎる。簡単すぎて、信じられない。

ロール・アリビートの顔からは、ずっと左目に装着して離さなかった、眼帯が取り払われていた。

隠されていた左目は、右目と同じくぱっちり大きい、それ以外の特徴は全て、違っていた。

眼球が、真っ黒だった。

白目と瞳の区別もなく、瞼の内側の全てが、黒く塗りつぶされたようだった。遠くから見れば、それはまるで空洞だ。リイが瞬時に連想したのは、骸骨だった。

完璧な美貌を持つ少女の中で、その一点だけが決定的に浮いている。いや、これは神々しいのだと、リイはそんなことを思った。神などという概念を信じたことはない。それでも。

目の前に存在する、圧倒的な何かに、ただ平伏してしまいたくなるほどの、畏怖を覚えた。

ロール・アリビートを乗せた異形の生物が、ふわりと床に降り立った。

その黒い首筋をそつと撫でながら、ロールは身体を滑らせ、自らの足で床を踏んだ。乗っていた一匹以外の数匹も、彼女を護ろうとでもするように、周りに散るように降り立った。

「救援……ね」

近くにいたスティアが、顔をしかめて、小声で毒づく。

「これが救援かよ、レイバの奴……ふざけやがって」

ロールが、ゆっくりと前に歩み出た。

その拳動に、何かおかしな所があったわけではない。昨日から顔を合わせていた普通の少女が、普通にする身のこなしと、何が違うわけではない。

それでも、身体が動かない。ただ動物的直感が告げる。怖い。

彼女はこちらを　　というよりは、兄のスティアを？　　ちらり

と確認した後に、別の場所に視線を定めた。この場にいる全員が床に伏せる中で、立ち尽くしているセイ・ホワイトへ。

セイの真つ白な右目と、ロールの真つ黒な左目が、向き合う。鏡に映されるよりも正反対の瞳と瞳が、交錯する。

すぐに、会話が始まった。

「この獣は、わたしの力を恐れて、わたしの意志に従っています」

ロールの澄みきった幼い声は、どこか辿々しかった。台本を読まされる、学芸会の子供のように。

「わたしが命じれば、どんなものでも破壊します。わたしが意識を乱せば、制御を失って、暴走します。獰猛な肉食獣ですから、戦って犠牲が出ないことはないでしょう。でも、わたしが自分の願いを叶えた上で、無傷で帰ることができれば、何もせずに退却することを、命じることができません」

「……キメラか」

セイが忌々しげにつぶやく。

ロールは明らかに緊張している様子であったが、それでも、大人が横から手をさしのべてやるには、あまりにも圧倒的な存在感を放っていた。エルクも、警備員も、何も言えないまま、立ち上がることさえも忘れたように彼女を見ている。身内であるスティアもまた、動かない。

「兄と、リレイさんを、解放してください。そしてそのまま、これから逃げるわたし達を、決して追跡しないでください」

ロールの要求を聞いて、セイは気むずかしく眉根を寄せた。

「わたしは戦いに慣れていません。危害を加えられたら、平静でいられません。兄や、リレイさんが、怪我をしたり、殺されたりすれば、きつとその瞬間に」

中途半端な箇所で言葉を切って、ロールは息をのんだ。続きを口にしたくないようだった。

すぐに顔をあげて、にらむように、セイ・ホワイトを見やる。

「…… サード・グランドクロス の現場が、この街になったって、

わたしは構わないんです。わたしに選択権なんてないから。あなた達の行動次第で、わたしは自分の意志とは関係なく、この学校もろとも、この街の全てを」

やはり言葉を途中で切って、ロールはぎゅっと唇を噛んだ。震える声を、絞り出す。

「決めるのは、あなたたちです」

「……………」

セイ・ホワイトは沈黙した。そして。

コートの中に手を入れて、隠していたハンドガンを取り出した。

それをすぐに、床に置く。

「武器を捨ててください」

その言葉が、エルクや警備員に向けられた発言であるということを理解するまで、時間がかかった。

もつとも顕著な驚きを顔に浮かべたのはエルクだったが、そのまま特に逆らわず、着ていた古着のジャケットを脱いでまるごと床に置いた。あの中に大量の武器が隠されていることは、リリイも爆竹を放たれた時点で直感していた。腰に携えていた警棒も外す。ライフルは、もう持っていないようだった。

警備員もまた、警棒をあわてて置く。

「グラウンドから、外に出ます」

ロールはそう言って、ただ、セイ・ホワイトの方だけを見つめていた。

「外にいた警備の人間を、解散させてください。決してわたし達を追わせないでください。今すぐに」

セイは黙ったまま、通信機を取り出した。

彼は受話器に向けていくばくか言葉を発すると、すぐにスイッチを切る。まもなく警備のバイトが引くはずだと、簡潔に述べた。ロールはうなずく。

「あなた達は、今置いた武器から離れて。そして、離れた場所から、決して動かないで。わたし達は、ここにカメラを置いたままで脱出

します」

念を押すような言葉が、震える声で続いていく。

「脱出の間に、わたしや二人に何かがあれば、この子たちが暴れ回ります。わたしが、無事に目的地まで帰ることができたら、この子たちもまた、窓から飛び立って、あなた達を解放します。そのようにプログラムをされています」

「我々全員が人質、そして最悪の事態なら、この街の全てが人質、ということですね」

セイが要約すると、ロールは頷く。

「ええ。だから、決して動かないで」

その命令で、会話は終わった。

ロールは三匹の獣を残したままで、ここに来たときに乗っていた一匹だけを護衛に、移動を始める。ごく普通の少女が、ごく普通に歩くようなぱたぱたと軽い足取りで、こちらに　スティアの方に、やってきた。

妹と顔を合わせて、スティアは何も言わなかった。だが、呆れたような苦笑を、ほんの一瞬だけ、唇に浮かべた。

ロールはその笑みを見てほっとしたのか、ほんの少しだけ笑った。そして、深く息をつく。

スティアが立ち上がり、ロールよりも早く歩き出す。彼は、迷っているリリィを手招きしてから、すたすたと行ってしまった。呆然としつつも、リリィは追いかける。しんがりをつとめるのはロールだった。セイらに注意を向けながら、気絶したテッドを置き去りにして、三人は学校から脱出する扉を潜った。

外の空気が、ずいぶんと久しぶりに感じられた。変な感じだった。あれだけ出口が遠かったこの建物が、こんなにも静かになってしまった。

グラウンドを横断して、外壁の所までたどり着く。スティアが心得たように、壁の上部に手をかざした。扉に張られた、赤く錆びた有刺鉄線がブツンと切れた。そのまま額に手を当てる。緑色に輝く

手の甲から、風が生まれる。跳んで、と、彼は言った。

タイミングを合わせると、リリイは、嘘みたいに高く軽く跳躍する自分を見下ろして呆然とした。足に絡みつく不思議な風。鉄線がなくなつた壁の上に立って、そして同じ術をもう一度使つて、三人で壁を越えた。

外の道路に出ると、そこには一台、自動車が止まっていた。

内側から、助手席の扉が開く。運転席に座っていたひとりの女性が、身を乗り出してこちらを見ていた。年齢は二十代の後半といった所だろうか。知らない人間だった。うしろに一つで縛つた髪と、飾り気のない服装、大柄な体格、そしてこの場にそぐわない強気な笑みなどといった全てが、非常にパワフルだった。

「さ、早く乗って！」

ロールが助手席に身を滑らすと同時に、ステイアが後部座席の扉を勝手に開ける。そのまま乗車した彼を追つて、リリイも慌てて飛び込んだ。扉を閉めると、その瞬間に発進した。予想外のタイミングとスピードに、リリイは体勢を崩して腰を滑らせてしまう。だがステイアもロールも、この乱暴な運転には慣れてしている様子だった。

景色がめまぐるしく変わる。車道から離れた歩道を好き勝手に通り抜け、すぐに、今いる場所が分からなくなつてしまった。

住所も分からない場所で下ろされた。レイバの家に勝るとも劣らないボ口屋だった。車を運転してくれた女性は、リリイたち三人だけを残して、別の場所にまた走つていつてしまった。啞然とするだけの時間ももらえず、訳知り顔のステイアに背中を押されて、リリイはその家の中に入った。中は外観よりもさらに意味不明だった。玄関から伸びる廊下にはひたすら段ボールが積み重ねられて、その手前には、いきなり地下へ続く階段があった。

わけが分からないまま、ステイアとロールの案内で、その地下道に降りた。コンクリート製の壁や床が、つけっぱなしの小さな明かりに照らされている。入り組んだ道だった。何度も曲がり、いい加減に帰る道が分からなくなつてきたあたりで、ステイアが指した梯

子を登った。そして。

人家のあたたかい明かりが、目を刺激する。

たどりついたのは、どこかの家の内部だった。床に開いた蓋が開けられて、それがそのまま、この地下通路に通じていたようだった。知らない人間が大勢いた。こちらの到着を待っていたとでも言うように梯子を囲んで、歓喜の表情で覗いてきている。男性が多いが、女性もいる。白衣や作業着を着た人間が多く、全員が同じ組織の人間であることを、一瞬で意識した。そして。

その人影の中で、ひととき目立つ人間がいた。脱色した明るい茶髪に、耳を浸食するシルバーピアス。

「リリイ！」

レイバは、這いあがったばかりのリリイが事態を理解するより早く、他の人間をかき分けて、思い切り抱きついてきた。

「お疲れさん！ ごめんね！ 愛してるから許して！！」

ひたすらに軽い謝罪を受け止めながら。

リリイは先ほどまでの恐怖や緊張を一瞬だけ忘れた。まったく変わらないレイバの声が、重い疲労と呆れになって、ずんと肩にのしかかるようだった。

その男の第一印象を率直に言えば、不躰な人間だと思った。

「お前、アリビートさんちの子だよな？」

初めて会った日の彼は、大きな体がかがめて、こちらと目線を合わせてきた。栗色の短髪。まっすぐな薄茶の目。

「名前、言えるか」

「……ステイア」

喉の奥から絞り出した声は、子供らしい甲高さを保ったまま潰れていた。我ながら、哀れを誘うような音だったように思う。

だが目の前の男は、ほっとしたように微笑んだ。ぼろぼろになった服をまとって、ぼろぼろの声を絞り出した子供を目前にして、明るく笑いかけてくる。

「よし、偉い。ステイアか。女みたいな名前だなあ」

よく言われる。

ステイアは慥然とするが、男は気にした様子も見せなかった。

「ま、でも似合ってるからいいじゃんか。顔も女の子みたいだし」  
それもよく言われる。

九年間生きてきて、目下の所、もっともプライドを傷つけられる侮辱はこれだった。母親の遺伝子を、何度恨んだかは知れない。

だが目の前の男は、見たままのことを、見たままに言っただけでも言うように、気持ちよく笑っている。なぜだか、それほど腹も立たなかった。あるいは。

「でも、立派な男の子だな」

ごつごつとした手が、ステイアの頭に包み込むように触れた。そのまま、大ざっぱに髪を撫でくり回す。

「妹のこと、ちゃんと守ったじゃねえか」

その言葉を聞いて、急速に現実が身に染みた。

鼓膜に違和感を残した、巨大な振動と爆音。灼けた大地の焦げた

臭い。ゴミのような粉塵を交えたぬるい風。フラッシュバックする。ついさつき、起きてしまった非現実の全て。

乾いた空気の中で、あつという間に広がった炎が、頭から離れない。包まれた街から、わずかに聞こえた人々の悲鳴も、耳に残って離れない。

ぐつと、目を閉じる。そして開いた。ここは、街じゃなくて森の中だった。街から逃げて、たどり着いた場所……。

妹は、スティアが立つすぐ横の地面の上に、寝かされていた。命の別状なく寝息を立てている。六歳になったばかりの、自分のそれより小さな手足。大きな怪我は何もない。だが、それ以外の全ても、何もない。

血臭が鼻腔を刺激する。獣の死骸が近くに転がっていた。街から逃げた自分たち兄妹を、突然襲ってきた野犬だった。今は銃撃で絶命している。

街には戻れない。

きつと二度と、戻れない。

戻った所でどうにもならない。自分の家はもう、吹き飛ばされてどこにもなかった。妹しかいなかった。妹しか見つけれなかった。妹ひとりしか守ることができなかったのだ！ この無力な自分分は。

震えが止まらなくなった。スティアは一度にたくさんの顔を思い出した。学校の友人や教師。街の人。家で雇っていた使用人。

のんきに笑う父。やさしく微笑む母。

母を恨みながら、鏡をにらんでいた自分。馬鹿だ。そんな些

細なことを気にしている間に、どうしても傍にいなかったのだろう。どうして今の俺は、お母さんがどこにいつてしまったかすらも、分からないのだろう。

涙が溢れた。止まらなかった。その感情を言葉にすることなど、当時の自分には出来なかった。いや、今でもきつと、出来やしない。何年経っても、どんな言葉を覚えても、あの時に胸を苛んだ圧倒的

な感情を、説明できる気なんかしない。

男は、泣き始めたスティアを、ぐいと引き寄せて、抱きしめた。これまで見たこともないような、大きな胸板と、たくましい腕だった。その温もりにくるまれて、スティアは歯を食いしばった。とめどなくあふれる涙が枯れるまで、ずっとそうして、泣いていた。

その男に甘えながら、なぜ目の前にある温もりが、父でも母でもないのだろうと、失礼なことばかりを切実に思っていた事を、よく覚えていた。

開いた瞼の隙間から、景色が滲んでくる。

くすんだ灰色のコンクリートの天井と、同じ素材の壁。窓のない地下室に固有の湿った空気。電球の色あせた鈍い輝き。

スティアは目を瞬かせて、それらの景色を意識と馴染ませた。ゆっくりと、半身を起こす。奇跡的に、意識はしっかりとしていた。

(……薬、飲み過ぎた)

ベッドの周りにずらりと並んだ、医療機器の群れを見とめながら、この光景をハッキリと見ている自分に、違和感を覚える。寝起きに特有の、死にたくなるような虚脱感が、今はない。

(たぶん、あとがキツいな)

憂鬱な心持ちで、ベッドから足を滑らせた。靴を捜し当てて足だけで履くと、すぐに立ち上がる。

見慣れたいつもの病室だが、朝の診察を受ける必要はもうない。先日の検査で合格をもらって、今は勝手に動くことを許可されている。

とはいえ、この施設にいる限り、自分が寝る部屋は、他に空いていないのだ。

スティアは、部屋着の袖の上から、右肩から右腕にかけての自らの体に、なぞるように触れてみた。特に異常もなければ、違和感もない。

その右手で、乱れていた前髪を、軽くかき揚げてみた。まったく不具合なく動く。

機械でできた手の甲を、額に当てた。消えていたランプの光が点る。鮮やかなイエローに。

「……言わなきゃ」

夢の中で見た栗色の髪を、思い返した。

\*\*\*

本来、リリイは早起きだった。

二人分の朝食を準備する時間と、二人分の弁当を詰める時間。身だしなみを整える時間、歩いて通学する時間、朝の訓練場で軽い運動に取り組む時間。それら全てに手を抜かず、遅刻しないようにするには、どうした所で早く起きることが必要だった。続けているうちに、自然と習慣になってしまった。

だが今は、どうしても起きる気がしなかった。

借りたベッドの上で、布団をかぶったまま、リリイは寝転がりながら窓を見ていた。カーテンは閉めたままだが、そのベージュの布地を越してなお、日の光の明るさがよく分かる。時計を持ってきていないので感覚だが、もう昼に届くだろう。

レイバが客室と呼んだこの部屋は、昨晚、地下からたどり着いた場所の、二階の端にあった。三階建てのこの建造物は、デカルト・シティの基準で言えばかなり広く、個人が所有する家屋ではなさそうだと見当がついた。だが、追求を深める前に、通された部屋でリリイは眠ってしまった。

客室には、ベッドとサイドテーブルと鏡台しか置いてなかった。殺風景ではあるが、散らかっているわけでもなく、一晩、身体を休めるには上等な場所だった。

だが、まだ、気だるかった。昨日の戦闘の疲労もあるだろうが、もっと単純に、起きるのが億劫な気持ちだった。もう何時間かは、こうしてぼうつとしている気がする。

色々なことが、頭を回っていた。通信機。届いた電子メール。偽物の父親。病弱な少年。魔法。レアリス・カンパニー。得体の知れない獣。知らない施設にいたレイバ。

考えなきゃいけない。だけど、考えたくない。

通信機が手元になかった。父はもういないのだ。ずっと昔から、いなかった。

ノックの音がした。

「リリイは視線を上げる。」

この部屋は、広いこの建物の中でも、端の方に位置している。わざわざ、起こしに来させてしまったのだろうか。誰が？

「リリイ、寝てる？」

ドアの外から聞こえたのは、知っている人間の声だった。

リリイは予想外の来客に驚いて、半身を起こした。昨日、あれだけの疲労の色を見せた彼が、もう活動を開始しているとは、思ってもみなかった。

「寝てたり、気が進まないんなら、無視してくれていい」

ドアを隔てて、ステイアは淡々とそう言った。

「だけどそうじゃないなら、入れてほしい。今日は、事情の説明とかそういうの含めて、レイバ達と一緒に、話すことがたくさんあるんだけど……その前に」

言葉を切って、続く一言を、はっきりと発音した。

「俺が個人的に、君と二人で話したいことがあるんだ」

断ることは簡単だった。彼が自ら、そのチャンスをくれている。だけど、かたくなに拒否するような、意地があるわけでもない。

リリイは自らの髪に触れた。寝ていたのだから当然、ぐしゃぐしゃだ。テッドの銃で切られてしまった部分も含めて、ひどく不格好だった。顔もまだ洗っていないし、借りた寝間着のままだし、身体

の半分は布団に潜り込んだままである。

だが、身だしなみを意識することすらも、今は面倒だった。

「……どうぞ」

髪だけを軽く整えながら、自分でない自分が声を発するのを、リイは他人事のように聞いていた。

扉はすぐに開いた。姿を見せたステイアは、昨日と違う上着を羽織って、再び体格を隠すような格好に戻っていた。先日着ていたジャケットは、学校に脱ぎ捨てていたはずなので、違う服を着ているのは当然だが、どうやって着替えを用意していたのだろう。リイのベッドのサイドテーブルには、昨日着ていた服が畳んである。

ステイアは、ベッドに座ったままのこちらを見て驚いたようだが、その驚きの表情は、すぐに隠した。後ろ手に扉を閉めて、歩み寄ってくる。

すぐ傍までやってくると、無造作に窓辺に寄って、閉まっていたカーテンを開けた。

「これじゃ、見舞いみたいだね」

リイが日差しを眩しさに目を閉じていると、彼は苦笑した。

「寝てたなら、無理に通してくれなくても良かったのに」

「ううん。目は覚めてたから。ただ、ちょっと……だるかった、て言えばいいのかな」

なるだけ印象が悪くならないように言葉を探すが、結局の所、自分勝手な本音がこぼれた。

ステイアは、気を悪くした様子もなく笑った。

「いいんじゃない？ あんたみたいな性格の人には特にさ、だらける時間だっと思って思うよ」

「……でも確かに、いくらなんでもちょっとひどいね。ごめんね。こんな格好で」

寛大に受け止められると逆に居心地が悪く、ようやく恥ずかしくなってきた、リイはつぶやいていた。

「君が嫌じゃないなら、別に。それよりさ、外、見た？」

開いたばかりのカーテンの向こう側を、ステイアが指し示す。

昨日の夜にこの部屋に通された時にも見たが、近辺にはまるで人がいなかった。ひどく静かで、音がない。自宅付近のように、ごみと建物が詰められているわけでもなく、ガランとしている。小さな古いビルなどがいくつも見えるが、誰かが出入りしている様子はない。外から見た所で、どんなフロアが展開されているかは分からない。ならば、店舗の類ではないのだろう。

そのビルを越えた奥の方には、区画を分けるような石垣があった。奥から、石造りの神殿街の頭が見える。ひっそりと静謐で、チェス盤のように整備された、立ち入り禁止地区だ。

「教区」の近くの？」

問うと、ステイアは首を振った。

「厳密には違うかな。まあ、似たようなもんだけど。その点については後で説明するよ。俺が言いたかったのは、ここが君の学校や、自宅からはちよつと離れた場所にあるってこと。景色に、見覚えはないでしょ。」

リリイは頷いた。

「だから、君が自分のやりたいことを、個人的に行うには、ちよつと不向きな場所だよな。」

「……………」

「でさ、ちよつと、俺が勝手に調べたことがあるんだ。聞いてほしい。」

ステイアは、いたずらっぽく笑った。

「キツイこと言って泣かせたり、尻触ったあげくに銃を突きつけたり、抱きついたり、七階から突き落としたりした、お詫びにいつたら図々しいけど。せめてもの罪滅ぼしに。」

「……………改めて並べると、けっこうんでもないね。」

リリイがつぶやくと、ステイアは悪びれるでもなく、堂々と頷いた。だが、すぐにそのふざけたリアクションを止めて、こちらを見る。

「最初に謝っておく。君の通信機はまだレイバが持つてる。それ、勝手に使わせてもらった。ごめん」

出し抜けにまた、とんでもないことを言うが、もはや今更だった。リリイが無言で続きを促すと、ステイアは続けた。

「エミリさん、だっけ」

ステイアの口から、面識がないはずの級友の名前が出て、リリイはどきりとした。

「彼女は、何の事情も知らないようだったよ。学校が破壊されていたことにも、君と連絡が取れなくなったことにも、心底驚いていた。演技ではなかったと思う。実際に話してきたけど」

あつさり言いながら、ステイアは窓枠に肘を置いた。

「ケイトに　ああ、ケイトってのは、昨日ここまで運んでくれた女の人ね。彼女に頼んで、車で学校に行ってみたんだ。どういう事件として処理されているのか、キメラはちゃんと退散したのかどうか、いろいろ気になってたから。そのついでと言ってはなんだけど、レイバが認識してる程度には君と親しそうな人と、話してきた。君の通信機で連絡がつく範囲だけだけど」

「昨日の今日で、学校に行ったの？」

信じられない思いで聞くが、ステイアはあつさりと頷いた。

「昨日は、決戦に備えて定着剤を飲み過ぎたみたいでさ。めっちゃ早く目が覚めたし、体調も良かったから。まあ、こういう時はあと三日分くらいまとめて疲労がきて、動けなくなるんだけど……ってそれはどうでもいい。とにかく時間があつたし、気になってたから。変装してつたし、そうバレるようなもんでもないって」

「そ、そうなのかな……」

「実際、見つからなかったんだし、そのへんは気にしないでいいよ。とにかく、学校は大騒ぎだったよ。試験の採点期間だったから本当なら休校だったみたいだけど、生徒たちが噂をきいて野次馬になった。エミリさんもそこにいたよ。あんたのことを心配してた」

名前を反復されて、胸がざわついた。

「テリー・シモンだっけ。あんたの先生。エミリさんを通じて、その人にもいろいろ聞いたよ。彼はあんたの事を、すごく褒めてた。あんたが本社に特別視されている生徒だっことは、知らないわけじゃなかったみたいだけど、実力以外の成績は、一度だっけ書いたことがないって言ってた。将来を期待してた、ともね」

教官の顔が頭に浮かんだ。実地演習の時の、穏やかな笑顔と厳しい指摘。シモンは決して、リリイを甘やかしたりしなかった。厳しい課題を投げて、厳しい成績をつけてくれた。

「昨日、俺が侵入する直前に小火騒ぎがあつたのを覚えてる？ あれを起こしたのは、ジャンなんだ」

リリイは目を丸くした。

ステイアはそんなこちらの反応を見て、苦笑する。

「外部の警備が厳しかったから。隙が生まれるような派手な陽動が欲しかったし、セイ・ホワイトを外におびき寄せたかった。生徒をひとり拉致している状態だったら、カンパニーは非常事態にあつても助けを呼べない。消防団を呼ばずに消火するには、セイ・ホワイトの特殊能力を使うしかない。そのための協力者として、警備で外に突っ立ってたジャンを、俺が利用したんだよ。あんたの銃を借りて脅したんだ。ちょっとでも罪悪感があるなら、入り口の植木に火を放て、てね」

ステイアは左肘を窓枠についたまま、右手で首筋に手を当てた。手袋はもう、両手ともにつけていない。

「その時に少し話したんだけど、あいつら二人とも、スパイではあつたけど、そう派手な仕事もしてなかつたみたいだし、事情もよく知らなかったみたいだよ。少なくとも、あんたの行動を逐一監視して、あざ笑っていたっていうレベルではない。普通に日常を過ごす中で、リリイ・ブルーノの身に変わった事があるたびにカンパニーに報告すると、小遣いがもらえるって程度のバイトだっただけで言った。強攻策に協力させられたのは、昨日が初めて最後だったから、すごく驚いたって。今まで小銭をもらっていたのは事実だし、それ

を許すか許さないかはあんたが決めればいい。でも、心配してた。ジャンも。たぶん、リックとか言うもう一人も、同じようなもんだと思う。セイがいる限り絶対に火事にならないって俺が断言しただけで、学校に火を放つ協力をしてくれたくらいだからね。わりと乗り気で、こつちがびつくりした」

呆然とするこちらに微笑みかけて、ステイアはそのまま続ける。

「二十番地区で会った時のジャンとリックは、あんたが誰と会っているのかを確かめるために遣わされたらしい。会っていた相手が俺だったことが、カンパニーにとって最悪の結果だったんだ。それはとにかく」

言葉を切って、こちらの目をまっすぐに見つめてきた。

「あの時、すぐにあいつらが去っていったのは、上官であるテッドに報告に行くため。『待ち合わせ』をしてるってのは、そっちの意味。嘘の待ち合わせ相手をあんたに伝えたのは、リリーの追求を確実に撒くための、とっさの言い訳だったんだってさ」

リリーは、二十番街地区で会った時の、ジャンとリックの様子を思い出していた。

お前らが来られないから、別の奴呼んだの。リリーは来ない方がいいよ。

「ラルフ、で合ってる？ あんたの昔の彼氏」

ステイアがどこまでもあっさりとして、リリーにとっては、口にすることすらも躊躇してしまうような、その名前を呼んだ。

「彼はまったく関係がない。あんたとレアリス・カンパニーの事情を何も知らないし、例のバイトにも参加しちやいない。ジャンとエミリさんに聞いた情報からの、俺の独断だけだね」

唇が乾いていた。いつしか、開いていたまま、塞がっていなかった。

「ジャンとリックとは、彼を通じて知り合っただってね。ラルフさんが仲介して、あんたの周りにスパイを引き寄せたって思ってるといけないから伝えとくけど、そうじゃないよ。それだと順番が違

う。ジャンに聞いた話だと、彼はカンパニーから仕事を受けた後に、リレイ・ブルーノという生徒に近づく口実を探して、初めにターゲツトの恋人と仲良くなつてから、自然に接近することを選んだつて言つてた。ラルフさん本人が、監視のためにあんたを誘惑したわけじゃない。他人が勝手に、あんた達の恋愛を利用しただけだ。彼は、まったく関係がない」

そこまで言つて、ステイアは肩をすくめてみせた。

「こうしてざつと調べただけで、テッドが言つてたことが、どれだけ大袈裟に盛り上げた大ボラだったかが分かるでしょ」

リレイが何も言えずにいると、ステイアは照れくさそうに笑つた。「俺みたいな他人に、プライベートな人間関係を調べ尽くされるのは、あんたにしてみれば気分のいいことじゃないよね。でも、悪い。どうしても伝えなかつた。あんたは、何を信じればいいのか分からないって言つてたからさ」

ステイアは続けた。

「嘘を本当だと証明することは難しいけど、本当のことを嘘だと言ひ張ることは簡単なんだ。本当のことを本当だと証明するよりも、きつとずっと簡単。なんでこんな実感たつぷりに言えるかつて言えば、まあ、俺も嘘つきだからなんだけど」

リレイは、テッドの言葉を思い出していた。

すべてが嘘だったお前の日常で、本物だったのは俺との会話だけだ。

その言葉が、嘘ならば。

「どこまでが嘘で、どこまでが本当がよく分からないこの現実でさ、あんたなら、いきなり現れた不気味な男のわめきと、心配してくれているクラスメイトと、どっちが信じられる？」

比べるまでもなかつた。

だが、答えることも出来なかつた。理屈はどうあれ、現実がどうであれ、リレイは先日、セイヤテッドに逆らえず、自分を捕らえることに協力していたジャンとリックの姿を見てしまつていた。その

時の失望と絶望は、まだ、忘れられそうにない。

ステイアは穏やかに笑んだ。

「別に、全部を許せって言うてるわけじゃない。ただ、知っておいて欲しかったんだ。あんたがこれまで感じてきたことは、間違いだけじゃない」

彼は右手を指し示すように前に出して、機械で出来た指先を開く動作をした。

「テッドに向かって言うていたよね。嘘も本当もひっくりかえして、自分を育てたって。その考え方は好きだし、正しいと思う。けど、あんたが嘘だと疑っている部分にも、本当のことや、誰かの誠意はあったんだよ。間違いじゃなかったことが、たくさんあった。たぶん、あんたの世界は、今あんたが思っているより、ずっと優しくなかったんだよ。……で、ここからが、一番言いたかったことなんだけど」

開いたばかりの指を、軽く握るように丸めた。

「今まで言ったことは、全部が伝聞だけど、俺の目から見て、あんたの信じていたものを一つ、正しいと言えるよ」

「え？」

「ガイルさんは、かっこいい人だった」

きつぱりと、そう言われて。

リリイは、ステイアの顔をじっと見返した。

ステイアは初めて、こちらの視線から逃れるように、そっと目を逸らして、ごまかすように笑った。どんな時でも、堂々としていた彼には、珍しい動作だった。

「世界で一番、かっこいい人だった。何年経っても忘れられなくて、尊敬の気持ちを捨てられなかったのなら、それは俺にしてみれば、賢明だし、正しい判断だと断言できる」

「私は、別に……」

「父さんのことなんか好きじゃなかった？ それでも上等だよ。嫌いではなかったでしょ」

そのまま彼は、なんだかとても悲しそうに笑った。

「俺にしてみればそれだけで、あんたの信念は、圧倒的に正しかったって言えるよ」

「あなたは、父さんの何なの？」

思わず口から零れた質問に、ステイアは黙った。

リリーのベッド脇にあるサイドテーブルには、昨日着ていた服が、たたんで置いてある。中身をなくしてしまった拳銃のホルスターも、その近くに置いてある。

お守りを入れていた箇所に、一つのライセンスがしまっている事を、忘れていたわけではなかった。ずっと、気になっていた。

ステイアは、窓枠から肘を外して、重心を両足に戻して立ち上がった。

「心の準備が出来たら、着替えて、身支度をして、一階に下りてきて欲しい」

ポケットに手を入れながら、そんなことを言う。

「食堂があるから。昨日の夜から何も食べてないでしょ？ まあ、ケイトの料理じゃたぶん、あんたが自分で作るより、味は劣ると思うけど」

突然の話題転換に乗り切れず、リリーが黙っていると、ステイアは淡々と続けた。

「飯でも食って、本当に落ち着いたら、その時に話すよ。全部話す。君の父さんのことや、俺たちのこと。今度こそ、俺に言えるだけの本当のことを」

そこまで言って、ステイアは苦笑した。

「なんて、当事者が『本当』なんて断言するのは、今の君には皮肉か。判断をするのは君だからね」

「……………」

「今は情報量が多すぎて、パンクしそうですよ。時間はあるから、ゆっくり気持ちを整理して欲しい。申し訳ないけど、俺もレイバも、混乱している人につまぐ説明ができるほどには、気が利かないから」  
ステイアはそう言って、右手を上げた。

「……それじゃ、また後で」

軽くそれだけ言い残して、彼は部屋を出て行った。その足取りは出会った時と変わらず、体重を感じさせなくて頼りなかった。

扉が閉められてから、リリイは自分の格好を見下ろした。そして、エミリのことを思い出した。シモンのことを、ジャンのことを、リツクのことを……ラルフのことを。

楽しかった。

学校生活は、楽しかった。それだけのシンプルな現実が、身に染みた。胸の奥が潰れる。瞼と鼻の奥が、じんと痺れた。

父に送るメールを考えることも、楽しかった。画面の向こうにある、裏表のない笑顔を想像するだけで、どんな悩みもバカバカしく思えた。父に会う日を想像して、一人前になった自分を想像して、訓練に励むのは、時々とても辛かった。でも、楽しかった。嬉しかった。

もう、二度と戻ることはできない。

これからのような道を選ぼうと、あの日常とまったく同じものは、二度と作り上げることができない。

そう確信すると、嗚咽が溢れた。抑えようとすが、しゃっくりが止まらない。熱い雫が、頬の上を滑って流れ落ちた。

窓の外すらも殺風景な、借り物の客室。誰もいない。

ステイアがさっさと出て行ってくれた理由を察しながら、リリイはしばらく泣いていた。泣きすぎて、わけが分からなくなるくらいに、思い切り泣いた。

他人の目がある場所では泣けない性格だった。ひとりきりの時でも、どこかで見ていそうな父の姿を勝手に意識して、うまく泣けない性格だった。けど、今は、父の視線なんてない。世界中のどこにも、想像の中にすらも、もう存在しない。

これつきりにしよう、と、心の中の冷静な部分が、そんなことを考えていた。ここで思い切り泣いて、落ち着くまでひたすら泣いて、それから現実を見よう。顔を上げよう。

泣いているリリーの脳裏を過ぎったのは、五年前に見た父の背中  
だった。

身だしなみを整えて、鏡台に自分の姿を映す。髪型がひどく不格好になっっているのが気になって、リリイは毛先に指で触れた。テッドの銃弾をかすめて爆ぜたその部位は、ぼろぼろになっただけで乾かしきっていた。

はさみが置いてあるわけでもないのに、リリイは仕方なく、そこを整理することをあきらめた。ぱしっと気合を入れるように頬を両手で押さえこむ。髪型を気にすることが出来る程度には余裕ができたならば、大丈夫。念じるように勢いづけて、部屋の出口の扉を開けた。

夜に歩いた時には気にとめていなかったが、昼間になれば、この建物の広さが改めて分かった。

壁一面に広がる窓と、まっすぐに長く延びる廊下と、それに沿って並ぶいくつかの扉。その構造は、故郷で通った初等学校を思い出させた。決して新しい建物ではなく、壁の隅などに老朽化の兆しが見える。だが、よく掃除が行き届いているようで、居心地の悪さは感じない。

廊下の端に、昇りと下りの階段があった。リリイは言われたとおりに一階に降りる。

同じような構造のフロアが続いたが、一階は部屋の扉がやたらと大きかった。ステイアが言っていた食堂だろうか。

開きっぱなしだった両開きの扉から中を覗くと、おおそ想像通りの光景だった。学校の食堂ほどに広くはないとはいえ、テーブルと椅子を、六セットほど設える程度には、広さに余裕がある。端は厨房のカウンターにつながっていた。ここが食堂であると考えて間違いないだろう。

入り口に近い場所で、白衣を着た見知らぬ男と、同じような格好をした女が、食事をしていた。

彼らはリリイに気づくと、ああ、と納得をしたような顔をして、友好的な笑顔を浮かべた。そのまま、部屋の奥を指し示す。

ステイアとレイバが、そこにいた。スープにひたしたパンを頬張るレイバの前で、何も食べていないステイアが肘をついている。二人は会話をしていたようだが、リリイの接近に気づくと、ステイアは場所を示すように軽く手を上げた。

食べ物を口にしながら振り返ったレイバは、リリイの目がひどく腫れているのを見て、驚いたようだった。ステイアの方は何も言わず、表情もまったく変えなかった。

「おそよう」

パンを飲み込んだレイバが、いつもの気楽な口調でそう言った。

リリイは答えず、部屋からずつと右手に握っていたものを、レイバらがかけているテーブルの上に置いた。離れた手の下から現れたものは、銀色のプレート。

ガイル・ブルーノの名が刻まれた、ガードライセンス。

「聞きたいことが、たくさんあるの」

リリイはきつぱりと言った。

「何が起きたのか、ここがどこなのか、これはなんなのか、父さんは、なんだったのか……全部教えて」

「飯も食わずに、せっかちな。って当たり前か」

レイバはパンをもしゃもしゃと頬張りながら、気楽に言った。

「俺、食事中だから、説明役はステイアにパスね。こっちに座ってレイバの隣の席につくと、彼の正面にいるステイアと目が合った。彼もまた、なにげない口調で、同じ事を聞いてきた。

「お腹空いてるなら、無理せず食べながらどうぞ。もう二時だし」  
「……食べる気になれないよ。あなただって、何も食べてないじゃない」

「俺は普通食が摂れないって、言わなかったっけ」

「あなたの生い立ちは嘘だったんじゃないの？」

「演技で飯は抜けないよ」

ステイアは笑った。

「ま、君の言い分も分からはないか。手短に話して、手短に納得してもらって、夕飯には間に合うようにすればいいかな」

「どう短縮しても、長い話になりそうだけどなあ」

レイバが口をもごもご言わせながら口を挟む。その不作法に苛立つて、リリイは思わず、隣に座る彼を肘で突いた。「痛って！」

「とりあえず現状の説明かな。ここはレイバの職場だよ」

レイバの悲鳴を無視したステイアは、食堂全体を指し示すように、腕を広げてみせた。

「住所は 教区 の内部。 居住区 からは、遺跡の影になって見えない位置にある」

「え？」

「十何年前に、だだっぴろい遺跡街を解析する上で、拠点として作られた建物らしいよ。今はレイバたち研究者の仕事場になってるけど」

「ちょ、ちょっと待って」

すらすらと続く説明を、必死で遮った。

「 教区 って……」

「そう」

「だって、立ち入り禁止区域でしょう！？ レアリス・カンパニーと テンプル が、保護をするために共同で管理しているって言う」

「その通り」

ステイアは雄弁に肯定した。

「だからこそ、カンパニーの技師や学者、 テンプル の権力者はここに入る権利を正式に持つてるってことだよ」

「どういう意味？」

「レイバは テンプル に所属する技術者であり、同時にやっかいごと専門の闇医者なんだ。この施設に出入りして、この施設で仕事をやる正式な権利を持っている」

理解ができず、思わずレイバの方を見た。

スープを飲み込んだレイバは、あっさりと言いついてみせた。

「ほら、俺言つてたつしよ。仕事仲間で寄り集まって、仕事場を借りている作るって」

「き、聞いてたけど……」

「依頼主とかの説明を省いたのは悪かったよ。でも、お前に言つてもワケ分らないだろうし、言う必要もないかなって思つて。守秘義務とかそういう、面倒なこともあるしね」

悪びれる様子もなく、レイバは快活にそう言った。

「でもちよつと待つてよ。そもそも、　　テンプル　　って、あの　　テンプル　　なの？」

反復するように問いかけながら、リリイは思わず　　テンプルの定義を胸の内で確認してしまった。

森人信仰を掲げる、大陸でもつともポピュラーな宗教であり、議会やレアリス・カンパニーに追随する、現在の大陸における重要機関のひとつのはずだ。

デカルト・シティの面積の三分の一を占める　　教区　　は、森人の残した都市の遺跡である。それを研究するために考古学者がキャンプを築いたのが、この街の起源であると言われている。

森人の残した魔法文明は、レアリス・カンパニーが開発した通信技術や　　シエルター　　、　　ストーン　　などを中心に汎用化が進められており、今や生活に欠かせないものになっているが、そういった文明的な側面ではなく、思想的な側面で森人を崇める団体もまた存在した。それが　　テンプル　　である。森を使役していた森人を奉ることで、魔法を崇敬し、自然を崇敬する、そんな思想を掲げていたはずだ。

デカルトは技術者の街であり、遺跡の街である。信仰を定めた法令はなく、住民の自由意志が尊重されている。だからこの街では、遺跡の近くにいることをありがたがる敬虔な森人信者と、信仰にはまったく興味を示さず技術にのみ依存する無神論者とが、ほぼ同程度の割合で存在し、共存している。これはこの街の治安の良さを計

る材料になる程度には、珍しいことだ。デカルトと位置を近くする、リリーの出身地であるスピノザも同じようなものだった。

リリー自身は無神論者だった。だから、テンプルの権威については話に聞く以上の実感が無い。

とはいえ、教区 の入り口近くに場所を構える寺院が、礼拝堂として民間に解放されていることは知っているし、週の明けの講師会ではそれなりに賑わっていることも知っている。存在を当然のものとして認知できる程度には、テンプルの存在は生活にとけ込んでいる。カンパニーが技術で人を救っているのに対し、テンプルは思想で人を救っているというのは、ごく一般的な見解だ。

つまりは、宗教団体だ。

リリーは思わずまじまじとレイバを見てしまった。作業着に身を包み、健康サンダルを履いた、髪色の不自然な、ピアスだらけの叔父を。

「レイバ、前、宗教とかは嫌いだって言ってたじゃない」

「言ったけど、どっちかってーとお前をこっちに近づけないための防衛だったかな。自分の仕事のこと知られるのって、恥ずいじゃん」  
叔父はあっさりとそう言い放って、残りのパンをスープにひたした。

「それに、俺としては教義とかそういうのはどうでもいいんだよね。労働条件がよかったってだけで」

「労働？」

「レイバは教師として働いているわけじゃない。あくまで裏方仕事だからね。あんたがイメージする テンプル とは繋がらないような仕事しかしてないよ」

ステイアが補足した。

「寺院に幻想を抱いているのなら、ここから先の話は聞かない方がいいかもね」

「別に、そんなことはないけど……」

言いながら、その言葉とは裏腹に、リリーは居心地の悪さを感じ

はじめていた。先日レアリス・カンパニーの汚い部分を見せつけられてすぐに、助けてくれたテンプルの汚い部分も話されるのかと思うと、複雑ではある。

世の中のすべてがきれいごとで回っていると思っていたわけではない。そういうつもりだった。が　やはり、つもりはつもりにすぎないということか。

嘘だらけの世界には、薄っぺらな建前がばらまかれている。

きっとその建前こそが、人が望む平和を、空中に築いている大事な一線なのだろう。そんな風に、思った。

「レイバは正式にテンプルの一員だよ。で、ここはテンプルの所有する研究施設。白衣の人とか、作業着の人がやたら多いのはそういうこと。みんなみんな裏方で、寺院の教義には何も興味がない変わり者ばかりだ。構えなくても平気だよ」

「昨日の女の人も？」

「ケイトはまた別枠だけど、似たようなもん。彼女は技術者じゃなくて、雑用を一手に引き受けてる。交通の管理とかね」

ステイアは言った。

「この施設で行われている研究は、一般には極秘。特に民間のイメージだけで信頼を築いてる　テンプル　にしてみれば、カンパニー以上に外からの目には注意を払わなければならぬ。よって、この施設はこんなややこしい所にあるってワケ」

「地下を通って来たみたいだけど……」

「あんたがさらわれた、入り口の方から入ってもたどり着けなくはないんだけどね。　教区　の中では、カンパニーとテンプルの協定がある。実質的には縄張り争いって言えばいいかな」

「俺たちが所有している土地に、カンパニー側は入れないんだよ。管理をする上で、公平に二分割したんだ」

レイバが横から説明を加えた。

「テンプルとカンパニーは、表面上は提携してるけど、ぶつちやけるなら冷戦状態だからな。お手手つないで仲良く仕事はできないか

ら、ハッキリ線が引かれてる。そんでテンブルが管理してる地区は、わりとややこしい位置にあるんだ。どうせならややこしいものをもっとややこしくして、秘密基地にしちまおうぜって話で、こんなことになっただよ。遺跡に残されていた地下通路をフル活用して、入場を難しくしてる」

「俺とかレイバも、行って帰ってくる道くらいは覚えてるけどね。迷ったら出られる自信はない。ケイトはすごいよ。このあたりの道を完璧に把握してる」

ステイアが、厨房の方を目で指し示しつつ肩をすくめた。先ほどの言を思い出すに、今のケイトは台所仕事でもしているのだろう。ここからではその姿は見えなかったが。

あとできちんと礼を言つて、食事をいただくこう。そんなことを考えつつ、リリイは質問を重ねた。

「ステイアは、どういう立場でここにいるの？」

「聞こえがいいように言えば、レイバの部下みたいなもんだけど、正式には違う」

彼は苦笑した。

「俺とロールはここでは完全にゲストだね。ガイルさんのことを話すなら、そのへんの説明から始めないといけないけど」

「そういえば、ロールちゃんは？ どこかに出かけたの？」

「ちよつと外にね。気を遣ったんじゃないかな。出来ればロールのいない所で、あなたに説明を終えたかったし」

「……どうして。ロールちゃんは関係者じゃないの？」

「関係者だよ。関係者すぎるんだ」

ステイアは溜息をついた。

「あなたが知りたいのは、きっとガイルさんのことだろうけど、それを話す前にちよつと質問してもいいかな。あなたが、どれくらいの知識を持つてるかで、こっちの説明の仕方を変えなきゃいけないから」

「……知識？」

「たいしたことじゃないよ」

ステイアは言葉を切つて、こちらの顔をまっすぐに見た。

「グランドクロス と セカンド・グランドクロス が、いつに起きた、どういう事件だかは知ってるよね」

予想外の問いに、思わずぱちくりと瞬きをしてしまう。

知らないわけがない。一般常識だった。確認をするように答える。

「グランド が八年前。 セカンド が三年前。原因も正体も分からないエネルギー体が大爆発を起こしたことともなう、震災被害だつて言われてる。原因が分からない以上、双方の因果関係も不明だけど、無関係とするにはあまりに似た現象だから、セットで名前がつけられている……これくらいいい？」

「その口振りだと、教科書にもそれくらいは載ってるんだね。オツケー、次。グランド が発生した場所はどこ？」

「ノースグラウンドの、ハウアー・タウン」

「正解。グランド と セカンド がもたらしたものは、突然の大爆発と、それに伴った震災だけど、それらの物理的被害のほか、大陸全体に強い影響を及ぼした。それはなに？」

「獣の狂暴化と、森の活性化。誰彼かまわず生物を襲う 狂獣 の発生。ハウアー・タウンは、その被害で街としてのとどめを刺されたつて言われてる」

「その通り。じゃ、爆発もしくは震災に分類される グランド と セカンド が、獣を狂暴化させるに至った、直接のつながりを説明できる？」

「まだ説明されていないって習った。ただ……爆発の影響で、大陸じゅうのアニマが乱れて、動物の体に影響を与えたとて説が一般的だと思ってるけど」

「オツケー、優等生だね。じゃ、ちょっとだけ高度な質問」

ステイアは、こちらを試すように挑発的に笑った。

「実は、獣が狂暴化する兆候は、グランドクロス 以前にも動物学者とか自然科学者の間では囁かれていた。明るみに出たきっかけ

が グランド だったってだけで、もつと前から、ちよつとずつ動物は狂っていたんだよ。その兆候が初めて見られたのは、何年前だか知ってる？」

「えつと、ちよつと待って。習った。……だいたい、十四、五年前じゃなかったっけ」

「ほぼ正解。それくらい知ってれば、たいしたものだね」

問答を打ち切って、スティアは椅子の背もたれに体重を預けた。

「あなたの知識は、一般常識の範囲では完璧。でも、俺はその曖昧な認識に、もつと具体的な答えをあげられる」

「え？」

「獣の狂暴化が始まったのは、十四年前の九月二十七日」  
断言をした。

「 グランド が発生した場所は、ハウアー・タウン。爆心地は中心街のユゴー地区、三番地の二区の十九号、二階の西部屋」

「スティア？」

「獣が狂暴化した原因は、アニマの氾濫。強力無比なアニマの集合体が出出したことで、連鎖反応が起きて、はしゃいでしまっている」

スティアは、椅子に座り直して、腕を組んだ。

「うちの妹の誕生日は、十四年前の九月二十七日」  
顔をあげて、まっすぐにこちらの顔を見る。

「俺と妹の出身地は、ノースグラウンドの、ハウアー・タウン」

リリイには、何一つ言葉を発することができなかった。

「ついでに言えば、住所は中心街のユゴー地区、三番地の二区の十九号」

きっぱりとしたスティアの言葉の意味が、胸の中で再構築される。心臓が、冷たく鳴る。

「妹の左目に、無限のアニマの集合体である、真っ黒な眼球が覚醒したのは三年前。 セカンド・グラウンドクロス の日」

スティアは、こちらから目を反らさなかった。

「ガイルさんが亡くなったのも、 セカンド・グラウンドクロス の

日

聞き逃せない情報を、突きつけられたが。

だが、最後の一声に限らず、すべての言葉がリリイを縛り付けるように強く響いた。父のことを聞くはずだった。父のことを聞ければよかった。だけど。

ステイアの今の言葉を統合すれば、その意味は。

「学校を脱出する時、ロールの左目を見たでしょ」

リリイは固りかけた首で、なんとか頷く。ステイアは続けた。

「凶悪な動物の背中に乗っても、あいつは絶対に攻撃をされないんだ。同じように、狂獣のすべても、あいつを恐れて攻撃ができない」

「……え？」

「この大陸で獣が狂暴化をたどりはじめたのは、俺の妹が生まれた日だ」

強い口調で、そう言った。

「ロール・アリビートはすべての狂獣の王であり、生まれつきの神なんだ。それがすべての始まりさ」

\*\*\*

教区 を歩くことには慣れていた。殺風景な遺跡街。白く、四角い。いつもと変わらない。

ロール・アリビートは華奢な両足で、軽い歩調で散歩をしていた。ここ二年ほど、時間を持て余すたびに行う日課だった。行くことが出来る場所は限られている。代わり映えのない景色。最初は飽きたやがてそれを通り越した。今ではこの空気を吸わなければ、落ち着かなくなっていた。

昨日とは異なり、今日は風があった。春風のようなやわらかさで、髪や服をくすぐり、流れていく。

肌に触れるその暖かさが、心地よかった。  
左目を覆う眼帯を、外したくなった。  
だけど、それは、しなかった。

「はじめは分からなかった。俺も妹も、普通に生まれて普通に生活してたからね。ロールの左目も、生まれたときは青かったし。……そのへんの流れも踏まえて、本当に昔のことから、話させてもらおうよ」

ステイア・アリビートが生まれ育ったハウアー・タウンは、北大<sup>ノースクラウン</sup>陸の、主要都市のひとつだった。

情報都市ユングや、大陸首都フロイトと比べれば、街そのものの規模が巨大というほどではなかった。だが、南北の大地を横切るセントラル海峡からそれほど距離もなく、銀鉱山への鉄道ステーションからも近かったので、商業の拠点として機能し、栄えていた。

当時のハウアーには、大陸内の物流を手広く管理する大規模な商社が存在していた。その社長が、ステイアの父親だったという。

経営は順風満帆で、アリビート家は、豪商と呼んでも障りない程度に裕福だったらしい。街の名士として、一等地に邸宅を構え、適度に贅沢をしながら、平和に暮らしていた。八年前までは。

「グランドの被害規模については、一般的に広まっている情報で、ほぼ間違いがない」

食堂のテーブルに肘をついて、ステイアは静かに断言してきた。

「ある日突然、街の一点が異常に光って、同時に周辺のすべてが跡形もなく消し飛ばされた。本当に、跡形もなかった。死体もなかったらしい」

淡々と続ける。

「被災地はユゴー地区。かなりの広さがあった区画だったけど、中心からほぼ壊滅。はじっただけ微妙に残った程度。俺の家はもろに範囲内だった。親父の会社も」

ステイアは、左手で自分自身を指し示した。

「俺が助かったのは、友達の家遊びに行つてたからさ。親父の趣味で一等地に住んでたけど、学校は普通の所に行つてたから、バスで通学する程度には、家から遠かつたんだ。その時に俺がいた場所も学区内だったから、ぎりぎり爆発を免れた。地震はひどかつたけど」

説明を聞きながら、リリイは悲しくなった。隣で聞いているレイバは、すでに知っているからとも言うように、特に表情を変えないのだ。ステイアの説明も、整然としていて、迷いがない。

言い慣れている。

ゲスト、と表現した、彼の言葉を思い出した。

きつとステイアは、彼に関わつてきた様々な人間に、この説明を繰り返してきたのだ。こんな、口に出すのも辛いはずのことを。

ステイアはきつと、リリイがそう感じてしまった事を見抜いただろうが、あえて無視するように、冷淡に続けた。

「地震で火災が発生して、火災が爆風で広がって、水道管が死んだから消防団も役に立たなくて　そんな感じで、街は大混乱だった。その混乱をぐり抜けて、俺は自分の家に戻ろうとした。身ひとつでね。止められたけど、家族や家のことを考えると、いてもたつてもいられなくて」

そこで言葉を切つて、苦笑した。

「今思うと本当にバカだよ。救助隊も機能しない規模なのに、九歳のガキ一人で、なにができるんだつて話だよ。ひたすら走つたけど、道だつて分かりやしなかった。後悔した頃にはもう迷子さ。道路も建物も何もないくらいに、その区画全体が、完全に焦土になってた。暑さも半端じゃなくて、信じられないくらい肌とか喉が乾いて、結局、どこまで走れたかも分からないままで、倒れたんだ」

無造作に、左手で機械の右指に触れながら、続けた。

「でも走つた甲斐はあつたんだ。倒れた場所の近くで、妹を発見したんだよ。跡形もなくぼろぼろになつた街の中で、気を失つてた口

ールを」

どこか遠くを見るように、目を細める。

「気絶してたけど、あいつは無傷だった。今思えば、その時におかしいと思うべきだったんだ。けどあの時の俺はとにかく必死だったから、気づかなかつたよ。六歳の妹が、被災地に投げ出されているのを見つけて、なりふり構わず起きあがって、助けた。まさに火事場の馬鹿力さ。何も分からないながらに、俺はあいつを守るうとしたんだ」

悲劇的な過去を語りながらも、ステイアの声は、自嘲をするように冷たかった。

「一回倒れたから、方角が分からなくなってたけど、それでもやけくそに走った。でも運悪く、走った方向がハズレで、ほとんど街から離れていったんだ。そこで、なぜか突然現れた、見知らぬ人間に襲われた」

展開が、リリーの予想外の方向に転じた。

「大人の男が、ふたりがかりで。ぼろぼろだった俺とロールを、連れ去ろうとした」

「何それ……」

「その時は分からなかったけど、たぶんカンパニーの刺客だね」

ステイアはあっさりと言って、溜息をついた。

「まあ、それは後で話す。とにかく、何もかもがなくなって、妹気絶してて、暑いし辛いしわけわかんない。って感じに極限状態だったから、こつからは微妙に記憶が曖昧なんだけど」

言葉を切って、こちらの目をまっすぐに見つめてきた。

そして、口角をつり上げる。

「でも、その時に見たガイルさんの顔だけは、今でも覚えてるよ」「え？」

ステイアは、リリーの驚きに苦笑を投げながら、続けた。

「悪漢にさらわれそうになって、悲鳴あげながら喚いてた俺を、助けてくれたのは、旅人のガイル・ブルーノ」

「……………」  
「できすぎた話に聞こえるかな。生きてる人間が誰ひとりいない壊れた街で、タイミングよく救世主が現れたんだし」

呆然としてしまったリリイに向けて、彼はゆっくりと告げた。

「でも、完全に偶然ってわけでもなかったんだよ。ガイルさんがあの日にはウアーに来ていたのは、俺の親父に依頼された仕事を果たすためだったんだ」

「え？」

「俺んち金持ちだったし、親父は道楽に惜しみなく金を使うタイプだった。世界中の珍品を収集するのが趣味だったんだよ。自分じゃ動けないから、人をよく雇ってさ、大陸各所の珍しいものを集めてもらって、飾って見せ物にしてたんだ。家が軽く美術館状態だったね」

言いながら左手をあげて、呆れるようなポーズを作ってみせた。

「俺は親父の趣味になんか興味なかったから、よく知らなかったけど、察するにガイルさんとは気が合ったんじゃないかな。世界中の珍しいものとか、面白いものが好きな、ガキみたいな大人ふたりだったから。うちの親父はガイルさんのことを気に入っていて、お抱えのトレジャー・ハンターみたいな意識で、懇意にしていたような記憶がある。ガイルさんにしてみれば、うちはお得意さまだったってワケだ」

リリイは、故郷での生活を思い出した。

父親は旅に出ていた。母親は、小売店で販売の非常勤をする程度だった。だが、スピノザでの生活で金に困ったことはない。食べることに、窮したことはない。

母が病気でふせてからは、リリイが看病の片手間に家計をやりくりしていた。病床の母にかける費用を差し引いてもなお、日銭を軽く稼ぐ程度で生活ができるほど、貯金は貯まっていた。住んでいたのも、借家ではなく持ち家だった。

父は、著名な富豪の依頼を達成して一山当ててから、家財にたっ

ぶりと余裕を生んだと聞いた。

逼迫しない生活が、彼の放浪癖に磨きをかけていた事は、幼かったリリイにも分かっていた。

「当時の俺は、ガイルさんに会ったことなんかなかったけどね。うちの母親が、ちよつと特徴深い顔だったから」

ステイアは自分の顔を指し示すように、手を翳してみせた。

「認めたくないけど、俺もロールも生き写しだし、ガイルさんにはすぐに、俺たちが誰だか分かったみたいだった。今の時代じゃ、北にだって銀髪は少ないんだよ」

「ちよつと特殊な劣性遺伝子だしね」

レイバが、そこだけ口を挟んだ。

「そこんところは、俺としてはもうちよつと詳しく説明したいくらいに面白いポイントなんだけどなー」

「いらぬ。今はその話題じゃないだろ」

ステイアがにべなく、話を戻す。

「そうしてガイルさんは、俺たちを助けてくれたんだ。よく覚えてないけど、二対一だったのにあっさりと。不意打ちでもしたのかもしれないけど」

「父さんが……」

「後で聞いた話では、ガイルさんはたまたま、前日からその襲撃者たちと、同じ宿を取ってたんだった。ユゴーだと宿代高いから、ギリギリちよつと外れたあたり。事件があった前後に、その二人が妙に落ち着いててもものすごく怪しかったから、犯人なんじゃないかって決めつけて後をつけた結果、俺たちが襲われてた現場に行き着いたらしい」

常人なら、そんな行動をとらない。

だが、父なら確かにそうしていた気がする。いや、そうしていたに違いなかった。鮮やかに想像ができた。

奇妙な現実感に、リリイの胸はじわりと熱くなった。

「とにかく、俺たちは助けられたけど、その二人を撒くために慌た

だしかったから、街の方角には戻れなかった。どのみち火災が広がって、大変なことになってたから無理だったんだけど」

ステイアは、淡々と続けた。

「で、気づいたら街の外に出てて、その森で、凶暴化した野犬に襲われた。初期の狂獣さ。ガイルさんは、それも倒してくれた」

そのまま、何でもない風に、肩をすくめてみせた。

「で、森の中でようやく落ち着いたけど……あくまで、森の中だ。

それから二度と、ハウアーには戻れなかった。両親がどうなったかは知らないけど、あの様子じゃどこにも死体はないだろうね。俺が覚えてる グランドクロス の記憶は、これで終わり」

リリイが思わず黙ってしまうと、ステイアは快活に言った。

「リアクションに困ってるみたいだけど、別に気にしないし、思うままにしてくれていいよ。こんなのは、ただの現実にすぎないから、それこそ彼の方が気遣うように、穏やかに笑う。

「あんたが嘘をつけない事は知ってるし、どう受け止めてもらっても構わない。これからの説明に必要なことを、俺が勝手に話しただけだ」

ステイアがそう言うと、横からレイバが言葉を投げた。

「でもステイア、『哀れまれるのは嫌い』とか言っただけだ」

「……空気読めよ」

ステイアはレイバをじろりとらんで、ため息をついた。

「ごめん、気にしないで。……まあ確かに」

弁解するような口調で、ぽつりと呟く。

「俺をかわいそうだと思ってしまったのなら、あんたは後悔するかもしれないけどね」

「え？」

「残念ながら、あんまりかわいそうじゃない。俺もロールも」

ステイアは肩をすくめて、苦笑した。

「その話はあとですよ。とにかく、俺たち二人はガイルさんに引き取られて、とりあえずは狂獣から逃れるために、近くの街に急い

で逃げたんだ。あとは、たぶんあんたも経験があるんじゃないかな。商都ハウアー・タウンの壊滅と、獣の凶暴化で、治安も流通も情報も、どこもかしこも大混乱。シエルターが完成するまでの、慌ただしい時代だよ。そんな中で、ガイルさんは、自失状態だった俺とロールの面倒を見てくれたんだ」

リリイは当時の自分を思い出していた。グランドクロスによる情報の混乱。父の生死が分からなくなって、レイバに冷淡な言葉をかけられて、母親と抱き合って泣いていた、あの時期だ。

「自分だって家族と連絡が取れなくなって大変なのにさ。託児所にも預けろって感じだよ。まあ、ハウアーから流れた難民は他にもいたし、近隣の街は全部、獣の発生と合わせて余裕がなかったから無理だったのかもしれないけど。でも、ガイルさんが俺たちに構ってくれた理由は、たぶん、そういうのじゃなかったと思う。だってあの人、子供の世話していると、むしろ楽しそうだったからね」

ステイアは、懐かしむ口調で、そう言った。

「たぶん、俺があんたと同い年だったことと、ロールが女だったことが決定打だったんじゃない？ ふたり合わせて、自分の娘と立場が重なるわけだから」

「私？」

突然、自分が話題になってリリイはきょとんとした。ステイアはうなずく。

「本人にどう接してたかまでは知らないけど、あの人の親馬鹿オーブンぶりはすごかったよ。こっちは街も家族も失ってどん底なのに、自分の娘の話題とかで、マイペースにデレデレしてんの。正直、うるせー知るかって感じだったよ。最初は」

リリイが気恥ずかしさに口を閉ざすと、ステイアは笑った。

「リリイは四月十三日生まれのA型で、男勝りなおてんばだけど、実は料理や掃除が得意な、気だてのいい女の子だとか。もう覚えちゃって離れないよ。甘いケーキより肉が好きで、嫌いな野菜は嫌々食べるけど、セロリだけはどうしても無理でこっそり残そうとする

んでしょ？ 今は違いかもしれないけど」

「そんなこと言い回してたの！？」

今でも肉料理は大好きだった。

かーっと耳まで赤くなってしまう。

「あの時、うちですっごい心配してたのに、ほんとバカみたい！

あの親父！」

噴火したりリイを見て、ステイアは大笑いした。

「確かにね。バカは同意。ガイルさん、めっちゃ頑張って家族に電報を届ける努力をしながら、それ以外の時間を使って、めっちゃ頑張って俺とロールを笑わせようとすんの。普通は自分の問題にかかりきりだろうし、そうでなくても、傷心の災害孤児なんか、預けるべき場所に預けて、そっとしとくもんでしょ」

「うん」

「でもガイルさんのバカさには、ずいぶん救われたんだ。俺もロールも」

その笑みに、どこか暗い影を落として続ける。

「その街に滞在してる間、俺たちはテンプルの寺院にいたんだ。公共の体育館とか、空き地に作ったキャンプとか、そういつた施設も難民のために解放されてただけ、俺たちが割り当てられたのは寺院の礼拝堂だった。今でこそ、こうしてテンプル関連の施設に世話になってるけど、当時の俺にしてみりゃ、まるっきり未知の世界だし、それはガイルさんにも同じだったらしい。まだレイバはその時、他の会社で働いてたみたいだしね」

言葉をきって、肩をすくめた。

「なのにガイルさん、いつのまにかテンプルの人間と、すげえ仲良くなってるの。あの人が笑うと、場の空気が変わるんだ」

懐かしむような瞳の色で。

「難民が極限状態だったのは言うまでもないけど、テンプルや街の自治体だって、世話する人口が増える物資減るわけで、ものすごく大変だったはずなんだ。だから、難民の世話に当たってた人とか、

口に出す人も出さなかった人も、ひどくストレスが溜まっていた。それが原因で勃発する喧嘩も日常茶飯事で、最悪な空気だったのに、あの人は少しづつそれを取り払っていった。それも、無意識でね」

スティアは、改めてリリーの顔をじつと見た。

「ガイルさんがレアリスカンパニー公認のハンターになるまでの経緯は、ふつうの人とはだいぶ違った。シエルターができあがる前に、勝手にふらっと街を出ては、勝手に獣肉を狩ってきて、俺やロールに食わせようとしてくれたのがきっかけだったんだ。もちろん自治体は、食糧の供給はこちらで管理をしているから、勝手な真似をされると困るって注意した。そしたらあの人、だったら正式に俺を雇えよ、狩猟なんてのは得意分野だし、食わせてやる相手を増やす分には問題ねえよ、とか言って、そのまま流れて職を得たんだ。本当にちゃっかりしてるよ」

「……本当に」

リリーは呆れる思いでうめいたが、すぐに唇から力が抜けた。小さな笑みの形に。「父さんらしいね」

「ガードやハンターを用いた治安維持構想が完成するのは、シエルターが完成してからしばらく後だった。けど、ガイルさんはすでに街を出る権利を持っていたから、シエルターが完成するとはほぼ同時に、ストーン・キーを特例でもらっていたんだ。職が設立される前から、すでにハンターとして認められていたわけさ。当時は自治体も使える人材に飢えてたんだろうね」

ハンターはガードと同じく、街を出る資格と、銃を持つ資格を有した、対狂獣戦闘職だった。ガードの任務が用心棒ならば、ハンターは文字通りの狩猟者だ。狂獣を掃討し、死骸を回収して街の流通に乗せることが主要な任務で、街の周辺に棲む危険な狂獣を、退治する役目も含まれている。

だが。

「でも、これは……」

リリーは眉間に皺を寄せて、そっと、テーブルに置いたライセンス

スを指差した。

受け取った時からずっと気になっていた。ガイル・ブルーノの名が刻まれたライセンスは、ハンターのものではなく、ガードのものだった。

身分証明それ自体が、シエルターを開くための鍵になっているという、機能そのものは変わらない。だが、表面に刻まれた、マークが違う。

名前の隣に彫られた、盾のモチーフは、ガードライセンスの証だった。

ハンターライセンスならば、ここに刻まれている絵は、剣であるはずだ。

父がハンターであったと言うことは、五年前に会った時に、本人の口からもはっきりと聞いた。今、ステイアもそう言った。

「ライセンスがガード仕様なのは、ちゃんと理由があるんだよ」

こちらが問う前に、意図をくみ取ったステイアが、答えてくれた。「今言ったようにガイルさんは、社会の基盤ができるよりかなり前から、ストーン・キーをもらっていた。だからシエルターが完成して、大陸がある程度まで落ち着いた途端に、また、居てもたつてもいられずに、旅に出た。天変地異程度じゃ、あの人の、旅への情熱は止められなかったんだよ。狂獣を戦いながら、命がけになってなお、彼は放浪をやめなかった」

「……………」  
「でも、急速に進歩する科学の社会で、ストーン・キーがいつまでもプロトタイプだと、困ることも多いわけだ。そのうち、自治体から正式に連絡が来たんだよ。今持つてるストーン・キーを、最寄りの街の役所で、正式にガードライセンスかハンターライセンスに取り替えてくれて。資格試験は免除するから、契約更新だと思ってそうしろ、じゃなきゃそのうち最新式のシエルターを越えられなくなる、って」

ステイアは、そこまで言って息をついた。小さく、だが深く。

「訪れた役所で、ガイルさんは訊かれた。あんたはガードかハンターか、どっちかって」

ゆっくりと、言葉が続いた。

「あの人はトレジャー・ハンターである自分に、無駄なほど誇りを持ってた。狩猟は日常茶飯事だったけど、ボディ・ガードは引き受けたことがなかった。自分がしたいように、自分のために生きるやり方しか知らない人だったからね。用心棒なんて柄じゃない」

説明を止めて、次の言葉を強調する。

「でも、ガイルさんがその時に答えたのは、ガード、の一声だった」「どうして？」

「カモフラージュのため」

スティアは苦笑した。

「子連れで狩猟をするハンターなんていない。そんな奴、シエルターの警備員にまっさきに止められるに決まってる。だから、ガードの職について、ハンターと勝手に名乗ることを選んだんだよ」

「え？」

「ガイルさんは、最初の街を出る時に、俺とロールの身柄を引き取った。だから、その役所には一人で行ったわけじゃなかったんだ」  
その笑顔がひどく悲しげに見えたのは、気のせいなんかじゃないと、確信できた。

「シエルターが完成した日から、セカンド・グランドクロスの日まで、俺たち兄妹とガイルさんは旅をしたんだ。一緒にね」

リリイの表情が、驚きの形で停止する。予想通りではあった。スティアはそつと目をそらした。ごまかすように、苦笑する。

「シエルターの完成が約七年前、セカンドが三年前、差し引いて、だいたい四年間だね。その間、あんたの父親を借りていたんだ」  
「で、でも」

リリイは言葉をつかえながら、声をあげた。

「私は、五年前に一度だけ父さんに会ったことがあるけど、その時あなたはどこにもいなかったよ。それに」  
そこまで言つて、はたと気づいたように、突然言葉を止めた。

スティアがその様子を見つめてみると、リリイは呆然としながら、小さな声を唇に載せた。

「あの時、『人を待たせてる』って、父さん、言つてた……」

「うん」

スティアは頷いた。

「俺は、五年前にスピノザ・タウンに行ったことがあるよ」

リリイは目を見開いた。

本当にリアクションの大きい人だな、と思いながら、スティアは続けた。

「五年前。初めてデカルトに来た帰りに。ガイルさんの家があるっていう、スピノザに寄った。……ガイルさんは、リリイに会わせてやるからうち来いよって、うるさかったけど、断った。ホテルで待ってたんだ」

「どうして……」

「会わせる顔がなかったから」

リリイには、意味が分からなかったのだろう。やはり呆然としたままだった。

どう話してやろうか思案していると、レイバが横から口を挟んだ。

「なに、兄さんあの時、リリイに会ってたの？」

「そ。レイバには内緒にしろって、口止めされてたけど」

「んー？ 意味が分からない。兄さんらしくない気がするけど」

「内緒って言葉で察しろよ。ガイルさんはあの時に、リリイにイエロー を渡したんじゃないかな。マターの跡もあったし」

ステイアがじっとリリイを見ると、リリイは驚いているようだった。

「たぶん、そうだよな？」

念を押すと、リリイはあっさりと頷いた。そのまま、驚いたままの声で、続ける。

「どうして分かるの？ いや、その前に、 イエロー って、結局

……」

「待って。やっぱり、このへんは順序よく話した方がいい」

ステイアは、制するように左手をあげた。

「とにかく、七年前から、俺とロールはガイルさんと旅を始めた。彼の放浪に付き合いながら、サバイバル生活してたんだ。俺が森育ちだって話は、学校でしたよね。そういうこと」

「サバイバル」

リリイはその言葉を繰り返しながら、何か言いたそうに、こちらの瘦身をじっと見た。

本当に、ものすごく正直な女だと思いながら、ステイアは笑ってみせた。

「その頃の俺は、ここまで痩せちゃいなかったよ。普通にメシも食えたし、薬がなくても生きていけた。確かに、どちらかと言えば小柄だったし、特別に頑丈なわけではなかったけどね。それに対して、左手が、無意識に右手に触れていた。」

「俺の妹は、本当に健康だった。病気は寄せ付けないし、怪我の治りも早かった」

「へえ、意外」

「どんなにひどい怪我を負っても、気がついたら治ってるんだ」

ステイアが念を押すと、リリイは不可解に思ったようだった。

「どんな環境に置かれても、絶対に風邪なんか引かない。足を切って血塗れになっても、すぐに傷跡が消える。どれほど紫外線に当てられても、肌が荒れることなんか絶対にない。気温がどれだけ高い場所でも、熱中症なんか起こさない。……俺とガイルさんが、すっかり謎の植物の毒でぶっ倒れた時も、明らかに食べごろを過ぎすぎたもので腹を壊した時も、ロールだけは、いつだってけるっとしてた」

言葉を失っているリリイに、苦笑を投げた。

「普通じゃないでしょ？」

彼女がなんの言葉も返せないことは予測していたので、淡々と続けた。

「もちろん、生まれた時からこうだったわけじゃない。少なくともハウアーに住んでいた時は、そんなことはなかった。いつからそうなったかは、分からなかった。最初は気のせいかと思ったくらい、微々たる変化だったからね。だけど、だんだん顕著になってきた」  
思わず、ため息をついていた。

「本人も不気味だったみたいで、医者にも相談したんだけど、原因はなにも分からなかった。だから、どうしようもなかったんだけど……五年前。レイバから、ガイルさんに連絡があったんだ」

「レイバが？」

リリイが繰り返すと、隣のレイバは頷いた。

「俺が兄さんに最初の依頼をした時期なら、たしかに五年前だね」  
「レイバはその時、テンプルの技術開発局に転職したばかりだったらしいんだ。ガイルさんは例の難民の件で、テンプルの関係者とは仲がよかったし、何より実の弟の頼みだから、ある品物の回収の依頼を受けたんだよ」

「それは何？」

「カラストーン」

きっぱりと告げると、リリイが硬直する。

レイバが説明を勝手に継いだ。

「俺が、あれを使った発明の構想を始めた時期が、ちょうど五年前だったんだ。そもそも カラーストーン がなんだかは、リリイ知ってるんだっけ？」

「よくは知らないけど……セイ・ホワイトは、アニマの結晶だって言ってたような気がする」

「あ、やっぱりお前セイに会ったんだ。まあ、大雑把にはだいたい合ってるかな」

まるで旧知の仲のような気楽な口調で、セイの名を転がす叔父に、リリイは不可解そうな視線を投げた。だが、レイバは何事もなかったかのように（彼にとっては本当に何事でもないのだ）、すぐに受け流す。

「正確には、アニマの六属性、それぞれの結晶なんだ。レッド、グリーン、ブルー、イエロー、シアン、マゼンタ」

「光の三原色と、色料の三原色。全部で六種類」

ステイアが補足すると、レイバは嬉しそうに続けた。

「これは森人の視覚・色彩感覚が人間と等しく、なおかつ、魔法という力が極めて主観的で恣意的なものであるという何よりの証明だね。人間の基準で見える世界の色に、魔法の事象が分類できる。出力機関が目であるという点も、ここつながるからすごく重要なんだ」

「レイバの説明は理解しなくても問題ないから、無視していいよ。

要するに、カラーストーンは全部で六種類ある、森人の遺産なんだ」

「森人の？」

リリイが首を傾げる。信仰対象として知られる大陸の先住民と、自分の父親のイメージが結びつかないのだろう。

「……そうだな。少し話はそれるけど、こつちから話すか。ガイルさんとは直接関係しないけど、昔話を聞くような気持ちで、聞いてほしい」

ステイアが言うと、リリイは素直に頷いた。

「むかしむかし、大陸は森人と呼ばれる種族が支配していました。森人は、アニマという不可視の粒子の存在を、先天的に感じられました。そのアニマを操ることで、不思議な力を扱い、魔法文明を築き、発展していきました」

「うん」

「森人の多くは魔法を使いましたが、使えるすべての魔法には限界がありました」

さっそくりリイはきよとんとしてくれた。苦笑して、続ける。

「指紋みたいなもんかな。先天的に、ひとりひとりに属性が定まっていたんだ。俺の右手で光ってた、ランプの色を覚えてるでしょ？」

問うと、リイは頷いた。

「あれと同じ。グリーンが定められていたら、レッドを出力できない。そんな具合で、先天的に定められていた属性と異なるイメージは、誰もが魔法にできなかった」

「……………どうということ？」

「魔法つてのはそもそも、色のイメージだけで構成される、主観的な力さ。出力に際して、物理法則や、化学反応は問題にしないんだ」  
言いながら、機械の右手を広げてみせた。

「学校での俺の戦い方だと、グリーンを思い出してもらうと分かりやすいかな。木の葉っぱを飛ばすなんて芸は、見たままの単純なイメージだけど、緑イコール森イコール風、って連想から風を出すなんて、俺の個人的なイメージというか、妄想の域でしょ。それを全部力バーできる」

「……………」

「術者の頭の中の問題なんだ。色と、事象のイメージを結びつけて絶対に発動する！ って強く確信できれば、際限なくなんでもできる。アニマという不思議粒子そのものの配列を、願い事に沿って無意識に変えられるんだ」

言い放ってから、自嘲ぎみに笑ってしまった。

「口で言うほどは、簡単じゃないけどね」

「なんでもできるの？」

リリイが、信じられないとも言つのように、顔をしかめている。スティアは頷いた。

「森人は自分の属性の範囲でなら、想像力と集中力次第でなんでもできた。ただし属性の範囲内だ。個人でできる事には限界があった」  
「あなたは、ポンポン色を変えていたけど……」

「この右腕は、ちょっと違うんだよ。まあ、その話はあとですよ。普通は、定められた自分の属性は、何が何でも変えることができなかった」

「じゃあ、六種類しかなかったの？」

「いや、六属性は単に原色ってだけで、先天属性それ自体には、さまざまな色があったらしい。俺が一回作ったオリーブ色だって、魔法として成立してたでしょ。あれと同じだよ。それをさらにアニメ一粒単位で分解すれば、六種にできるってだけで」

「もつと厳密に言えば、三色でも作れるんだけどね」  
レイバが補足した。

「たぶん、はるか大昔には森人にも二種類いたんだよ。銀髪種と金髪種だったって、俺はにらんでるけど。そのへんが統合したせいで、多少複雑になったんじゃないかな」

「話をややこしくすんなよ。誰もそのへんには興味ないんだから」  
楽しそうなレイバを、冷たく遮った。

「とにかく森人の魔法には、限界があった。……だから森人は、魔法をもつと便利に改良しようと努力するうちに、ひとつの理想に行き着いたんだ」

「どんな？」

「そのままだよ。全ての属性を無限に増幅・制御できる存在さ」  
スティアは皮肉に笑った。

「今の人類にとっては、森人が神様みたいなもんだけど、この時の森人も森人でまた、神様を作ろうとしたんだ、って言えば分かりやすいかな」

「神様……」

「すべての属性を制御する完全生命。それを作るために、森人はあ  
る二つの生物兵器を作り出してしまった。それが　　ブラック  
と　ホワイト」

リリーの表情が、固まった。

「ばか正直ではあるが、そこまで鈍くもないらしい。ステイアは小  
さく息をついて、続けた。

「簡単に魔法のプロセスを解説させてもらうよ。だいたい二ステッ  
プに分けられる。第一に　増幅　。自分の属性を中心に、付随する  
イメージの分だけアニマの絶対量を増やす、あるいはひきつけるこ  
とをこう呼ぶ。第二には　制御　。増やしたアニマを思い通りに動  
かすことで、間接的に事象を変化させる。結果として、”願いを叶  
える”という現象が発生するんだ」

「……うん」

「森人が目指したのは、全部の属性を増幅・制御できる存在。だけ  
どさすがに、それをいきなり作るのは無理だったから、力を二分す  
ることにしたらしい。全てのアニマを増幅できる　ブラック　と、  
全てのアニマを制御できる　ホワイト　。その二つの存在を育て、  
将来的に掛け合わせることで、完全生命の誕生をもくろんだ」

「そこまで言って、肩をすくめてみせた。

「結果、制御を失った状態でひたすら増幅した　ブラック　が、こ  
の大陸を二つに割って、森人の時代をぶち壊した」

リリーが目丸くする。

「このへんは神話の範囲だから、嘘っぱいんだけどね。この大陸が  
ノースグラウンドとサウスグラウンドに分かれたきっかけは、ブ  
ラック　の暴走で起きた大爆発が、大陸に巨大な亀裂を生んだこと  
だと言われている」

「大陸」という総称は、実の所、正確ではない。上空から見れば  
円形になっている島の中心に、横一直線の海峡がある。それを隔て  
て、北大陸をノースグラウンドと呼び、南大陸をサウスグラウンド

と呼ぶ。二つを合わせてようやく”大陸”と呼ばれる。ハンバーガーのような形だと、幼い日のロールは喜んでいた気がする。

間に隔たるセントラル海峡は、確かに大海にはほど遠い小さな海だが、それでも川と呼ぶほどには狭くない。人間による本格的な治世の先駆けである、エンパイアが台頭した中世には、すでにこの海峡が存在していたと、はつきりとした歴史として伝えられている。

信じられない、と顔面いっぱい書いたままで、リリイは固まっていた。ステイアも、それに苦笑を投げた。

「ま、さすがに大きさに伝わっているとは思うよ。それだけの威力があったなら逆に、地脈とかがどうにかなって、大陸自体が沈んでそうだし」

「……そうだよな」

「でもまあ、そんな伝承が残ってしまう程度には、すさまじい爆発だった。栄華を極めていた森人が、滅びてしまうきっかけになるほどだったから」

リリイは、きよとんとした。

「森人はアニマをの存在を感じられる種族。つまり、人間には感覚的に分からない存在と、共存して生きていた。だから ブラックの暴走で、世界に漂うアニマが爆発的に増えたなら、感じられるアニマの量も、爆発的に増える。それが、許容量を越えたんだ」

「どういうこと？」

「今の狂獣と同じさ。増えすぎたアニマを体内で持て余して、制御しきれずに暴走、発狂する奴が増えたんだ」

リリイはすぐに理解したようだった。さすがはガード候補生と言ったところか。狂獣の実情はよく知っているのだろう。

「それだけじゃない。魔法は術者のイメージを体現するから、そのイメージを”絶対にそうなる！”って確信しなくちゃ使えない力なんだ。アニマの氾濫で、アニマを持て余して、うまく魔法を使えない奴が増える。すると、自分の能力に自信がなくなる。自信がなくなったら最後。魔法は絶対に使えなくなる」

「確信をすることが、発動の絶対条件だからね」

レイバが口を挟んだ。

「信頼のない力は維持されない。より所を失えば、崩壊するしかなかったってワケさ」

「アニマという不可視の自然に頼りきりだった種族は、皮肉にも、そのアニマが増えすぎたことで滅びたんだ。んで、アニマに鈍感な種族である人間はピンピンしてたから、滅びた森人に代わって台頭するってわけ。そんな話まですると、歴史の授業になっちゃうけどね」

ステイアが一息つくくと、リリイが訊いてきた。

「カラストーンは、結局なんなの？」

「ブラック が暴走して、森人の社会は崩壊したけど、全員が全員死んだわけじゃなかった。そいつらが、どうにかして ブラック を制御して、元の状態に戻すために あるいは、単に完全生命を作るためのリベンジに、作り出した道具の、第二段がカラストーンなんだ」

「二分割してダメなら、六分割してやろうって腹だっただんだと思う」  
レイバが楽しそうに補足した。

「増幅と制御を分けると、暴走することをふまえた上で、今度は、各属性ごとに増幅・制御のすべてを可能にする、結晶体を作り出したんだ」

「えっと……。ちょっと待って。そもそもは、色の壁を超えるための ブラック と ホワイト なんだよね？ ……自分の色の魔法を、完璧に使うだけなら、普通の魔法とは何が違うの？」

リリイが質問する。思っていたよりは理解が早い。ステイアは答えなるべく口を開いた。

「今度は、生物兵器を作り出したんじゃないじゃなくて、結晶体……石の形に固めたんだ。赤の石は、原色レッドを司るアニマを、固めたんだって言われてる」

なんとなく、右手の義肢に触れながら続ける。

「今ポピュラーに使われてる ストーン なんかは、カラーストーンの劣化版だよ。あれよりはるかに威力があつて、そして、あれよりはるかに扱いが難しい燃料なんだ」

「燃料……」

「今度は生物なんかじゃなく、文字通り完全に制御下における『道具』を作ろうとしたんだ。無限に出てくる絵の具みたいなものだと思つてもらえば、分かりやすいかな」

「そうだね。特長を二つあげるなら、混色ができることと、第三者が道具として使用できること」

レイバが自分に酔うように目を閉じながら、まとめに入る。

「六つのカラーストーンを、森人が作ったしかるべき装置に設置すれば、誰にでも力が引き出せるし、なんでもできる。そうなるはずだったんだ」

「……失敗したの？」

「そう。頼りにしていた”しかるべき装置”が壊れたんだ。人間との抗争で、たまたま破壊された。同じものを作り上げるだけの力は、もうその時の森人には残されていなかった」

そのまま調子に乗って、レイバは手を広げて見せた。

「で、森人が大陸から姿を消して、この伝説は人間には伝えられな  
いまままで、うやむやになつてしまった。俺は五年前くらいにこの話  
を知ったから、興味を持つたんだ。結晶体のアニマを観測できるレ  
ーダを開発して、旅に出てた兄さんに頼んで、とりあえず現物を回  
収してもらつてたつてワケ」

「そのひとつが、イエロー？」

「そ。なんで兄さんが、わざわざお前に渡していたかだけが、分  
からないけど」

心底不思議そうにレイバはこちらを見るが、スティアはあえて、  
気づかないふりをした。ため息をつく。

「話を元に戻すよ。そんなワケで、俺とロールは、カラーストーン  
を回収するガイルさんの旅に同行したんだ。最初にレイバに依頼さ

れた イエロー と、次に見つけた グリーン 。苦勞はしたけど、順調に回収していったんだよ。で」

スティアは思わず、目を細めていた。

「その旅が終わるのが三年前。 セカンド・グランドクロス の日」  
正面のリリイが、体を緊張させたのが分かった。

構わず、続ける。

「ガイルさんが亡くなったあの日に、俺たちは初めて、セイ・ホワイトに会った」

静かな口調を意識したが、うまくいったかは分からなかった。

「あいつは、ロールを迎えに来た」

「ロール・アリビートさん、ですね」

街の外の森で、人間に出会う機会などはごく少ない。

ましてやハンターともガードとも結びつかない、正装したビジネスマンに、挨拶をされる機会などほとんどない。保護者であるガイルを飛ばして、妹ひとりの名前を呼ぶ相手に遭遇する機会などは、絶無だった。これまででは。

ステイアが十四歳だったその日その時間、彼は、崖に沿った道に停めた、車の座席に座っていた。

前に発った街から、さほどの距離もない。だが道が険しいために迂回せずに越えようとする人間は、ほとんどいない山肌の道。車を停めて、給水を兼ねて休憩をしているところに、その集団は唐突に現れた。

「誰だ？」

答えたのはロールではなかった。オープンカーの運転席の背もたれに腰掛けていたガイルが、怪訝そうに眉根を寄せる。

ステイアもまた、胸中で繰り返した。本当に誰だ？

山道を走るのに相応しい、無骨な車が二台。だが、中から登場したのは、場違いなビジネススーツを着た男が三人ほど。

都会から来たのだとは一目で分かった。長旅を歩いたわけではないことも。

「失礼」

ガイルの問いに、男がひとり、先頭に立って頭を下げた。年齢はガイルとそう離れてはいないだろう。子供のひとりやふたりは抱えていそうだ。

「ガイル・ブルーノさん」

自己紹介をしたわけでもないのにそう呼ばれて、ガイルは怪訝そうに眉根を寄せた。否定も肯定もせずに、黙ってじっと、その男を

見つめた。

山道を迂回せずにこんな場所にいるのは、ガイルのいつもの気まぐれだ。自分たちの居場所を調べた人間がいたとしても、こんな場所まで追跡できるはずがない。正面から車を走らせて、スーツや靴にほとんど汚れをつけないほどの短時間で、偶然に出会えるはずはない。

そして。

「う……」

妹が、ほんの小さな声で低くうめくのを、ステイアは聞いた。

隣の座席に座っていた、ロールの顔を見る。もともと日焼けも火傷も知らないような白い肌をしていたが、そこからさらに血の気が引いている。どんな時にでも体調を崩さなかった妹が、だ。

どうした、と小声で問うが、彼女はこちらを見ることすらしなかった。うつむいて、自らの体を抱く。天気は快晴だった。あたりの空気は、暖かいくらいだった。だけど、彼女は確かに、震えていた。「突然お伺いして申し訳ないです。まず、自己紹介をさせてください」

ロールの異常ををよそに、大人の会話が進んでいく。

「あなたに、まるきり無関係な人間というわけでもありませんから」  
スーツの男は、内ポケットから取り出した名刺入れを開きながら近づいてきた。車に接近される前に、ガイルは地面に降りて、車体から少し離れた場所まで歩いて男を迎えた。差し出された名刺を、つまらなそうに見る。

「レアリスカンパニー、な」

ガイルは顔をあげて、男たちをざっと観察した後に、すたすたと車の方に戻ってきた。後部座席についたステイアのもとに、その名刺を持ってきて、渡す。子供を蚊帳の外にしないのは、ガイルの美点のひとつだ。

名刺には、誰かの名前と役職名、そして所属組織が書かれていた。ステイアにも分かったのは最後のひとつ。ガイルが言っていた言葉

と同じ。　　レアリス・カンパニー。

ガイルは名刺をこちらに渡した際に、ロールの異常に気づいた。スーツの男の声に、見透かしたような余裕の色が覗いた。

「やはり、苦しんでおられますか」

ステイアは顔をあげる。

男は、訳知り顔で涼やかに続けた。

「誤解しないで下さい。私どもに害意はない。ロール・アリビートさんを保護するために来たんです」

「は？」

ガイルが鼻の穴を広げて顔をゆがめる。ロールは変わらず震えている。ステイアはほとんど意識せず、妹の肩を片手で抱いた。

「お時間、大丈夫ですか。できればあなた達の承諾も得たい。……

悪い話じゃありませんよ」

「何だか知らんが、そのためだけにこんな場所まで俺たちを追いかけてきたのか？」

ガイルの口調が苛立っている。普段の彼は、ビジネスの相手や目上の人間には礼儀が正しい方だった。挨拶と敬語は客商売の基本だと、旅の中で何度も教えられてきた。

「用事があるならギルドを通じてどっかの街に呼び出せば文句も言わない。こっちの予定は丸無視で、あんまりにも無礼じゃないか」

「話が終わるまで街には帰せません。声をひそめた内緒話で、済むような事ではないのでね」

無礼を堂々と肯定しながら、三人連れのカンパニー社員は、誰一人笑ってなどいなかった。

「せめて話を早く終わらせましょうか。あなた方には、ロール・アリビートさんの身柄をこちらに預けてほしいのです」

「意味が分かん」

「彼女の身体は特異でしょう？　我々はその正体も対処法も知っていますよ」

ステイアは目を見開いた。

カンパニーを名乗る男は、続けた。

「彼女は、グランドクロス の爆心地にいて、生き延びた唯一の人間です。その素養は、人類を生かす糧になります。殺す刃にもなりかねない。順を追って説明します」

「唯一？」

ガイルが聞き返す。

「あの事件で生き延びた難民を、俺は他にも山ほど知ってる。ステイアだって」

「ハウアー・タウンの元住人、というくりならその通りです。ですが、爆心地のユゴー地区、第三区画にいて、生き延びたのは彼女ひとりのはずです」

ステイアは直感的に、故郷の光景を思い出していた。瓦礫の山と化した街。瓦礫すら消し飛ばされ、屋気楼になってしまった自分の家。

無傷で転がっていた妹。

思わずロールの肩にぎゅっと力を込めた。妹は何も反応を返さなかった。

スーツの男が、すっと息を吸う。

「神話だと思わないで聞いて下さい。かつて、この大陸には、壊れない爆弾が存在していました」

「は？」

ガイルが、思い切り間の抜けた声を出す。

「大陸を二分するほどの、強大な威力を誇りながら、決してそれ自身は、砕けず、壊れない。膨大な破壊エネルギーを、内側から外側へまき散らし、周囲のすべてを破壊し尽くしながら、それ自体は決して燃えることなく、無傷で爆発跡に残される。そして何度でも爆発を繰り返す。無限の爆弾です」

「なんだって」

「かつて、この大陸を支配していたのが 森人 であり、彼らが築いた魔法と呼ばれる文明が、この大陸を支えているのはご存じでし

よう。その最高傑作にして死神。制御手段のない、絶対的なエネルギーの塊が、存在していたんです。……もちろん、発明してしまつた後に、森人はそれを制御しようとはしました。ですが、無限に再生するアニメを抑える手段は、どこにもなかった。壊さずに、封印するしか暴走を止める方法はありませんでした」

男は一瞬だけ、ガイルから視線をそらして、うつむいているロールの方をちらりと見た。

「森人はアニメと共存していた。だが、人間はアニメを感じられない……。だから森人は、人間の体を、封印する場所として選びました」

ロールが、その言葉を聞いているか聞いていないのかは、分からなかった。

「マターのような絶縁体で閉じこめると、それこそ本当の爆弾のように破裂しかねない。だから森人は、アニメに極端に鈍感でありながら、アニメを体に通すことができる種族……人間の間に封印してその存在を少しずつ、忘れさせることを選んだ。封印はうまくいきました。森人の最後の魔法で、結晶体である ブラック と ホワイ ト に、人間の体に寄生するようにと、マジックプログラムを植え付けることに成功したんです。寄生者が死ねば、次の寄生者へ……。完全に忘れ去られるまで、永遠に」

そこまで語って、男はゆっくりと息をついた。

「ですが、上手くはいきませんでした。なぜなら、我々が、思い出してしまつたから」

男が、今度は堂々と、ロールの方をじつと見た。

「だから、ロール・アリビートさんを保護しにきました」

「なに？」

「彼女は森人が残した遺産、ブラック を体内に宿している。彼女自身が、爆弾なんですよ」

きつぱりとした物言いの前に、ガイルは黙つた。そして、うめくように口を開く。

「……女の子の形容に『爆弾』は関心しねえな」

「分からないのなら、もつと言いましょうか。五年前に グランドクロス を引き起こしたのは、彼女です」

空気が凍った。

ステイアは、完全に思考を止めて、男の顔をただ見た。冗談を言っている様子はなかった。

「獣の凶暴化の兆候が見られたのは、十一年前だという調査結果が出てます。ハウアー・タウンの住民票と照らしあわせた、彼女の生年月日と非常に近い。我々は感覚的にアニマをとらえることが出来ないで分かりにくいですが、動物は実感していたんでしょう。新たな ブラック の誕生と、その封印の弱体化を」

ガイルは、何も言わない。

ロールは相変わらず、震えて俯いている。

「グランドクロス の爆心地は彼女の住所と同じ。加えて、爆心地に居ながらにして生き延びたのは彼女ひとり。あの日を境に、大陸の含有アニマが激増して、獣が凶暴化をたどり始めてる。そして、これは推測ですが」

男は、俯いたままのロールの方をじつと見て、きつぱりと言った。「あなたの身体には、すでに異常が出ている。そうじゃないですか？」

ロールは何も言わず、聞いているのか聞いていないのかも、分からなかった。彼女を横から抱いていたステイアは、自分が責められているような気がして、胸の奥が冷えるのを感じていた。

妹は、どんな怪我でもけろりと治す。絶対に風邪なんか引かない。何があってもすぐに、健康な状態にリセットされる。

アニマは決して砕けない。

「ロール」

我慢が出来なかった。

何も言わない妹にそつと声をかけた。絞り出した声が震えていたことには、自分で驚いた。だめだ、鵜呑みにするな、と、理性が警

戒を投げているのと同時に、頭がどうしても思い出してしまふ。グランドクロス の惨状を。無傷で眠っていた妹の姿を。

何も言わないでうずくまる妹の身体を、開かせた。抵抗する力は彼女にはなく、腕はあっさりとはどける。そのまま妹の体重のほとんどが、自立しきれずに、もたれかかってきた。

顔をのぞき込んだ。蒼白な肌が、涙と汗でひどく濡れていた。

ロールはぎゅっと目を閉じて、声をこぼした。

「痛い……」

「ロール？」

「頭痛い。死んじゃう」

それ以外なにも考えられないとでも言うような、かすれ声。力なく、スティアの手を払って、頭を抱えた。

スーツの男は、彼女のそんな姿をみとめて、ため息をついた。

「発眼はまだみたいです。だから力が不安定なんですよ」

「ハツガン？」

聞き慣れない単語をガイルが拾い上げる。それに適当な愛想笑いを返しながら、スーツの男は、自らが乗ってきた方の車を振り返った。

「ロールさん。我々がここに来たのは、あなたを保護するためです。そしてもう一つ。あなたに会わせたい人間を、連れてくるため」

後ろに控えていた男のひとりが、車の扉を外から開いた。中には、人がいた。

「あなたはひとりじゃない。取り急ぎそれだけを、お伝えするために」

地面を踏む、靴の音が聞こえた。

その瞬間、今まで大きな動きを見せなかったロールの肩が、びくりと跳ねた。

スーツ姿のカンパニー社員三人の後ろから、前に進み出る、すらりとした人間がいた。

年齢は二十に届くか届かないか。自分自身よりはだいぶ年上だが、

この場にいる人間としては若く見えた。彼が着用しているのはスーツではなく、ビジネスマン以上に場違いな、明らかに金のかかった洒落た私服だった。黒のレザージャケットの襟の間で、ダイヤの指輪とおぼしきネックレスがきらりと輝いている。

服装以上に特徴的なのは、明るい金髪と、まるで顔を隠すように大仰なサングラスだった。ファッションモデルのような男だが、顔が見えないせいで、あまり印象は良いとは言えなかった。

「あ……」

ロールが、いつのまにか顔をあげていた。

ステイアは妹の方を見た。真つ白な顔面を、はつきりと恐怖の形で固めている。指先が、いよいよ顕著に震えていた。

こんなに怖がっている妹を見たのは初めてだった。いや、そもそもここまで恐怖に呑まれた人間というものを見たことがない。

金髪の男を、もう一度見る。どこが危険だとも思わなかった。芸能人のような派手さはあれど、それだけだ。

その男が、歩み寄る。唇が開く。

「セイ・ホワイトです」

明朗な声だった。

聞き手を意識することに、慣れていく。

「あなたにずっと、お会いしたかった」

微笑みを作ろうとしながら、彼はサングラスをゆっくりと外した。穏やかな顔に湛えられた、色の違う双眸。

青い目の右にある、どこまでも白い眼球。

間違いなく、物珍しさに驚くべき瞬間だったに違いない。だが、ステイアはセイと名乗った若者の瞳の色など、その時は気にしていられなかった。サングラスを外して、その素顔を見た瞬間に、ロールが悲鳴をあげたのだ。顔面を両手で覆って、激痛に苛まれた、かすれ声を。

「ああ………！」

「ロール？」

顔を押しさえたまま、ロールがのけぞる。手はすぐに、顔全体ではなく、瞼に移動した。両目を押しさせていたが、すぐに左目に。両手で左目を押しさえながら、身をよじって叫ぶ。

「ああああ！」

「どうしたんだ」

「来ないで！」

心配して伸ばした手は、思い切り振り払われた。左目を潰す勢いで押さえ込みながら、涙声で叫ぶ。

「嫌だ、近づかないで！ 痛い、痛い痛い痛い！」

激痛に身をよじりながら、それでも左の瞼から目を離さない。

「目が痛い……！」

なにがなんだか分からず、ステイアは動けなかった。そして。

ガイルが、ステイアとロールの襟首をまとめてつかんだ。視界と重心が回転する。

小動物でも扱つように抱き上げられて、そのまま猛烈に風を切る。兄妹を両の小脇に抱えて、ガイルは思い切りよくダッシュした。カンパニーの一行に背を向けて、車を置いたままで。

突然の逃亡に、カンパニーの人間が目を丸くするのが一瞬だけ見えた。そしてステイアは、我に返る。

「ちよつと！」

「よく分かんねーけど、尋常じゃない！ 逃げる！」

「だったら、俺は自分で」

「下ろす時間が惜しい、とりあえず身を隠す。森に戻ればこっちのもん」

銃声が、森の静寂を裂いた。

辺りの木々から、鳥が一斉に逃げだしたのとまったく同時に、ステイアは空中に投げ出された。激突した地べたの上をがりがりとする。肘から血が滲むのを意識しながら、必死に起き上がって振り返る。そして、目を剥いた。

倒れたガイルの足から吹き出た血の量は、擦り傷のそれとは比べ

ものにならず、何かの冗談としか思えなかった。

「言ったでしょう。話が終わるまでは街に帰せないと」

声が近づいてくる。セイ・ホワイトではなく、最初に話したスーツ姿の壮年だった。手に握った拳銃からは、煙が立ちこめていた。

「危害を加えることは我々の本意ではありませんが、そうして困るわけでもないんです」

ガイルの足から、蛇口でもひねったかのように、赤い粘液が後から後から噴き出ていた。どんな時でも傲慢不遜な笑顔を絶やさなかったその男の表情が、見たこともないほどにひきつっている。

「ちよつと、乱暴なことはしないでください」

スーツの男のさらに向こうから、セイ・ホワイトの焦ったような声が出た。追いかけてきたらしい。

「ブラック への影響もあります」

「刺激を与えた方がいいじゃないか。発眼を促すなら」

ステイアには、カンパニーの人間の言い争いを気にするだけの余裕はなかった。ハンターの旅に同行していたので、銃がどれほど危険な武器だかはよく知っていた。体が、凍り付いたように動かない。

でも、動かないと、ガイルは、物理的に動けない。

壇上に崖が切り立った山道の一角。ガイルが倒れたのは道の真ん中。幸か不幸か、通路は狭い。とはいえ、車を置いてきたのなら、塞げるほどじゃない。ロールとステイアが放り出されたのは前方だったので、移動が必要だ。囲まれたら、逃げられなくなる。

ステイアはなんとか立ち上がった。ガイルの隣に飛び出した。ロールと、男たちの間に、立ちふさがるように。

十四歳の少年のそういった勇ましさは、カンパニーの人間にしてみれば、予想外だったらしい。きよとん、とした後に、失笑が聞こえてきた。

「なんのつもりだい？」

ステイアは、いっばいっばいの頭を、なんとか回転させようと思つた。足下のガイルは足を撃たれた。動けそうにない。ならば、

俺が守らなくては。……どうやって？

ちらりと視線を投げる。ロールはまだ消耗しているのだろう。ガイルの腕から投げ出された時から、顔をあげることすらできずに、地面に倒れ伏している。

敵の狙いがロールならば、自分はこの動きを動けない。砂でもぶつけて時間を稼ぐ？ ……だが、その後はどうやって切り抜かれる？ 切り抜けて、一刻も早くガイルの怪我を医者に診せなければならぬのに？

思考の混乱の終止符を打ったのは、壮年の男の笑みだった。

「しばらく寝てくれるかな。大丈夫。あとでどうせ治せるから」パン、と乾いた音が響いたと同時に、右腕に何かが貫通した。

嘘みたいに一瞬だった。

耳で音を感じてから、身体が吹っ飛ばされるまでの間、何がなんだか分からなかった。振動のような衝撃を受けた右腕の一点が、灼けるように熱い。やがて膨大な痛みを知覚すると、声が割れた。人生で一番の絶叫をした。

倒れる一瞬前に、ロールの姿が見えた。彼女は、顔をあげていた。足を撃たれて血塗れのガードと、腕を撃たれて飛ばされる兄を見て、その瞬間に、彼女が何を思ったかは、分からない。今でも、分からない。

覚えているのは、彼女の瞳が、異常に見開かれたこと。

倒れてロールが視界から消えた瞬間に、静電気の波が空気を振動させたこと。視界に閃く、黒のプラズマ。

ガイルが渾身の力で、スティアを抱き攫うように、崖から飛び降りた瞬間に、大爆発が起きた。壁にしていた崖が崩れて、大量の岩が降ってきた。熱。振動。激痛。闇。

それが、覚えている セカンド・グラウンドクロス の全てだった。

リリイは、しばらく言葉を失った。正面にいるステイアを、ただ見つめることしかできなかった。

過去を語り終えた彼は、テーブルに肘をついて、背筋を丸めた。

「今のが、俺が体験した限りの セカンド・グランドクロス。ガイルさんは、この時の爆発に巻き込まれて、亡くなったんだ」

淡々とした口調は相変わらずだが、それを、そのままの意味で受け取ることができなかった。

「だから、セカンド以降にあんたに来た、『ガイル』からのメーイルは偽物だよ。全部、例外はない。本人が認めただから、テッドのイタズラなんだろうね」

ステイアは視線をあげた。リリイの方を、まっすぐに見る。

「一般的にも知られているように、セカンドはグランドに比べて、被害規模がはるかに小さかった。理由は分からないけど、人間や建物が跡形もなく溶けたりするようなレベルではなかったって聞いている。さらにガイルさんが反射的に崖から飛び降りて、それを盾にするように逃げてくれたから、俺は色んな奇跡が重なったおかげで、助かった」

そっと、自らの右肩を押さえるような仕草をみせた。

「けど、盾にするはずだった崖が粉々に崩れる程度には、強い爆発だった。当然、完全には逃げきれなくて、ガイルさんは俺を庇ったんだ。全身でね」

機械で出来たその肩に触れる、左手の指に力がこもる。

「俺がこの身に受けるはずだった衝撃を、あの人は自分の背中です受けた。勢いだったから完全にはうまくいかなくて、あの人の身体からはみ出でてた右腕だけは死んだけど。でも、あとは大怪我だけで助かった。うまい具合に土砂に隙間が空いてたんだから、運もあつただけ」

ステイアはそのまま、静かな声で続けた。

「死体に抱きしめられたまま、救助が来るまで過ごした。だから断言できるよ。あの人は間違いないで死んでいた。あんなに冷たくて、あんなに固い生者がいてたまるか」

そこまで語って、はっと気づいたようにこちらを見た。気を遣うような、悲しい顔。

「……ごめん。これはあなたにするような話じゃなかった」

リリイは無言で首を振った。

ステイアはしばし、言葉を探すように間を取ったあとに、元のような淡々とした声で、続きを口にした。

「とにかく、どんな形であれ、ガイルさんは仕事中に亡くなった。不幸中の幸いというか、彼の足跡がたどれなくなったことに、雇い主のレイバが気づくのは早かったんだ。最寄りの街にあるテンプルの役員が、カラストーンレーダーが示したガイルさんの居場所まで、搜索に来てくれたから、瀕死の俺と、無傷のロールは救出されたんだ」

ステイアは、肘をテーブルから離して、体勢を変えた。今度は背もたれに寄りかかる。

「セイたちはもう、その場にいなかった。けどやっぱり、ガイルさんと同じような体勢で、カンパニーの連中もひとり死んでたらしい。俺はその時、ちょっとひどい状態だったから、よく覚えてないんだけど」

「右腕は使いものにならなかつたし、打撲や骨折はいくつもあつたし、精神状態も最悪だつたしなー」

レイバが、気楽な調子で口を挟んだ。

「ちなみにその時のこいつの担当医、俺だつたのね」

「治療を受けながらレイバに事情を聞いた。ロールは無傷のまま現場に残されてたつて話。何日も何日も茫然自失状態のまま、だけどなんの身体異常も起きないままで、あいつはひたすら、あそこにいる。そして、あいつの左目は、なぜかあの日から、真っ黒になった」

ステイアはため息をついた。

「その辺りの事情は、レイバが詳しくかった。最初に説明をしたんだから、あなたにも見当はつくんじゃないかな」

リリイは、押し黙った。

森人の遺産、カラーストーン。その前身であり、魔法文明を滅ぼした要因でもある究極生命、ブラックとホワイト。

過去のステイアが聞いたという会話。ブラックとホワイトは人間の身体に封印されている。無尽蔵にアニマを生み出す、壊すことができない爆弾である。

学校でリリイ自身が聞いた会話。セイ・ホワイトとロール・アリビート。白い瞳と黒い瞳。得体の知れない力。

リリイは、ゆっくりと口を開いた。

「セイ・ホワイトは、ホワイトをその瞳に持っていた。……そしてロールちゃんが、ブラックっていうのを、持っていたってこと?」

「そう」

ステイアはきっぱりと肯定した。

「森人の社会が消えてから今まで、数え切れない人間の間をさまよっていたアニマが、うちの妹の代で覚醒したんだ」

「ロールに自覚症状はなかったらしいけど、グランドクロスが起きたってことは、八年前になんらかの刺激を受けて、無意識のうちには大量のアニマを呼び寄せてしまったんだろうな。だから八年前からこれまで、徐々に獣の凶暴化が進んでいる。動物は森人ほどではないにせよ、アニマの変化に敏感だからね。そして、セイ・ホワイトと接近した三年前に、ついに発眼して セカンド・グランドクロスだ」

レイバが補足する。こんな深刻な話題でなお、魔法の説明をする彼は、不謹慎なほどに生き生きとしていた。

「ブラックとホワイトは、もともとはふたつがひとつになるために生まれてきたものだ。だから、互いに惹かれあう。発眼し

てしまえば、互いの存在を強く感じられるようになるし、発眼する前なら、片方が完全な状態で近くにあるだけで、封印が解けるほどの刺激を受けてしまう」

「ハツガン？」

「封印の解放、お目覚めの事さ。厳密には、ブラックやホワイトが、瞳を出力器官に変じてしまう現象の定義だ。つまり、ロールの左目が、青から黒に変わった瞬間。俺は、力の自覚と同時に起こる変化だと仮定してる。この変化が起こらない限りは、いたずらに力を持て余すこともなく、普通の人間でいられるんだよ。今までの宿主が、そうして死んでいったようにね」

ひたすら気楽な声で、説明を続ける。

「森人の魔法は、もともと色彩感覚を抛りしろとしていた。つまり、視線を媒体にしていたんだ。ブラックも ホワイトも しょせんは魔法だし、変化が目に見れるのは、たぶんその名残だろう。瞳の色が変じれば、宿主の目を媒体に、体中から溢れる力を現出させられる」

「学校でのセイ・ホワイトは、あれでもこっちの手に負えない能力をいろいろと持っていたんだよ」

ステイアが口を挟んだ。

「だけど、あいつの視線の届かない場所に逃げれば、それは封じることができる。室内戦みたいな障害物の多い場所なら、俺でも、時間を稼ぐことくらいは出来たでしょ」

リリイは、セイ・ホワイトの行動を思い返した。教区 の入り口で瞳を覗かれたと同時に、意識が飛んだこと。ステイアの熱線を無力化したこと。拳銃を越える破壊力の光線を、一瞬で生み出したこと。

ステイアやエルクは、小火の鎮火もセイがしたと言っていた。消防団も呼ばずに、ひとりで、跡形もなく火を消したということだろう。

この調子ではおそらく、ロールが現れた際に、割れた天窓が飛び

散らないように防御をしたのも、彼なのではないだろうか？ 誰よりも早く、伏せると叫んだのは彼だった。

ステイアが、不意にためいきをついた。

「ま、原理はとにかくとしてね。ロールの ブラック が覚醒したことで、俺たちの生活はすべてが変わってしまったんだ」

「え？」

「当然でしょ。 グランドクロス と セカンド・グランドクロス を起こしたのはロールなんだ。そしてカンパニー側もそれを把握した」

ステイアは淡々と吐き捨てた。

「これまでの俺たちの生きる糧は、保護者の存在と、社会の庇護と、他人からの同情がすべてだった。未成年の上に学歴も能力もないガキが二人なんだから。ただあの日を境に、そのすべてがなくなっただ。『かわいそうな災害孤児』ではいらなくなっただよ。世界が混乱している事件の犯人は、間違はなくうちの妹なんだからね」

「でも、そんなのロールちゃんのせいでも、あなたのせいでもないよ」

「ロールのせいで死んだ人間は大勢いる。ガイルさんもその一人だ」

ステイアがきっぱりと言ったので、思わず言葉を失う。

「これからだって、あいつの存在が、どれだけの人間が殺すかが分からない。カンパニーだって自治体だって議会だって、たったひとりの人権と人類全体の存亡を、天秤にかけてはくれないよ。くわえて、瞳が真っ黒になるなんて分かりやすい目印つきだ。おまけにセイ・ホワイトが天然のリーダーになってる」

レイバも、ごく当然と言うように頷いた。

「そういうこと。セイが セカンド の日にロールの前に現れたのは、きつと偶然じゃないんだよね。 ブラック はアニメの増幅をお役目とするから、ひたすら増幅連鎖の無差別破壊を得意とする。

それに対して、制御担当の ホワイト は、アニメの流れに対して、感覚が鋭敏になる」

「どついう意味」

「ナマズが地震に敏感ってのは聞いたことある？ 同じように、セイはアニメに敏感なんだよ」

「レイバから聞いたただだから、俺にはよく分からないけど、セイ・ホワイトはアニメの劇的な変化を、事前に体が察してしまうんだってさ。予知夢に近いものも視るらしいから、それこそ グランドや セカンド レベルの爆発なら、かなり前から気配を察してしまう。 グランド の時にハウアーに現れた怪しい二人組も、たぶんその力で事件を見越した上で、事前に派遣されたんだと思う」

ステイアは肩をすくめた。

「もつと言えば、現在の市場がカンパニーの独占状態なもの、その力のおかげだと思うよ。シエルター、シールド、通信技術に、移動手段と制度……まるであらかじめ用意していたように、時代が必要とするものに手を伸ばしてるでしょ？ 先見の才能で片づけるには極端だ。 グランド や セカンド が起こる日も、その結果も全部、セイは昔から知ってたんだ。交通インフラはあえてほったらかして、住民を街の中に閉じこめてるのが、カンパニーの悪意なんだよ」

学校の中でも聞いた言葉だ。そして、テッドはそれを否定しなかった。

「まあ、それはとにかくとして。ロールが何かをやらかす前に、セイはたぶんそれを予知するんだよ。カンパニーは、俺たちがどこに逃げてても、居場所を知ることができるし、事前に対策を練ることもできる。 セカンド の被害規模については予測が甘かったし、それほど完全なものでもないんだろうけどね」

「……………」  
「カンパニーが ブラック を確保して、何をしたいのか、俺は知らない」

ステイアの肩にわずかに力が入ったのを、リリイは見逃さなかった。左手が、ぎゅっと握られている。

「まあ、もしかしたら、本当に適切な処置を知っているのかもしれない。だけど、ガイルさんを撃つたり、俺の故郷が根こそぎ滅ぶのを静観してた企業の主張なんか、信じる気はない」

「うん……それは分かる」

テッドの顔を思い出しながら、リリイは思わず口にしていった。

特に反応は見せず、ステイアは続ける。

「だけど今さら、政府を頼れる気もしなかった。最高権力機構に譲渡するには、ロールの力は大きすぎるし、カンパニーに利権を奪われてる今現在なら、方向性を見失って暴走するのが目に見えてる。まあ、そんな理由とは関係なく……俺も、口封じに抹殺されたくはないしね」

話が絶望的な雲行きになってきて、思わずリリイは黙り込む。

ステイアは、そんなこちらの様子に気づいて、笑ってみせた。

「そんな顔しないでよ。あの事件から三年経ったけど、俺は生きてる。必要なものを確保できたからね」

「必要なもの？」

「隠れ蓑だよ」

言いながら、ステイアは建物全体を指し示すように、左手をあげた。

「テンブルの話に戻るよ。そもそも、レイバがカラストーンを回収していたのはなぜかと言えば、森人の目指した理想の魔法技術を、科学の力で再現するためなんだ。こいつは、現代に魔法を蘇らせることが仕事なわけ」

「そういうこと。テンブルはそもそも、帝政を解体させるきっかけになったくらいに有力な宗教だったけど、カンパニーが台頭してからは、発言力を弱らせている。科学の発展つてのは、人間を良くも悪くも自立させるもんだからな」

レイバが補足した。

「テンブルは、かつての発言力を取り戻したかった。もし、一般人たちに、アニメが氾濫して獣が狂い始めている　なんて事実が明

るみに出たら、アニメを信仰する宗教なんか、評判が地に落ちることうけあいだからね。そうなる前に信頼を得て、もつと入信者を集めることと、部外者からのイメージをよくする事が必要だった。そのため、一番手っ取り早い方法として、信仰のシンボルを捜していた。シンボルはなにかつて言われたら、そのままだ。森人信仰の寺院が信じる奇跡　魔法」

「カンパニーの科学力で地位が危ぶまれたテンプルは、それ以上の科学で、精巧に魔法の奇跡を復活させる必要があった。……まあ、俺に言わせればループして馬鹿げてるけど。とにかく、そのために雇われているのが、ここの施設を使っている科学者たち。レイバはそのチームリーダーなんだよ」

「働き口に困ってる時に、拾ってもらったんだよね。俺も魔法の再現には興味があったし、ちょうどよかった」

「まあ、そのへんの事情はどうでもいい。レイバにしてみれば、ブラックを宿したロールの身柄が手に入ったのは、棚ボタだったんだ」

ステイアが強引に話を戻すと、レイバは朗らかに笑った。

「そりゃそうだよ。本人にはいい迷惑なんだろうけど、アニメの結晶体なんて、科学者の夢だ。なにせ魔法そのもの、森人の遺産そのものだからね」

得意げに笑って、胸を張りながら続けた。

「テンプルは、兄さんのおかげで偶然に転がり込んできた　ブラックの身柄を確保するのに、一役買ってくれた。破壊兵器と言えは聞こえが悪いけど、それはそのぶんエネルギーを秘めているからこそだ。研究対象としては、じつに魅力的だ。……たぶんカンパニーも、俺と同じようなことを考えて、ブラックを確保しようとしてるんだろっな」

「だから、ロールがカンパニーに捕まってしまうのは、テンプルやレイバにとっても、嬉しくない事態だったらいいよ。……だから俺は、救助してくれたレイバが出した条件に、乗ったんだ」

「条件？」

リリイがつぶやくと、スティアは笑った。

自分を嘲るような、そんな顔で。

「レイバは俺たちの身柄を預かることと、カンパニーや政府には引き渡さないこと、生活と報酬を保証するということを約束した。その代わりに、労働条件を三つあげたんだ」

「労働？」

「そう。タダで子供を保護しようなんてバカなことを考えるのはガイルさんくらいだからね。レイバは俺たちに仕事を与えることで、双方の利害一致を計ったんだよ」

スティアは、何か含みをもたせた声でそう答えながらレイバの方を見た。だが、彼は特に気にした様子もなく、堂々とうなずく。

「我ながらナイスアイデアだったね」

「くそつたれ。　ごめん、脱線した。レイバが出した条件は、ひとつ目には　ブラック　やロールの情報・身柄を、他の権力機構に譲渡しないこと。ふたつ目は、　ブラック　を科学や医学の視点から解析できるように、研究に協力すること」

「みつ目は」

「俺の身体を、好きにいじらせてやること」

低い声で、彼は断言した。

意味を計りかねて、リリイはレイバの方を見た。彼はいつものように楽しそうに笑って、世間話のように口を開いた。

「あの時の俺は、カラーストーンを出力するための装置を開発することに夢中だったからね」

「カラーストーンは、六つすべてを集めて、しかるべき装置に設置すれば、どんな魔法でも使うことができる道具になるはずだった。だけど、森人はそれを実現する前に、研究途中の装置を失ってしまった……それが、森人の終末」

スティアの補足に、レイバは頷いた。

「俺はその、失われた装置を再現したかった。だけど、それはでき

なかった。人間は森人よりアニマに鈍感だからな。仮に同じものを作ることができて、森人のような感覚で魔法を使えるはずがない。だから、人間用のインターフェースを考えなきゃいけなかった。森人が目を媒体にしたように、何かを媒体にしてアニマに行使できるイメージを生む道具が必要だった。そのアイデアに煮詰まっていた所で、ステイアとロールが転がり込んできたわけだ」

「その時の俺は、右腕が死んでた。完全に使いものにならなくなっていたんだ」

ステイアは淡々と言った。

「そんな俺の姿を見て、レイバがひらめいた結果が、これだよ」

そして、右腕をそっと持ち上げる。

長袖の上着を、肘のあたりまでまくった。昨日に何度も見た、不格好な機械の義肢だ。

「そ」

レイバが不適に笑う。

「この右腕が、天才レイバちゃんの発明した、カラーストーン出力型、疑似魔法実現装置なんだ。とりあえず今の段階の名前は キヤロール かな」

「キヤロール？」

「レイバのネーミングセンスは、突っ込んだらキリがないから気にしない方がいいよ」

ステイアは早口でそう言った。

「この右腕は、あんたが学校で見たように、魔法が使えるんだ。設置したカラーストーンの属性が出力できるし、混色もできる」

「そういうこと。森人が目指した究極の魔法は、すべての属性を自在に操ることだったからね。この右腕は、それに限りなく近づいた、大きな一歩目なんだ」

レイバは自慢をするように胸を張った。

「兄さんが死んだことにより、ブラック ことロールとその兄が、俺たちのもとに転がり込んできた。兄妹には家族がなく、保護者も

なく、社会的な地位もない。セカンドに思いきり巻き込まれたんだから、公式には行方不明扱いで、身元を隠蔽するのにこれ以上なく適している。親族もいないから、第三者に反対をされる筋合いもなく、当人の意志さえ通ればいい。おまけにアニメへの適応が高い銀髪種で、確かにふたりとも血が繋がっている。比較対照実験には、これ以上ない条件がてんこもりだった」

「ブラックを越える魔法を作るための実験体として、ブラックの兄である俺は、レイバにとってもっとも都合のいい材料だった」

対するステイアの声は、無然としている。

「被験者が隻腕だったという事をも生かすために、レイバが思いついた発明の形が、これ。腕にカラストーンを装着してアニメを蒸留させて、身体全体に定着させたくて、手を媒体に魔法を使う」「正確にはプロトタイプだ。こんなのはまだ完成型にはほど遠い。」

これからどんな改良していかないかね」「ちよつと待つて」

レイバが口を挟むと、レイバはきよとんとした。

当然のようにそんなリアクションをとった叔父を見て、逆にこちらが焦る。

「つまりレイバはステイアに、身柄を保護する代わりに、人体実験の材料になれって言ったの?」

「そう」

堂々と肯定され、言葉を失った。

「そういう仕事だよ。十分な報酬はちゃんと払ってる。衣食住つきで、何もなくていいんだぜ? 素敵な待遇だと思うけどね」

「そんな、脅迫するみたいな……」

「いいんだよ。この契約を承諾したのは俺とロールだ」  
ステイアもまた、断言した。

「それに、俺としても使われることに異論があるわけじゃない。レイバはもう一つ、俺にとって魅力的な餌をぶら下げやがったからね」

「餌？」

「キャラル を出力するにはカラーストーンがいる。ガイルさんが志なかばで死んだから、カラーストーンはまだ大陸中に散らばっていて、回収できていない。けど、この右腕にそのすべてを集めることができれば、すべての属性を自在に操って、イメージのすべてを魔法にできる。……願いが何でも叶うんだ」

落ち着いているはずの表情の奥で、瞳だけがざらりと輝いていた。「俺には、どうしても叶えたい願いがひとつある」

「……それはなに」

「ロールの左目を、元に戻す」

リリイは目を丸くした。

「レイバに約束させた。ブラック の身柄は引き渡す。好きなように実験も研究もさせてやる。だけど、カラーストーンを用いることで、俺の右腕が、完全な魔法を制御できるようになった暁には

ブラック を超えたその時には 用済みになっているはずのブラック を、この世から完全に消し去ってしまうのが絶対条件だ、てね」

「もつたいたないのは確かだけど」

レイバが肩をすくめる。

「でも、この キャロル を汎用化できる日が本当に訪れるなら、そのくらいの代償は確かに安い。俺にしてみれば ブラック より は キャロル が理想型だしね。エネルギーは制御して初めて、文明と呼ばれるんだし」

「え、でも、待って」

リリイは戸惑った。

「ブラック は絶対に除去できないからこそ、古代からずっと残っていて危険だって、さっきから言ってたでしょ。消し去るなんて可能なの？」

「不可能を可能にするのが魔法だよ。プロセスをすっ飛ばして、イメージだけで結果をもぎ取る」

ステイアは苦笑した。

「強く願って、それを確信すれば、絶対になんでもできる。森人にそれができなかったのは、属性の壁を超えられなくて、ブラックのアニマの量についていけなかったからだ。カラーストーン六つの力を使えば、ブラックは消せるはずなんだ」

「理論上はね。あとは術者の努力次第」

レイバが軽い調子で付け足した。

「とにかく、ステイアが出した条件はそんな所だ。人体実験に参加する代わりに、実験が成功した暁には、その力を最初に使わせる、そして妹の力を消させる、てね。ま、ブラックは許可したけど、キャロルはもらうよ。そうじゃなきゃ困るし」

「そ。だから俺は、セカンドが落ち着いてから、レイバに引き取られた。ずっとこの街にいたんだよ」

ステイアは、己の右手を握りしめながら言った。

「教区の奥にあるこの施設で、治療や実験を受けながら生活してた。ちょうど二年くらいかな」

「二年前……」

自分がこの街に訪れた時と、ほぼ同じだった。セカンド・グランドクロス の影響で治安が悪化したことは、確かに進路を決める要因として大きな役割を果たした。

レイバもステイアもロールも、そのセカンド・グランドクロス の中心にいて、同じ街にいた。なのにガイルの娘であるリリイは、ずっと何も知らなかった。

「で、ついこの前にやっと、レイバからオーケーが出た。これならきつと、街に出て一般人にまぎれて生活しても、旅に出て暴れ回っても、なんとかなるだろうってね」

「万全をきすために、最後にひとつ、テストをすることにしたんだ。俺の知る限りもつとも嘘がつけない人間の前で、普通の人間のふりをして、普通に生活ができるかどうか、実践してみることにした」

レイバがそう言った途端に、順番に話し続けていた、彼らふたり

の説明が止まった。

リリイはきよんとする。そしてすぐに、ふたりが自分を、不自然に見つめていることに気づいた。少し時間をかけて、会話の内容を思い返し

「……私!？」

素っ頓狂な声をあげると、二人は同時に頷いた。

「そう。いきなりあんたの家に泊まることになったのは、そういうわけ」

「リリイのリアクションほど信じられるものはないからね。言い方を変えるなら、まあリリイにすらバレるようじゃ問題外だよなっただけだ」

レイバが笑う。なんの他意もなく。

リリイは、愕然としながらも、ステイアが言っていた言葉を思い出していた。レイバは好奇心でしか動かない。あいつがどう好意的に見ているものでも、あいつにとっては全てが客体なんだよ。レイバにしてみれば、同居人のリリイですらも、効率のよい物差しでしかないのだ。きつと、あらゆる人間が彼にとっては、本当にそう認識されているのだろう。

怒りは沸かなかった。まったく悪びれないレイバを見てみると、むしろ力が抜けてゆく。

ステイアが仕切り直すように、左手を翻す。

「そろそろ話が繋がったかな。俺とロールは一昨日レイバに連れられて、あんたの家にお邪魔することになった。数日滞在して、必要な検査を終えて、それに合格したら、すぐに離れるつもりだったんだ」

「そういうこと。俺はお前がカラーストーンを持ってたなんて知らなかったから、ちょっと話がややこしくなったんだけど」

レイバが笑う。

「カンパニーが、兄さんの消息とカラーストーンの存在を重要視していたのに対して、テンブルは、兄さんやリリイを部外者としか認

識してなかった。だから、行動の指針が双方ズレたんだと思う。テッドだかセイだかは、俺の知らない所でリリイをマークしてたみたいだし、リリイ・ブルーノと ブラック 一味が接触するなんて何事だ！？ 装置が完成したのか！？ くらいの焦りはあったんじゃないかな」

「リリイと イエロー を人質にとることで、俺を確保するっていう狙いもあったみたいだよ。願わくばロールも、って所じゃない」  
ステイアが補足をする、レイバは納得した。

話が途切れて、ステイアが息をついた。

「こんな所かな。ずいぶん話が長くなっちゃったけど。まとめるなら、俺たちテンプルとカンパニーは、 ブラック や ホワイト の存在に関心を示している点、カラストーンを回収しようとしている点で、対立しているんだ。もちろん、ビジネスでは互いの存在や権威を利用して、表面上は友好関係になるから、喧嘩の様子は表沙汰にできない状況なんだけどね」

肩をすくめて、手振りをまじえた。

「カンパニーが、どういう意図で石を集めようとしているのかも俺は知らない。完全生命の具現が狙いかもしれないし、テンプルの台頭を防ぐためかもしれない。何にせよ、セイ・ホワイトの予知能力が関係していることは、確かだけどね。ロールとセイは、人間の治世するこの大陸に生まれてしまった異質な力の結晶さ。誰もがそれを利用する方法ばかりを考えている」

説明の傍らで、張本人であるレイバが、他人事のように頷いていた。ステイアは続ける。

「獣が狂ったのは、ロールが生まれたことと、ロールの中にある ブラック が目覚めていったのが原因さ。アニマが増えたことで動物が狂った。そしてカンパニーは、その窮地を利用して、情報を統制するための体制を敷いたんだ。それがいわゆるシエルターで、奴らが世界を掌握した足がかり。狂獣に対する恐怖や、議会に対する不信を、全てカンパニーに対する信頼に変えた上で、さらに魔法

の存在を隠蔽したり、邪魔な人間を消したりの、情報遮断に利用している」

そこまで言ってから、ステイアはリリーの顔に視線を投げた。

「学校で話したよね。カンパニーは狂獣に責任を転嫁して、情報を統制し、自分たちの計画を遂行しやすいように悪事を働いている。

だけど、そのカモフラージュ役の狂獣つてのは、うちの妹が偶然に生み出したものなんだ。カンパニーが自分で狂獣をバラ撒いてたなら、事態はもうちょっとシンプルだったんだろうね。自然災害すらも利用してしまうそのたくましさは、人間の手に負えないところなんだと思う」

「その場しのぎつてのは、成功すれば奇跡に見える。今の状況はまさにそんな感じだな。逆境を逆手にとろうとして頑張ってるから、今だけ見ればちょっと良さげだけど、全体としてはマイナスにマイナスに動いてしまつていて、世界が閉塞してきているんだ」

レイバが付け足しながら、笑った。

「我ながらいいフレーズだな。『その場しのぎつてのは成功すれば奇跡に見える』」

「この前のラジオで誰かが言つてたそのままだろ、それ。とにかくステイアが、仕切りなおした。

「そんな馬鹿げたスパイラルに、身を任せるのは御免なんだ。だから俺は、ロールの力は断ち切るべきだと考えているし、ロール本人もそれを望んでいる。ブラックは決して砕けないから、壊れない。だからあいつは、風邪を引かないばかりか、殺されても死なない体なんだ。長くこの世にとどまらせるべきじゃない。……たぶん、あいつが成人体まで成長を終えたら、年もとらなくなるんじゃないかって言われてる。一刻も早く、なんとかしたい」

そこまで、力強く言い切つて。そして。

ステイアはふっと、表情から力を抜いた。

突然の変化に、リリーが瞬きをすると、彼は苦笑する。

「……ごめん。また話がずれた。あんたにとってはこんな話、どう

でもいいよね。だいぶ長くなっただけど、一番言いたかったことは、こっちさ」

息をためて、一気に言葉を流しこんだ。

「あなたの父親は、俺の妹が起こした爆撃に巻き込まれ、俺を庇って死んだ。あなたの家庭から父親を奪ったのは俺たちだし、あの人を殺したのも俺たちなんだ」

硬直した。

スティアは、そんなリリーの瞳を、まっすぐに見ていた。決然と。「その過去があつて、今の俺がここにいるんだから、俺の口からは謝れない。……俺は、これから先も、ガイルさんの名前を利用させてもらうつもりだから」

言いながらスティアは、リリーがテーブルに置いたガードライセンスを、手を伸ばして拾い上げた。

銀色のブレスレットは、彼の銀髪やシルバーピアスに詭えたように、恐らくは飾り気のなかった父親よりも、よく似合っていた。

「シエルターを管理しているのはカンパニーだけど、シエルターを越える方法がないかと言えば、そうじゃない。そのためには、このガードライセンスが要る」

リリーが言い返せないことを、見越したように、すらすらと言葉が続く。

「俺とロールは、体調が整って、必要な準備が終わったらこの街を出るよ。カラストーンの回収に一役負わせてもらう予定なんだ。そのためにこいつは、返してもらいたい。申し訳ないけど、これだけは譲れない」

手にしたライセンスを握りしめて、スティアは立ち上がった。

「あなたには迷惑ばかりかけたし、詫びる方法も思いつかない。恨まれることに文句は言わないけど、恨むならガイルさんじゃなくて、俺かロールにして欲しい」

リリーは、思わず、唇をわずかに開いた。

言葉を選ぶより先に、スティアは笑った。穏やかに。

「説得力はないかもしれないけどさ、ガイルさんは最初から最後まで、あんたのことを大事に想ってたんだよ」

引きずった椅子を元に戻して、ステイアは席を離れた。軽く手をあげて、レイバに向けて「あとはよろしく」とだけ言い残す。

彼が立ち去るのはすぐだった。いつもと変わらない、軽い足音が、耳に届いた。

動けなかった。

「若いくせにせっかちなんだよな、あいつ」

レイバが、しごく気楽に言った。

返事の言葉を見つけられず、彼を見つめると、まるきりいつものように笑っていた。

「追いかけたら？」

逡巡はあった。だが。

すぐにリリイは立ち上がった。そして席を立って、急いでステイアの後を追った。

施設を出ると、人気なく、白い町並みが広がっていた。

いかにも遺跡然とした見慣れぬ造りの町並みだが、この付近にはコンクリート製のビルがパラパラと存在していた。探検隊の拠点だったとステイアは言っていた。このあたりの区画には、人の手が入っているのだろう。

区切りのようなコンクリートの壁を越えると、先日見た遺跡と同じように整然とした景色に変わった。すべての建物が石で出来ている。デカルトは確かに天災の少ない地域だが、それにしてもここまですっかりと残っているのは驚きだ。かと思えば。

ある一角だけ、工事現場のように、石の遺跡が無惨に破壊されていた。

風化した石の壁が砕かれた結果だろうか、付近の道路だけは、白い砂のようなものでじゅりじゅりとしていた。

ステイアは、そこにいた。

無惨に壊された家らしき建物のひとつ、ちょうど腰のあたりの高さで崩れてしまったらしい塀のような場所に、腰掛けていた。ぼうつとして見るように見えた。

リリイは、思わず足を止めた。

人のいない石の街は白く、静謐だった。こんな時代に、動物はいない。石の建物しかない場所となれば、羽虫の類も寄りつかない。

生命感から隔絶された、滅んだ街。

周囲を埋めつくす石と同じほどに、ステイアの横顔もまた、白かった。日焼けをしていないという意味もあるうが、それを差し引いても、彼は血色が悪い。

だけど、その青白さはどこまでも透き通っていて、滑らかだった。染みの一つもなく、形に欠点が見えない。

(きれいな人)

今さら、そんな事を思った。出会った時から分かっていた事だし、だからどうしたというわけでもないはずなのだが、遺跡に佇むその姿は、息を洩らすのも忘れるほどだ。しかし、美人を見かけた時の感嘆とは、少し違う。

遺跡は美しかった。現代とは違った技術で、現代の人類には描けぬ形を見事に作り上げている。滅んで誰もいないからこそ、胸を揺さぶられる。

ステイアの持つ雰囲気は、それに近い気がする。温度のない造形美だ。リリイは芸術にたいして興味があるわけでも、廃墟に詳しいわけでもない。さらにいえば、女性と見まがうばかりの美少年という類が、特に好みというわけではなかったので直感だが、強くそう思った。

女性と見まがうばかりの。

自分で思った言葉を、胸中で反芻する。

遠く目の前にあるステイアの姿を見つめる。首が細いなと思った。女性のようなまるやかさはなく、ただ肉がない。骨格が浮いているからだろうか、こんな痩せ方をする女性なんて、リリイには想像もつかない。

たくましさとは真逆の要素が、彼が男だという現実を裏から主張しているように見える。

健康な肉体からは、澁刺とした魅力が自然とにじみ出る。ステイアに、そういったものはまったくない。手を伸ばすのを、躊躇してしまう。

作り物のようだ。

だが、ここで足を止めれば、出会った頃と何も変わらない。リリイは、きゅつと唇を引き結ぶ。

砂のような石が混ざる地面の上で、わざと靴を滑らせて歩いた。ステイアは、音の接近に気づいて、顔をこちらに向けた、

拒絶されることも覚悟はしていたが、彼はいたって平静だった。すぐ近くまで来て、足を止めたリリイに、そっと笑みを作ってみせ

た。穏やかに。

「点数稼ぎだったんだよ」

「え？」

「最初に、あんたの部屋でした話」

出し抜けにそう切り出されて、リリイは返事を見失う。

ステイアは特に説明はしないままで、苦笑した。学校の連中の様子を伝えてくれた今朝の会話を指しているのだろうと気づいた時には、次の言葉に移っていた。

「贖罪だなんて、大げさなことは言わないけどさ。ちょっとゴマ擦るところって、心のどっかで思ってたんだと思う。本当は、ガイルさんの娘に会うことも、ガイルさんの娘に、彼と俺の関係を伝えることも、気が進まなかった」

よく見れば、彼が腰掛けている壁面は、ぼこぼここと隆起しており、とても座りやすそうには見えなかった。だが、器用にも、平らな箇所を選びとって体重をかけているらしい。この場所に慣れているのだろうか。

「だから、俺にちょっとでも恩を感じちゃって、それを気にしてくれてるなら、いいよ。最初からその恩だって計算づくで売ったんだから」

「……そんなこと、言わないでよ」

リリイはうめいて、奥歯を噛みしめた。

「あなたは、私に憎まれないの？」

「憎まれるだけのことはしたと思うし、その行動を謝罪する気はないよ」

「でも、点数を稼ごうと思うくらいには、人に憎まれるのが怖いんですよ。だったら、そんな卑屈なこと言わないでよ」

まっすぐに、目を合わせてそう告げると、ステイアは少し驚いたようだった。派手なリアクションは見せないが、ほんの少しの間だけ、表情を固める。

リリイは伝えるべきことを探しながら、ゆっくりと口を開いた。

「私は、別に怒ってないよ」

「なんだか、しどろもどろな言い方になってしまったが、ステイアは先を急かさなかった。だからリリイは、なんとか己の気持ちを見つけることができた。唇から、力が抜けるのが分かる。」

「……むしろ、ちよつとほつとした」

「ほつとした？」

「父さんが死んだって話を聞いた時は、なんの実感も沸かなかったの。カンパニーの連中が言う、秘密だとか計画だとか、私にはなにも分からなかったし、まるで別の人間の話をされてるみたいで、落ち着かなかった」

「笑みを作りながら、ステイアの顔を見る。」

「きつと、いま自分が浮かべている笑顔は、晴れやかなものではない。先日までメールを続けていた父親が、この世のどこにもいないという現実が、やはりとても辛かった。だけど。」

「それでも、自分の大切なものを守りきって死んだって言うなら、父さんらしいって、初めてそう思ったの」

「苦笑するこちらの顔を、ステイアは真顔で見つめていた。」

「うまく言えないけど、父さんが、最後まで私の知ってる父さんのままだったのは、嬉しいよ」

「……めちゃくちゃだ」

「ステイアは、視線を道路に投げて、派手にため息をついてみせた。「やっぱりあんた、ガイルさんの娘だよ」

「そう？」

「うん。そういう所、似てる」

「ステイアはきつと、人の目を見つめるのが癖なのだろうとリリイは思った。今の彼はこちらの瞳を見ずに話していて、その姿を物珍しく感じたからだ。出会ってからこれまでを振り返れば、超然とした印象がどうしても勝るが、初めて繊細な部分を見つけられた気がした。」

「まったく新しいそんな印象が、すんと腑に落ちるのが不思議だ」

った。彼が淡々と語った、凄惨な生い立ちのイメージが関係しているのだろうが。

(……それだけじゃないかな)

リリイは胸中で、付け加えた。たぶん、彼の言う所の点数稼ぎは、彼自身が計算していた以上に、リリイの中で高得点を積み上げたのだ。リリイはこの少年の言葉に救われたし、それを思うと、邪険にする気にならない。

見方が変わると、これまでは捕らえどころがなかったステイア・アリビートという人間が、急速に身近な存在に見えてきた。なんだから、少し嬉しかった。

顔をあげたステイアは、こちらの表情を見て、居心地悪そうに、唇をむすつと尖らせる。そのリアクションを見て、リリイは初めて自分が微笑んでいたことに気づいた。

「かつこ悪」

ぼそりとそう呟いたかと思えば、ステイアは立ち上がった。

背筋を伸ばしてから、今度はリリイの顔をまっすぐに見た。話題を変える。

「ここらへんの建物、壊れてるでしょ。俺、このへんで魔法の練習してたんだ」

言いながら、ごつごつと無秩序な断面を覗かせる、塀を左手で指した。爪の形がとても綺麗だった。

この左手と同じ形をしていたであろう右手は、もう永遠に失われてしまつてこの世にない。それはとても、悲しいことである気がした。

「なんでもできるって断言はしたけど、葉っぱを飛ばすのも、熱戦を撃つのも、時間をかけて修得したひとつの技なんだ。頭の中にあるイメージを確信するのって、思つてたより難しくてさ」

「そうなの？」

「機械つてのは、その点で楽なんだよね。たとえば銃なら、引き金を引けば、火薬が破裂して、銃弾が飛び出るでしょ。もちろんあん

たみたいな専門家に言わせれば、それだけじゃないだろうけど。でも、『引き金を引いたら銃が撃てる』ってイメージは、素人でも子供でも共有している。『引き金を引く』というアクションがあるからだと思う」

「……どういうこと？」

「引き金引いたんだから、銃弾が出るだろうっていう確信。それだけの原因は作ってやったんだから、結果は出るに決まってる、ていう無意識だよ。魔法にはそれが無い」

ステイアは、不意に歩きだした。

リリーの隣をすり抜けて、二歩ほど進んだ所で、足を止める。

正面にある、大きな建物　先ほどまでいた、テンプルの施設を見つめながら、彼は息をついた。

「たとえば、俺がここから手をかざして、なんでもいいからテンプル滅べ！　って思った所で、そんなことはできないんだ」

右手を掲げ、視界に入れたその施設を覆い隠して、握りつぶすような動作をしてみせる。

「属性の問題を抜いても、出来ない。俺の想像力が追いついてないから、具体的な手順が何も浮かんでいない」

「結果のイメージが出来てれば、手順はいらなくて言うてなかったっけ」

「俺の性格のせいかもしれないけど、手順のイメージがまったくない状態で、結果を確信するのって、けっこう難しいんだよ。願い事に根拠がなければいほど、実現を信じることは困難だ」

ステイアは、かざしていた右手を下ろした。

「俺が子供の頃に読んだ本ではさ、森人は、呪文を唱えて魔法を使ってたんだ」

「あ、私を読んだ本もそうだった」

「賢いよね。銃の引き金と同じだよ。『呪文を唱えたんだから、結果がついてくるに決まってる』という思いこみが、確信を強くする。ひとつの能力を、好きな時に出せる条件付けなワケ」

「じゃあ、あなたもそれをすればいいんじゃない？」

「残念ながら、森人が実際に使っていたという呪文の資料は何も残っていない。まあ、人それぞれだっただろうから、当然っちゃ当然だけだね。で、俺は自分で創作した呪文に、力があるなんて思いこめるほど詩人じゃない。生まれた時から当たり前に魔法使いだった奴らとは違って、二年前までは普通の人間だったから、どうしても価値観が追いつかない。それに……」

「それに？」

「肺活量がない」

堂々と断言しながら、彼は肩をすくめた。

「大声を出すの苦手なんだ。走ってる時なんか絶対無理だし、どう考えても向いてないと思ってやめた」

リリイは斜め後ろから、スティアの姿を見つめた。

手で押せば肋骨が砕けそうな体だった。肺が強そうに見えるかと言われると、ノーと言わざるを得ない。

「……聞いていいかな」

「なに？」

「ご飯が食べられなくなったのって、レイバがあなたを改造してから？」

率直に訪ねると、スティアは一瞬だけ黙った後、苦笑した。

「まあね」

「どうして？ 改造したのは腕だけなのに」

「腕はアニマを蒸留させる事と、出力させる事を可能にする装置だけど、増やしたアニマを貯蓄しておく場所は俺の全身なんだよ。学校での俺はさ、すぐに息が上がってたわりに、けっこうしぶとかったでしょ。カラストーンから体中に流れているアニマが、体をつなぎ止めるように、力を底上げしてるんだ」

リリイは、エルクに攻撃を受けて気絶した時のスティアを思い出した。ダメージは受けていたし、疲労は打ち消せなかったようだが、それでも、目を覚ますのだけは、やけに早かった。

「アニマを定着させるために、薬を飲んで。それが昨日、朝の目覚ましに使ってた液体のボトル。レイバは定着剤って呼んでる」

「それがどうして、ご飯が食べられないって事と関係するの」

「正直に言えば、はつきりとした理屈は分かってない。どれも仮説でも、摂食行為がするのがすごく不快なんだ。出来る限り食べたくはない。一応、栄養剤くらいはもらってるけど、本当はそれだってサボりたい。無理だけどね。とにかく、人間としての仕組みからちょっと外れてるわけだし、体質が変わったんじゃないかな。筋力とかはさすがに壊滅したけど、生命活動は維持できてるわけだし。森人は、必ずしも食事をとらなくても生きていけたらしい。アニマが生かしてくれるから」

「……それで、いいの?」

「いいんだ」

断言しながら、彼は振り返った。その表情に迷いはない。

「確かに、日常生活に支障が出るくらいに体力は削られたけど、日常生活以外の所で必要とされる力は、必要なだけ出せるようになってる。俺がこれまで、普通に生きてただけじゃ、決して得られなかっただけの力がね」

まっすぐに前を見る、その瞳に込められた意志が、彼の覚悟なのだろうか。ならば、自分には止められない。

止められる強さじゃない。こんなに鋭い眼光は、見たことがない。「タダで願いを叶えようなんて思っちゃいないよ。これが最適だと思っただから、俺の意志でレイバの話に乗っただ。だから、これでもいい」

「……そう」

「でも、ロールは普通にメシが食えるんだけどね」

ステイアは口調を崩した。

「あいつは感情だけで魔法を解き放てるんだ。逆に、感情にしか従ってくれなくて、厄介なくらいさ。意識して操ることができないくらい、本能のひとつとしてあいつに忠実らしい。摂食にもなんら問

題はない。生まれたときから、ブラック と共にあるのがデフォルトだったわけだから、力が体に馴染んでる」

ぎゅっと、右手を握りしめる仕草を試みた。その動きは義肢としては見事なものだったが、生身の左手に比べると、やはりどこかぎこちなかった。

「それが魔法と機械の差なのかな。でも、こうやって格差を感じる限り、レイバは満足しないし、俺も願いを叶えることは出来ないんだと思う」

そして、再び苦笑した。

「何が言いたいのかって言うと、こうして不満を感じる限り、キヤロル はまだ未完成だってことさ。強気に振る舞ってはいたけど、俺の力は穴だらけだし、他人のフォローなしでは機能しないんだ」  
リリイは、どきりとした。

スティアは笑ったまま、軽い口調で続けた。

「今だから言うけど、学校で戦ってて、笑いそうになったんだ。何度も」

彼は、握りしめていた手をそっと上げた。腕時計でも確認するよ  
うに、甲を上に向ける。

さまざまな色に変わる例のランプは、消灯されていた。だが不意に、黄色の明かりが灯った。鮮やかなイエローの、宝石のような光  
「あんたには、あんまり期待してなかったから、正直 びっくり  
した」

そう言うってから、しばらく黙って、やがてスティアは小さく吹き  
出した。

可笑しそうに、くつくつと笑う。リリイは動揺してしまう。

「な、なに？ なんかおかしい？」

「いや、ごめん、なんでもない」

にやけ面で言われても、説得力もなにもない。

視線の圧力で意志が伝わったのだらう。スティアは笑いながら、  
弁解するように左手を振った。

「ほんとごめん、悪い意味じゃないんだ。ただ、いろいろ思い出した」

「思い出した？」

「俺あんたのこと天才だと思う。いや、天才じゃちよつと意味が違うか。なんにしるすげーって思う」

「なんの話？」

「普通、ついていけないでしょ。我ながら変だったよ。あの戦い方明るく断言されて、リリイは思わず言葉を失った。

ステイアは、いくぶんスッキリとした表情で屈託なく笑いながら、種明かしでもするように手を広げた。

「自信満々に見えるように努力したけど、マジで初めてだったんだよ、あんな大規模な戦闘。魔法なんて遺跡でひとりで練習してたくらいにしか使ってないから、ただだけ効果あるのかも分かってなかったし。混戦の時なんて立ち位置すらよく分からなくてめっちゃ混乱してたし。派手な目くらましでごまかしてたけど、自分がなにやってんのかほんとに分かってなかった。全部、行き当たりばったり」

あまりの激白に、リリイはあんぐりと口を開けてしまう。確かに、あらゆる意味でステイアの戦い方は規格外だった。

なんの筋書きもなくあれをしでかすのならば、天才はそっちではなからうか。少なくともリリイには、発想もなければ、度胸もない。「でも、ミスって助けて欲しいと思った時にはあんたがいたし、動けないと思った時にはすでに動いてくれてたし、ほんと、勉強してる人は違うなって思った。こんな扱いにくいのと、打ち合わせもせずに合わせられるんだから、基礎すげーって感心したよ」

ステイアは、こちらの胸中とは真逆のことを誉めてくる。リリイの無意識が心がけた、マニユアルのすべてを。

「この二年間ずっと、力の使い方が分からなかったんだ。魔法を放てるようになった所で、一人じゃどうにもならなくて、ブラックを越えるイメージなんて、うまく固まらなかった。でも、おかげさまで、ようやくいけるかもって思えたよ。使い方次第で、めっちゃ

や役に立つんだって分かった」

そう言ってステイアは、とても嬉しそうに笑った。

昨晩から今までにかけての、彼の様子を思い返す。罪の意識が、この喜びを覆い隠していたのだろうか。

努力が実を結ぶ瞬間の手応えを、リリイはよく知っている。そのかけがえのない喜びさえも、塗りつぶしてしまうほどに、気を遣わせていたのだろうか。

「……私も、あなたと一緒に戦って分かったことがあるよ」  
「なに？」

「自分を守る事と、人を守る事は違うってこと」

ステイアがきよとんとする。

「シモン教官に言われたことがあるんだ。攻め急ぐなって。その意味が、実際にあなたを守るために戦ったことで、ようやく分かった」  
自分のことばかりを考えていた。敵を掃討し、立場を守ることだけを考えていた。他人を守ることは、自己顕示の手段だった。

必要な覚悟は、そんなものではなかった。

「周り、見なきゃね」

につこりと、笑う。

ステイアは何も言わない。意味が分からなかったのかもしれない。それならば、それでいい。

「分からなかったことが分かって、しつかり実現できたから、これでも自信ついたんだよ。今までの私がしてきたことが、役に立ったのが嬉しいの。嘘じゃなかったことが、ここにもある」

それは簡単なことだった。これまで思い悩んでいたよりも、ずっと。

「まだ実感はないけど、父さんが死んでたことは、悲しい。でも、あなたには感謝してる。だから……」

続ける言葉が見つからず、息を吸う。結局は、格好をつけずに率直に告げた。

「落ち込まないで欲しいし、気に病まないで欲しいよ」

リリイは照れくさくなってきた、ごまかすように髪をかきあげようとしました。

だが、テッドの銃で爆ぜ落ちた箇所だけ、不格好に空虚な感触がした。ほんの少しだけ、顔をしかめてしまう。

ステイアはその仕草の一部始終を見ていたようだった。唇から言葉が滑る。

「あなたの髪が切れた瞬間もさ、恨まれる要素がまたひとつ増えたって、思った」

「これは別に、あなたのせいじゃないよ」

「俺が現れなければ、あんたがテッドと対面することもなかったからね」

屁理屈を告げながら、ステイアはまた苦笑する。

「分かってる。たぶん、俺は考えすぎなんだよね」

「本当に分かっている？　なら、いいけど」

ステイアは降参を告げるように、軽く両手を上げた。

リリイは、なるたけ明るく、笑ってみせた。

「この髪は切らないよ。あんな奴のために、せっかく伸ばしてたのを短くするのは癪だもの」

「けっこう格好悪いことになってるけど？」

「毛先だけなんとか整えてごまかすから、平気。私、結構こういうの上手いんだよ」

リリイはステイアに近寄った。右手を、挨拶のような仕草で折り曲げる。

意図が理解できなかったのか、ステイアは黙った。ぎこちない仕草で、右手を上げる。握手でも求められたのかと思っただろう。

何かを言われる前に、リリイは首を振った。

「違う、そうじゃなくて。こう……」

自分の手のひらを肩の高さまで上げてから、ステイアにも同じ動作を要求した。

「こうしてから、勢いよく、こう」

こちらの指示に正確に従ったスティアの右手と、リリーの右手が、空中で勢いよくぶつかった。これが生身の手だったら、パシンと小気味よい音が鳴っていただろう。

お決まりのハイタッチは、リリーにとっては馴染んだ動作だったが、スティアにしてみれば目新しいものであつたようだ。当然と言えば当然である。あの生い立ちにこの体質では、競技スポーツなどをした経験はほとんどないだろう。

機械の手のひらの冷たく固い感触を持って余しながら、リリーは笑う。

「私たちはいつもこうするの。チームプレイに勝った時」

困惑する碧い瞳に向けて、力を込めて説明をする。

「あなたは私に謝れないって言つてたよね。別にいいよ。それでいいんだよ。だって、今は謝つて欲しいなんて思う場面じゃないものだから私から言うことは、二つだけ」

自然と、唇から力が抜けた。リリーは晴れやかな気分で、にっこりと笑っていた。

「お疲れさま。ありがとうございました」

スティアはしばし面食らっていたが、やがて、破顔した。今度こそ憂いを感じさせない造作で、声を出して笑った。

「ほんつと体育会系だよね」

その笑顔に言葉を返しながら、雑談で盛り上がりながら、リリーはほつとしてた。

やっぱりこの人は、笑顔がいい。

強気に前を見据える顔も、後ろ髪を引かれるような後悔の顔も、人形のような容姿と、人気のない遺跡に、とても似合う。だからこそ、もつともつと、顔が崩れるくらいに笑っていて欲しい。それだけで、こんなにも彩りが差すことを、知って欲しいし、知らせて欲しい。

今朝のスティアはリリーに言った。リリーの世界は、リリーが思っている以上に優しかったはずだと。周りの人間が、どれだけリリ

イのことを想っていたかを証明した上で、そう言ってくれた。

きつと、ステイアが見ている世界は、彼にとって優しくなかった。だからこそ、彼には見つけることが出来たのだろう。リリイが見逃していた人情の欠片が、眩しいほど目に映ったのではないだろうか。彼はきつと、父親の問題を置いて、自分の生い立ちなど話したくはなかったはずだ。哀れまれるのを嫌うというレイバの評が、哀れみを糧に生きてきたという彼の言葉の裏を、そのまま表している。リリイもまた、心のどこかでは、ステイアを哀れと思っているに違いないのだ。それが失礼に当たると、分かっているにも。

(なら、せめて)

正直であろうと思った。それならば、嘘がつけず、ろくに空気が読めない自分にも、今すぐ出来る。

彼に救われたことや、彼に助けられたことへの感謝を隠さず、きちんと伝えようと思った。彼にとってこの世界が優しくないのであるとしても、自分は誠実であろうと思った。

嘘つきであると自ら言った彼が、こちらに本当の言葉を届けてくれた誠意と同じくらいには、まっすぐでいようと、そう思った。

夕方になってから、これまでずっと好調だったステイアの表情に、急に疲労の色が覗きはじめた。

施設に戻ったのちに、彼はリリイに別れを告げて自分の部屋に下がっていった。日が沈み、夕餉の頃合いになっても、食堂には現れなかった。

「なんつうか、超寝てる」

様子を見に行ったらレイバが帰ってきて、そう報告をくれた。

「あの様子だと数日は目覚めないと思うから、今晚のうちに勝手に体調検査しちゃうつもり。ちよっと今回は、定着剤を投与しすぎたかもしれない」

テーブルについたりリリイは、ステイアの様子を想像した。きつと出会った次の日の朝と同じように、昏昏とした深い眠りについているのだろう。

ステイアは以前、定着剤がないと目覚めないと言っていた。そして、飲み過ぎた際には、反動でしばらく体がきかなくなるとも。

「定着剤って、アニマを定着させる薬だよな」

「お、よく知ってんじゃん。なにに、ようやくリリイも俺の仕事の魅力に気付いた？」

「ステイアに聞いたただだよ。とにかく、それがどうしてあの寝起きの悪さにつながるの？」

レイバは、実に楽しそうに腕を組んだ。

「詳しい説明をするとそれなりに長くなるから、簡略バージョンな。あいつの右腕 キャロル は、人間が先天的には持たないアニマ制御能力を、人間の体と連動させて実現する装置なんだ。天賦にない力を操るわけだから、アニマを扱うことはそれなりに使用者の体力を削る。でもステイアには、とにかく基礎体力がない。それは見れば分かるよな」

リリイが頷くのを、確認したかしないかのハイペースで、どんどん言葉が続いてゆく。

「そしてアニマってのは、ものすごくざっくり言うと、結合した生物の身体能力を増強させる作用があるんだ。その点は狂獣がいい例だね。身体能力が強くなりすぎて、ドーピングよろしく理性がぶっ飛んでる状態にあるのが、今、大陸で暴れる獣たち。同じように、ブラック や ホワイト が発眼して、アニマの結晶体として存在している限り、ロールやセイの身体能力は極限まで向上し、生命を超越。まあ分かりやすく言えばほとんど不死身だったりするんだ。人間はなぜか理性を失わないから、発狂もしない。自覚がないうちは、森人のマジックプログラム 魔法っぽい技術で封印されてるんだけど、それを壊すのが発眼だから。同じ原理で」

強調するように、息を継ぐ。

「ステイアが腕から発生させてるアニマも、定着剤であいつの体に寄生している限りは、あいつの体を効率よく生かすに、最適な形で動く。だから、定着剤を飲んでいる間は、疲労の類がアニマに分散されて、肩代わりされるんだよ。その反動で、蓄積された疲労は、薬が切れてアニマが離れた時に顕著に現れるんだ。それを睡眠で補おうと、体があがく」

「基礎体力を底上げすることはしないの？ トレーニングとか、そういう単純な手段ならいくらでもあるでしょ」

「手遅れだね。食事がとれないようじゃ、筋力を増強する材料がそもそもない」

「……聞いていいかな」

リリイは、思わず目を細めてレイバを見る。

「どうしてわざわざ、ステイアみたいな人を選んだの？ うちの父さんみたいに、頑丈な奴の方がいいに決まってるのに。魔法使いを作る実験への参加者って名目で外から募れば、私の学校の男子でも絶対に志願するよ」

言いたいことは人道的な問題だったが、レイバはそうには受け取

らなかつたらしい。特に悪びれるわけでもなく、堂々と返事をくれた。

「人体実験の材料の調達つてのは、たぶんお前が思ってるより面倒くさいんだ。昨日も言ったけど、ステイアなら立場的な条件が最高だった。こつちの事情を知り尽くしている上に、戸籍がないから、カンパニーからも自治体からも、正式な存在としては隠蔽できる」「戸籍がない？」

「そ。都合が悪いから、生きてることはなんとか濁して、三年前の日付で死亡届も偽造した。今は狂獣騒ぎで、行方不明者の数が近代史上最悪の状態だし、自治体にも突っ込んだことを調べる余裕がないんだよ」

狂獣を情報隠蔽のカモフラージュに使っているのは、カンパニーだけじゃなく、テンプルも同じらしい。

「他にも色々と事情はあるけど、結局、ステイアの体力や体調がどうこうつて話で、俺たちの側には、今の状態でデメリットがないんだ。だから、今から社会的・費用的な問題を全部クリアしてまで、新しい人間を調達するまでもないってことだ」

「モラルとかないの、それ」

「この施設でのステイアは、限りなくゲストに近い労働者さ。基礎給に上乘せして、おとといの救出劇みたいな時間外労働にはちゃんと手当も出してる。そういう契約だから、何も問題はない」

社会的地位は隠蔽して、労働基準の法令は意識するのが滑稽だった。

だが、レイバは特にそうは思わないらしい。朗らかな笑みを浮かべて、話題を変えた。

「まあ、ステイアの話はそんなもんでいいか。お前はこれからどうするつもりなんだ？」

リリイはどきりとした。

今いるこの食堂は、教区にある、テンプルの施設の中。

事情を聞いてなおリリイは、自宅には戻らなかった。戻ることが

出来ないのだ。学校は騒ぎになっているようだし、リリイが事件に巻き込まれたことを知る級友が多いという報告も、ステイアがくれた。

リリイの住所として、レイバの家の場所は、教員や級友に知られている。友人であるエミリから、失態を犯したテッドまで、今この瞬間も、リリイを探している人間は多い。そして、今のリリイは、それら全ての人間に漏らせない事情を多く知ってしまった。

テンプルとしては、リリイを自由にして、情報が漏洩するのは避けたいらしい。よって、昨晚に引き続いてゲストルームを貸すから、しばらくはこの施設から出るなど、注意をされたばかりだった。

状況だけ見ればほとんど軟禁に近いが、リリイ自身にも異論はなかった。

異論を持つべきなのだろうが、意見を述べるだけの材料が、何もなかった。

「……………」  
ガードになること。  
父に会うこと。

自分の全てだった夢は、もう叶えることができない。  
そんな状態でこの街にいても、他の過ごし方なんて、分からなかった。

「俺としては、この街に留まることは勧められないかな。どうしてもって言うなら、騒ぎのほとぼりが完全に冷めるまで、一ヶ月くらいはここにいた上で、住所は変えた方がいい」

レイバはあくまで、利害だけを考えた提案をくれた。

「スピノザに戻るって言うなら、こっちのツテでガードを調達するよ。カンパニーにお前の居場所が把握されたら面倒だからね。でも」  
気楽な調子で、叔父はにっこりと笑った。

「第三の選択肢もあるってことは、頭に入れて欲しいかな」  
「え？」

「俺がお前に、仕事を斡旋できるかもしれない」

ちょうど、その時。

「あ」

後ろから、小さな声が聞こえた。

振り返ると、眼帯をつけた、銀髪の美少女がそこにいた。ロール。振り返ってしまったリリーのリアクションを見て、彼女は会話の邪魔をしてしまったことを恥じたようだった。

「ごめんなさい。邪魔しちゃいました」

「そんなことないよー」

答えたのはレイバだった。

「むしろナイスタイミングと言うべきかな。俺ちよつと、これから作業に出なきゃだし。ロール、リリーに食堂の使い方教えてやってくれない？ もう行かなきゃ」

唐突な話の流れに、リリーはレイバをじっと見てしまうが、彼は意味深に笑っただけだった。

「仲良くしてやってね」

それだけ言っつて、言葉と同じくらい唐突さで、ひらりと手を振って去っていった。

残されたリリーは呆然とその姿を目で追うが、ロールの方はさらにあっけにとられているようだった。なんとか、気を取り直して、話しかける。

「ごめんね。こっちの都合で」

「いえ」

「よかつたら、レイバの言う通り、食堂の使い方教えてくれないかな。それで、一緒にご飯にしよう」

こちらがそう申し出ると、ロールはとても驚いたようだった。

厨房に繋がるカウンターに、トレーや食器が置かれている。まとめて用意された食事を、もらいにいく仕組みらしい。職業柄、施設を利用する各人の作業時間がバラバラであることから、こういった体制になっているとロールは説明してくれた。

カウンターの向こうには、先日も見た女性がいた。大柄な体をせ

わしく動かしながら、鍋に入ったスープを皿に注いでいる。彼女がケイトだろう。カウンター越しに、こちらに親しげに笑いかけてくれた。

「はい、女の子にはおまけだよ」

チョコレートをはひとかけら、トレーの上に載せてくれた。気持ち嬉しくて、リリイは礼を言った。

別のカウンターに向かっていたロールと、席に着く前に合流する。そしてリリイはあつけにとられた。ロールの持つトレーの上に置かれた品。

当然、メニューはリリイと同じだ。薄くスライスした獣肉の炒め。だが、その量が尋常じゃなかった。文字通りの山盛りになっていた。自分の分量ではまったく気にならなかったガーリックの香りが、こちらの鼻にまで届いた。重ねに重ねられた肉の層が、脂でテラテラと光っていた。

ライスも同じだった。たぶんリリイの皿の二倍はある。

ロールは嬉しそうに肉を見つめながら、リリイに一言告げて、ケイトが働いている方のカウンターに向かった。ケイトはにやりとしながら、ドンと音を立てて新しい料理を置いた。芋だった。茹でた芋を丸ごと一個、皿に載せている。スープの具の残りなのだろうが……

さらにドン、と追加される。リリイももらったチョコレートだった。ただし個数が違った。六個。

ロールは満面の笑顔で礼を言っ、すべてをトレーに載せてこちらに戻ってきた。

リリイも運動をするので、同じ年頃の女性の中では、よく食べる方だと思う。思っていた。だけど。

食事をする前から、ちよっぴり胸やけがするような気持ちになった。

味は、可もなく不可もなく　いや、料理を得意とするリリイに

言わせれば、けちをつけたくなる部分がちらちら感じられる程度には不可がある、というのが正直な所だった。ステイアが微妙にそんなことを言い含めていたことを、思い出す。

大きさがバラバラな野菜や、少しばかり香ばしすぎる黒い肉などを噛みしめつつ、ケイトはきつと豪快な人なのだろうなと思った。

「リリイさんは、わたしのこと、怖くないんですか？」

出し抜けに、ロールがこう言った。

思わず、彼女の顔を見返してしまう。場違いなほどの料理に囲まれた、眼帯をつけた美しい顔。

その表情は、卑屈さではなく、純粋な疑問の念で埋められている。

「あ、ごめんなさい。失礼ですね、こんな聞き方」

「いや、別にいいけど……でもそうだね。驚いちゃった」

「お兄ちゃんから、わたしのこと、聞きましたよね。学校でも怖がらせちゃったし、ちゃんと話してもらえるなんて思ってたなくて」

すんなりと言葉を滑らせながら、彼女は愛想笑いを見せた。リリイは、その仕草を見て先ほどのステイアを思い出した。戸惑いの箇所が、リリイの基準とは、ずれている。要するに、慣れている。

恐れられることにも、避けられることにも、人間扱いされないことにも、彼女はきつと、慣れている。

胸が痛くなつた。だが、こればかりは、単にロールの肩を持てばいいという問題ではないと分かった。学校で目にした、ブラックの威圧感、覚えている。凶悪な肉食獣に睨まれた時に似た、指一本動かさなくなる類の恐怖を、確かに感じた。

(今はこんなに、普通なのに)

むしろ、あの時の光景が幻だったのではないかと思えてくる。彼女自身に言われるまで、リリイはこの少女と、学校で見た光景を同一視することができなかったし、それをしていない自分にも気づかなかった。人間の形をしたものは、人間にしか見えない。左目さえ隠していれば、彼女はごく普通の少女だった。

その意志ひとつで大陸を割るかもしれないと言われたところで、現実味がない。

どう言おうかと悩んでいると、不意にロールが微笑んだ。その反応を見て、心赴くままに百面相をしていたことに、ようやく気づく。「やっぱり、いいです。答えてくれなくて」

分かりましたから、とても言いたげな笑顔で見られて、リリイは無性に恥ずかしくなったが、あえて言い訳をするのはぐっとこらえた。ロールは嬉しそうだった。出会ってから今までで、本当に嬉しそうに笑った彼女を初めて見た。

「でも、ごめんなさい。今はともかく、学校では怖がらせちゃいましたよね。それに、ガイルさんのことも……」

静かな口調ではあったが、ロールは驚くほどあっさり、率直にそう言ってきた。

「お父さんがずっと家に帰れなくて、大変な思いをさせてしまって、ごめんなさい」

さっきのスティアと同じ想いを表しているだろうに、言っている内容がまるで正反対だった。ロールが謝りたいように謝ってくるのに対して、スティアがどんなに回りくどかったことだろう。

それが年齢の差か男女の差か、性格の差かは分からないが。

「いいよ、もう」

素っ気なく聞こえないように笑いながら、だけど話題を変えたくて、リリイはそう言った。

「私は気にしてないし、あなたたちのせいじゃない。それより、学校ではびっくりしちゃった。……空から来るなんて思ってなかったから」

静かにそう告げると、ロールはびたりと食事をとる手を止めた。顔をあげて、こちらをじっと見つめてくる。

「狂獣……じゃないよね、あなたが乗ってた、狼みたいなやつ」

「えっと……」

「セイ・ホワイトはカメラって呼んでたっけ。少なくとも私は見た

ことない。あれは、なに？」

責めている風に聞こえないように、おだやかな口調を意識した。だが、ロールは目に見えて萎縮した。たどたどしく、口を開く。

「わたしには、うまく説明できませんけど……キメラは、人が作った発明品です」

リリイは目を見張った。

「異常発生した狂獣を、ユニオン現象で掛け合わせた動物だって聞いてます。昨日のは、この施設から連れ出しました」

必死に暗記した教科書でも暗唱するように告げるその言葉の中身が、場違いに重い。

「施設の地下に、この人たちが作った発明品がいくつも置かれているから、そこに、たくさん……」

「……どういうこと？」

質問がとても形にならなかったが、それでもリリイは頭を回転させた。

「あの生き物が、人が作った発明品で、人の言うことをちゃんと聞くって言うてるの？」

「人間の言うこと、聞くって言うことと少し違って、でも、わたしの意志には、逆らわないんです」

ロールは見ていてかわいそうになるくらいに困惑しながら、それでもなんとか説明をしてくれた。

「動物はわたしのアニメを恐れるから、それを利用してプログラムしたって、レイバさん、言っていました」

「レイバ……？」

先ほどここを立ち去ったばかりの叔父の、気楽な笑顔が頭をよぎった。

それ以後に食べたものからは、ろくに味が感じられなかった。咀嚼をしながらリリイは考える。知らなかったことがたくさんある。知らない方がいいことが、この施設にはきつと、ごろごろと転がっている。だけど、いまさら素通りすることができるだろうか。父を

殺し、ステイアたち兄妹を苦しめた事件のすべて、日常の裏にひそんでいた欺瞞の存在を、いまさら無視して、知らないふりをして普通に生きていくことが、自分にできるのか？

答えは否だ。

レイバに聞かなくてはならないことがまた増えたと、リリイは静かに、そう思った。

食事を終えてから、ロールにレイバの居場所の心当たりを聞いてみた。スティアの様子を見に行っているのなら、地下室ではないかと彼女は言う。

「わたしは二階の部屋で寝泊まりしてるんですけど、お兄ちゃんは下にいるんです。大規模な実験については、地下ですることが多いから……頻繁に検診とかしてるみたいだし」

情報の提供に感謝を告げてから、リリイは食器を戻し、施設の地下を目指した。だが、階段を降りた先には、番兵のように、ひとりの研究員が立っていた。

「悪いけど、ここから先は関係者以外立ち入り禁止だよ。レイバの姪だとは聞いてるけど、君は研究員じゃないだろ？」

「レイバに用事があるんです。彼はここにいるだろうと思って、来たんですけど」

「だったら探して呼んでくるから、ここで待ってて」

研究員が階段を離れ、リリイは廊下にひとり取り残された。この際に勝手に探索をすることも不可能ではないだろうが、やめておく。

とはいえ、機密保持の施設としては、不用心な対応だとは思う。

ここにいる人間は、外界の侵入者などとは無縁なのだろう。

伸びる廊下の先に、視線を移した。他の階と同じく初等学校のような構造だが、窓がない。電灯は一定間隔で設置されていて、しかもつけっぱなしだった。秘密基地だなんて言っても、電力は引いているのだなと、今更ながらに実感する。

今もつとも一般的な発電燃料は、ストーンであり、すなわちアニメだ。

スティアは、ストーンを、カラーストーンの劣化版だと言っていた。

ストーンが科学燃料として一般化してから、リリイを取り巻

く文明は革命的に変わった。それ以上の質を誇るといふのなら、カ  
ンパニーやテンプルが躍起になるのも、当然のことかもしれない……  
「おまたせ！」

見つめていた方向とは反対側から、明るい声をかけられた。

戻ってきたのは、先ほどの研究員ではなく、探していたレイバ・  
グリーニツシユその人だった。

「以心伝心だな。迎えに来ちゃった。奥に来てくれる？ お前に話  
したいことが色々あって」

「ここにいた人には、入っちゃだめって言われたよ」

「いいっていいって。ちゃんと saying おく。はい、リリイの入室を  
許可許可。おいで」

適当な口調で言い放ちながら、叔父は廊下の先にリリイを手招い  
た。

後ろにつきながら、長い廊下を歩く。通り過ぎた扉には、それぞ  
れ表札がつけられていた。ストーン・ガン保管倉庫、裏ガード  
資料室、シールド研究室、遺跡街秘密経路管理室……

見覚えのある名称もあれば、見覚えのない名称もあったが、どれ  
もこれも街の商店街などでは見かけない類の文字であることは共通  
していた。寺院のイメージには、おおよそ結びつかないということ  
も。そして。

しばらく歩いて、リリイは思わず足を止めた。

キメラ研究室。

広い部屋だった。扉の間隔が他の部屋よりも長い。上の階の食堂  
くらいはありそうだった。

視線をやれば、隣の部屋にも似た表札が並んでいる。キメラ研究  
室<sup>2</sup>。

先を歩いていたレイバが、リリイが立ち止まっていることに気づ  
いて振り返った。サンダルをペタペタと鳴らしながら、気楽な調子  
で戻ってくる。

「目的地はここじゃないぜー」

「分かってる、けど……」

言葉を濁すと、レイバは笑った。

「そっか、お前ロールに助けられたんだもんな。カメラに興味あるなら見てみる？」

「いいの？」

「構わないよ。俺のポリシーだから。来るもの拒まず、去るもの追わず、ってね。学問系限定だけど」

しごく当然とでも言うように断言しながら、レイバは作業着のポケットからカードを取り出した。ドアの取っ手近くに設置してあった、小さな装置に向けてかざすと、ピツと電子音が聞こえた。リリイは驚いた。シエルターや、学校の武器庫と同等の技術だ。

解錠した扉を無造作に押し開けると、レイバは先に入って明かりをつけた。リリイはあとに続いて、扉を閉める。ひんやりとした地下室の空気に、薬品の匂いが混ざっていた。

照らされた光景は予想外に狭かった。ひとりずつしか通り抜けられない小さな廊下のようなだった。本棚を仕切代わりにして、細長い通路にしているらしい。左右に伸びる書棚と、納められた本やファイルの数に圧倒されるが、レイバはすいすい進んでいった。

突き当たりで左に曲がると、とたんに視界が開けた。  
息を呑む。

「これがキメラ。ここにいるのはほんの一部だけどね」

レイバが誇らしげに言う声が、耳から入ってすぐに抜けてゆく。広がっていた部屋の壁際には、巨大な水槽のようなケースが設置されていた。どれも頑丈そうな扉がつけられていて、嚴重にロックをかけられている。中にいるのは生物だった。だが、見たことも聞いたこともない、異形の獣だった。

猿の手足を持った動物に、野犬の胴体と首が繋がっている。

それは、鋭い牙を覗かせながら、細やかに手足を動かして、水のない水槽の中を動き回っていた。

隣の槽には、また別の生物がいる。寝そべった猪の体に、熊のよ

うなたくましく足。さらに隣には、また別の生物が。

ケースは密閉されていたが、それらが息苦しそうにしている様子はまったくなかった。よく見れば、すべての水槽の外から、パイプが接続されている。先をたどれば、巨大な制御装置に繋がっていた。空気を送っているのだろうが、それだけの機能と考えるには大仰である。獣たちが、見た目に反して大人しいことも含めて、リリースはぞつとした。この薬品の匂いも、この装置も。

「キメラってのは、異種の狂獣を掛け合わせた生物の総称さ。形質を異とする動物を、人間の手で融合させる新技術だ」

レイバの声は、あくまで誇らしげだった。

「異種間で子供は作れない。体の仕組みがそもそも違うからね。だけど、二種の動物を合体させることは実現できる。これは、アニマの性質を応用した融合の技術なんだよ。ユニオン現象を発生させたことで、類似した形質を接着剤に、生物と生物の結合を可能にした」  
とつておきの手品を披露するように、実に楽しそうに告げる。

「自我が崩壊して、破壊衝動の固まりになってしまった狂獣を、なんとか再利用してやろうと思いついた実験なんだ。人間には知覚できないからピンとこないかもしれないけど、狂獣ってのはそもそも、増えすぎたアニマの影響を受けて身体能力の異常増強をきたし、それを制御しきれずに自我を崩壊させた生物のなれの果てだ。脳みそをコンピュータに例えると分かりやすいかな。あらゆる部品のスペックが無作為に上がったり、装置がものすごく活発に活動して熱暴走を起こしたりして、全体の制御が死んでる状態にある。それ自体で完結していた円が、ボッコボコに隆起したり削れたり、足りなかったり、余計なものがついていたりしている状態なんだ」

手振りを交えて、彼は続ける。

「完成品だった形質が変質したことで、隙間が出来た。だから、その穴を、他の生物でジグソーパズルのように埋め合わせることは可能か？ という仮説が生まれた。実験してみたら、可能だった。今となつては、当初に思っていた以上に、実用的に活躍してくれてる

よ

リリイは、言葉を探した。唇がかすかに震えた。

学校で、翼の生えた狼を目にした時にも、確かに自分は未知の恐怖に怯えた。だが、それとは、違う。

「どうして……」

「ん？」

「どうして、こんなものを作ったの……？」

恐ろしいのは、この生物の姿形以上に、それを自慢するように語る叔父だと思った。レイバの顔には、どこにも邪悪さが無い。

それが信じられない。

そのままの無邪気さで、彼は平然と言葉を返す。

「いけない？ 実用的だつて言つたじゃない」

「いいとかいけないじゃなくて！ だつて、こんなの、おかしいよ」

こちらの意図が通じないことにひどく焦るが、レイバは特に困った様子もみせず、軽く首をひねっていた。

「うーん、そう来るか」

心外とでも言うようなニュアンスだが、怒りは無い。

たぶんレイバもまた、慣れている。なにせこの性格でこの性質だ。他人、主に常識人に、頭ごなしに否定されることは日常茶飯事だろう。

「感情的に頭から否定するのって、ようするに了見が狭いつて事だと思つんだよね。お前だつて、狂獣を掃討する仕事につきたかつたんだらう？」

説教と言うには熱意もない。世間話のような口調だ。

「今の大陸は獣の異常発生で、ただでさえ悪化してる治安が、いろんな側面から脅かされている。だから、人間が獣を狩るしかない。

……狩つた獣はどうなる？ 市場にだつて流しきれないのが現実だ。実際、ハンターやガードは死骸処理に困つて、外に置くはめになるケースの方が圧倒的に多いつて統計が出てる。とはいえ、野ざらしにして放置したら他の生物の餌になつて、さらなる動物の発生

に繋がってしまう」

リリイは言葉に詰まった。

「どうせ邪魔になるなら、活用するべきだろ。俺たちは一部のハンターと繋がってる。実験動物として、狂獣を仕入れてるんだよ」

「だからって……」

「動物愛護の心は大事だとは思っけどね。すべての化学技術は、マウスの犠牲があって生まれてるってことは、忘れちゃいけない。事実、この研究が進んだことで、俺らがユニオン現象を利用する際の技術精度はかなり上がったんだ。このケースに限らず、ユニオンってのはどこにだって使われてる技術だし、可能性は全て試すべきさ」

「……さつきから、ユニオンって何なの」

「アニマの結合性質を定義した、専門用語さ。シエルターもこれで存在してるし、ストーンもそう。スティアの定着剤だって、大ざっぱに言えばこいつの働きかな」

身近な単語が並べられて、リリイは目を見開く。

「粒子の配列さえ合わせられれば、アニマは結合する。だからこそ、キャロルに混色機能があるんだ。森人だって、それを利用してホワイトとブラックを結合させようとしてたんだと思う」

レイバの瞳の中で、実に生き生きとした光が躍っていた。話題の中心になっているセイヤロールの眼球とは、比べようもないほどの充足感に満ちている。

「もちろん、異形の生物を世に流すのは、遺伝子的な混乱を生むし、最悪の場合は、種の滅亡につながるかもしれないとは、分かっている。分かってるから、陰に隠れて実験をしてるんだ。だけど、勘違いしちゃだめなんだ。節度を保つべきなのは、できあがった発明の利用法であって、法則の解析じゃあない」

こちらが聞いていようが聞いていなかろうが、レイバにとっては、どうでもいいようだった。

「倫理にもとるという理由で、発想を捨てたりしたら、文明なんて何一つ残らないんだ。そういったことを考えるのは、政治家のお偉

いさんか、思想家だけでいい。科学者は真理の追究と、それを組み合わせて可能性を生むことと、そのすべてを全力で制御する事が仕事なんだよ。だから、俺はこいつを使った実験をやめないよ」

何も言い返せなかった。何を言っても無駄だ。彼には本当に、悪気がない。

レイバは腕を広げて、部屋全体を指し示してみせた。

「俺の理想としては、こいつらを、人間の命令通り動かす事を可能にしたいんだ。そしたら危険を冒してハンターを遣わせなくても、立派な軍隊が出来上がるよ」

その腕をすぐに縮めて、自分の頭を指差す。

「実用化にはほど遠いけど、方向性は見えてる。またコンピュータと比較するよ。リリイは制御側に立って触った事がないからピンとこないかもしれないけど、コンピュータってのは電子の配列を制御することで動いている。脳みそにも似たような信号があつて、それが生命活動の中枢になっている。その命令信号を、アニマの力でどうにかできないか？ っるのが課題。森人が魔法を使っていたのは、自分の属性のアニマを使役していたから。つまり、アニマ そのものを制御する手段は絶対にある。アニマの力で生物の命令信号を操れば、電子を操ってコンピュータを動かすのと同じように、生物を制御下における」

得意げに、笑みを深める。

「ステイアの右腕を思い出してもらえれば、分かりやすいかな。あれは見ての通り義肢だけど、実際の手足に近い形で動いていただろ？ 仕組みとしては、筋電位信号を測定して、その反応から擬似的に、本人の意思と同じ形で動かすことを可能にしているんだ」

レイバはそう言って、自らの右腕を曲げて、伸ばした。

「理想としては、それと同じことをしたい。人が人を洗脳するのは高度だけど、狂獣ってのは自我が崩壊してるからね。キメラを作る事が出来たのと同じ原理で、隙間があるからいじりやすい。命令記号さえこちらが把握すれば、論理上、獣を使役することは可能な

んだよ。『霊的粒子』であるアニマをなんとか機械で操れば、間接的に魔法が使えるわけだから」

最後の言葉を、興奮するままに強調して、笑った。

「謎の定義だよな。アニマの正体や、発祥については何も分かっていない。だけど、それを利用することは人間にだってできるんだよ。これだから世の中つてのは面白い」

「……研究は、進んでるの」

リリイが小声で問うと、レイバはいい質問をしてくれたとでも言わんばかりに、こちらの目を見た。

「ぼちぼちだね。信号を割り出すのも、機械仕様に作り替えるのも大変だし、そもそもアニマには属性の問題があるから、森人が妄想を実現するみたいに意志ひとつではいかない。だけど、この動物たちを利用する術も、今現在、なくはないんだ。こいつらは、ロールを怖がる。いや、畏怖してるとでも言うべきかな」

水槽のひとつを見つめながら、うつとりと言葉を紡ぐ。

「ロールはすべての狂獣の発生源で、アニマの塊だ。狂獣を含めたすべての獣は、彼女が王であることを本能的に知っている。アニマの絶対量が膨大すぎて、潜在的な恐怖を感じるんだ。その習性を利用したプログラムは、簡単に書けた。彼女の意志に逆らわない延長で、彼女の感情に忠実であれば、特性を引き延ばしたんだ」

リリイは、食堂で話していたロールの言葉を思い出した。学校での彼女の様子も思い出した。

「セイが魔法使いなのは知ってるよな？ ロールだって同じさ。力が膨大すぎると、制御機能が著しく欠けていることで形にはなっていないけど、本当は歴史上で最も優れた魔法使いになるはずだったんだよ。それは叶わなかったけど、第三者が制御の補助をすれば、魔法に近いものを出せるだけの力は十分に持っている。この場合は、その援助役が、俺が生み出したプログラムなわけだ。リソーはロールで、式を書いたのは俺ってわけ。科学ってのは、そもそも魔法を疑似的に生み出すために作られたものだからね」

レイバは、にっこりと笑った。

「森人の魔法は、自然を自在に操った。だけどキメラは、その魔法の力をうまく利用すれば、生物すらも制御できるという可能性を提示した。倫理的にどうこうじゃなくて、技術としては革新的だろ？ 実際、なんの犠牲もなしにお前たちを学校から助けられたのは、こいつらがいたからこそだよ」

言いたいことは、たくさんあるはずだった。

だが、そのどれもが形にならない。言葉にならない。

説明を終えたレイバは、何事もなかったような振る舞いで、リリーの顔を改めて見つめた。

「ちよつと話しすぎたかな。ま、難しいことも多いだろうけど、こいつは俺の自慢のひとつ。本題の方は、俺のもう一つの自慢についてだから、とりあえず、この部屋を出よう」

その言葉を聞いて、リリーは、これからレイバが自分をどこに連れようとしているのか、予想をつけた。

廊下の最奥に、その部屋はあった。表札に書かれた文字は、『キヤロル』。

「あいつ寝てるけど、まあ、あんまり気にしないでね」

レイバは、そう言って、作業着から再び取り出したカードキーで開錠をした。

病室のようだった。リリイが寝泊まりしているゲストルームとは、根本的に雰囲気が違う。部屋の中心に寝具を置いて、ほかのものでそれを取り囲むようなレイアウトを取っているにも関わらず、生活感が感じられない。ベッドの周りに設置されているものが、家具などではなく、医療機器と思われる機械であることが原因だろう。

装置はいかにもジャンク屋が作り出したものらしく、複雑なスイッチやコードが、たくさん接続されている。戸棚には、薬品と思われるものが多く並べられていた。その隣の棚には、たくさんのファイルや本。事務用机には、汚い字が綴られたカルテが数枚重なっている。

途中で寄ったキメラ研究室と、雰囲気には大差がなかった。壁と天井は、くすんだ灰色のコンクリート。電球の色あせた輝き。

部屋の中心にあるベッドに、人が寝ているのは入り口からでも分かった。サンダル独特の扁平な足音を立てながら、レイバはそちらに歩み寄る。リリイも続いて、近寄った。

点滴を接続されたまま熟睡しているスティアは、上半身に服を着ていなかった。腕の血管に沿って、いくつかがガーゼが当てられている。レイバの言う所の検査をした後なのだろう。

だが、叔父がわざわざ服を脱がせた理由はきっと他にもあった。思惑通りになっていることを理解しつつも、リリイは目をそらすことができなかった。きっと、レイバはリリイに、これを見せようとした。

「体重また減ってんだよね。できれば栄養剤を固形にしたいんだけど、まだ拒否反応が出る」

右肩から先にある無骨な義肢とて、スティア自身の肢体にくらべればたいして目を引かなかつた。見つめるだけで、こちらが罪悪感を覚えるほどには、やせ細っている。皮の下にある肋骨が、ここまではつきりと浮かび上がって見える人間を見たのは、初めてだ。

彼が痩せていることなんて、服を着ている状態でも、見れば分かる。だけど、それでもこうして眠っている姿を見ると、印象が違う。

二度と目覚めないのではないかと思えた。見た目には、昏睡する重病人そのものだ。とても、共に学校で走り回り、テッドに跳び蹴りを食らわせた人間だとは、思えなかつた。

「隙だらけだろ？」

レイバは、どこまでも軽い口調で言った。

「もうこうなれば、俺たちがここで騒いだくらいじゃ起きないよ。定着剤を投与すれば起こせなくもないけど、その負担はさつきも言ったように、次なる睡眠に繋がるから、意味がない」

「……………」

「殺そうと思えば、誰にだって簡単に殺せる」

レイバは事務机に近寄って、ハサミを手取る。

寝ているスティアの側に移動し、ハサミの柄を握った。手を高く掲げて、振り降ろす。

「ちよっと！」

思わず大声をあげたと同時に、レイバはピタリと手を止めた。空中で停止したハサミは、スティアの肌に到達することなく、ぎりぎりの所で浮いている。

「ほらね。抵抗なんかできっこない」

ひよいと肩をすくめて、レイバはハサミを引いた。熟睡したスティアは、微動だにしていない。

「人間ってさ、頑張ればわりと徹夜とかできるもんじゃん。でも、こいつには無理なんだ。精神力とか、気合いでなんとか出来るレベ

ルじゃなく、そういう風に出来ていない。自分で自分の体調が管理できないくらいには、健康を害してると言ってもいい」

リリイはレイバの言葉を、思わず反芻した。　　そういう風に来ていない？

少なくとも三年前までは、外の世界を旅して普通に生活をしていた若い男に、言うような言葉ではない。

「でも、ステイアの仕事は、これからが本番」

ハサミを机に戻しながら、レイバは言った。

「キャロル の実働実験は、いまテンプルが進めている研究では、もともと大規模なプロジェクトで、最優先事項なんだ。ま、当然だよな。アニマを操るには、頭ひねってプログラム組まなきゃいけないけど、魔法が使えたらその手間は一気に拭える」

「何度も聞いたよ。それがどうしたの？」

「キャロル は人体に直接繋がっているから、扱えるのは被験者のステイアだけだ。設計者にだって、魔法を使っている本人の感覚なんて分かりっこない。主観の問題だからね」

リリイは、外で話をした時のステイアの様子を思い出した。 教区 の空きスペースで魔法の練習をしたと言っていた。想像力で全てを構築しなければならず、森人の文献も含めて見本が何一つなかったとも。

「だから、動力であるカラーストーンをこれから回収するわけだけど、手に入れたらハイおしまい、じゃなくて、現品をステイアに渡さなきゃならない。それも、なるべく早く。　　だったら、ステイア本人に石の回収もやってもらった方が効率がいい」

話の矛先が変わった。

「カラーストーンは、五年前に兄さんに回収を頼んでから、全国のテンプル関係者が水面下で探してる。でも、だめだった。リーダーで場所を特定したくらいで、即座に回収できるほど単純な話じゃなかった。誰かの所有物として、外から手出しが出来ない場所にしまいい込まれてたり、手が出ないほど危険な、狂獣の住処に転がってた

り。そんな風にいろいろあって、回収の補助だけで、犠牲者も出たんだよ。それに、五年も経てば、すぐに回収可能な品物なんて、もう転がっちゃいない」

「……うん」

「俺たちテンプルも、レアリス・カンパニーも、すでにそれぞれカラストーンをいくつか所有してる。けど、あれは全部集めなきゃ意味がないんだ。キャロルに接続すれば立派に魔法が使えるけど、そもそもの目的である属性無視するのは、すべての色が集まらないと出力できない」

レイバは肩をすくめた。

「だから、高いリスクをおかして取り合い合戦を始めるくらいなら、準備が整うまで潜伏しようって話になったんだ。こっちにはすでにグリーンとレッドがあるわけだから、カンパニー側に全部揃えられるわけがないしね。一応、妨害工作くらいはしたけど」

テッドが奪った イエロー。それを求めたセイ・ホワイト。

カラストーンの取り合いが続いている中で、父が所在を隠したイエローだけが、双方にとってのイレギュラーだったのだろう。そして、それに手が届くところまで来たカンパニーが、スティアの登場に焦って、行動を開始した。

父が独断で所在を隠した理由が、なんとなく分かった。スティアは語らなかつたが、たぶん彼にも分かっている。

父は、レイバやテンプルと、カンパニーが正面衝突するのを避けたのだ。曖昧さをあえて残すことで、双方の行動を遅らせる。他の全てがそろってから、最後のひとつを秘密裏に合流させる計画を立て、テンプル側のスムーズな勝利への保険にしたのではないだろうか。

敵を騙すために、味方から騙した。そして、種を明かす前に、勝手に命を落としてしまった。

自分勝手な父親の、自分勝手な芝居だったのではないだろうか。

「カラストーンは、手に入れたらすぐに力を発揮できるってわけ

じゃない。スティアのイメージが定着しないと、魔法の形にならないからね。だから、アニメを扱う練習をさせる意味でも、俺たちはあくまで支援役に徹して、スティア自身に回収をさせた方がいい。そのために、こいつに大陸を回ってもらうつもり。身元を隠せるから、多少強引な手段を取ってもテンプルのイメージに泥を塗ることがない。そして何より、こいつの側にはロールがいる」

レイバはそう言って、得意げにスティアを見た。

「何度も言ったように、ロールは決して狂獣に襲われない。どんな優秀なガードよりも、あるいはシエルターよりも優れた、狂獣対策の最終形だと言ってしまってもいい。もつとはつきり言うか。大陸のすべての人類が、狂獣の脅威におびえて引きこもってるこの時代で、ロールだけは、自由自在に外の世界を歩き回ることができんだ。そして、ロールの近くにいれば、敵が寄りつかないという恩恵を授かれる」

リリイは驚いた。

ガードを目指して、実際に外で演習もした身だ。狂獣を退けるとが、どれほどリスクが高く困難であるかは、よく知っている。

「ロールの持つ力を考えると、こんなのは付加価値にすぎないけどね。活用できれば、カンパニー側よりかなり優位に立てる。けど、ロールは一人で外を歩くには幼く世間知らずだし、本人にも、スティアの側を離れる意志がない。まあ、当然かな。スティアが実験体に甘んじているのはロールのためだからね」

「……つまり」

話が見えてきて、リリイはうめいた。

「父さんに石を回収させたように、今度はスティアとロールに石を回収させようってこと？」

「正解。もちろん、俺たちは全力でバックアップする」

レイバはにっこりと笑った。そして、眠ったままのスティアに視線を移す。

「ここまでが現状の説明。お前をここに連れてきたのはこっからが

本題。単刀直入に言うよ。スティアのガードになつてくれないかな」  
ひどく普通の口調で、さらりとそう言われた。

思わず、聞き流してしまいそうなほどに、なんの強調もなく。

発言の意味を理解する前に、レイバは続ける。思いついたアイデアを自慢したくてたまらない、そんな子供のよう。

「見ての通り、こいつは一人じゃ生きていけない。文字通り、生活に支障をきたすレベルで不安定だからね」

いつものような笑顔。いつものような声。

「さらに、石の回収なんて始めたら、大なり小なりのトラブルが日常になるのは目に見えている。だから、戦闘の領域に踏み込めるほどの強さを持ち、かつ、こいつのフォローを手がけてくれる、サポーターを探してた。キャロル が完成したら手配して、スティアとロールのフォローをさせて、一緒に出立してもらうつもりだったんだ」

叔父は無造作に首筋を搔いた。

「サポーターをどこから引っ張ってくるかを考えると、裏ガードあたりから、適当に見繕うしか手段がなかった。でも、この任務の機密性を考慮すると、人材選びは慎重にならざるをえないから、なかなか難しくてさ」

裏ガードという単語に聞き覚えはなく、ガード候補生としては気になったが、問いただすだけの時間はなかった。どっどっ言葉が続いていく。

「でも、昨日の事件を見るに、お前は俺が思ってたよりずっと強いみたいだし、何より、スティアの無茶な能力を短時間で把握して、フォローできるくらいに柔軟だ。さらに、就職するはずだったカンパニーとは仲違いをした。加えて俺のかわいい姪だ。情報の漏洩がどうか、そいつった心配が少ない」

レイバは得意げに断言をして、こちらを見る。

リリイには、返事が出来なかった。なんとか言葉を探して、うめく。

「……スティアに、そのアイデアは言ったの？」

「いや。あいつの了承をとる必要もないでしょ。雇用主はテンブルで、責任者は俺だしね。でも反対はしないんじゃない？ 学校でうまく戦えたみたいだし」

ガイルさんの娘に会うことも、ガイルさんの娘に彼と俺の関係を伝えることも、気が進まなかった。

おそらくレイバには言っていないであろうスティアの言葉が、頭をよぎる。

「専属サポーターを最低一人は手配するとは伝えてる。それがリリイだった所で、特に問題じゃない。考慮すべきことは一つだよ。お前の意志」

丸投げされて、リリイはぐつと口を閉ざす。

「労働条件を並べるよ。仕事内容はスティアのサポートとフォローをしながら、カラストーン回収の補佐をすること。スティアにはこのまま、兄さんのガードライセンスを渡す。ガイル・ブルーノという名の非合法ガードとして、レアリス・カンパニーの手の届かない所で、街から街を移動してもらうつもり。だから、同行者であるお前も必然的に、カンパニーの庇護を求めたりはできない立場になる。けどそのへんは、テンブルが全力でバックアップをするから、不安に思ってもらわなくてもいい」

指を折りながら、レイバは説明を並べた。

「仕事は臨機応変に行ってもらって構わない。給金は月賦の形で銀行口座に振り込んでおくし、必要経費はこちらで持つ。狂獣やカンパニーを相手にした戦闘も禁止はしないけど、表沙汰にしないようには注意すること。あとは、そうだね。スティアの体調について、定期的な俺への報告もほしいかな。病人の自己管理ほど信頼できないものはないから」

説明を終えたレイバは、リリイの顔をじつと見た。

何も答えられずにいると、苦笑して、腕を組んだ。

「即決できないなら、今すぐ答えてくれなくてもいいよ。でもそう

だね、出来れば明日までに返事が欲しい。こつちもいろいろ準備があるから」

無茶なことを、平然と要求する。

リリイは結局、言葉を見つけれないまま、ただ叔父の顔を見た。そして、視線をずらして、寝ているステイアを見た。

これだけ騒いでも、起きる気配がまったくない。何も知らずに眠っている。

電球の明かりの下で、右腕が冷たく光っていた。その光を見つめながら、リリイは苦し紛れに、一言だけを口にした。

「質問いいかな」

「どうぞ」

「キャロル の名前って、結局なにが由来なの？」

沈黙を退けるために口にした、思いつきだった。そして叔父の返答には、さらに意味がない。

「キャノン砲みたいでかつこいじじゃん？」

どこまでも軽く笑うレイバを見て、リリイはどっと疲れるのを感じていた。レイバにとっては、全ての現実はこのものだ。父も、ステイアも、ロールも、キメラも、リリイも。

自分は同じような尺度では考えられない。そう実感すると、明日に迫られた選択が、ひどく重かった。

夕食時をすぎた食堂には、誰もいなかった。厨房からは、水音と食器を置くような高い音が忙しく聞こえてくるが、テーブルの設置されている部屋には、明かりも灯っていない。

リリイは、誰もいないそのテーブルについて、椅子に腰掛けていた。部屋に戻る気にはなれなかった。今ロールに会ってしまったら、どんな顔をすればいいのか、分からない。

「おひとり？」

突然、声をかけられて顔をあげる。

首にかけてタオルで手を拭きながら、ケイトは不思議に思う気持ちを隠しもせずに、こちらを見ていた。飾り気のないエプロンと、色気なくひとつに縛った長い髪と、化粧つけない顔立ち。リリイは、彼女が食事の後片づけのために残っていたのだと見当をつけた。

「……ええ。レイバもステイアも忙しいみたいだし」

「レイバに頼まれたんだ？ ステイアのパートナーになれって」

驚いて目を丸くすると、ケイトは屈託なく笑った。

「あたしは一応、この施設の関係者だしね。事前にレイバから聞いてたんだよ。で、当のあなたは、気が進まないって顔だね、それ」

「私は……」

「気を遣わなくてもいいよ。あたしは別にレイバびいきでわけじゃないし」

ケイトははつきりとそう断言をして、片手を腰に当てた。

「レイバはああいう奴だから、分からないだろうけど。悪行の片棒をかつぐのは、誰だっという気分じゃないでしょ」

「悪行？」

「法律とか倫理とか、難しいことはあたしにや分からないけど、どんどん痩せてくステイアの様子を見るに、あのやり方が正しいなんて思えない。感情的な意見よ、もちろん」

「なら、どうして、あなたはここで働いているんですか」

「他人事だからよ」

ケイトはそう言っただけで、いたずらっぽく笑った。

「あたしがここに就職した理由は、知人のツテ。路頭に迷っていた所を拾われた。で、雑用を一手に引き受ける。あたしの雇い主であるテンブルって奴は、どう見てもまっとうじゃないけど、あたしはそれに直接関わってない。つまり、テンブルのやってるあこぎな商売には直接に、責任がないのよ。だから、やっていけるの」

諦観的なことを言いながら、さばさばと笑う。

「ステイアのことは、可哀想だと思う。でもそれって、悲劇の主人公を見て『かわいそう』って思うのと、同じレベルの可哀想なのよ。あたしの人生には、なんの関わりもない。だから、自分が食っていくために、横目で見つめて知らないふりだってできる。だけど、もしもサポーターになって実験の補佐をしるなんて言われたら、とたんに怖くなって、この施設を飛び出すと思う」

「……………」

「薄情でしょ。あたし正直なのよ」

自分の中にある想いが、ケイトの主張と同じだとは思えなかった。だが、断片的には分からなくもない。

リリイは自分の気持ちを整理しきれないまま、ぼつぼつと、思うままの言葉を並べた。

「テンブルが、怖くなったって言うのは、確かにあります。ケイトさん……は、ここで行われている実験の内容は知っていますか」「この施設の職員に、建前上は優劣がない。雑用のあたしも含めて、全ての情報はオープンよ。キメラとか キャロル まで、だいたいのは分かる」

「私は、レアリス・カンパニーが世界を守るふりをして、その裏で狂獣を利用していると知って、失望しました。でも、助けてくれたテンブルだって、その点は何も変わらない」

思いを口にするには、予想していた以上の意味があった。漠

然としていた感情が、絞り込まれる。胸がきりきりと痛くなる。

「ずっと、心のどこかで思ってたんです。好きなことを選んで、生きていけるって。私は、父さんの背中を見すぎたのかもしれない。ガードになるって言う目標があって、その目標にそって努力すれば、夢をつかむことが絶対にできるって。努力は必ず報われるものだって、信じてたんです」

ぎゅっと、拳を握りしめた。

「でも、外からの、思いも寄らない要因で、目標を見失って……後ろめたくないものや、正しいものなんて見あたらなくて、誰を信じたらいいのかが、分からない。心から信じられて、目指したいと思えるものが、現実の世界のどこにも見あたららない」

なにが ブラック と ホワイト だろう。世界には白も黒もない。さまざまな属性が混迷している。混ぜって、濁って、何がなんだが分からない。

狂獣の瞳のグレイと、何も変わらない。

「テンプルに協力することには、やっぱり抵抗があります」

声を振り絞った。精一杯に。

「私には、理屈や理由は言えない。ただ、キメラの顔を思い出すと、怖いんです。……科学なんて、もうこれ以上、進歩しなければいいのに」

限りなく本音でそう言うと、ケイトは苦笑した。

「それは極論だね」

痛いほどに分かっていた。レイバの言葉は、いつでも思いやりがないが、いつでも現実的なのだ。

今更、シエルターやシールドなしでは生きられない。便利なものは、確実に身体に浸透してゆく。生み出してしまった文明を破棄するのは、容易なことではない。

ブラック も ホワイト も キメラも スティアも、同じレベルで考えれば、自分に発展を止める力はない。

「……まあ、分からなくもないけど。でも、人間はそこまで弱く

ないよ」

ケイトは言った。きっぱりとした話し方だが、彼女の言葉は不思議と冷たくない。

「あのさ。夢を掴める人間と、夢をあきらめる人間のどっちが多いかって言われれば、どんな時代だって関係なく、たぶん後者なのよでも、そんな統計には意味なんてない。自分の定めた将来設計にそつて、自分の定めた通りに全てがこなせる人間なんて、きつとどこにもいない。おおまかにそれができた所で、必ずしも幸せになれるとは限らない」

「……………」

「目標を定めるのは、物事を始める前。だから、実際にやってみて想像とのギャップがあるのは当たり前。それに絶望するのも、多く人間が通る道。歩んでしまった道の長さを振り返つて、戻ることもできないのに、怯えてしまうことも含めてね」

「受け入れるつて言うんですか？ この現実を」  
「いいえ。抵抗することは悪くはないと思う。ただ、潔癖な気持ちを保とうとして、可能性を狭めてしまうのなら、もつたいたいと思つよ」

ケイトは笑つた。

「テンブルの実験は、スティアの身体をたぶん壊す。その片棒を担ぐのが嫌なら、拒否する手段は、依頼を断る他にも色々ある。たとえば、あなたが内側から見ればいい。どうすれば、もつとよくできるか、考えてみればいいのよ。もしもここから飛び出して、あいつのことを忘れて生きる道を選んだら、絶対に見えなかったことが見えてくるはずだよ。……組織に属するつてことはね、魂を売ることと同義じゃない」

返す言葉が見つからず、呆然と見つめ返す。

「もちろん、関わりたくないなら止めやしなしいし、それが悪いとも臆病だとも思わない。あなたとスティアはあくまで他人だし、あなたがテンブルに所属する理由がないつて言うなら、もつともだから

ね。なにより、そういうの全部、あたしにとっては、やっぱり他人事だから」

ケイトはそこまで言って息をつき、なんだか寂しそうに笑った。「だけど、個人的な意見としては、あなたとステイアがコンビを組むのは、悪くないんじゃないかなって思える。あのままじゃ、可哀想だしね」

ぐっと、リリイは奥歯に力がこもるのを感じた。

そんなこちらの顔を見て、ケイトはにやりとした。

「可哀想だと思うのは、可哀想って言いたい？」

目を、見開いてしまった。

けらけらと、邪気なく笑うケイトの声が響く。

「ごめん。別に責めてるわけじゃないよ。むしろあたしは、あなたがそういう風に考えられる子だから、いいと思ったんだ」

「……どういことですか」

「ステイアは、たぶんあなたが思っているより、二倍くらいはガキだよ」

馬鹿にするような言葉を吐きながら、声だけがとても優しかった。

「ま、きつとあたしが思ってるよりは五割増くらいで、大人なんだからうけどね」

「……？」

「あいつは、大人に囲まれることに慣れすぎてる。しかも、庇護を受けるという意味ではなく、対等でいようと肩肘を張っている」

リリイは直感した。ケイトは、たぶん本気でステイアを心配しているのだ。言葉通りの感情しか読みとれないレイバとは、違う。

「もうすぐ十八で成人なんだし、それくらいは当然なのかもしれない。けど、十四の時からずっとよ、ずっと。さらにやっかいなのは、あいつは立场上、仕事とプライベートの区別がない。知らないままで育ってしまったし、その状態で利害や責任ばかりを気にかけることに慣れすぎた。気が抜けないのよ、いつだって」

リリイはテッドの言葉を思い出していた。大人って生き物は汚い

んだ。閉息感を打破したいのは、お前たちみたいなガキだけじゃない。だからストレス解消のために、手軽な手段を取った。

あれは、あながち異常な事ではなかったのかもしれない。

「要するにあたしは、石がどうか、ブラック や ホワイト

がどうとかって前に、スティアは友達を作るべきだと思ってるのよ」

ケイトは、微笑んだ。

「あなたなら、そういう意味で、いいんじゃないかって思ったの。ガイルだって、四六時中かっこつけられたわけじゃないんだから」

突然、父の話になってリリィはきよとんとした。ケイトは得意げになる。

「あなたは、お父さんのことをどう思ってたのかな。さっきの一言を聞くに、自分の好きなことだけ好きなようにやって、自分勝手に人生を謳歌して、最初から最後まで楽しいばかりだと思ってた？」

「えっと……」

「たいていの男が、一番かっこつける場所がどこだか知ってる？自分の娘の前だよ。ガイルにだって、情けない面や汚い面はあったし、あたしはそれを見たことがある。ただ、あなたにそれを見せようとしなかっただけ」

思ってもみなかった言葉が、だけど少し考えればきつと分かった言葉が、胸を突いた。

「ありがちな言葉で締めるよ。一人で生きていける人間なんていない。ガイルはそれが分かりづらくて、スティアはそれが分かりやすいけど、違いなんてそれだけしかないのよ。……あたしから言えるのはこれくらい」

ケイトは最後にニヤリと笑って、颯爽と去っていった。タオルで手を拭いながら、厨房の方に歩いていく。

その背中を見送りながら、リリィは、心のざわめきが、鎮まっていくなを感じていた。

部屋に戻ると、ベッドのサイドテーブルに、シルバーのストラップがついた、見慣れた機械が置かれていた。その隣にはメモがある。よく知ってる、レイバの字だ。

通信機は返しておく。でも、この事件のアフター・ケアとして、新しいのを今度プレゼントするよ。これは好きにしている。とっておきたいならとっておけばいいし、捨てたいなら捨てればいい。リリイは、ずいぶん久しぶりに見た気がするその機械を手にとつて、開いた。恐ろしい数のメールが届いていた。

差出人は、主にエミリだった。日付はほとんどが今日。生きてる？ だの、どうしたの？ だの、あなたの家の前まで来たんだけどいないじゃんどこにいるの？ だのといった、忙しい内容がほとんどだ。

エミリからの連続メールに紛れて、ジャンとリックからも一通ずつ届いている。そして、ラルフからも一通だけ。本当に久しぶりのことだ。

おおまかにチェックしていると、ふと、もつとも見覚えのある差出人の名前が目に入った。

ガイル・ブルーノ。

新しいものではない。大切に保存していた過去のデータが、変わらず存在している。

開く気にはなれなかったが、件名を見るだけで、大抵の内容は思いついた。差出人が偽者だと発覚しても、思い出は消えてくれやしない。

それでいいのだと、それでもいいのだと断言するには、まだ、時間が足りない。

だけど、分かる。胸がつんと痛いけれど、ちゃんと分かる。今の自分がここにいるというそれだけのことに、級友から届いた大量のメールと同じくらいには、価値があるはずなのだ。

何を信じればいいのか分からないと、スティアに言った。自分で考えろと言われた。

正しいものなんてどこにもないと、ケイトに言った。自分で考えろと言われた。

最後に会った父は、問いかけを投げた。この世界をどう思う？と。

どの答えも、今のリリイにはまだ出せない。

だけど。

(……何もしないで、ここで悩み続けるよりは)

母が死んで、ひとりになったあの時に、周りの人間の助言に従って、ガードの夢を諦めていたらどうなっていただろう。スピノザから出ることなく、外の世界を知ることもなく、慎ましく暮らしていたのだろうか。

そんな人生も、悪くないと思う。世界の秘密を知って、得体の知れない科学に怯えて、罪悪感を抱えながら生きるよりは、ずっと賢いと思う。

だけど、もしその道を選んでいたら、今こうして感じているような、悲しいほどの清々しさは、知らないままだった。

潔癖でいることは、今この胸の中で混ざり合う、たくさんの人の声を、知らないままでいることなのだ。

(動いてから悩むほうが、ずっといい)

起きてしまったことを悔やんでも仕方がない。これからどうするかが肝要なのだ。

リリイは胸中でつぶやいて、苦笑した。

信じられない現実がいくつもある。怖いことがたくさんある。だけど、誰かさんが繰り返した、この言葉は好きだった。

今は、それが理由でいい。

たとえあとで後悔しても、それでいいはずだ。

心を決めてからは、躊躇わなかった。リリイは開いていた通信機を操作して、メールの返事を打つ。

受取人はエミリに決めた。ジャンやリックやラルフには届けてやらない。これくらいの仕返しは許されるだろう。

Equ8 / 7 / 23 21:04

To: エミリ

Title: 心配かけてごめん

すっかり音信不通でごめんね。ちょっと色々ありました。私は元  
気。

いきなりだけど、このメールは、さよならを言うために書きました。

返事はいりません。きつと、あなたのことだから、勇んで電話を  
かけてくれるだろうけど、出ることはできません。

ごめんね。

話せないことが多いけど、たいしたことじゃないの。

事情を知りたいなら、ジャンカリックを尋問してね。あなただけ  
知らないのは、仲間外れみたいだね。

でも、もし何か感じるものがあっても、二人を責めないで  
あげてください。

ついでに伝言も頼んじゃおうかな。ジャンとリックには、気にし  
てなんかないよバーカ、って言うておいて。一字一句間違えずにね。

ちょっと、みんなより一足早く、ガードの仕事をもたらえること  
になりました。

学校と一緒に卒業できないのは残念だけど、このチャンスに乗  
ると思います。

今まで、色々ありがとう。

新しい連絡先を、教える勇気がなくてごめんね。

このくらいのアクシデントでパーになるほど、今までの努力が、

薄っぺらくなかったことが誇りです。

みんなで学んだことは忘れません。

エミリと一緒に、笑ったり泣いたりしたことは、忘れません。  
全部ひっくるめて私です。

また会える日が、いつか来るって信じてます。

そこまで打って、推敲をせずに送信した。完了を確認すると、リイは通信機の電源を切った。

機体を、テーブルの上に置く。鞆にはしまわない。

ここに置いていく。この機械に記憶された言葉のすべてを。ガイル・ブルーノと交わした、言葉の全てを。

お気に入りの、シルバーのストラップも、一緒に。

「……さよなら」

リイはそれきり通信機には触れず、窓辺に歩み寄った。ステイアがカーテンを開け放したままだったので、月がよく見えた。その下の、人気のない白い町並みも。

見慣れない景色だ。これからは、さらに知らない景色をたくさん見るのだろう。そう考えると、好奇心が不安を沈めていった。

\*\*\*\*\*

「……というわけだ。ケイトにも一枚噛んでもらったし、たぶん断らないと思うよ。ナイスアイデアだろ？」

「……………」

「どうした？ 不満そうだけど」

「分かって言ってるだろ」

「うちの姪っ子じゃ嫌？」

「嫌だ」

「はつきり言うなあ」

「……女の子じゃん」

「お、なになに、やっぱり意識しちゃうの？ いいよ別に好きになっても。誰も困らないし」

「茶化すな。やりづらいし、めんどくさいし、もっと頑丈な方が都合がいい。それに、出会って間もない同じ年の女に、介護されたいなんて誰が思うんだよ。俺にだってプライドはなくてはならない」

「おっさんとしては羨ましいけどな」。どうせ世話してくれるなら、むさい男よりは若い女の子がいいじゃん」

「……」

「それに、女の子であることは、お前にとって都合がいいんじゃない？ 他の理由で」

「……なに」

「ロールの友達になってくれるかもしれない」

「……」

「どれだけ希少で、どれだけ魅力的なチャンスだかは、分かるだろ？」

「……」

「お前のプライドなんて、その恩恵に比べれば安いもんだと思うけどな。それとも、リイリイじゃ不満かな。あの子のこと、嫌い？」

「そういう意味じゃない。ただ……」

「ただ？」

「あんたのことは死ぬほど嫌いだ」

「そりゃ何より。お前と一緒に仕事をするには、嫌われた方が効率上がるからな」

レイバに答えを告げてからは、慌ただしかった。

まず、彼は伝言通りに新しい通信機をくれた。それも普通のものではなく、ガードが利用する機種の中でも特に高価な、森の中での通信を可能にするものだと言う。

「こいつで連絡をとってもらうことになるだろうから、なくさないでね。他の機種で代用して欲しくない」

開いて動作を確かめると、すでに電話番号とメールアドレスがふたつ登録してあった。テンプル発明事務局（つまりはレイバ宛）、そしてケイト。

レイバに訊いてみると、どうでもよさそうに答えてくれた。

「ああ、彼女たつての希望だよ。女の子同士の相談があつたら、気軽に連絡ちようだいねって言ってたけど」

その言葉だけでは、いまいちケイトの意図は読めなかったが、リイは気にしないことにした。先日話した感触だと、悪い人間ではなさそうだ。知り合いが増えたと考えておけばいいだろう。

準備が必要なのは、もちろん通信機だけではない。たいていのものはレイバが手を回してくれたが、リイが個人的に使用する日用品や武器は、自分で用意しなければならなかった。銃は両方もう使えないが、それを除いた装備はすべて自宅に置いてあると告げると、レイバはケイトを呼んで、リイを自宅に送り届けるように言った。用事が済んだら、誰かに気づかれる前に帰ってくるように、とも。

形だけのガレージが存在していたことが幸いして、リイは人目につくことなく、帰宅することに成功した。先日、エミリに送ったメールが効を奏したのか、家の周りに張り付いているような知り合いはいなかった。

いや。そういえば授業が再開されるのも、今日だった。今頃はみな、学校に呼び出されて、ステイアが壊した校舎の修復でも、手伝

わされているのだろう。

念のため、ケイトを玄関口に残してから、リリイは家の中のものを物色することにした。のんびりしている暇はないが、それでも、二年を過ごしたこの家を見れば、感傷じみた想いが沸いた。

リリイは自室に向かつて、髪を結ぶゴムから、防御効果が高いインナーまで、一通りの愛用品をバッグにつめた。武器の整備に使う道具のセットも、めったに使わないナイフも、意外と効果が高いと分かった短いロッドも、グローブも、アームガードも、靴底に敷いていた詰め物の替えも。思いつく限りの全てを。

服や下着を最低限だけ選んでから、最後に化粧品や常備薬と言った類を、ほんの少しだけ詰め込んだ。そして、すぐに部屋を出た。のんびりしていたら、出たくなくなると思った。

教区 に帰ると、レイバがまたもプレゼントを用意してくれていた。

「ほら」

得意げに笑って差し出してくれたものは、三つの銃。

一つ目は、学校から支給されるリボルバーとは根本的に形が違った。もつと大きく、長い。担がねば持てぬほどの全長と、遠くを見据えられるスコープが、端的に機能を示している。

「ストーン弾に対応させたライフルさ。森に出るなら、そこそこ使えると思うよ。射程と破壊力は、支給リボルバーの比じゃない」

ライフルは扱える。縦長の構造を採用した学校の窓から、援護射撃のような訓練をしたのは、記憶に新しい。そして、この種類の銃の使用感を、リリイは決して嫌いじゃない。

「とりあえずの銘は プラスト 。装弾数は20。セミオートに対応したオートマチックだから、速射性に優れている。有効射程は二百メートルで、危険区域は六百くらいかな。ただし、障害物の多い場所で使うことが多いだろうから、過信はしない方がいいけど」

レイバはそう説明しながら、もう一つ、銃を目の前のテーブルに置いた。リボルバーだった。学校でなくしてしまったものと、ほぼ

同じ大きさだ。ただし、こちらも弾薬はきつと違つ。

リリイは長銃　プラスチック　を手に取つた。ずっしりと重く、扱つには練習が必要だろう。だが、狂獣を相手にするにはこれ以上ない武器だと思つた。リボルバーと併せて、攻撃の幅が広がるだろう。

喜びが顔に出ていたのか、レイバはこちらの反応に、実に満足したようだった。邪気なくはしゃぎながら、俺つてやつぱ天才だよねと笑つ。

こういふ所は相変わらずだと、リリイはそんなことを思つた。

慌ただしく準備が進む日々の際間で、リリイが久しぶりにステイアの姿を見つけられたのは、雨の日の昼下がりであった。

ざあざあと屋根を叩く水音が響く、人気のない食堂。彼は壁際のテーブル席で、椅子の背もたれに寄りかかつて、居眠りをしているように見えた。

リリイは、そつとそちらに近づいた。ずっと探してはいたのだが、同行を決意してからステイアに会ってはいなかった。彼は地下の実験室から出られなかったようだし、リリイ自身も準備に手間取つて、慌ただしくしていたからだ。

ステイアはイヤホンを装着していた。耳から垂れたコードが、小さな機器に接続されている。音楽プレイヤーの存在は知っているが、あまり馴染みのない機械だったので、リリイは思わずじつと見つめてしまった。そういえば、初めて会つた日も、彼はこれを持っていた気がする。

機械の中にあるレコードストーンが回転する、小さな摩擦音が聞こえた。彼が聞いている曲そのものは、雨音に紛れて、リズムすらも聞き取れない。

「……寝てるのかな」

思わず呟いてしまったその瞬間に、ステイアはゆっくりと目を開けた。

リリイはびっくりして、肩を凍らせる。ステイアが一度寝たら容易に目覚めないことは、身にしみて知っている。ならば、起きてはいたのだろう。

声の主を探すように、彼はこちらを見た。独り言を聞かれてしまったような気まずさを感じながらも、リリイはなんとか挨拶の言葉を探した。

「お、おはよう？　じゃないや、久しぶり、かな」

「そんなに動揺しないでよ。自分から近づいておいて」

ステイアはこちらの反応に笑いながら、耳からイヤホンを外して、機械のスイッチを切った。

「寝てたわけじゃないよ。……なんだろうな。イメトレかな」

「イメトレ？」

「ほとんど暗示みたいなもんだけどね。気合い入れたい時はこれ聴くの。初任給もらった時、レイバが作ってくれたんだよ」

音楽プレイヤーを指しながら、苦笑する。

「で、なにか用？」

「あ、そうだね。えっと……」

リリイは、ポケットに入れていたものを、さっと取り出した。

一枚のハンカチだ。いつか返そうと思って、洗濯を終えてからずっと持ち歩いてきた。学校で泣きだしたリリイに、ステイアが無言で押しつけたものだ。

綺麗に洗濯されて畳まれたそれを見て、ステイアは一瞬だけ沈黙した。やがて気付いて、小さく笑う。

「別に、いつでもよかったのに」

ハンカチを受け取りながら、ステイアは自分の服のポケットにしまおうとしたが、すでに今日の分が入っていたらしい。収めることを諦めて、テーブルの音楽プレイヤーの隣にそっと置いた。常にハンカチを持ち歩いている男子なんて、珍しいなと思ったが。

そんなことよりも、重要な言い含めには、気づいていた。

「……いつでも？」

ここで別れる予定の人間に、向ける言葉ではなかった。

「あなたはもう知ってるの？ これからのこと」

「レイバにだいたい聞いたよ」

「同行者が、誰だかも？」

リリイが率直に訊くと、ステイアは返事の代わりに、冗談めかした動作で、肩をすくめた。

「寝てる間に人の裸見るとか、リリイは悪趣味だと思う」

「ばっ……!!」

からかわれているとは分かっていたが、つい過剰に反応してしまふ。ステイアは笑った。嫌みたっぷり。でも、明るく。

リリイは返す言葉に詰まりながらも、今の一言にはどこかほっとしていた。彼が自分の体のことを、冗談の種にするとは思っていなかった。それができるということを考えると、こちらが思っている以上に開き直っていて、強い人なのかもしれない。だが。

「ほんとに、私でいいの？」

半信半疑だったので、隠さずに訊くことにした。

「いいとか悪いとかじゃないでしょ。あんたの雇い主は、俺じゃないかってレイバだよ」

「……そうだけど。でも、あなたが嫌だつて言うなら、私も無理にはついていけないよ」

不安な気持ちも、どうせ隠せやしない。告げる。

「レイバもあなたも、いつもあなたの意向を置き去りにする。でも、私がもしあなたのパートナーになるなら、契約相手をきちんと立たたいよ。あなたは、私と一緒に旅をすることが、本当に嫌じゃないか、教えて欲しい」

ステイアは、ふつと息をついて、意味深に笑んだ。

「じゃあ、本音で言うよ。同行者は、きちんと仕事ができる人間なら誰でもいい。その点ではあんたを信頼してる。……でも、ひとつだけ、条件を出したい」

じつと、こちらの目を見つめてくる。深い碧色の瞳が、氷のよう

に静かだ。

リリイはたじろぎそうになったが、ぐっところえた。こちらも気を緩ませず、まっすぐに相手の目を見る。

対等でいなければ。これは、仕事なのだから。

「ロールのことを、怖がらないで欲しい」  
とても静かな声だった。

リリイは、言葉に縛り付けられたように、身体を静止してしまう。目の前にある表情もまた、声と同じく静かだった。だげどこか、まるで、母の手を探す迷子のようにだ。

「……けっこう、難しい事だよ。できる？」

少ない言葉に込められた、数々の悲哀を漠然と感じた。たぶん、今自分が感じているよりも、彼が背負っているものはもっと重い。怯んだことは否定しない。だけど。

根拠のない確信が、胸に広がってゆくを感じる。

その確信は、とても温かい。まるで、父の腕の中のように。

「大丈夫」

答えると、ステイアは静かに目を見張った。

リリイは、胸を張って続けた。

「私は鈍いから平気だよ。この前だつて、ロールちゃんと一緒に飯とか食べたけど、普通にしていれば普通にしか見えないよ。眼帯外されちゃうと……その、ちょっとびっくりするけど」

話の内容が正直な感情にずれていって、あわてて首を振った。

「でも、大丈夫だから。ほら、だつて私つてさ、あの子のお姉さんになれるんじゃない？ なんとつて父親が同じなわけだし」

ごまかすようにそう言つてから、失言に気づいた。はたと唇を固まらせるが、遅い。

ステイアは、今の一言をすっかり捕まえてしまったようだった。じつとこちらを見て、つぶやく。

「……父親」

「あ、えっと、違うの深い意味はなくて」

リリイは慌てて、悪気のないことを伝えようとしたが、慌てれば慌てるほど、わけがわからなくなってしまうた。ステイアとロールには、亡くした父親がちゃんとした。どうにもならない理由で失ってしまった本当の親と、気まぐれで面倒を見てくれたお節介な男とを同列にするなど、考えようによっては失礼極まりない。

だが、リリイのそのような懸念を、そっと退けるように、ステイアは笑った。

とても、素直に笑った。

「やっぱり親子だ、ほんとに」

「え？」

「すげー似てる。そのアバウトな家族意識」

誰のことを指しているのかは、言われなくても分かった。ステイアの笑みの温かさが、なによりも物語っている。

「世の中の人みんなが、ブルーノ家の考え方したら、人類みんな兄弟になれるな」

「……そんなに変？」

「褒めてるんだよ」

ステイアはそう言って、こちらの瞳を見る。

深い碧。

だが、冷たさはなぜか、もう感じない。

「これからよろしく。お姉さん」

微笑んでそう告げる彼を見て、リリイは自分がなぜ年上役であるのかとても疑問に思ったが、すぐに思い出した。そういえば彼は、リリイが四月生まれだということをガイルに聞いたと言っていた。

そう思ったことが表情で伝わったのか、彼も同じことを考えていたのかは分からない。ステイアは最後にぽつりと、こう言った。

「あなたの誕生日を覚えておくことには、俺にとって他の意味があるんだ」

「え？」

「出発の日に分かるよ」

街の出入り口である、シエルターを管理しているのはレアリス・カンパニーだ。その状況下で、どうやって街を抜けるのか疑問に思っていたのだが、レイバはあっさりと、リリーの常識を覆すプランを提供した。

「シエルターだけが出入り口だと思ってるから、いけないんだよ。他のルートでいけば、カンパニーのチェックは受けない」

「でも、私は実際に見たけど、街を覆う壁に隙間なんかないよ？開いてるのは空くらいしか……」

「空が開いていることには気づいて、地面の下が開いていることには気づかないあたり、リリーは発明家には向かないかもね」

学校から 教区 へ移動する際に使った地下道。あれはもともとこの街にあつた森人の遺跡の一部である、巨大迷宮なのだと言う。

かなり入り組んでいるので、道を知らずに入れば出ることは難しいが、把握さえしていれば、街のあらゆる場所に移動をすることに役立つ。そして、テンプル側の地区にある出口のひとつは、シエルターの下をくぐり抜けて、街の外へとつながっているのだと言う。

「ま、使いやすいように俺たちが改造したんだけどね」

案内役のケイトと、見送りのレイバを含めたメンバーで、地下道を抜けることになった。

旅装束を整えて、ステイアとロールと合流をする。彼らの服装や雰囲気は普段とあまり変わらず、嚴重装備で実地訓練を行ったりリイにしてみれば、若干気が抜けるほどだった。狂獣の被害がほぼないということを考えれば、妥当な選択なのかもしれないが。

だが、ステイアは街にいた時よりも、服を着込んでいるように見えた。おそらく、今は上着の下も長袖だ。布地と空気がうまく働いてか、普段よりはほんの少しだけ、まともな体格に見える。実験や診療が繰り返されたテンプルの生活では、着脱が耐えなかったのだらうと、リリーは見当をつけた。

来た時と同じ部屋から地下に降りて、違う道へ進んだ。所々は、ライフルを背負っている、身動きをとるのが辛いくらいには狭かったが、やがて道が開けて、車道ほどの広さになっていた。レイバたちによる改造だろうか。

終点に着くまでは、かなりの時間がかかり、途中で何度か休憩もした。やがて道はゆるやかな上り坂になった。たどり着いた出口には、車が置いてあった。

新しい車ではないが、明らかに整備の直後だとも言うようにピカピカだった。小回りに優れた型だ。人気のオープンタイプではなく、天井と壁がある。必要に応じて天井は開閉できるらしく、蓋のような窓が取り付けられていた。

「シールドは一応、四つ入ってる。ロールがいるなら大丈夫だと思うけど、うまく使ってるね」

レイバが気楽に言う。これから世話になる車を前に、リリイは足取りが軽くなった。近づいて、様々な角度から点検をした。

壁と天井がある分見通しには優れていないが、防御力が高そうなので、その点はむしろありがたかった。ガードの人数が少ないならば、機動製重視の型の方が扱いやすい。

「一番の自慢は、燃費がいいことだけだね」

レイバは得意げに笑って、リリイの側に近寄った。車を目で指しながら、リリイの頭にポンと手を載せる。

「運転できるよね？」

リリイは頷いた。自動車免許は学校の一年目のカリキュラムで習得ができる。

「しばらくは交代の要員がいなくても、そのうちステイアにもできるとーに運転教えてやってよ。どうせ外の世界は無法地帯だし」

いい加減なことを言いながら、レイバは車から離れて、さらに奥に向かった。

車体に目を奪われて気づかなかったが、そこが出口なのだろう。

大仰な扉の前に、シエルターのゲートによく似た、開閉装置と思わ

れる機械パネルが貼り付いている。

「外から誰か入ってきたら困るから、施錠はしてるんだ。開けるの  
久しぶり」

レイバは気楽に言いながら、機械に異常がないか確かめた。すぐ  
に振り返る。

「ステイア、鍵」

呼ばれたステイアはレイバの方に向かおうとしたが、足を止めて  
リリイに声をかけた。

「一緒に開ける？」

「え？」

「これから同じ作業を何度もするんだし、あんたも覚えておいてよ」  
ステイアに連れられて、装置パネルの前に来た。やはりシエルタ  
ーの制御装置によく似ている。

鍵はガードライセンスだった。ステイアが、取り出した父のブレ  
スレットを装置にかざすと、電子音が鳴って、パネルが光る。たし  
か、本人登録の暗証番号を入れるはずだ……。

「ガイルさんのライセンスだからね、これ」

「え？ うん」

「暗証番号は、ガイルさんが考えた」

告げながら、ステイアは無造作にパネルに指を滑らせる。

0413。

とても見覚えのある数字の羅列が、何を意味するのか、一瞬だけ  
分からなかった。

気づいたのは、ステイアがにやりと笑ってこちらを見たからだ。

胸の奥が、熱くなった。

扉が開く。光が溢れた。天井も壁もない、外からの太陽が視界に  
降り注ぐ。

閉ざされていた世界が確かに開いた。そんな壮大な錯覚を起こさ  
せる。それは。

「四月十三日は、俺にとってはケーキの日だった」

隣に立つスティアが、外の光を眩しそうに見つめながら、笑う。  
「知らないって言ってるのに、あの人、毎年その場にいる人間みんなを巻き込んで、祝うんだ。本人の元へは戻ってやらないくせに。勝手だよね」

この光に触れて、ここから流れる空気を吸って、夢にまで見た外の世界に出る。たとえそれが望んだ形ではなくても、きつと意味はあると強く思った。失ってしまったと思いついていた夢のかけらは、ここにあった。

「だから、この暗証番号ばかりは、忘れなくても忘れられない」  
どこにも見当たらなかった父の想いは、確かな形として、こんなに近くに、残っていた。

スティアが最初に車に乗り込んだ。ロールがそれに続く。最後にリリイは運転席に乗車した。

「街についたら、入る前にテンプル側に連絡よこすこと」  
レイバが近づいて、窓から声をかけてくる。

「これからお前たちは立派な裏ガードだ。身分の照会はなんとか避けて、胸を張って生きること。ギルドの場所は俺に連絡をくれればすぐに教える」

「裏ガード？」

リリイが問うと、スティアが答えた。

「ライセンスを不法入手して、勝手にガードを名乗って商売をする連中のこと」

あつさりと言いつつ放たれて啞然とするが、彼は肩をすくめるだけだった。

「なにも間違っていないでしょ」

「カラー스토ーンの場所は、スティアに渡したリーダーでだいたいは見れる。詳細情報を調べただけのメモも渡した。新しい情報がこちに入ったら、その都度連絡する。そっちからも、こつちに報告を怠らないこと。特に、定着剤と栄養剤は持てそうだけ持たせたけど、消耗品だからすぐに足りなくなる。原材料は俺だけの秘密だ

から、こつちから送らなきゃマズいんだ。お前たちの居場所はステイアのピアスで把握できるけど、そればかりに頼るのも怖いし、ちゃんと報告してきてよ」

ふとリリイは気づいた。叔父の言葉をこうして聞く事は、これから先はしばらくないのだ。

「レイバ」

「ん？」

「お世話になりました」

感謝だけは間違えずに告げようと、リリイは礼を言った。レイバは驚きも喜びもせず、いつものように明るく笑った。

「ん。俺もまともな飯が食えて楽しかった」

「あたしの料理じゃ不満なのかよ」

後ろからケイトがレイバを小突く。ぐお、と悲鳴を上げる叔父の姿を見て、ロールが笑った。リリイも笑む。

「それじゃ」

「ああ」

リリイがアクセルを踏むと、上り坂になっていた道を車が進んだ。光に身を躍らせると、やがてガタンと音がして、地面が傾く。何かのスイッチになっていたようだ。重力が、回転する。

ズシン、と重い音がしたと同時に、床の振動が止まった。気がつけば、地面の上にあった。先ほどまで地下道と通じていたはずの床が完全に閉ざされ、真下にあった。

眼前に広がるのは、とてつもなく広い森だ。狂った鳥が飛んでいる。狂った獣もきつと潜んでいる。

リリイは振り返る。シールドに覆われたデカルトの街は、少し離れた背後にあった。この場所は街道からは外れているが、そこまで遠くもない。

「じゃあ、行くよ」

後部座席に向けて告げると、銀髪の兄妹はそろって了解を示した。不思議な旅の連れ。不思議な車。不思議な景色。

リリイは旅立ちの高揚感を胸に抱いたまま、アクセルを踏んだ。  
これが大きな一歩目になるような気がしていた。  
門出の空は抜けるように青く、晴れ渡っていた。

\*\*\*

正しい決断をするには、リリイ・ブルーノはまだ、ステイア・ア  
リビートのことを知らなすぎた。

彼女がそれを知ることになるのは、もう少し後の話だった。

## エピソード

リリイ・ブルーノ。

四月十三日生まれのア型。おてんばと言つには、もうずいぶんと落ち着いて成長した。だが、子供のように感情を隠さず、子供のようにだまされ、子供のように落ち込むので、総じて印象は子供っぽい。

性格には裏表がない。努力家で素直。相手によつて態度を変えず、老若男女や立場の分け隔てなく人と接するから、話しやすい人間である。その点はガイルにもレイバにも、よく似ていると言えるだろう。

学校成績はきわめて優秀だと聞いたし、それは横で見ても納得できる。特に戦闘における視野の広さが目立った長所としてあげられる。敵や味方の能力を把握するのが早く、状況に応じた対応ができる。その点では頭の回転が早いのだが、口頭での説明を飲み込むのは、そう早いわけではない。彼女が感覚型であるか、自分の説明が下手なのかは分からない。おそらく、その両方だろう。

女性にしては、どちらかと言えば身長が高いかもしれない。トレーニングを日常にしていたのなら、体重もそれなりだろう。だが、見た目には屈強な印象はなく、むしろもっと一般的な意味で、スタイルがいい。だが、年頃の娘にしては飾り気に乏しいかもしれない。ルックスが父に似ているとは、まったく思わなかった。顔立ちに特に目立つ所はなく普通だが、どちらかと言えば目が大きいかもしれない。感情がくるくると動くから、そう見えるのだろうか。

実用性を重視した動きやすい服装の上に、二丁のリボルバーを着している。すぐ手に取れる位置に、真新しいライフルも。

長い髪を、極めてシンプルにまとめていた。気取った所も、媚びるような態度も、何もない。

だが、そうして仕事モードに入っている様を見ると、思い出す。

借り物の寝間着に身を包んで、ベッドの中でぼうつとしていた顔。少し乱れた柔らかい髪。

「……………」  
後部座席についたステイアは、運転席でハンドルをさばくりリイの姿を見ていた。森に浸食された街道で、ガタガタと石を踏みながら、車は進んでいく。

以前、外の世界を旅した時の運転手は、彼女の父親だった。そう考えると、悲しいような、感慨深いような不思議な気持ちだが、そつと胸を撫でていくようだった。

共に長い時を過ごすことになるであろう少女の姿を、張本人の視線がないのをいいことに、ステイアはじつと観察し続ける。そして確認を反復する。ここ数日のつきあいでの把握した彼女の性能と性格を。

導き出せる結論は、とても無難なものだと分かっている。

(一緒にいて、嫌な相手ではない)

性格が悪いわけではない。仕事ができないわけではない。付き合いにくいわけでもない。生理的に受け付けられないなどという、外的な要素さえもない。

(感情的で、素直で、たつぷり愛されて育って、友達もたくさんいて、根が明るくて、金銭にも才能にも恵まれた、普通の女……………)

むしろ、レイバの言う通りというのもしかただが、かつて共に世界を歩いたあの男と比べると、場が華やぐような存在である。

だからこそ。

(いっそ)

ステイアは思い出す。ガイルを己らの父と認め、ロールを妹だと言った、リリーの言葉。

彼女には言わなかったが、ガイルも昔、自分たちふたりを家族の一員にすることにこだわった。ただし、彼の場合はもう少し、妄想の中身が直接的だった。ステイアがうちの娘と結婚すりゃあ、俺たちみんな家族だ。これで全部解決じゃん？

ため息をつきそうになったが、ぐっところえた。喉の奥が、わずかに鳴る。

(似てない方がよかった)

お前と一緒に仕事をするには、嫌われた方が効率があがるからな。

ステイアは己の性格を呪った。何もかもがああの科学者の言う通りだ。

リイがどうしようもない愚図で、性悪で、ひとつの好意も抱けないような相手だったら、まだ、やりやすかったんだ。

「ステイアー」

不意に声をかけられて、ステイアは慌てて目を開けた。動揺が表に出ていないことを、バックミラーでちらりと確認しつつ、何食わぬ顔で返事をする。「なに？」

「道が二手に分かれてる。近道の方は地形的に坂とか多そうだけど、あなたはきつい？」

「それは平気。乗り物酔いとかはしないから気にしないで。よっほど険しい山道だったら迂回するべきだと思うけど、このへんにそんなのないでしょ」

頷いたのちに、彼女は妹の方の意向も確認をした。ロールはいつものように、曖昧に笑いながら頷いていた。その笑顔の隣で、気分が暗くなるのを自覚する。

妹の、すべてを受け流すような表情や仕草を見ると、どうしても気は急いた。

だが、どんな時でも、今できる最善を考えるしかない。

ステイアら三人を乗せた車は、街道をぐんぐん進んでいった。本当に、拍子抜けするほどに獣の姿はない。昔の妹にはなかった特技だ。

少し開けた窓から、風が入る。

もうガイルの夢を見ている暇はないとは分かっていた。だが、リイの後ろ姿を見ていると、どうしても、彼の言葉を思い出した。

尊敬していた。憧れていた。その気持ちに偽りはない。

だがこの現実にもう彼はいない。

(あんたの言葉は、忘れてない)

夢に見るまでもない。

彼が自分に届けた言葉は覚えているし、いつだって正しかった。だけど。

(正しいやり方が出来ない人間にも、あかく手段があるってことを証明したい。証明しなければならぬ)

無言で、右手に触れた。機械でできた己の手。装着してからずっと、好きになれたことなどない不格好なフォーム。

(……俺はあんたに、逆らうよ)

ぎゅっと、左手の握力を強める。不気味なほど細い腕。感触は冷たい。温度も、脈もない。

天気は晴れていた。風が気持ちよく頬を撫ぜる。先日の雨に洗い流されたのだろう、空気はとても澄んでいた。

遠くから聞こえる鳥の声を、ひたすらに懐かしく思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3752i/>

---

グレイゾーン 1

2011年7月5日03時17分発行